

# フィールド演習

DEPARTMENT OF CIVIL ENGINEERING THE UNIVERSITY OF TOKYO ——— フィールド演習担当一同 2016.7

# 目次

---

- ・ フィールド演習のねらい
- ・ フィールド演習の課題と概要の紹介 (2014 年度を例にしたものである)

## 付録 1

- ・ 2015 年度配布資料
- ・ エスキス記録
- ・ 最終成果物写真

## 付録 2

- ・ 2015 年度学生レポート

# フィールド演習のねらい

石田哲也

フィールド演習は、卒業論文を除けば、社会基盤学科における唯一の必修科目です。3泊4日の合宿形式で東京大学富士演習林に滞在しながら、グループ毎に演習林内の与えられた地点（20m×20m）を丁寧に観察し、互いに異なる観点や意見を出し合いながら、それぞれの地点が持つ固有の価値について論じるという課題を設定しています。日常の大学生活とは異なる富士演習林に身を置き、ある種「答えのない」課題に対し、これまでの自身の経験やバックグラウンドを投影させながら「価値」というものについて深く考え、学生同士や教員との議論を通じて他者に説明することを求めています。

では、なぜこのような演習を必修科目として設定しているのでしょうか。必修科目としての演習を設計するにあたり、担当教員は時間をかけて様々な議論を行ってきました。社会基盤学という領域の根幹に関わるテーマに取り組んでもらい、将来プロフェッショナルとしての長い道を歩んでいく上で何らかの原体験として心の根っこに残るものの良いのでは、また瞬間的に答えが出る類のものではなく、長きにわたって考え続けるきっかけとなるような課題が望ましいのではという議論となり、しかるべき演習課題を設計しました。実践ですぐに使える知識や技術の習得というよりも、専門家として社会の海原に出た後の羅針盤となるような演習こそが、必修科目としてふさわしいと考えたのです。

社会基盤学とは、人、自然、社会を対象として、時にそれらの間に生じるコンフリクトを解消し、様々な課題を解決することで、人間が人間らしく豊かな文明生活を持続的に送るための学問です。自然科学や人文科学の知識を総動員して、新しい技術、仕組み、制度等を生み出し、それらを具体の形に落とし込んで社会に実装することが求められます。人間が生み出す技術や仕組みが多かれ少なかれ自然を改変し、日常の生活に常に寄り添って使われるという性質上、社会基盤学を通じた行為は、人々の暮らしや環境に対して長期かつ広域に影響を与え続けます。従って、現世代だけではなく未来の人たちにも思いを馳せながら、我々は何をすべきなのか、また何をつくり何を残すべきなのかについて、真摯に考えることが必要不可欠です。過去から現在、また未来に向かう時間軸の中で、大切にすべき「価値」とは何か、ということが常に問われているのです。

また、社会基盤学に関わるステークホルダーは多様であり、色々な考え方を持つ人たちと関わっていくこととなります。例えば、ある社会基盤施設の建設にあたって、利害や意見が対立し賛否が分かれる場合もあるでしょう。物事は全て表裏一体であり、表から見ると正であることも、裏から見れば誤として捉えられ得るものです。何事も犠牲にせず、全て100%正しいといったことは、世の中にそう多くありません。従って、短期的のみならず長期的な視点を持ちながら、現状を良くするために、また良い未来を作り出すために我々は何をすべきか、あるいは何を作ったらよいのかについて、十分に考える必要があります。さらにその議論は、専門家だけで閉じるのではなく、専門家以外の人々に広く理解してもらう必要があります。様々な観点からの「価値」が問われる命題であり、色々な人の理解を得ることは決して簡単なことではありません。

以上のように、社会基盤学とは、多様な尺度から価値を考えることが問われる領域と言っても良いでしょう。その専門家となるための第一歩として、フィールド演習では、富士演習林の一区画を対象として、その価値について議論してもらうこととしました。現在の土木技術をもってすれば、重機一つであつという間に整地されてしまうような空間ですが、木漏れ日の差し込む中で、樹木、草花、昆虫をじっくり観察し、葉の擦れ合う音を聞きながら風を感じ、自然の営みとして生まれた森を自分なりに捉え、その場固有の価値を見つけて欲しいと考えています。同じ場所で同じものを観察したとしても、感じ方や価値の捉え方は人それぞれです。これまで自分自身がおかれた環境、経験、また身につけた知識などをベースとしているからです。受講する学生諸君が、フィールド演習ならではの経験を通じて、自分自身の内面や他者と向き合い、社会基盤学としての哲学あるいは倫理的態度の端緒を掴んでもらうことを、教員一同期待しています。

# フィールド演習の課題と概要の紹介

(2014 年度を例にしたものである)

# 課題

## はじめに

この世のモノや現象が有する価値は、その対象を捉える人の価値観や捉える際の尺度により異なる。例えば、ダムを例に考えてみると、そのダムが有する価値はダムの周辺住民とダムの利益（水やエネルギーなど）を受ける下流の住民との間で異なるであろう。また、人間と動植物、流域全体の水循環とダム周辺の水循環を考えてみると、ダムが有する価値が決して絶対的なものではなく、何を主体として考えるかにより相対的に変化しうることが想像できるであろう。ある対象を理解するために、まず、ある特定の価値観の下でそれを理解しようと試みることは有用である。しかしながら、社会に存在するモノや現象を扱う際に、そのような特定の価値観のみに基づく理解には自ずと限界が訪れる。我々シビルエンジニアには、様々に変わりうる価値を、多様な視点から理解しようとする能力が求められている。そこで、諸君らには本演習林を対象として、様々に異なり、様々に変化する価値について論じてもらう。

諸君らには演習林内の1地点(10m×10m)を与える。〈はじめに〉  
に書かれていることを踏まえて、与えられた地点を複数の視点から  
観察し、深く知ることを通して、あなたにとってのその場所の価値を  
見だし、他の人がわかるように伝えてほしい。

## 課題の進め方

1日目	2日目	3日目	4日目
まずは見てみよう	詳しく見てみよう	みんなに伝えよう	みんなに伝えよう
<ul style="list-style-type: none"><li>○ガイダンス</li><li>○レクチャー</li><li>○踏査</li><li>→スケッチ×3</li><li>→イメージ抽出</li><li>→カテゴリー化</li><li>○プレスト</li><li>○全体共有・エスキス</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>○再踏査</li><li>→スケッチ×3</li><li>→イメージ抽出</li><li>→カテゴリー化</li><li>○プレスト</li><li>○調査・測定・作図</li><li>○全体共有・エスキス</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>○講評会発表資料作成</li><li>・再踏査(随時)</li><li>・プレスト(随時)</li><li>・エスキス(随時)</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>○講評会</li><li>・発表5分</li><li>・ポスターセッション</li><li>・詳細は当日説明</li></ul>

11班(4-5名)を3つのグループに分け、  
3つに分れた教員グループが、4日間同じ数班のエスキスを行う

# DAY1

---



1日目の目標は、対象地である演習林の全体像を把握することと、「演習林内を観察して価値を見いだす」具体的なプロセスを体験し、その困難さを実感することである。これは、2日目以降の本格的な調査における態度・観察方法などを工夫・改善することにつながると期待されている。

まず、演習林の先生による注意事項・危険地点の説明とレクチャーが行われ、続いて演習林を回りながらの説明が行われた。

# Sketch



続いて、各班の担当区域に赴き、調査範囲（概ね 10m×10m）に対して、杭とロープによって縄張りを行った。その上で、印象的な対象・風景を各自 3 つ選んでスケッチを作成する課題を与え、「複数の視点から観察する」ことを実践してもらった。

最初の観察においてスケッチという手段を用いたのは、言葉による説明よりも、描いた本人も意識しない要素が多く描写されていることを期待したためである。演習の限られた時間内（しかもその中の限られた林内踏査）で、できるだけ多くの情報を持ち帰るための手段として選んだものである。

その一方で、スケッチという手段は、実際に観察される光景から多くの要素を半ば無意識的に切り捨てざるを得ない。そのため、実際の光景と比べてみて、いかに多くの要素が切り捨てられたか、またそれがいかなる理由によるものか、という問いかけを行って、学生に観察姿勢・方法、自らの依拠する価値・論理などを深く考えてもらうきっかけとすることもできる。この点も（写真ではなく）スケッチを選択した理由である。

# Brainstorming



林内で作成したスケッチを各班で見直ししながら、スケッチから想起されるイメージを書きだした後、それらのイメージを上位概念化し、価値を議論するヒントを探ってもらった。

このプロセスの過程で、同じ上位概念に属するイメージが全く異なるスケッチ（対象物）から得られていたりすれば、それがなぜか、そうした感じ方の違いはなぜ生じたかを議論したり、同じスケッチから得られたイメージが、相反する上位概念に属している場合、それがなぜかを議論したりすることは、価値の多元性を理解する助けになる。

まずはブレインストーミングから始める。スケッチに描かれたのは、林内で目にとまった対象と推測される。これがなぜ目にとまったのかを考えながら、それを見て感じたことを書き出してもらう。たとえば、倒木とそこに生えた草のスケッチを見て、「はかない」、「生命力」、「輪廻転生」、「くさい」、「汚い」、「落ち着く」…といったイメージ（印象）をポストイットに書き出して、スケッチに貼り付ける。この作業を個人でやってもいいし、各人が書いてきたスケッチを班員に説明しながら提示し、それを見て感じたイメージを全員が書き出して貼り付けるという作業を行ってもいい。

# Conceptualization

---



次に、貼り付けられたイメージ（ポストイット）だけを残してスケッチを取り去り、残ったイメージを分類する。この分類のレベルは人それぞれであろうが、グループで「これとこれは近いよね」「いや、これはこっちと近いんじゃないか」といった議論をしながら分類する。たとえば、「くさい」「汚い」は同じグループ、「生命力」「落ち着く」は同じグループ、「はかない」「輪廻転生」は同じグループなど。

最後に、グループを代表するラベル（上位概念、コンセプト）をつける。これが「価値」、ないし「価値」につながる特性になる。たとえば、「くさい」「汚い」は不快・嫌悪、「生命力」「落ち着く」は安心、「はかない」「輪廻転生」は自然の摂理など。森には安心感を感じる特性もあれば、都会生活に慣れていれば不快感を催すこともあるので、森の相反する「価値」をプレストに基づいて見いだすこともあり得る。

# Esquisse Discussion

---



エスキスとは素描・草稿の意であるが、ここではそれを用いた議論・討議を指す。この初期段階でエスキスを行う目的は、学生に複数の視点や観察手段があり得ることに気づいてもらうためである。限られた時間で一定の成果を出してもらうために、学生の思考・観察の手助けをするという目的もなくはないが、それ以上に、学生が自ら気づくきっかけを与えたり、班員間のコミュニケーションの円滑化を図ったりすることがエスキスの目的である。

具体的には、学生のスケッチと書き出されたイメージ、上位概念を見比べて、「異なる対象から同じイメージが得られたのはなぜか」、「二人が同じ光景をスケッチしているのに、なぜ片方にしか描かれていない対象物が存在するのか」、「ほかに適切な上位概念はないか」、「AとBがXという概念でまとめられているが、AとCをYと上位概念化することもできるのではないか」などといった質問を繰り返し、価値の多元性・多様性に学生たちが気づくよう導く。

# Idea Sharing



フィールド演習では、個人、グループ、全体という3つのスケールを活用して、情報の収束・発散・共有を図る方針である。特に、グループワークでは議論が収束してしまいがちであるので、あえて全体共有・討議の時間を挟むことによって、一度手を止めて新たな視点を獲得する機会を与えることが有効である。また、卒論研究を除くと、フィールド演習は学科(学部教育)唯一の必修講義であり、グループで具体的な成果を出すことよりも、学年全体が同じ問いに答えるようとして、体験を共有することが重要である。学年全体で演習に臨んでいるのだ、ということを再確認する意味でも、全体共有・討議の場は重要である。一方、エキス・指導を行う教員にとっても、他班を指導する教員の方針を確認するなど、全体の方向性をそろえる機会となる。ここでの全体共有では、1班3分ずつプレゼンテーションしてもらい、その後質疑応答とした。班ごとに状況は異なるだろうが、この段階での全体に共通する課題として、観察力の不足から、議論のために十分な素材が集まっていないことが想定される。また、最終成果を得るまでのプロセスについてもイメージができておらず、価値を議論するために有効な上位概念が得られていないこともあり得る。

そこで、議論が深まることなく収束してしまっているなら、なぜ収束しているのかを問いかける。その議論を通じて、これまでの観察・ブレインストーミングでは意識的もしくは無意識に除外していた論点・視点を見いだす。たとえば、「森」だから貴重とか、安らぐとか、輪廻転生とか、山中湖の演習林でなくてもあり得る価値ばかりが出ていた場合、なぜそういうものしか出ていないのか、それは観察者に起因するのか、演習林の特性(人工林・特徴がない)に起因するのか、といったことを議論する。さらに、観察しても出てこないのなら、逆に富士演習林がどういうものかを客観的資料・データに基づいて理解を深め、そうした外的要因・特徴を表出していると思われる林内の情景を探してみる(たとえば山中湖村との関係を表す情景)ことを、再踏査の課題に挙げてみる。このように、次の日に再踏査してこういうことを調べてみようと思わせるようなコメント、課題で求められている価値に関する議論とはどのようなものであるかをイメージさせるようなコメントを行うことが、教員側に求められる。

# Communication



すでに述べたとおり、学年全体で同じ演習体験を共有している、という認識を持つこと、それによってある種の組織文化を醸成するきっかけを得ることが、この演習の目的である。

しかし、演習そのものに取り組むプロセスは、必ずしも楽しいものばかりではなく、議論・思考の行き詰まり、班内での意見対立、教員からの厳しい指導などで、時に演習に対して後ろ向きになることもある。これは、本演習がフィールド演習となる以前の測量実習の時代から、共通する課題ともいえる。

そこで、夕食後は演習を離れ、教員と学生が飲み交わしつつ、ざくばらんに日頃の研究や学生生活、教員の人生・人生観、本演習の意義、果ては学生の恋愛事情に至るまで語り合うのが慣例となっている。凝り固まった頭をほぐすとともに、演習とは異なる手段で組織文化の伝達・共有を行うのである。

また、フィールド演習は答えのない問いに、学生たちが自分たちならではの答えを準備して論理立てて説明することを求めるものであり、ここでの教員－学生関係は、いわゆる座学型の講義における一方的関係とは異なる。教員も自身の経験や知識に基づいて答えを出そうとしていることに学生たちが気づき、積極的な議論を通じて自らの考えを陶冶していくことができるような雰囲気を作ること、こうした懇親会に期待される機能である。

# DAY2

---



2日目は、課題に対してどのように答えるか、その方針を大まかに決めてもらうことが目標となる。そのために、(1) ちゃぶ台返し、(2) 視点の提供、(3) 専門知識の提供を行う。3日目には、最終発表資料作成に一定時間を割く必要があることから、価値を議論するための素材（スケッチ、データ、イメージ、概念）集めは、事実上この2日目で完了しなければならない。成果物の質を左右する、重要な一日である。

# Re-Exploration



1日目のエスキス・全体共有を踏まえて、自らの観察姿勢・視点・手法、課題の真意を再考してもらうため、いったん作業を白紙に戻して、1日目と全く同じく「1人3枚のスケッチ作成」、「スケッチから想起されるイメージのブレインストーミング」、「イメージの上位概念化」という作業を行った。こうした強制的な「ちゃぶ台返し」は、アイデア創造ワークショップにおいて有用性が示されるプロセスである。どういう成果が求められるか、そのためにどのような材料が必要か、といったことを認識した上で、改めて同じ手順を踏むことにより、より短時間で有用な情報を得ることができる。演習参加者が自らちゃぶ台を返すことは容易ではないので、演習設計者・指導者が意図してちゃぶ台返しを演習プロセスに組み込むことが必要となる。このように、アイデア発想や議論に有用な技術を経験・習得することも、フィールド演習の二次的な目的といえる。

また、複数の視点で価値を捉えるために、視野を変えて観察することは有用であるが、観察に不慣れな学生にとっては複数のスケール（マルチスケール）を自ら設定して、対象（演習林内の一区画）を重層的に観察することは難しい。観察者、すなわち人間のスケール（ヒューマンスケール）のみに依拠してしまうことも多く見られる。そこで、全ての班を2つに分けて、一方には「調査領域 10m×10m の平面図を班で1枚作成する」、もう一方には「調査領域の中から 20cm×20cm の区域を各員5つ設定し、それらの平面図を作成する（1人あたり5枚の平面図作成）」という課題を与えて、その成果を全体共有することにより、観察の平面スケールを変化させることで、異なった情報・印象・感情が得られるということに気づいてもらうことを狙った。

# Re-Brainstorming

---



いわゆる産みの苦しみが見られるのも2日目からである。当初、よくわからないままに何となく議論して、アイデアを発散させることに集中していたところから、班内の意思統一や、求められている成果の理解、議論が行き詰まった状況の打開、上位概念の創造などの、知的負荷の高い作業に移行し始めるためである。1日目を振り返りつつ、新たな情報・視点を得て、再度イメージのブレインストーミングと上位概念化を行ってもらおう。さらに、上位概念の下に構造化した結果についてエスキスを行って、さらに議論を深める。このあたりで、議論が収束する見通しが立たず、道を見失う班も見られるようになる。しかし、2日間かけて調査を行ったことで、手元に豊富な情報が集まってきていることも事実である。議論が行き詰まったら、もう一度手元の情報を洗い直す、あるいは現場に戻って観察し直すよう、エスキス等で指導することが重要である。

# Interview



2日間に及ぶ観察と議論を経て、学生たちは様々な疑問を抱えている。それはたとえば、自らが20cm×20cmの平面図を書いたときにわざわざ描写した植物が何であるかといった単純な疑問から、植物の生長や状態に規則性を見いだして、その原因（日照・野生動物・風など）を問うようなもの、あるいは林内で観察される人の手の介入について意図を問うものなどまで幅広く、それらは学生たちが着目しようとしている価値と関連するものである。

彼らの疑問に専門知識をもって答える、推測する、あるいは議論することができる専門家として、演習林の教員である藤原先生をお招きし、学生からのインタビューにお答えいただくこととした。1日目冒頭の演習林レクチャーと時と異なり、藤原先生が答えきれないほどの質問を矢継ぎ早に繰り出す学生たちの姿には、彼らが自覚していなくても、演習に没頭し、演習林の価値を見いだそうとする真摯な姿勢が表出していた。

# DAY3

---



3日目は、いよいよ最終発表に向けて議論を収束させ、発表資料を作成するまとめの一日である。

課題は、「与えられた地点(10m×10m)の有する価値について、複数の視点による観察、考察に基づいた議論を各班で十分に行い、自分たちの考える価値についてプレゼンテーションするために必要と思われるA1サイズのポスターを作成する」というものである。

与えられた地点の価値が最もよく表現された光景をスケッチ、または絵画的に表現することと、与えられた地点の価値を特定した検討プロセスを説明することの2点を必須要件とした。また、議論を深めるための手がかりとして、他の価値との関係性などの相対的な観点を入れることや、与えられた地点の価値を高めるために考えられる方策、特に人為的介入を提案することなども提案した。

# Esquisse Discussion-1

---



3日目は発表資料作成に向けて、学生にスケジュールは一任されているが、成果物が作り込まれた段階でエスキスに持ち込まれても、抜本的な修正を視野に入れた議論できないので、作業の早い段階でまず最終成果物のコンテ的なものを作成してもらい、それを用いてエスキスを行うなどの工夫を行った。

最終成果のイメージが明確に見える班はごく限られており、価値について大まかな合意がなされたものの、現場の素材との接合を含めた論理構成ができていない班や、価値について班内で意見が割れている班、そもそも見通しが全く立ちそうになく、投げ出しそうな班まで、状況は様々である。

2日目までのエスキスとは異なり、できるだけ学生の意図をくみ取ったり、せっかく集めた観察結果を活用できないか検討して見せたりして、議論を支援することも重視したエスキスを行う。

# Esquisse Discussion-2

---



あまりに班内での合意形成が難しく、「こういう考えもあれば、ああいう考えもあります」とお茶を濁そうとする班や、うまい概念化を図ろうとするばかりに、自分が現場で感じた素直な気持ちを表出することを忘れつつある班もある。

一方で教員も、単に観察の視点を提供したり、議論を深めるきっかけを与えたりするだけでなく、2日以上かけて真剣に議論してきた学生たちに追いつき、彼らを動かすようなコメントを繰り返す必要が出てくる。そうすると、エスキスに参加する教員側も必ずしも一枚岩ではなくなり、それぞれの経験と知識に基づいて、異なるコメントを出すようになる。それは、学生と教員とが正面から対等にぶつかり合っていることを示しているともいえる。

# Esquisse Discussion-3



フィールド演習は、学生にとってのみならず、教員、特に若手教員にとっての修行の場にもなっている。価値という、人間社会における根源的要素について、いかなる学術的背景を持つ教員であっても、自らの専門と社会との関わりに基づいて思索を深めていることを、学生たちを前に実証してみせることが求められるためである。

また、様々に異なる学生たちを相手に、自らの論理を理解できるように説明しつつ、学生の意図や疑問を読み取って、彼らの思考・議論を助ける能力、まさに指導する力をも問われる。

このようにフィールド演習は、社会と強く関わっている「社会基盤学」の研究者、そして教育者として、本質的に重要な資質を涵養するファカルティ・ディベロップメント (FD) の機会でもある。

翌日に最終発表を控えた3日目夜には、夜半を過ぎても議論や資料作成に全力を注ぐ学生の姿が毎年見られる。それも、学生たちの記憶に残っていくのであろう。

# DAY4

---



4日目、最終日は1日かけて各班の成果を発表し、議論を行う。

# Presentation-1



プレゼンテーションは、各班3分で発表し、講評5分とした。スケッチや図面、さらにはスキット（寸劇）まで、様々な表現方法を活用して、学生たち自身が感じた演習林の価値について発表が行われた。

# Presentation-2

---



例年、最終発表や毎夜の懇親会には、演習担当以外の学科教員が訪問しており、学生・教員双方にとっての刺激となっている。

# Poster Session



どの学生も、4日間真剣に課題に取り組んできた。その分、自らの成果物に対する自信・誇りも、他班の成果に対して掘り下げた議論をしたいという気持ちも抱く。時間的制約を考慮しながらも、そうした学生たちができるだけ討議することが可能となるよう、プレゼンテーションの後にポスターセッションの時間を設けることとした。

最初に1～6班が発表し（合計48分）、5分休憩をとってその間に1～6班のポスターを壁面に貼り出す。25分のポスターセッションをもうけて、学生や教員が自由にコメントして回る。

1～6班のポスターをはがして、7～11班の発表準備を行うため、5分休憩を取る。

次に7～11班が発表し（合計40分）、5分休憩をとってその間に7～11班のポスターを壁面に貼り出す。20分のポスターセッションをもうけて、学生や教員が自由にコメントして回る。

どのポスターの前にも人だかりができ、熱い議論が交わされた。

# Reflection WS



すべての成果発表、ポスターセッションが終わり、やり遂げた感のあふれる学生を前に、約2時間にも及ぶ振り返りワークショップが指示された。これは、このフィールド演習を「何か演習林の価値とやらについて議論した」というだけの記憶に終わらせず、学生たちそれぞれで何らかの「学び」を具体的に表現して記憶してもらうためのプロセスである。

本演習終了後にもレポート課題が出されるのであるが、記憶が風化する速度は思う以上に早いものである。記憶が鮮烈であるうちに、可能な限り「学び」として概念化し、長期記憶に刻み込む。それが、10年、20年、あるいは50年後に何らか役立つと期待して、あえて振り返りの機会を設けた。

まずグループワーク（1時間）で「自分たちの発表内容の反省」、「どういった気づきが足りなかったか」、「どういった発想がよかったか」、「いい発想が出てきたのはどういう時だったか」、「課題についてどう思ったか」、「4日間を通して自分や班がどのように変化したか」などといったことについて自由に議論してもらう。このとき、考えたことは必ずポストイットに書き出し、模造紙に貼りだして、類似するもの同士をグルーピングしてもらう。次に全体討議（約30分）で、「今回の課題についての感想（特に課題の意味についてどう考えたか）」、「もっとうまくやるためにはどういうプロセスをとるべきだったか」、「演習に取り組む過程でアイデアがどのように生まれ、消えたか（それらに影響した要因は何か）」の3点について議論する。

最後に、最終レポートの説明を行った後、レポートに必要な情報を整理したり、自分の考えをまとめたりするため再度グループワーク（約30分）の時間をとる。

# Reflection WS

---



# Comprehensive Evaluation



最後にスタッフからの総評（ひとり3～5分程度）を行った。例年、学生のレポートを読むと、総評で聞いた教員のメッセージが強く焼き付いていることが見て取れる。しかし、それは演習なしに伝えても、彼らの記憶に残ることはないであろう。

この4日間の体験が、学生たちにとっていかに大きな影響を持つものか、彼らが社会基盤学科の一員となるのに不可欠なプロセスであるか、そのことを強く意識しながら、フィールド演習の終わりを迎え、また次年度の課題を検討し始めるのである。



**DEPARTMENT OF CIVIL ENGINEERING THE UNIVERSITY OF TOKYO**  
**FIELD EXERCISES 2014 FOR THE NEXT YEAR...**

---

---



## フィールド演習の手引き

期間 2015年9月8日(火)～11日(金) 3泊4日  
場所 東京大学大学院農学生命科学研究科  
附属演習林 富士癒しの森研究所

1	【重要】富士演習林における留意事項 .....	2
2	演習課題・評価 .....	2
2.1	目的 .....	2
2.2	はじめに .....	2
2.3	課題 .....	3
2.4	単位認定の要件・成績評価 .....	3
3	スケジュールと進め方 .....	4
3.1	演習全体の流れ .....	4
3.2	詳細なスケジュール .....	4
3.3	作業のポイント .....	6
3.4	調査領域の割り当て .....	8
	参考資料 .....	10
1.	スタッフが用意しているもの .....	10
2.	なにを測るかのヒント .....	11
3.	どう測るかのヒント .....	14
4.	どう表現するかのヒント .....	19
	事故時の対応および東京大学富士演習林周辺の医療機関 .....	24

### 演習場所

東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林 富士癒しの森研究所  
〒401-0501 山梨県南都留郡山中湖村山中 341-2  
Tel. 0555-62-0012

### 宿泊場所

東京大学山中寮 内藤セミナーハウス  
〒401-0502 山梨県南都留郡山中湖村平野 506-296  
Tel. 0555-62-0491

## 1 【重要】富士演習林における留意事項

- ・ 受講者の安全確保のため、野外での活動時間は 8 時～12 時、13 時～17 時(寮に帰着する時刻)とする。室内での作業は、時間帯を問わず、自由に行ってよい。
- ・ 初日を除き、毎朝 8 時半に点呼を行う。必ずそれまでに朝食・支度を済ませ、演習ができる状態とすること。
- ・ 野外作業に出かける際と戻った際に、全員揃っていることを確認し班長が出発時間、戻った時間をスタッフに知らせること。また、演習期間中は 1 人での行動はしないこと。
- ・ 敷地内には、うるしなどかぶれる可能性のある植物や、シカ、イノシシなどの動物が生息しているので注意すること。
- ・ 帽子、長袖シャツ、長ズボン、軍手、運動靴、タオルなど、野外での踏査の際の怪我を防げるような服装を心掛けること。短パン、サンダルは厳禁。
- ・ 短い時間でも天候変化が頻繁に起こるため、野外調査時は、常に雨天でも調査可能な服装・持ち物とすること。
- ・ スズメバチの生息域であるため、野外調査時は肌の露出のない白色系の服装をこころがけること(特に黒・黄色の服装はハチに襲われやすいため原則として避けること)。
- ・ その他、野外活動中に危険な動物などを発見したときは、教員に報告のこと。
- ・ 事故、体調の異変等のトラブルは速やかに教員に報告すること。
- ・ 山中湖水域には立ち入らないこと。

## 2 演習課題・評価

### 2.1 目的

個々の自然環境の特徴やその固有性を理解・感得し、自然に対する感受性や想像力を養い、シビルエンジニアとして、個々の環境の価値、その根拠、それらを維持あるいは改変する際に求められる倫理的態度について各自が考えることを目的とする。

### 2.2 はじめに

この世のモノや現象が有する価値は、その対象を捉える人の価値観や捉える際の尺度により異なる。例えば、ダムを例に考えてみると、そのダムが有する価値はダムの周辺住民とダムの利益(水やエネルギーなど)を受ける下流の住民との間で異なるであろう。また、人間と動植物、流域全体の水循環とダム周辺の水循環を考えると、ダムが有する価値が決して絶対的なものではなく、何を主体として考えるかにより相対的に変化しうるということが想像できるであろう。ある対象を理解するために、まず、ある特定の価値観の下でそれを理解しようと試みることは有用である。しかしながら、社会に存在するモノや現象を扱う際に、そのような特定の価値観のみに基づく理解には自ずと限界が訪れる。我々シビルエンジニアには、様々に変わりうる価値

を、多様な視点から理解しようとする能力が求められている。そのために必ず踏まなければならない第一歩は、その事物・その事象をよく「見る」ことである。そこで、諸君らには本演習林を対象として、様々に異なり、様々に変化する価値について論じてもらう。

### 2.3 課題

諸君らには演習林内の1地点(20m×20m)を与える。〈はじめに〉に書かれていることを踏まえて、与えられた地点を複数の視点から観察し、深く知ることを通して、あなたにとってのその場所の価値を見出し、その価値を他の人がわかるように作図などによって伝えてほしい。

#### ■注意

- ・この課題は、班内での合意形成の演習や、他の班との競争的課題ではなく、正解は無数に存在し、議論の勝ち負けを決めるものでもない。自分の経験、フィールド演習で体験したこと、他人の意見との比較、などを手がかりに、自然環境に対する自分の価値観と向き合い、深めてほしい。

### 2.4 単位認定の要件・成績評価

- ・ 山中湖合宿への参加(全日参加を前提とする)
- ・ 最終レポート提出(帰京後)
- ・ 成績は、班の成果物・発表内容と各自の貢献度、およびレポートで評価する

#### ■最終レポート：提出〆切9月25日(金)17:00

- ・ 4日間全体の取り組みや講評会の内容をふまえ、課題にどのように挑んだか、あなたが何をどう考えたかを、振り返り時の班内での情報共有もふまえてまとめる。特に、演習期間を通じた各自の考えの変化、班員間での意見の一致や相違、それらがグループ発表へ与えた影響などに着目する。
- ・ 演習全体についての意見・感想も付記すること。
- ・ 原則 A4 枚数自由、メールで石田教授に提出。メールの件名を「2015 フィールド演習」、レポートのファイル名を"2015 学生番号.doc or .pdf"とする。

### 3 スケジュールと進め方

#### 3.1 演習全体の流れ

8日	9日	10日	11日
<ul style="list-style-type: none"> <li>■ ガイダンス</li> <li>■ レクチャー</li> <li>■ 踏査 平面図作成、写真 10 枚を撮影</li> <li>■ 班内での議論</li> <li>■ 全体共有・エスキス</li> <li>■ 教員レクチャー</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 調査・現地エスキス スケッチ 3 枚作成</li> <li>■ 調査・測量・測定・作図</li> <li>■ 全体共有・エスキス</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 断面図・講評会発表資料作成</li> <li>踏査・エスキスは随時</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 講評会 現地でのポスターセッション</li> <li>■ 振返り</li> </ul>

#### 3.2 詳細なスケジュール

9/8(火)	11:00-11:30	集合/出席確認/スタッフ紹介/演習説明/寮利用上の注意
	11:30-12:00	部屋へ荷物入れ/装備
	12:00-12:30	昼食
	12:30-14:00	【レクチャー】演習林管理者から注意事項・危険地点
	14:00-16:30	【踏査】20m×20mの平面図作成 現地の様子を伝えるための10枚の写真を撮影
	16:30-17:30	【議論】各箇所をの価値を10枚の写真から議論
	17:30-18:15	【全体共有】(担当箇所がどのような場所か詳細に説明)
	18:15-19:00	【教員レクチャー】専門家が森を見たときの楽しさ
	19:00-	夕食・入浴・懇親会
9/9(水)	07:30-08:30	朝礼/朝食
	08:30-12:00	【調査】価値探し、各人3枚のスケッチ 【現地エスキス】
	12:00-13:00	昼食
	13:00-17:00	【調査・測量・測定・作図】【エスキス】 【平面図の更新/充実】 【断面図を作成する断面の決定】
	17:00-18:00	【全体共有】 or 【演習林助教質疑応答】
	18:30-	夕食・入浴

9/10(木)	07:30-08:30	朝礼/朝食
	08:30-12:00	【断面図・発表資料作成】※必要に応じて現地踏査
	12:00-13:00	昼食
	13:00-18:00	【発表資料作成】 / 【エスキス】
	18:30-	夕食・入浴
9/11(金)	07:30-08:30	朝礼/朝食
	08:30-09:30	部屋の清掃/荷物整理/部屋を空ける
	09:30-12:00	【講評会】ポスターセッション(現地)
	12:00-13:00	昼食
	13:00-15:30	【講評会】ポスターセッション(現地)
	15:30-16:30	【振返り】
	16:30-17:00	事務連絡/記念撮影/SR 掃除
	17:00	解散

※上記を目安に、班ごとに計画を立て、状況に応じて実施していくこと。エスキスも随時行う。

### 3.3 作業のポイント

#### <全体を通して>

- ・最初に各班で班長を1名決めて、スタッフに報告する。
- ・班員全員が均等の負担となるようにする。特定の班員に仕事を押し付けてはならない。
- ・課題を遂行するためには、対象とする森の地点を自分の目で見つめることが不可欠である。特に3日目は発表資料作成のための時間としているが、随時森へ出かけることを心がけてほしい。
- ・基本的に班ごとのグループワークによって議論を深めてもらう。課題に対して自由に議論し、活発な意見交換をしてほしい。
- ・個人作業として写真撮影やスケッチの作成などの時間を設けている。自分の観察したこと、感じたこと、調べたことなどについて個人で向き合い、整理、表現することを大切にしてほしい。特に、個人作業で得られた成果物は班内で共有し、そこから想起されるイメージをもとにして価値を考えるきっかけとしてほしい。
- ・各日に各班の議論の状況を共有する「全体共有」の時間と、教員からのコメントを得る「エスキス」の時間を設けている。これらの時間で得られたコメントが重要だと判断される場合には、最終成果に対して何らかの形で反映してほしいが、得られたコメントを鵜呑みにしたり真似したりすることを要求するものでもないし、あるいは単に反論することだけを目的とするものでもない。時には相矛盾する主張を、各班で十分に議論するきっかけとしたうえで、多面的な視点から参考にするようにしてほしい。また、2日目には演習林のスタッフの方への質問時間を設ける予定である。

#### <1日目>

##### ■レクチャー

演習の最初に、富士演習林スタッフによる富士演習林の特徴や、森林の基本的な見方などについてのレクチャーを受講する。

##### ■平面図作成

班ごとに、調査領域の全域(20m×20m：班で1枚)の作図を行う。作図に当たっては、見えているものをできるだけ客観的に、忠実に表現すること。詳細な要件は以下とする(参考資料の4.も参照すること)。

- ・縮尺は1/20とする(=1m四方)
- ・【必須】領域内における高木の位置・高さ・幹の太さ
- ・【必須】領域内のコンター
- ・[任意]その他、領域内で重要と思われる地表・地上・地中の情報

## ■写真撮影

各人で、前述の調査領域内で印象的な対象・風景の写真を10枚撮影する。対象領域を様々な視点から見ると同時に、対象領域の価値を班内で議論するための素材として活用できるように、対象領域を伝えると思われる箇所の撮影を行ってほしい。写真の撮り方に制約はない。

## ■教員レクチャー

専門家が森を見るとき視点やその楽しさのレクチャーを行う。測量と土質を専門とする教員2人を考えている。

## <2日目>

### ■スケッチ作成

再び対象地に入るが、前日の班内での議論や全体共有を踏まえ、新たな視点ももって対象地点を見つめなおしてほしい。そして、各人で3枚のスケッチを作成する。前日に行った写真撮影と異なり、スケッチでは自分の目に映る箇所を密に描くことを通して、自身が見出す価値を表現していく。なお、ここでの課題は絵の上手下手を問うものではない。

### ■現地でのエスキス

各人で描いたスケッチを持ち寄り、それぞれが考える価値について班内での共有を行う。各人がさまざまな価値を考え、場合によっては相反するようなものも見えてくるかもしれない。しかし、お互いの価値に何らかの共通点はないか、あるいは例え相反するものでも共存できないかといった視点で、各人が考える価値を様々な視点から見つめてほしい。

### ■調査・測量・測定

班ごとに、調査領域の全域で測量・測定を行う。個々のアイデアに基づいて調査項目や調査方法を立案してかまわない。参考のため、具体的に測定できるものや測定に使用できる機器の例、考察のヒントを参考資料に載せてある。

ここでの目的は、1日目に作成した平面図の充実を図ることにある。また、この後に断面図を作成する箇所を各班で決定することとなるため、個々の感性だけでなく調査等行った結果も手がかりに、価値を有すると思われる箇所を、断面図を作成する箇所として選定してほしい。

### <3日目>

#### ■断面図作成

班ごとに、調査領域の中で前日まで議論して決定した断面により、見いだした価値を示す図を作成する。作図に当たっては、見えているものをできるだけ客観的に、忠実に表現すること。また、その場所の価値を表現することを目的として、図中には「人」を書き入れること。書き入れた人と断面図との関係、平面図やその他の発表資料との関係を意識して作成してほしい。詳細な要件は以下とする(参考資料の4.も参照すること)。

- ・延長 10m 以上
- ・縮尺 1/20(=1m 以上)
- ・断面の真上だけでなく、奥側に見えているものも書き入れてよい

#### ■発表資料作成

与えられた地点(20m×20m)の有する価値について、複数の視点による観察、考察に基づいた議論を各班で十分に行い、自分たちの考える価値についてプレゼンテーションするために必要と思われる資料を作成すること。プレゼンテーション資料は、これまでに作成した平面図・断面図に加えて、対象地の価値を表すポスター (A1) を1枚用意する。

必要に応じて自由に踏査・エスキスを行ってよい。ただし、屋外での調査作業は17時までとする。

### <4日目>

#### ■講評会

最終日の講評会で、課題に対する取り組みについて、他の受講者と教員に説明し、講評を受ける。発表は現地でのポスター形式とする。具体的には、各班を4つに分割し、全班のメンバーからなるツアーグループを組成して、現地を回りながら自分の班の地点について説明を行っていく。すなわち、班の全員が他班のメンバーに対して説明を行うこととなるので、そのつもりで発表資料の作成を行ってほしい。

#### ■振り返り

セミナーハウスに戻り、これまでの取り組みや講評会での議論を共有する時間を設ける。

#### 3.4 調査領域の割り当て

各班の調査領域は、次ページの地図に従って割り当ててある。なお、状況により当日変更となる場合もある。

# 演習林平面図

【凡例】

区域：——

林道：————

歩道：.....



## 参考資料

以下に、課題に取り組むために参考となる資料を掲載する。

ここに掲載するものはあくまでも一例である。実際の作業においては、各自のアイデアに基づいて調査項目を設定し、調査方法を立案し、実際に調査を行ってほしい。スタッフとは、随時エスキスなどを通して意見交換できる。

### 1. スタッフが用意しているもの

文献・機材ともにすべてを網羅しているわけではないので、自らの目でスタッフルームを確認してほしい。また、必要な物品が発生した場合は遠慮無く相談すること。可能な範囲で対応する。

#### (1)文献・資料(配布資料以外はスタッフルームで貸出し)

##### ■山中湖・森林に関する文献・資料

「東京大学富士演習林の80年軌跡と未来」東京大学演習林出版局(※配布)

「山中湖村の自然誌」山中湖村 2006

「山中湖村史 第1巻~第5巻、資料編」山中湖村

「環境と国土の価値構造」東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習(著)、東京大学演習林出版局、2012

「“森たび” 東京大学演習林の見どころ100」東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習(著)、東京大学演習林出版局、2012

「森へゆこう—大学の森へのいざない」全国大学演習林協議会(編集)、丸善、1996

「東京大学の森林再生—自然の遷移か、人間の都合か」蔵治光一郎、東京大学愛知演習林、2011

「樹海をゆく—富良野・東京大学演習林の森づくり」東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習(著)、東京大学演習林出版局、2014

「東京大学千葉演習林のすべて—わが国最古の「大学の森」」東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習(著)、東京大学演習林出版局、2014

「山中湖周辺の民俗」吉田チエ子、岩田書院、2004

「1:50000 旧版地形図・1:25000 旧版地形図(M29~現在まで各年)」

##### ■生物・生態系などに関する文献

「樹木(春夏編)」「樹木(秋冬編)」永田芳男、山と溪谷社  
各種図鑑(植物、昆虫、動物など)

「保全生態学入門—遺伝子から景観まで—」鷲谷いづみ・矢原徹一 文一総合出版

「生態学入門」日本生態学会(編) 東京化学同人 2004

「群集生態学」宮下直・野田隆史 東京大学出版会 2003

## ■デザインに関する文献

「復刻 デザイン・サーヴェイ 『建築文化』誌再録」神代研究室・宮脇ゼミナール 彰国社

## ■音環境に関する文献

「新版道路環境」辻靖三/足立義雄/大西博文/桐越信 山海堂 2002

### (2)機器・機材など

- ・ 巻尺、コンベックス、くい、ハンマー、ビニールひも
- ・ マルチ環境測定器、レーザ距離計、測桿、標尺
- ・ T定規、文房具各種
- ・ プリンター

## 2. なにを測るかのヒント

以下には、測定を行う項目とその方法の一例を示す。以下を測らなければいけないというわけではなく、以下を測ればよいというわけでもない。ヒントとして活用してほしい。

### (1)地形

起伏の有無、斜面の向きやその周辺地域との関係により、調査地域の特徴をみることができる。

### (2)植生の様子

森林はいろいろな木や草によって構成されており、高木、亜高木、低木、草本のように様々な高さの植物がそれぞれ階層を作って一緒に生育している。森林を観察するときは、まず、階層ごとに植物を把握する。なお、一般に地質と植生の因果関係は深いといわれており、演習林周辺の植生や土壌の状態を解釈する上で地質の情報も参考となる。

#### ・高木の様子

樹木の特徴を説明する場合、一般に、樹種・樹齢・木の高さ・幹(樹幹)の太さ・樹冠(樹木の葉が集まった部分)の大きさなどを用いる。これらが調査地域をどのように特徴付けているのか、という観点が考えられる。

#### ・低木の様子

低木層以下(林床)の植物を調査することによって、植物群落を決定するための植物(標徴種)を明らかにすることができる。また、生育している植物の性質からその立地条件などの環境を知ることができ、さらに、人間の影響がなくなった後、自然のままに育成する植生(潜在自然植生)の予想や人為的影響の度合いを知ることができる。なお、森林の発達程度によって異なるが、林床に生育している植物種の高さの目安は5~6m以下のものである。

### (3)気象条件

まず、森林における気象条件の一般的な特徴などを記す。調査の方法(測定場所の選定、測定頻度など)を決定する際の参考とする。

植物はたとえ一本の木や丈が低い草などでも、周辺の接地層内の気象に影響を与え、植物群落内の微気候は周囲とは異なる。植物により改変された気候を植物微気候と呼ぶ。気候の変化程度は植物群落が密なほど、群落高が高いほど、面積が大きいほど顕著である。群落は幹・枝・葉を立体的に分散配置させているため、大部分の日射を主に葉により吸収している。一方、葉からの蒸散作用により日射エネルギーの半分近くが気化熱に消費されるので葉温の上昇は僅かで、ひいては気温の上昇も僅かである。群落周囲及び内部では、風速が裸地より著しく減少する。このため、乱流輸送の交換係数が低下するので、群落周辺では気温・湿度・ガスなど各種の量の局部偏在性が強くなる。

植物体が大きく、成長が進み、高密度で、樹冠が相互に接触し林冠閉鎖が生じた群落では、林冠表面が地表面に代わり日射吸収・夜間放射を行うので、林冠表面を上部活動表面・仮想地表面などと呼ぶ。上部活動表面と地表面の間は林冠層で埋められ、風速が弱い・日中気温が低いなど緩和された気象変化を示す。林冠閉鎖が起こり、群落高がさらに高い森林では、林冠層底面の下に、枝葉がなく樹幹のみ立ち並ぶ空間ができる。この場合、空気の流動がよいため気象緩和程度は林冠層内より低い。

次に、具体的に測定しやすい項目について記す。測定はマルチ環境測定器を用いると便利である。

#### ・気温

森林内外の平均気温を比較すると、季節・林種を問わず林内の方が平均気温が低い。平均気温の内外差は森林の閉鎖度が高いほど増加する。一方、日最高気温と最低気温の差(日較差)に関しても林外の方が大きい。こうした特徴は、林内では林冠によってエネルギーが反射および放出され、日中の気温が低くなることと、樹冠に遮られて林内に戻る小循環のために夜間の放射冷却が少なく、林外より気温が高くなるためである。

#### ・湿度

林内は、ほぼ常に林外より相対湿度が高い。閉鎖度が高い森林ほど蒸散による湿度が高い。林内湿度は明瞭な日変化を示すが、変化程度は林外よりも少ない。また、林内湿度には、地面からの高さによる違いもある。日の出直前は各高さとも飽和に近く、樹冠表面は結露していることが多い。日出後まもなく樹冠の表面は乾き、湿度は低下する。時間と共に湿度低下は順次林床に及ぶ。日中には地表付近と樹冠層では蒸発および蒸散のため湿度が高い。夕刻には葉内は乾いてくる。

#### ・風向・風速

広葉樹混交林では、樹冠層の風速は林縁から 40m 入った位置で林外風速の 30%以下に低下する。一方、抵抗が少ない樹幹層では林縁から 100m 入った位置で林外風速の 20%を示すという例がある。林内風速は、林の密度にも大きく影響される。風速が 0.2m/s 以下を静穏と称するが、カシ林内において静穏状態がみられた頻度は、疎林では着葉期に 87%・落葉期に 48%、密林では着葉期に 98%・落葉期に 67%という例がある。

・照度

林内の光の強さは、まず測定値の緯度・測定時の季節・時刻による太陽高度の影響を受け、次に天候の影響を受ける。雲の動きが早い時は経時的変動が極めて激しい。さらに林冠の影響により低下する。無雲状態で短時間内に測定しても、葉のそよぎにより測定値は大きく変動する。また、夏の快晴日の林外では 10 万 Lux オーダーの値を示すが、暗いスギ林などは数 Lux オーダーの値を示すというように、取り得る値のレンジが大きいことが特徴である。

(4)地質・土壌

(5)その他

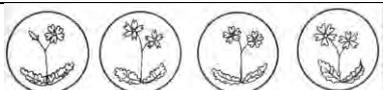
・主観情報

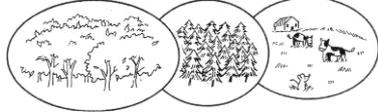
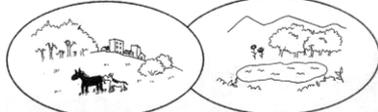
人間が感じる感覚やその結果としての主観評価も、気象条件などの重要な評価要素である。特に、聴覚(騒音)、触覚(温度や湿度の影響：不快指数・寒冷指数など)が参考となる。

・生物多様性

1992 年の地球環境サミットで採択された「生物の多様性に関する条約（生物多様性条約）」にみられるように、生物多様性の保全やその持続可能な利用が世界的課題として議論されている。同条約に加盟している日本では、「生物多様性国家戦略」のもと、里山・干潟をはじめとする国土全体の生物多様性の保全や自然再生の推進などが多様な主体の参加と連携によって進められている。生物多様性はいまや世界的なキーワードの 1 つである。生物多様性とは、生物の種類多様性を表す「種多様性」だけでなく、遺伝情報や生物と環境との関わりをも含む概念で、「遺伝子」、「種・個体群」、「群集・生態系」そして「景観」というマイクロからマクロまで様々なレベルで評価され、これらは互いに深く関連しあっている(表 1)。

表 1：生物多様性の概念 (鷲谷ら(1996)、pp.38-39 の内容を基に作成)

	組成的要素 (観察対象)	構造的要素 (観察内容)	機能的要素 (評価内容)
遺伝子		遺伝子組成	遺伝子構造 遺伝的過程

種・個体群		種 個体群	個体群構造	生活史 個体群統計過程
群集・生態系		群集タイプ 生態系タイプ	相関パターン ハビタット構造	種間相互作用 生態系過程
景観		景観タイプ	景観パターン	景観過程とその分布 土地利用傾向

### 3. どう測るかのヒント

#### (1) 水平距離・標高差の測定

##### ・2点間の距離・標高の測定[図1]

基準となる点から対象まで実距離( $L$ )と水平角度( $\phi$ )を測定する。距離  $L$  と水平角度  $\phi$  から三角比を用いて水平距離  $L'$  および標高差(鉛直距離)  $h$  を算出する。または、レーザ距離計を用いて  $L$  を直接測定することもできる。

※三角比の計算にあたっては、Excel の計算を用いると簡便である。ただし、Excel の入力値の単位はラジアンとなっているので注意すること。

※レーザ距離計は、レーザが照射されている点までの実距離を計測するものである。基本的には、2点間の距離を計測したい場合、片方の点に立ち、もう片方の点の方向に向けて距離を測定し、その距離が最短となる時水平距離  $L'$  を計測できている。計測誤差は巻き尺と比べて非常に小さいが、レーザが正しく対象に照射されており、かつ最短距離である状態を実現するにはコツが必要である。取扱説明書などを参照すること。なお、レーザを人に向けないこと。

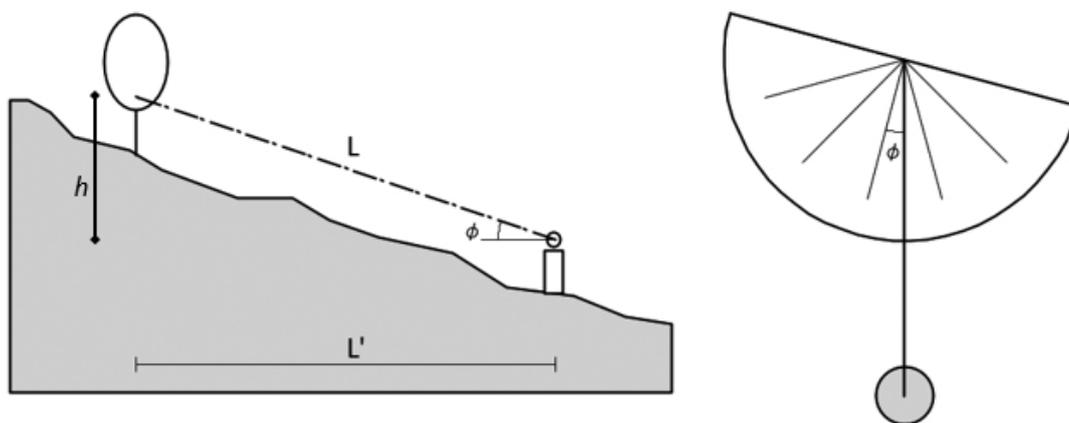


図1：対象との実距離と水平・鉛直距離

##### ・調査範囲における位置・標高の測定[図2]

樹木などの、調査範囲内での(相対的な)位置・標高を測量する簡便な方法を例示する。

- ・ 調査範囲のなかで、位置を既知とする基準点を定める。
- ・ 基準点から測量対象までの水平距離/標高差および磁北との角度(分度器などを利用)を測定する。
- ・ 複数の対象に対しては、一つ目の対象から二つ目の対象に向かって水平距離/標高差と磁北角を測定してもよいし、基準点からもう一度水平距離/標高差と磁北角を測定してもよい。
- ・ 相対的な位置関係が分かっている複数の基準点を設けたり、余分な測定を行ったりすることにより、誤差の軽減に努める。

・ 平面的な情報の作成[図 3]

上記を必要な密度で行うことにより、調査範囲内に(相対的な)位置や標高が判明している点が十分な個数設置できる。等高線は計測した点の標高をもとに内挿することで作成できる。

- ・ どこかの点を 0.0m(基準)とする
- ・ 計測点どうしの間には、原則として等間隔で等高線を引いていく
- ・ 等間隔で等高線を引くと明らかに実態と合わない場合は、計測点を増やすことが望ましい。

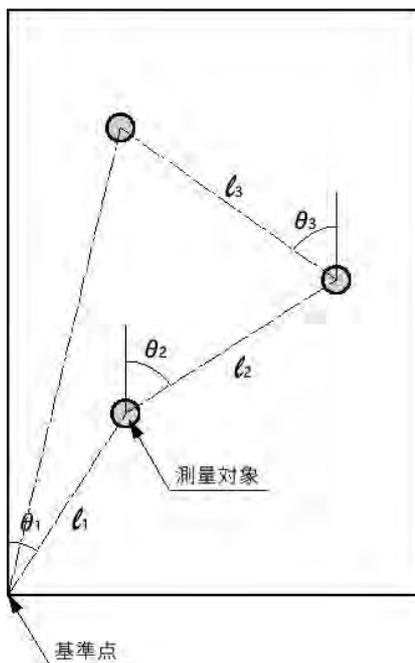


図 2 : 各対象の位置関係の把握

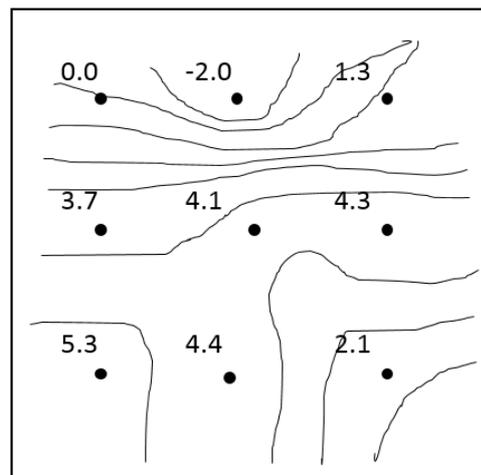


図 3 : 等高線の引き方

※本課題は地形図を作成すること自体が目的ではない。調査範囲内の様子を伝えるための方法としては、後述の平面図の書き方も参考にするとよい。

(2)高木の測定

- ・ 樹種

演習林内の代表的な樹木に関しては、「東京大学富士演習林の 80 年軌跡と未来」に詳しい。

- ・ 樹高

レーザ距離計(前出)もしくは測桿(そくかん；図4)を用いて樹高を測定できる。測桿とは測量用の伸縮式ポールのこと、12m測桿が一般的である。測定は2人1組で行い、1人が測定対象木の根元に測桿を垂直に立てこれを伸ばし、もう1人は測定対象木の先端がよく見える地点にあらかじめ移動しておき、樹木の先端と測桿の先端が重なったら測桿を伸ばすのを止めるよう合図を送る。その時の測桿の長さが樹高となる。測桿を伸ばした長さは手で読めるようになっている。

※本来は、樹高が12m以上の場合には測高器を用いるが、本演習では一律12m以上として扱ってもよいこととする。

※測桿の伸縮は比較的重労働であることに留意する。

・樹幹径[図5]

立木の直径は、直立した大人の胸の高さに当たる位置で測定するのが世界中の通例である。これを胸高直径と呼ぶ。胸高の位置は国や地域によって若干異なり、日本では地上1.2m、ヨーロッパでは1.3m、アメリカでは1.37mが採用されている。本課題では、どの胸高位置を採用してもかまわないが、測定木ごとに胸高位置が変わらないよう注意する。本来は、樹幹径の測定には、輪尺(大きなノギス)や直径巻尺(幹に巻きつけることで直接直径が測定できる巻尺)が使われるが、本演習では普通の巻尺を使用してよいこととする。測定は、胸高位置に巻尺を巻きつけて周囲長を測り、それを円周率で割って求める。傾斜地の立木については斜面の上側に立って測定すること。

※ウルシやハゼのような、触ると肌がかぶれる樹木があるので注意する。

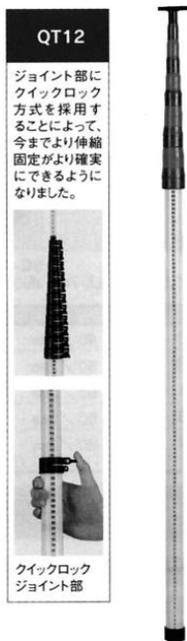


図4：測桿

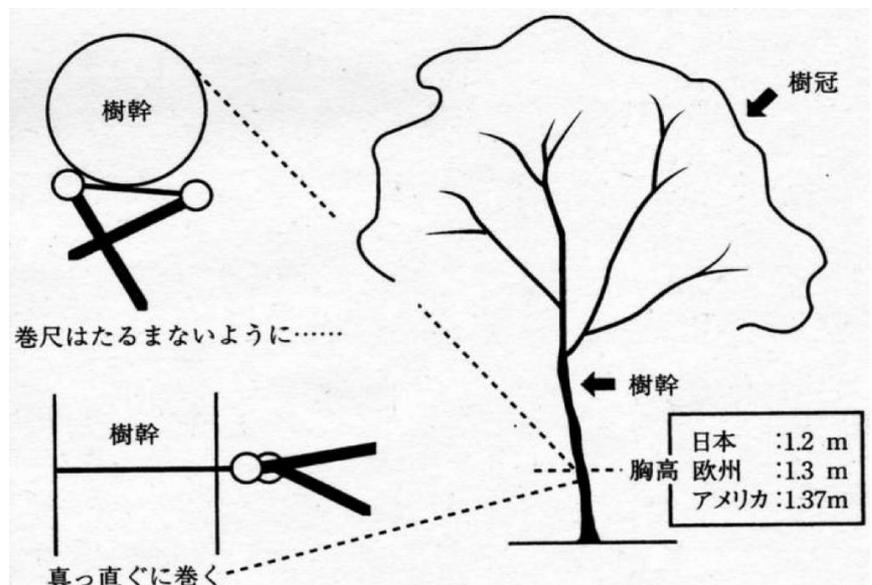


図5：樹幹径の測定方法

(3)低木の様子の測定[図6]

調査範囲内に存在する低木の種名を記録した後、種ごとの調査範囲に占める面積割合と、まとまって生育しているか、まばらに生育しているかなどの配分状況を調査する。調査地の立地条件や周辺の植生との関係を知るために、このような植生の配分図(群落配分図)を作成する。本来は、調査範囲内に出現する植物種すべてを調査し、植物群落を決定していく。ただし、本演習では特にまとまって生育している植物種などに関して調査を実施することとしてもよい。

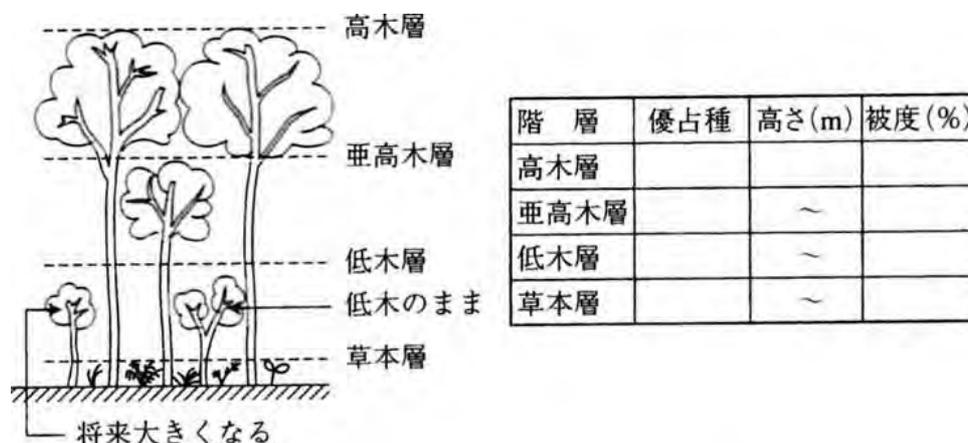


図6：階層区分の模式図

(4)気象条件の測定[表2；図7]

温度、湿度、風速、風向、照度はマルチ環境測定器で測定できる。なお、気象条件が上記までの項目と大きく異なるのは、同じ地点であっても時間変化を伴うという点である。各班で必要な時空間的解像度の情報を取得するよう工夫するとよい。

マルチ環境計測器の電源ボタン(Power)を押してしばらくすると測定準備が完了する。測定項目をモード選択ボタン(Function)によって選択する。モード選択はディスプレイの表示で判断する[表2]。

表2：マルチ環境測定器のディスプレイ表示

モード	ディスプレイ表示	測り方
風速/風向	右上に m/s	センサ(風車)を風の方向に向ける。風向は風速が最大となる向きを探すことによって判定する。
温度/湿度	右上に%RH(湿度) 左下に°C(温度)	値を読み取る。
照度	Lux	ディスプレイの向きが反転するのでセンサ(照度計)が上を向くように持ち変える[図7]。



図7：マルチ環境測定器(左：温度・湿度・風速・風向測定時、右：照度測定時)

前述のとおり、照度は場所によって取り得る値が大きく異なるため、一般には林内の光強度把握には相対照度法が多用されている。すなわち、林外無庇陰地(裸地)と林内の照度を同時に測定し、林外照度( $I_0$ )を100とする林内の照度( $I$ )の比( $I/I_0 \times 100$ )を求める。これによって、雲の動きの影響を除去でき、値の変動が激減する。この場合でも、林冠構造には水平方向の変化が多いため、多数の点で測定する必要があるが、林内の平均値を求めるのに便利な方法である。ただし、本演習では簡単のため、林内の絶対照度を用いてもよいこととする。

#### (5)光環境の測定

デジタルカメラを用いて、鉛直上向きに撮影し、植生などに覆われていない部分の面積の比率を求めることで、簡易に森林内の光環境を調べることができる。面積比は、印刷した写真に格子状に罫線を引き格点での値を分類し数える方法で簡易に推定できる。

#### (6)主観情報の測定

聴覚を通じて不快感を評価する方法として「騒音測定」がある。騒音を含めて音の大きさは音響パワーレベル(dB：デシベル)で表されるが、これは基準となる音響出力(W)の何倍かを算出し、これを常用対数表現したものである。主要な音源の音響出力と音響パワーレベルは以下の通りである。

表3：音源の音響出力と音響パワーレベル (辻ら(2002)、p76に基づき作成)

音源	音響出力(W)	音響パワーレベル(dB)
航空機	$10^2 \sim 10^5$	140~170
鉄道	$10^{-1} \sim 10^2$	110~140
自動車	$10^{-3} \sim 10^{-1}$	90~110
建設機械	$10^{-3} \sim 10^2$	90~140
工場機械	$10^{-2} \sim 10$	100~130
ピアノ	$10^{-3} \sim 10^{-2}$	90~100

テレビ	$10^{-6} \sim 10^{-4}$	60~80
掃除機	$10^{-5} \sim 10^{-4}$	70~80
通常の会話	$3 \times 10^{-5}$	75
犬の鳴き声	$10^{-1} \sim 1$	110~120

音源からの距離に応じて音のパワーレベルは減少する。これを音の距離減衰という。音源がなめらかな平面上の一点にある場合(点音源)、距離が2倍になるとパワーレベルは6dB減少する。また、音源が等速で動く場合(線音源)、距離が2倍になるとパワーレベルは3dB減少する。騒音の評価は、一定時間の変動を考慮した等価騒音レベル  $L_{Aeq,T}$  で評価される。詳しくは辻ら(2002)を参照されたい。

触覚については様々な感覚があり、気温や湿度等の気象条件によって表現される不快性評価指標も様々定義されている。たとえば、以下の通り不快指数や風冷指数が定義されており、森林の快適性を定量的に示す指標としても用いられている。

$$\text{不快指数 } DI = 0.81T + 0.01RH \times (0.99T - 14.3) + 46.3$$

$$\text{風冷指数 } k_c = ((100V)^{0.5} + 10.5) \times (33 - T)$$

ただし、 $T$ : 気温(°C)、 $RH$ : 相対湿度(%),  $V$ : 風速(m/s)、 $T$ : 気温(°C)

なお、気温 27°C・湿度 55%で不快指数 75 であり、気温 29°C・湿度 70%で不快指数 80 である。不快指数が 75 を越えると人口の1割が不快になり、80 を越えると全員が不快になるといわれている。また、日本人の場合、不快指数が 77 になると不快に感じる人が出ははじめ、85 になると 93% の人が暑さによる不快を感じるといわれている。

#### 4. どう表現するかヒント

##### (1)スケッチを描く

スケッチには、必ずしも絵の上手さや綺麗さを求めている。課題に取りかかる最初の段階として、あなたが思ったとおりに描いてみるのが大切である。

##### (2)20m×20mの平面図の作成

- ・ 測量した結果を、1/20の縮尺で作図する(方位とスケールバーを入れる)
- ・ 調査範囲の外側の位置・向きがわかるように描く
- ・ 位置や標高を測定した点を示し、そこから等高線をひく
- ・ 樹幹などを太めの線で、下草などを細めの線で描き、メリハリをつける
- ・ 測定した結果、調査した内容、伝えたい事を考えて作図する

以下の図も参考とすること。

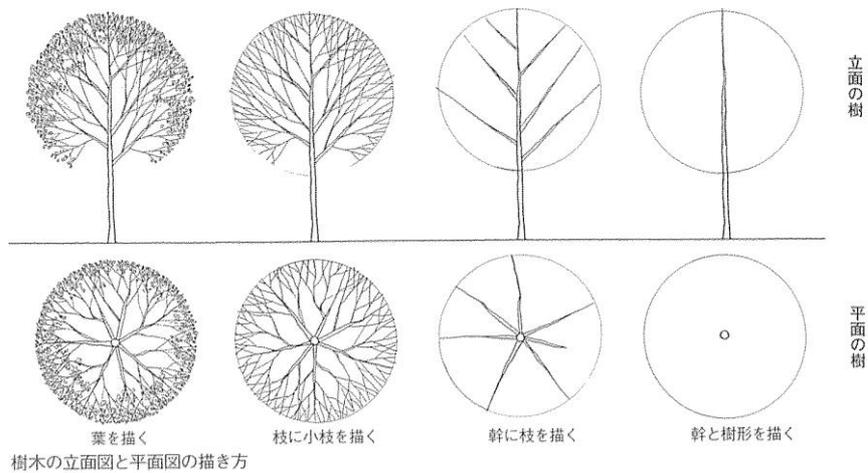


図 8：樹木の立面図と平面図の描き方(宮脇塾講師室編(2003)、眼を養い手を練れ、p.61)

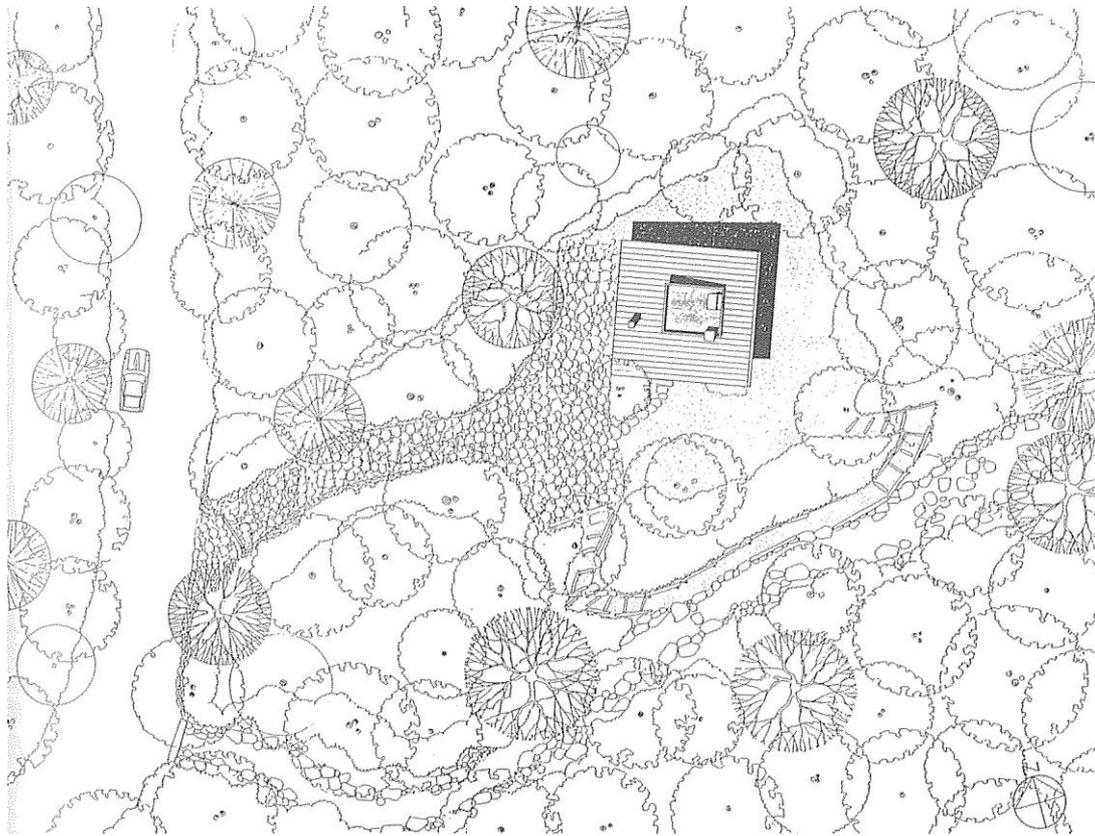


図 9：参考図(森の中の家 配置図/吉村順三)(宮脇塾講師室編(2003)、眼を養い手を練れ、p.62)

### (3)断面図の作成

- ・ 見えているものをできるだけ客観的に、忠実に表現すること。
- ・ また、その場所の価値を表現することを目的として、図中には「人」を書き入れること。
- ・ 断面の真上だけでなく、奥側に見えているものも書き入れてよい。

(近くのものをはっきり描き、遠くのをぼんやり描くまたは描かない等、伝えたい内容に

応じて工夫する)

- ・書き入れた人と断面図との関係、平面図やその他の発表資料との関係を意識すること。
- ・延長 10m 以上
- ・縮尺 1/20(=1m 以上)

以下の図も参考とすること。



図 10 : 参考図(森の中の家 立面図/吉村順三) (宮脇塾講師室編(2003)、眼を養い手を練れ、p.67)

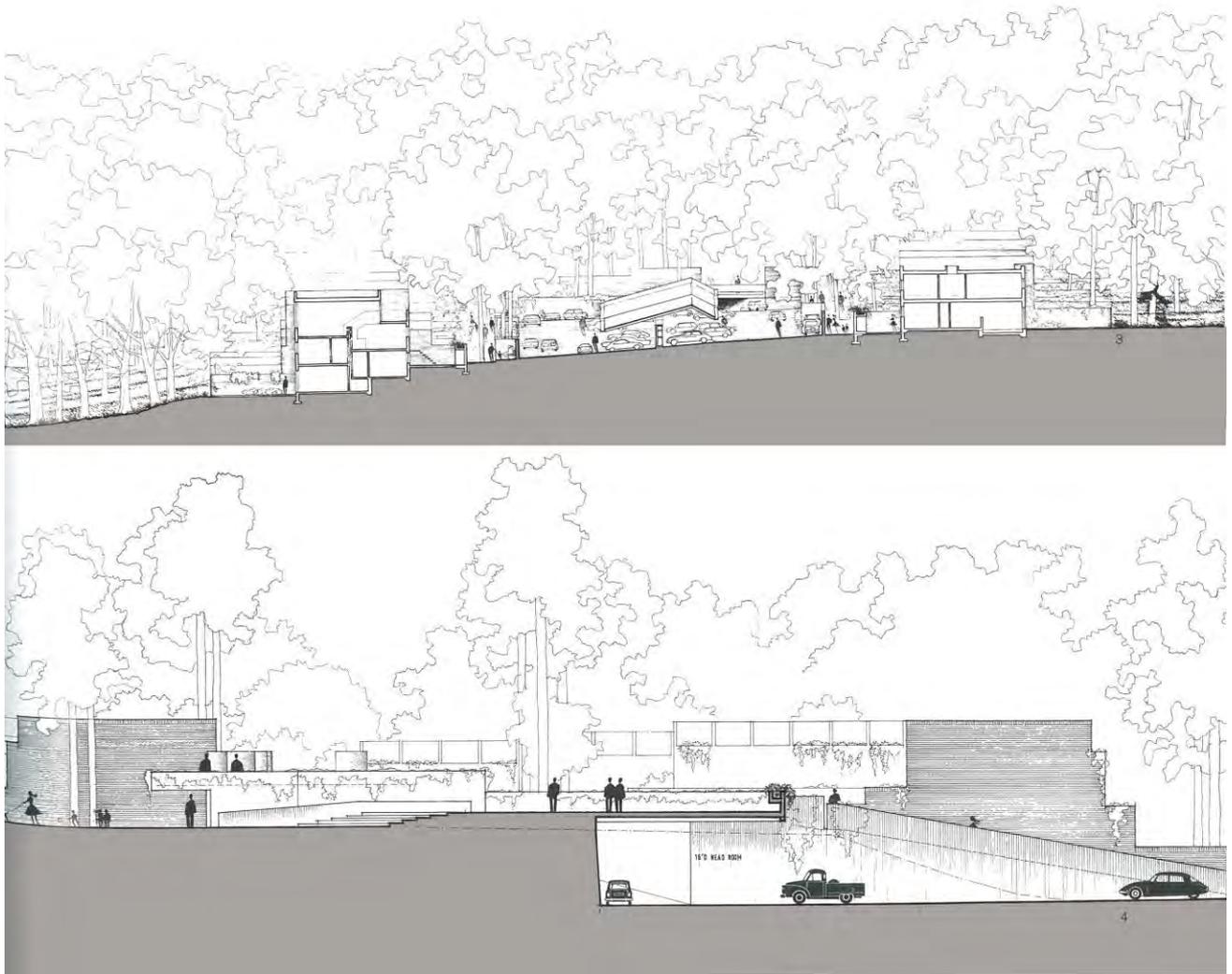


図 11 : 参考図 (Wates Housing) (Coulsdon, England (1965)、Norman Foster 『Works1』 )

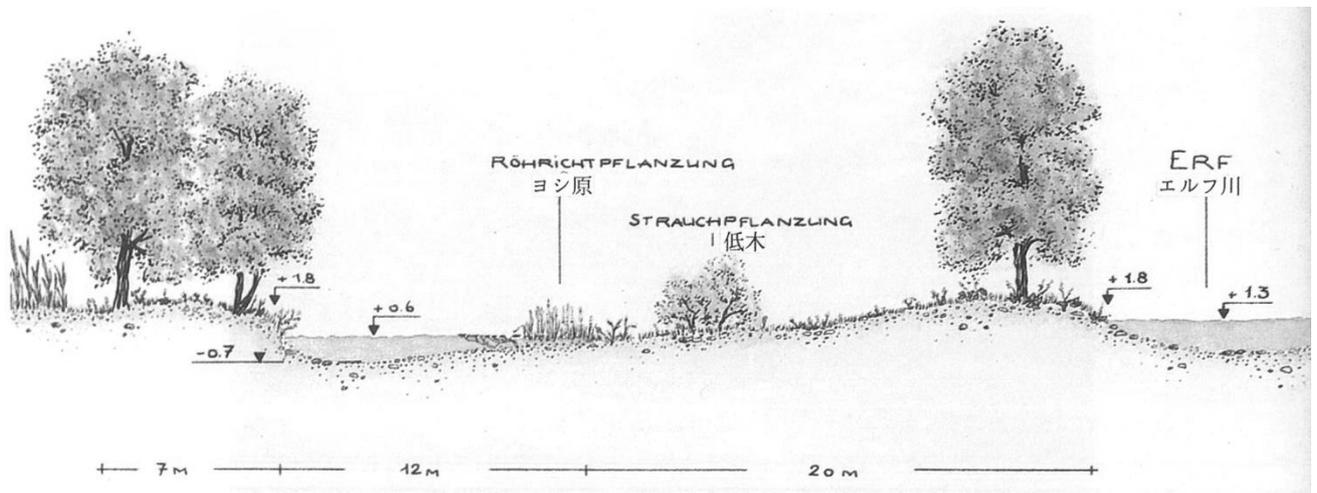
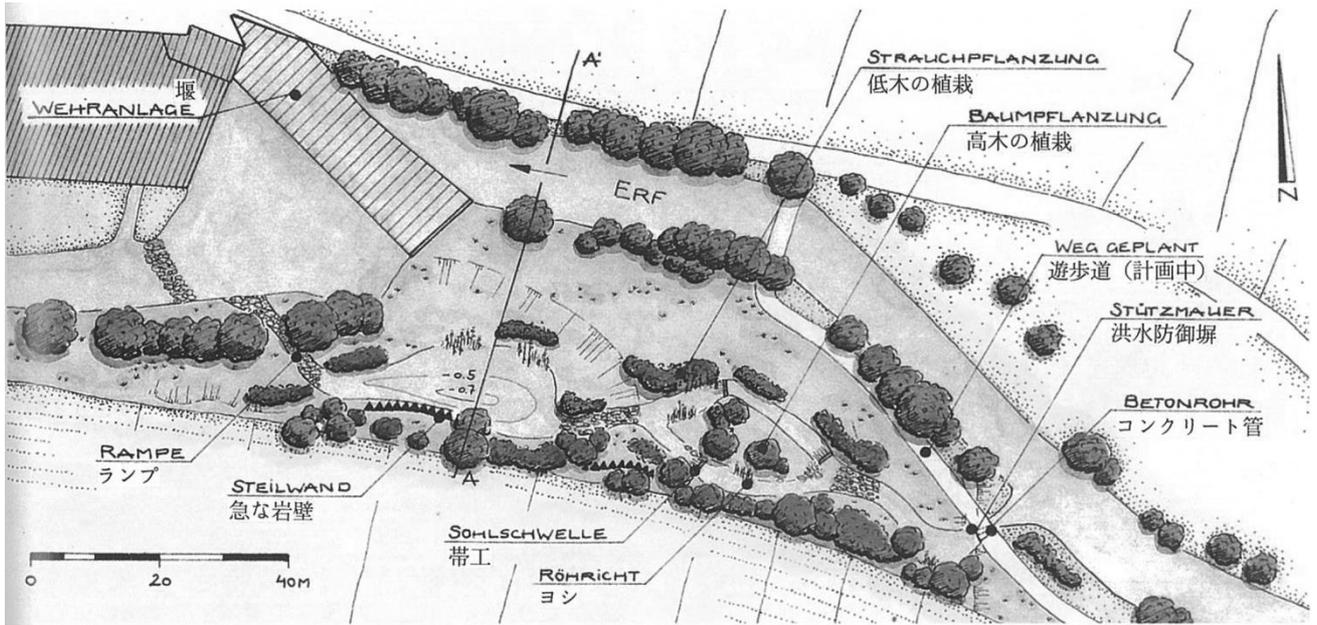


図 12：参考図(エルフ川改修案)(バイエルン水利管理局・バイエルン上級土木監督局・ドイツ連邦共和国内務省編、愛知県緑地工事工業共同組合訳(1989、1992)、河川と小川 保護・開発・造形、p.55-56)

#### (4)発表資料の作成

特に参考資料は示さないが、各班の議論の過程や結果が表現されるように工夫するとよい。与えられた条件のなかで、何の説明にどのような手法を用い、どの程度のスペースを割くかなども含めて検討するとよい。

## 付録 1：エスキス記録

(2015 年度を例にしたものである)

# 1班

1日目 9/8(火) 14:00-18:30

## ●作業内容

領域の情報：人工林で等間隔に植えられたヒノキのエリアで収量を最大化するために行われている。しかし、間伐を行っていないため、採光が悪く、良い状態とは言えない。

平面図を書くために状況把握を行った。そのために、まず、領域内を散策し、その後木の位置を調べた。木の位置の測り方としては、格子状に紐を張り、その紐の位置を測ることによって求めた。また、木の幹の太さも測った。

## ●教員からのコメント

・ファーストインプレッションは？(石田先生)

→最初は等間隔なことに気づかなかったけど、言われたらそれがはっと入ってきてなぞめいた感じ。薄暗いことも。

→意外と明るいなど。草木が少ないことから見晴らしが良い。(ヒノキが生えているから草木が生えない。)

→石が全然ない。森に来ているんだけどかなり人工的に感じた。セレブのガーデニング的な。←この意味は??

(from 石田先生)

・そういう感じたことを議論しよう。みんなで結構意見は違うと思うので。(石田先生)

・視点が変われば感じ方も変わる。どの視点から見るか、それをどうやって言葉にするのか。その辺を深めていくために皆さんで、素直な気持ちを話し合ってください。(福島先生)

・測るのに夢中になっていた。(松丸先生)

・短絡的に考えるのではなく、もう一度疑って見れば。

・グリッドグリッドに見えているものと、領域に対してみんなが感じているものは違うのではないか。(石田先生)

↓

2日目 9/9(水) 9:00-9:30

## ●作業内容

書きだしたものをカテゴリ化した。それらにタイトル付けを行おうとしている。

ヒノキの数がすごかったので、グリッドを作った。

第一印象を大事にして、要素の抽出を行った。その後、カテゴリ化を行い、それらにタイトル付けを行っている。

人工的だなという印象。そこに、くるみを食べた後があったりと自然的な部分も感じられた。

## ●作業から得た現時点での方針や結論

今後はカテゴリ化したものにタイトル付けをしていく。

マクロにしか見ていなかったなので、木1本1本にも注目していく。

## ●教員からのコメント

・人工的とはどういう意味なのか？(石田先生)

・言葉だけでとると真逆のように思えることも、きちんと説明を加えると、共通点が見つかることも多い(石田先生)

・言葉の使い方を丁寧にすべき。人がいると感じられる物理的状況にも様々ある(道路がある、杉が整列しているetc)ので。(福島先生)

・杉が並んでいる中に、変化は何か感じたか(高橋先生)→意外と個性がある。木1本1本にも着目していきたい。

・第一印象も大切だが、次はいる時に感じ方の変化も考えてほしい。(小松崎先生)

↓

## 2日目 9/9(水)夜 演習林藤原先生レクチャー

### ●質問と回答

○植樹された場所だが、いつどのように植樹を行ったか。

→後でお知らせします。

○林の中にくるみとか鹿の後があるが、どうやって動物が集まるのか。

→全域に関して動物は利用している。好みがあるので、使い分けはある(寝床、食事 etc.)。狼以外で日本昔話に出る動物は全部出る。くるみの食べた痕跡はリス。リス以外はあんなに綺麗に割れない。ヒノキのところにくるみの後があれば、それはリスが持ち運んでいる。

↓

## 3日目 9/10(木) 9:00-12:00

### ●作業内容

価値について探ってみた。ひとりずつ発表して、他の人がそれに対してコメントした。

共通の印象を持った部分をまとめた。

### ●作業から得た現時点での方針や結論

ヒノキの印象は語らずにはいられない。ヒノキが整列していることなどから、人為的なことを感じる。

価値を統合するのは、なぜこの価値を見出したのか要素を考えてみた。

ヒノキが整然としているのは自然じゃない。林の中にいるけど、作り物感を感じて、マイナスイメージがあった。2日目に行ってみたら、プラスチックや道路があるわけではないから人工的というのは言い過ぎ??自分の森に対する先入観から、この領域を人工的と感じたのでは。100%自然のもので構成されているが、人間を感じられるのが、この領域の特徴だと思った。自然との共生として、控えめに人間が関わっており、こういう関わり方もあるなと思った。次の人は、雨の上がりここの領域に入った時に既視感があった。その理由としては、境内に入った時と同じ雰囲気を感じられた。価値を感じた理由としては、そこに植えられている木がヒノキであることが大きいと思った。我々にとってはヒノキは身近なものだが、これは日本と台湾でしか生えていなくて、・・・

神聖なものを感じた。天井が高くて、

次の人は、墓地に近いと感じた。マイナスイメージはなくて、でもプラスもなく、ニュートラルなイメージを持った。ツタが絡まっている部分より先にはあまり草が入れないことから、そこが墓地と同じような雰囲気を感じた。整然と並んでいるところも墓地に似ているのでは。一人でいられる空間になっている

次の人は、居心地の良さ、落ち着きの良さを感じたが、それは隠れ家的な感じとかからくる。守られている感じ。

他の森だと風邪が吹いた時に葉が擦れる音が聞こえるはずだが、この領域では、あまり聞こえなくて(葉も遠くにしか無いので)、隔絶されている感じがした。

人の手が入ったことも自然の延長だと思い、人の手が入っていることが安心につながった。

次の人は、秩序的で殺伐とした空間だが、その中にある生命を感じる場所に価値を感じた。他の領域で生物を感じるのは当たり前だが、ここの部分は下草も少なく、暗く殺伐としている。だから、そこに生命を感じる場所価値があると思った。

次の人は、森に対して、多様性があってほしい。また、生存競争を感じられることが必要も思っていた。直線的なものだけでなく、割り切れない部分にも価値がある。というのが持っているイメージだった。しかし、この領域は直線的でマイナスイメージを感じた。植林をしている人から見ると、植物の生育プロセスを見ることができることにに対しては価値があると感じた。

### ●教員からのコメント

・面白いなと素直に思った。(石田先生)

・表現の仕方が違うだけで、同じことを言っている場合もあるし、逆に根本的に違う部分もあるはず(福島先生)

・共通項をまとめて、差異をバツサリときるということを求めているのではなく、根底にあるものを深掘りしてほしい。

→自然との距離感(石田先生)

・空間的な話しているのがこの班の特徴(石田先生)

・自然の距離感を考える場合、素材の話と形態の話がごっちゃになっている。その空間が何で出来ていて、それがどのような形態で、それがどのように構成されているのかを素直に考えると、わかりやすくなるのでは。(福島先生)

・時間のスケールが入ってくるからいい素材がある。(石田先生)

- ・思ったこととその理由を言っていてよかった。まとめるつもりはなかったけど、まとめる方向性が見えて来たように思えた。グリッドに対しても、美と思う人もいれば、自然とは間逆なのでマイナスに考える人もいる。後は、自分たちの感じたことをどう断面図、平面図に落とししていくか。(柳沼先生)
- ・人をどこに入れるのかで表現も変わってくるので、ここをきちんと考えよう(松丸先生)
- ・なぜ、目立つのか、グリッドに乗っかっていないものがあるからである。(中西先生)
- ・比喩だけで押すと失敗するから、もう一回この場所に戻って考えてみよう。なぜがあったからよかった。(福島先生、石田先生)
- ・共通項だと強すぎる。3次元的なもっと深いところにあるもの(石田先生)
- ・なぜのなぜを考えよう。(石田先生)
- ・生い立ち関わってくるかもしれないが、何でも生い立ちにするのは危険。(福島先生)
- ・主観を図に落とすと、言語化した時には伝わらなかったこともつたわるかもしれない。(福島先生)

↓

3日目 9/10(木) 14:00-16:00

### ●作業内容

現場で各班で話し合った価値について現地エスキス発表し、それらに対して、先生方に意見を頂いた。

### ●作業から得た現時点での方針や結論

ある人は、入ってきた時に暗かった事が印象深かった。また、領域の土が多い部分については、草も生えておらず、無の感じで、殺伐とした雰囲気を感じた。でも、そこには土の中に幼虫が居たり、きのこが居たりと生命を感じることが出来た。

班員が無意識に意識していたことから、「自然との距離感」というのが班員全員のが思う根底にあるものだったと思った。その理由は、スギが整列しているように、不自然なことがこの領域で起こっているからだと思っていた。

マクロなスケールで観察しがちだったのは、木が整列していて、個々の木が没個性化したからではないか。

### ●教員からのコメント

・自然からの距離感に関して、どこを原点に取るのか。下草が生えてといったように原生林を原点に取っているような気がするが、ここは演習林なので、人の手が入った森というのを原点にとることもできるのではないか。また、殺伐さに関して、人の手が入っているから、管理されているというふうにも捉えることができるのではないか。このようにどこを原点に取るかというのが重要に感じた。(石田先生) →ピュアな方の森をイメージして入ってきたと思う(学生)

・神殿とかに例えていたが、それは人の手がこの森に加わっているからではないか。日本では山の神とか言うが、それも山に人の手が入っているからである。人の手によって整列しているが、高さが自分たちよりも遥かに大きいところに神秘さを感じたのではないか。また、この杉の木が自分たちと同じような背丈であれば、この神秘さは感じなかったと思う。したがって、この領域の空間特性が学生の印象に大きな影響を与えたのではないか。この領域は領域内と領域外でコントラストが強いので、この領域の印象を決定づけたのではないか。(福島先生)

・神様というのは自然に対する恐れと自然を制御しているということのバランスがよいから感じるのではないか。エントロピーが増大しているような場所だったら、この場所のように神様いるとは感じなかったのではないか(石田先生)

・このヒノキ林の向こうにエントロピーが増大しているような場所が見えるがこれがもし置き換わったらどうなるのかというのは、価値を探索ヒントとして探してもいいかもしれない。あっちは草ボーボーだが、この領域にはあまり草が生えていないということが、居心地の良さにつながっているのではないか(福島先生)

・このグリッドを生かせればいいと思うが、理由付けに使えているのか(柳沼先生) →そこまでは使えていない。グリッドの写真は取ったが、そのデータ整理はまだできていない。しかし、例えば、そのグリッド内の緑の量を定量化することによって、理由付けに使いたいとは考えている。(学生) →ただ単になんとか緑が多いというよりもきちんと定量化したほうが良いだろう。例えば、領域の辺上では、ヒノキの木と外の木との境界はその部分に明確にあるが、下草はその領域を超えてきている。したがって、境界という話をするのであれば、侵食されていると見ることが出来る。(柳沼先生)

・緑レベルの上がり方にも注目すれば良い。境界付近で急激に緑レベルが上がるのか。それとも段々と上がっていくのか。(福島先生)

・方向性はありそう。外との関係と見え方とグリッドの話とか(福島先生)

- ・あの辺のごちゃごちゃ具合はどれくらい重要か。要するに、あそこの様相が重要であれば、きちんと観察する必要があるけど、そこまで必要でないのであれば、適当で大丈夫だし。(中西先生)
- ・断面図に自分をどこに書き込むかは重要なのできちんと考えておこう。(福島先生)
- ・図面を書く上で何が重要かをきちんと考えて、情報を持ち帰ろう。例えば、緑に関しては、量が大切なのか、葉の形が大切なのか etc。(中西先生)
- ・現地は現地、絵は絵。たまに、絵に全てを書き込もうとする人がいるが、その絵は何が言いたいのか良く分からない。それならば、例えば、木と木の関係性などに注意して書いた絵とかのほうがよい。絵の良い所は書いた人が伝えたい事がわかりやすいところである。(福島先生)

↓

## 最終日 9/11(金) 最終発表(4グループに分かれてツアー形式)

### ●内村先生ツアー

#### ○プレゼン要約

- ・違うというところに価値を見出した。それは、ニュートラルな感覚で、他のエリアや自分たちの持っている森のイメージなどと比較して感じるものである。この感覚の中からそれぞれ抽出したり変化を起こしたりして、個々の価値観へとつながっていく。
- ・個々の価値観の例としては、神聖さ、厳か、人を強烈に感じさせる自然、生命力、将来への希望が上がった。

#### ○ディスカッション

- ・断面図に書かれている人は? → 佇んでいて、これは一人で佇んでいても違和感がなく落ち着いていられることを表現している。
- ・全員が違うと感じたのか → どう違うかというところは共有できないが、違うということは共有できた。また、意見の違いは個人が森に対する感じ方の違いから来ているのではないか(神聖と一言で言っても程度は異なる。)
- ・平面図の説明は? → ヒノキが並んでいるところをプロット、緑が濃くなっていくところを表現、切り株等・・・
- ・図が誤解を生み、プレゼン内容を理解できていないと推測される質問が複数出ていた。また、プラス、マイナスの定義の議論があっても良かった。

### ●尾崎先生ツアー

#### ○プレゼン要約

- ・各々が出した価値が独特だったので、あえてまとめるようなことはしなかった。
- ・知覚された現象を出した → 知覚された現象から価値を考えた → 出された価値に対して違うレイヤーで共通項は無いのか考えた → 「違う」という感覚が共通だった。
- ・平面図にヒノキの位置と太さをプロットしてみると、ヒノキ個々には意外と個性があることがわかった。断面図については一番勾配が急なところを選んだ。
- ・一番伝えたい事は、個々人が価値を見出すまでのプロセスが一番大事なのでは無いかということ。

#### ○ディスカッション

- ・この土地に対してユニークな価値を見いだせたのか → 下草が無い、整列している木というこのエリアの特徴から各々が価値を見いだせたことから、見いだせているのではないか。
- ・違うという価値はどのエリアでも見いだせる可能性があるのでは無いの生まれているものを構造化してくれるとよかった。人の内面的な性質を落とし込めると良かった。
- ・知覚された現象はみんなの共通認識なのかどうか → 知覚された現象はわりと客観的なはず。その中で感じ方の強弱は個々人である。
- ・断面図のダイナミックさ、思い切りが良い。大きな木で囲まれていることがよく分かる。

## ●中井先生ツアー

### ○プレゼン要約

- ・特徴①この林は木が整列している。→植林している、人為的だが、一見気づきづらい
- ・特徴②下草は連続的。グラデーションになっており、奥に進むにつれて濃くなっていく
- ・特徴③ヒノキの細長さ、高さ
- ・思考過程：知覚された現象を見た後に、自分の中の森のイメージと知覚された現象をすりあわせた→結果、みんなが人の手が入っているから何かが違う→この「違う」にはプラスマイナスの価値判断はまだ入っていない→各個人がこの違うに対して価値判断を行った。

### ○ディスカッション

- ・個々の価値判断をまとめようとは思わなかったのか→まとめることは無意味だ。「違う」という根源から枝が出て行った感じ。(その解答に対して)難しいがまとめる意味はある。
- ・全く理解できないという意見は無いのか→違うという根っこは同じ。そこからのプロセスは理解できるが感じ方は違うし同じである必要も無い。
- ・根源は一緒と確信させるものは何か→インタビュー、思考実験の結果
- ・全く異なる倍系を持つ人とは共有できるのか→観測された事象と自分が持っている森のイメージの差異から「違う」という感覚は来るので、これらが変わるだけで、共有できるのではないか。(それに対して)もう少し引いた視点から見ても良かったのでは。

## ●石田先生ツアー

### ○プレゼン要約

- ・平面図：ヒノキを幹の太さに応じて描き分け、下草はグリッドに応じて濃淡をつけている。
- ・断面図：対角線上に切ったもの
- ・最初の印象をまとめた→知覚された現象と価値が混ざった状態で出てきた→価値を統合しようとしたが難しかった→共通項を探していくうちに「違う」という感覚に行き着いた。
- ・知覚された現象と森のイメージとの比較から「違う」という感覚が生まれる。この感覚はプラスでもマイナスでも無くニュートラル。
- ・出てくる価値は一人一人異なるのではというのが班の結論

### ○ディスカッション

- ・断面図から「違う」という感覚を感じれる部分はあるか→違うという感覚は内部での比較ではなく、他のエリアとの比較で出てくる。
- ・人の手が入っている中で他の動物との共存等の意見はあったのか→あった。ある人は殺伐とした森に生物を発見できたことがプラスのイメージにつながっている。
- ・人の手が入っているという部分も人によって捉え方が違う。人と自然のバランス
- ・マイナスイメージで落ち着いた人もいるのか→数人はマイナスイメージの方が強い。
- ・木が整列せず、下草が多いのが良いのか→個人的にはより自然な状態が良いと感じる。
- ・図が誤解を生んでいるのでは？矢印の途中にもう1ステップ位あるのでは無いか。

## 2班

1日目 9/8(火) 17:30-18:30

### ●作業内容

茂みが深く見通しが悪かったので、敷地を4x4に分割し、杭を打って、16マスの写真を撮影  
物体の位置の取り方：マスごとに、X,Y,対角線方向に写真撮影、人も配置する。肩車で上方向から撮影。  
斜面があるので、地面のおおよその高さも測る。  
植物の高さは大・中・腰くらいのもので3分類。  
エリアを16マスに区切って平面図に起こす。白樺の木は位置もしっかり書きこむ。

### ●作業から得た現時点での方針や結論

人の生活には厳しい印象。歩道から見ると白樺がきれいな場所だと思われるが、奥に入るとそうではない(いわゆる「ヤバイエリア」、茂みがすごい)。  
傾斜(1mくらい下がる?)があるので、歩道側からだの木々は高く見えなかったが、実は意外と高かった。

### ●教員からのコメント

- ・正確に、客観的に再現している。作業をしながら、自分たちにとっての価値を出し合って共有しまとめ上げるべき。(内村先生)
- ・印象が強いエリア、辛いエリアなどをポストイットで出してみても？(森川先生)

### ●議論の結果得られた方針

メンバーごとに色分けして、エリアに対する印象・感想をポストイットで書きこんでみることにした

↓

2日目 9/9(水) 8:30-10:30

### ●作業内容

1日目の夜よりもポストイット(個々人のミクروسケールでの印象)が増えた。  
全員が、平面図に数百字の小論文(もしも最終レポートを出されたら、という体で)を書き込み、みんなで回し読んで意見の共有。

### ●作業から得た現時点での方針や結論

スタートとゴールを決めている模様。歩道から入ると、奥に進むにつれて絶望感が増す。逆に裏からスタートすれば、ゴールでは視界が開けてくるのでは？  
(小論文を共有してどうだった?) 癒しとしての自然ではなく、邪魔なものとしての自然、という感想が共通？

### ●教員からのコメント

- ・価値を人に伝達するとき、枠組みも一緒に提供しないと、オリジナリティが無くなって、ただ言っているだけという印象になってしまう。今やっている作業を丁寧に育ててほしい。また、言葉だけでなく、絵・イメージ図で表現するのもあり。(尾崎)
- ・「あなたにとって」というのは大きな価値の枠組み。(石田)
- ・外から見たら分からないかもしれないが、自分たちにとっては論理的で説得力がある枠組みがあるはず。(尾崎)

↓

2日目 9/9(水) 13:00-18:00

### ●作業内容

下草が少ないところと茂みを両方入れたいので、斜め( $y=x-5$ の直線上)に断面をとる。  
標高の変化する点を記録 → その後レーダーも使用？

## ●作業から得た現時点での方針や結論

雨天だった昨日よりも狭く感じる。

分け入りにくいエリアなため、1人ではなく、みんなで協力できるという価値観があると思う。

危機感のもとで仲良くできる。「楽しかった思い出」という価値？

## ●教員からのコメント

・白樺エリアは、本来生えない白樺を植えているので、一番人工的な場所である。

「楽しかった思い出」というだけでは、他のエリアでも見いだせられる。差別化や工夫が必要。(尾崎)

↓

## 2日目 9/9(水)夜 演習林藤原先生レクチャー

### ●質問と回答

○白樺が同じ方向に倒れているのは何故か。

→根っこが浅い木なので、もともと倒れやすい。あそこに生えている木は弱っているが、もともと倒れていた。その原因としては風や太陽が考えられる。スギとかは上に伸びようとして、下の方の枝を落とす。広葉樹は広がるように伸びていき、光の当たらない枝を落とす。

○実験で白樺が植えられた。白樺が最近減ってきているが、それはここの土地の条件が悪いからか。

→ここ数年で急激に減っている。もともと白樺は長く生きられない木。したがって、寿命の可能性が考えられる。また、白樺は栄養の少ない場所に育つ。その後、栄養が豊富になると菌などにアタックされやすくなるので、それでそいつらにやられている可能性がある。

↓

## 3日目 9/10(木) 9:30-12:00

### ●作業内容

平面図を用いてエスキス

### ●作業から得た現時点での方針や結論

好奇心・探求心・行動力、「ダンジョン感」がテーマ。

地形:歩道にはオブジェがあるので人が興味をひかれやすく、入り口として既定される。奥側は標高が低くなっていて、歩道からは何があるのかがよく見えない。背の高い草が多く、その中にチクチクする草があって、難易度が高くなっている。白樺が対角線上にあるため、自然とそちらに視線がいく。

我々のエリアは下草の茂みがメインで、自分たちで切り開いていくしかないような場所なのが特徴。「先に進みたい、探求したい」という気持ちが生まれることが価値だと思う。

訪れた人の心を動かすようなものがあったら「価値がある」と思う。

最初は、1人で行っては楽しくないだろうと思っていたが、開拓していくうちに楽しくなっていたという気持ちの変化があった。

入れと言われなかったら入らなかったと思う。価値も感じられなかった。入れと言われなかったらどういう気持ちになったかどうかは分からない。入って散策してみても初めて気持ちが生まれた。

私たちは「発見した」というより「切り開いた」感がある。そこが他の班と違うと思う。

入り口では「入りたくないな」と思うってしまうが、進んでいくと最後に癒しの場(木の下空間、下草が少ない)があるのが良い。

プレゼンするときに、客観と主観のバランスがよく分からない。

### ●教員からのコメント

・探求心がどれくらい強いものなのかが伝わってこない。(尾崎)

・コミュニティ内で共有されてはいるが、他の人に伝わってこない。言葉で表現できていない。(菊池)

・時系列的に興味を持っていったというのが特徴だと思う。でも「ダンジョン」という言葉がチープにしている。場所オリエンテッドになっていない。敷地の中に空間軸でも変化がみられるのが面白さ。地形が見えにくいというのが特徴。(尾崎)

・最初は入りたくなかったはず。(内村)

・自分たちの体験で語るなら時系列で説明したほうがいい。手前から奥に進んだ時の大きなポイントは地形の変化。(尾崎)

好奇心という言葉では微妙。もっと掘り下げてほしい。「冒険心」のほうがあっている？「頑張れば道になる」というポストイットがみんなのやったことに近い。

・最初の発表だけでは「その場所の解釈」だけで終わっている。(森川)

・「価値」：誰にとっての価値なのか、どれくらいの広がりを持った価値なのか、も必要。条件がいろいろついてくる。「解釈」とは違う。(森川)

・価値は構造化しないと普遍性を持たないのでは？単に「私は～と思った」だけでは薄い。基本的には主観で良いと思う。(尾崎)

・原子力を良い・悪いという人の例：そのような価値を持つに至った経緯があるはず。社会問題の良し悪しの価値観は、客観的なものに見えて、本当は主観。(菊池)

・断面図に、価値を表すのに最も適したところに人の絵をかき入れること！

↓

### 3日目 9/10(木) 13:30-

#### ●作業内容

再度体験に基づくエッセイを全員書いたあと森へ

#### ●作業から得た現時点での方針や結論

なんでゲームが良いのか？冒険が楽しいから (☞ 普遍的な部分)

最初に来たときは楽しくなかったことが分かった→全貌を掴むために杭を打っていくうちに楽しくなった。目的をもって行動(探索、冒険)することで楽しさが生まれた。他の班にはない個性・価値なのでは？南極に旗をたてに行くような…

フィールドが見えにくく目隠しが多いため、いろんなところに発見があって密度が濃いから楽しい。

#### ●教員からのコメント

・この土地の特徴が価値の中に入ってきていない(尾崎)

・みんながやったことのプロセスを言葉で説明するのが足りていない。着目ポイントや要素を挙げることはできているが、要素間のつながりが分からない。(菊池)

・「冒険心」がなぜ価値になるのかについてよく分からない。もっと現場に沿ったほうが良い。本当に冒険心だけなのか？その言葉だけではこのエリアにかわいそう(森川)

・1つのポイントに対しても、それに対する解釈がメンバー間で共有されていないのが問題。

普通はこう考えるかもしれないが、実はそうじゃないんだよ、というようなギャップを示してあげるといいかもしれない。(尾崎)

#### ●議論の結果得られた方針

各要素を結びつけるフローチャートを作る。

冒険で満たされる理由とは？なんで楽しかったのか？

↓

### 最終日 9/11(金) 最終発表(4グループに分かれてツアー形式)

#### ●尾崎先生ツアー

#### ○プレゼン要約

主なオブジェとコースを説明した後、エリア内を一周 →特徴的な要素(ヤブ、オブジェ、白樺、木陰、チクチク村)の説明 → 班員が感じた印象 → ボトムアップ的に「冒険心の誘発」と抽象化、と解説。

ただし、「冒険心」という言葉の認識には班員の間で相違があったことを説明。ヤブがあって先が見えないところに好奇心や冒険心が刺激され、達成感、満足感、安心感というプラスの印象と、不快感というマイナスの感情を与えてくれるところに価値があると考えた。

## ○ディスカッション

- ・高橋先生：4つの感情がバランスよく得られたというように聞こえたが…？  
→人によって、道を切り開いた時の苦労や負荷が異なるため、感情のバランスは異なりうる。
- ・尾崎先生：最初の「冒険心」との出会いは、どんな状況だったのか？  
→ヤブの中に入らざるを得ない状況になった時に、4つの感情が得られた。今回は目的があったからこそ得られたのだと思う。
- ・松丸先生：逆に、坂の下のヤブの方角を入り口とした場合はどのような結論になったと思うか？  
→ゴール地点で人工物を見つけたときに得られる安心感は強くなると思う。冒険心が得られるかどうかは定かではない。
- ・森川先生：例えば、今とは違う時期にこのエリアに足を運んだり、植物の高さが違っていたりしたら、どう変わっていたと思うか？  
→腰に高さのヤブだったから入れたが、もしもう50cm高かったら、不快感が増していたと思う。雨の日の方が、攻略が難しい気がする。

## ●内村先生ツアー

### ○プレゼン要約

エリア内を一周 → エリア内の特徴的な要素の説明 → 5つ心象と与えられた4つの感情 → RPGを遊んでいるときのような「冒険心」の誘発  
他の感情も抱かれるかもしれないが、「冒険心」というのは最大公約数のようなもの。他の班の敷地にはないヤブや、ユートピアのような木陰の空間を踏破したことで、達成感のようなプラスの感情を引き起こしてくれたことに価値を見出した。他の人がどう感じたかは分からないが、班員が苦労して道を拓いたことで導き出した価値だということを念頭に置いてもらいたい、と付け加えている。

## ○ディスカッション

- ・学生：「冒険心」以外の感想を抱けなかったのか、他の価値を見出せなかったのか疑問を感じる。  
→班員の間では「冒険心」につながる意見が多かったため、発表の構成をこのように組み立てた。嫌悪感、面倒臭さなどの感情もあったが、このエリアをよく知りたいという知的好奇心もあった。最初に「冒険心」を結論にして、後付け(?)でストーリーを作ってしまったのは否めないかも。
- ・福島先生：開拓した先にユートピア的な安らぎの空間があったからこそ、今回のストーリーが出来上がったのではないかと発表がきれいすぎる。
- ・辻本先生：「誘発」というのは、もともと冒険心が無かった人に冒険心を湧き起こさせる、という意味のはず。班員はエリア中に分け入らななかったが、通りすがりの人がこの空間を見て冒険心を誘発されるだろうか？冒険心の「誘発」という言葉のチョイスは正しかったのだろうか？

## ●石田先生ツアー

### ○プレゼン要約

エリア内を一周（外観＝白樺のイメージと中に入ってみたときの印象の違いを示す） → エリア内の特徴的な要素の説明 → 演習中の作業を通じて班員が持ったプラス/マイナスの感情の説明 → 共通項として「冒険心の誘発」とした。

## ○ディスカッション

- ・学生：やはりこの敷地で目に付くのは白樺。これが冒険心を誘発したりその他の感情に与えたりする影響はあったのか？  
→白樺が傾いていたり葉っぱがまばらだったりしたので不安感を煽るという意見や、逆に上が開けていて空が見えるため綺麗であるという意見もあった。これらは全て白樺がきっかけで生まれた感情。
- ・柳沼先生：入り口にある人工物の位置づけとは？  
→人工物があることによって、中に入ってみようという気になる。公園のような役割もある。
- ・菊池先生：一見きれいな白樺や人工物が目に入ることから、安らぎの場所ではないかと思いがちだが、実際は奥に進むと高低差があって、ヤブが茂っており大変であることから、入り口の人工物や白樺はゲームの畏やだまし絵のようなギャップの役割を果たしている。エスキスではその話が出ていたのに、今回の発表では触れられていない。
- ・石田先生：全体の空間の構図があった上で、5つの個々のパーツの説明があれば良かったのでは？各パーツがまとまりのあるこの空間をどのように構成しているのかに触れるべき。

- ・柳沼先生：平面図に、各パーツの位置関係や、それぞれから想起される感情との関係性を落とし込めば、このエリア独特の価値観として説明できたのではないか？
- ・学生：中を散策する前と後では、このエリアに対する印象はどのように変化したのか？  
→最初は奥が見えなかったため「隠れ家」のような印象は持てなかったが、作業を通じて、隠れ家のような場所やチクチク村など、憎めない部分が見えてきた。

## ●小松崎先生ツアー

### ○プレゼン要約

エリア内を一周 → 初日から白樺にはあまり目が行かなかったこと、雨の中を踏査し、各班員が感じたことをありのまま話し合ったことを説明 → 平面図を用いて、傾斜と草木の高さについても説明 → エリア内の要素・当時の感想・なぜそのような感想を抱いたのかという分析を合わせて説明。

他のツアーに比べ、エリアの場所オリエンテッドな部分を、発表冒頭で説明できていた気がする。他の班員との意見の食い違いがあったことも説明していた。

### ○ディスカッション

・小松崎先生：価値—感情—エリア内の要素という構造は理解できたが、実際はどのようなプロセスでその結論に至ったのか？

→最初に「ダンジョン感がある」という意見が出たときに、ゲーム好きの多い班員の間では特に違和感がなかったが、エスキスでは先生方にあまり共感されなかった。班員が挙げた感情から「冒険心の誘発」以外の価値を見出そうとしたが、結局これ以外の適切なキーワードが挙がらなかったため、とりあえず「冒険心」でまとめた。

→(小松崎先生)自分なりの言葉で表そうとしている点は評価できるのではないか。「冒険心の誘発」という言葉になった時に、切り捨てられてしまったものもあると思う。この場所特有のものとも結びつけて考察するべき。

学生：なぜ特徴的な白樺を切り捨てて、ヤブに注目したのか？

→中に入ると白樺派意識されない。白樺が高くて緑が目に入らず、ヤブが中心になってしまう。

・中井先生：きっと数年後にはこのヤブはもっと高くなっているはずなので、今回みんなが感じたヤブとの関係というのは、今この時にしか感じられないものだと思う。10年後には同じ感情を誘発しないはず。目の前の森との関係性をもっと分析すれば議論を深められたはず。

# 3班

1日目 9/8(火) 13:00-17:00

---

## ●作業内容

周辺観察

各自好きな場所をピックアップ(感覚的、漠然としていても構わない)

写真撮影(細かいパーツ4人、全体規模2人)

その感想を話し合い

↓

1日目 9/8(火) 17:30-18:30

---

## ●作業内容

自分の好きなところ

平面図を大雑把に作成

## ●作業から得た現時点での方針や結論

植生の客観的データを集め、そこからそれが誰にとっての価値があるのかを考える(植物学者、○○学者 etc)

## ●教員からのコメント

- ・誰の視点という部分についてもっと簡単に考えても良いのでは。班員の中でも価値について違いがあるはず。
- ・価値に多元性があるのはみんなわかっているから、そこに単一の解を求める必要はない。逆に普遍的にその場所に関する価値も存在するから、そこを議論しても良い。

## ●議論の結果得られた方針

同じ主体で行動の目的によって如何に価値が変わるかということを考えるのがよいのでは

↓

2日目 9/9(水) 9:30-10:30

---

## ●作業内容

エスキスから方向転換

→始めに話した班員の印象を基に議論を進める(ミクロ、マクロの相互の視点)

個人の感想

他との違いは道があること、自然と人工の境界があることを意味する

乱雑、統一性がない

人工の椅子があることで人の行動に影響を与える etc...

## ●教員からのコメント

・昨日の時点で何を測ったのか、これから何を測るのか

→測定はしていない、今話している内容は定性的な話が多かったので定量的なものを測るのはまだ早いであろうと考えた

↓

## 2日目 9/9(水) 夜 演習林藤原先生レクチャー

---

### ●質問と回答

○富士見台の近くの広場はなぜ作ったか。

→森を使いたい→道を作る→道だけでなく環境や見通しを良くしたい(研究所だから)→人為的に刈り払って、人が散策しやすい空間を作った。

○広場の中に丸太を半分にしたベンチとただ単に丸太がおいてあるだけ

→ただ単に管理できていないだけ。

○記念の植樹の経緯は?→記事がある。

○あの広場のどこが好きか

→演習林の中では平らだし、ブラッと歩くという目的では良いでは、好きとまではいかない。

↓

## 3日目 9/10(水) 9:00-10:30

---

### ●作業内容

空間についての分析

→簡易平面図を作り、各要素と全体としての印象の分析、それら相互の関係性。

価値についての分析

→なぜ各人の価値判断に違いが出るのか、価値観の背景にあるもの、計画者の意図との関係など。

第一印象を話し合い

### ●教員からのコメント

・空間分析で何がわかった?

→木の葉っぱの広がり大きいから影が多くて過ごしやすいというようなこと

・安易なところにまとめに行っていないところが良い、逆に言うとまとめるという作業ができていない

・共通印象としてでてきたこと、違うこと

→良くも悪くも人工物が多い、人工と自然がアンバランスに共存している。その価値は個人によってことなる。

・自然、人工の軸を定めてどの程度、どのように人の手が加わっているのかを考え、それを基に議論を進めていくのも一つの手法

・この場所を改善するにはどうすればよいかという議論をするのも一つ

・Post it に書かれているのはただの羅列なので、それを構造化していくことが重要

・断面の選び方にしっかりとした根拠が必要

・6人の共通点、相違点をあぶりだすことで議論が深まる

↓

## 3日目 9/10(木) 14:00-16:00 (室内)

---

### ●作業内容

自然と天然物の共存が根底の論理として、それを空間的、平面的な分析を行い、その終着点として価値が多様に分化していく。

### ●教員からのコメント

・客観的事実と個々の価値観との間にある関係を議論できていない

・話が抽象的でまとまりが見えない、構造化できていない(多様性とかの言葉をもう少し具体的に)

・多様な価値観があることに対する考察もあれば議論が深まる

↓

### ●作業内容

6人で「自然と人工の混在」について詳しく考え、意見を述べ合った

### ●作業から得た現時点での方針や結論

議論を続ける

最終発表の際には価値のところを空欄にして、価値に関する部分は個々が自由に話す

### ●教員からのコメント

・最終発表の価値を空欄にするのはダメ。班員が全員で同じ考えを持つ必要はないが、全員が納得できる形で合意形成をする必要がある

・レンジが広いということは何を意味する？

→包容力、ポテンシャルが大きい、万人受け etc… もう少し煮詰める必要あり

↓

### 最終日 9/11(金) 最終発表(4グループに分かれてツアー形式)

---

#### ●石田先生ツアー

##### ○プレゼン要約

この区画に関して雑多な感想を話し合い、その上でこの区画の特徴として統一性がないこと、自然と人工物の共存していること、明るく開けているが木陰であることという3つを挙げた。この3つの特徴はそれぞれ肯定的な側面と否定的な側面を持っていて、否定的な側面があるということは、この森林空間の作成意図から乖離しているものと考えられる。この区画の価値とは、今後より快適な森林空間を作る上で貴重なサンプルとなりうるということである。

##### ○ディスカッション

C: 価値についての考察が浅い。しっかりと議論がなされているにも関わらず、それが価値に反映されていないことは非常にもったいない。

Q: 話し合いの過程の中でこの場所に関する印象が変わったりしたことはあったのか？

A: 一つ一つの要素に対する感想は班員の中で大きな乖離はなかったため話し合いの中で印象が変わったということはないが、要素間の関わりが全体に与える印象という面については新たな発見があった。

C: エスキス担当教員としては、価値の解釈に関しては上手くまとめたという感触を受ける。人によって感じるものが違うのは何故かということ深く突き詰めて考えた上でこの結論に至っている。ここをもう少し上手く表現できればさらに良かった。

C: 個々が抱いた感想の違いが何故なのかということ突き詰めて考えるという方法から、この区画の価値を考えるとこの方法をとっても良かった。

#### ●尾崎先生ツアー

##### ○プレゼン要約

この区画の第一印象を議論し、第一印象が生まれる原因を平面図に落とし込んだ。平面図にはひとつひとつの対象物がどのような性質のものであるかに着目して描いていった。これらの議論を基にこの区画の特徴を3つにまとめ、それぞれの特徴に対して肯定的意見、否定的意見を出した。1つ目の特徴は様々なものが雑多に配置されている統一性であり、童心を呼び起こしてくれるという肯定的意見がある一方で、不自然な乱雑さにより違和感を覚えるという否定的意見もあった。2つ目の特徴はベンチや丸太などの人工物が自然と共存していることであり、林という自然の中に人の手が加わったものがあり安らぎを感じるという肯定的意見と、自然に中途半端に人の手が加わっていて物足りなさを感じるという否定的意見が聞かれた。3つ目の特徴は明るく開けているが木陰であるということであり、開放感や安心感を覚えるという肯定的意見のみが聞かれた。この区画の価値とは、作成意図から乖離している事例として、森林空間を創出するために役立てられることである。断面図はこの空間の最大の特徴である自然と人工物の共存を表すことに力を入れた。そのためにベンチ、道、木を組み込むことのできる断面を取り入れた。

## ○ディスカッション

Q: この場所の否定的な意見をなくすためにはどのような工夫をすればよいと思うか

A: 例えば丸太を撤去することで統一性がないという否定的な意見を減らすことができる。

Q 統一性がないとどうしてダメなのか

A: 統一性がないという言葉の使い方をしてしまうと悪いように聞こえるが、これば中立的なコンセプト。統一性がないことで良いと感じる人も悪いと感じる人もいる。

C: 誰にとっても良いという場所というのは無理。この場所の価値を考えるに際して、万人受けするもの考えるのではなく、自分たちのエゴをもう少し全面に出したほうが良かった。

Q: この区画は他の区画に比べると利用者を意識したものが多いが、議論はこの場所に来る人の視点が多かったように感じる。議論の過程でこの場所を利用する人からの視点に立った話はあったのか

A あった。断面図に関しても使う人の視点を組み込もうとしたが、上手くいかなかった。

## ●小松崎先生ツアー

### ○プレゼン要約

各個人で第一印象について意見を出し合い、その第一印象に含まれる要素を抽出していった。次に第一印象からこの区画の特徴を3点にまとめ、その特徴に対する肯定的・否定的な意見を挙げていった。1点目の特徴は統一性のなさである。他の区画は区画内に存在するものが統一であるのに対し、この区画は丸太やベンチが存在し木も多様な種類が存在する。このことに対し肯定的な意見は童心に返ることができるということ、否定的な意見は何を意図して置かれたかわからず違和感があるということとなった。2点目は自然と人工が共存しているということであり、林という未知の存在の中に人工物があり安心できるという肯定的な意見と、他の区画に比して林の自然性が足りないという否定的な意見が挙げられた。3点目は明るく開けているが木陰であるということであり、明るく開放感があるという肯定的な意見のみが挙げられた。否定的な意見が挙げられることはこの演習林の作成意図と乖離していることを示すため、この場所の価値とは今後快適な森林空間を作るための貴重なサンプルとなりうることである。

### ○ディスカッション

Q: 断面図に関する説明がほしい

A: 人はベンチに座っている人と歩いている人を示している。ベンチに座っている人はこの場所を肯定的に捉えている結果この場所で休んでいる人であり、歩いている人はこの場所に魅力を感じなかったが故にただ通り過ぎてしまった人を表している。

Q: 道の左側にのみ大きなスペースがあるがこれはただ木が植えられていないだけなのか

A: スペースは意図的に木を植えずに作られたものである。

Q: この区画には道があるが道の価値に関する考察はされたのか

A: 道の価値とは少しずれるが、道の曲がり方的に下から上がってくる際に最初のベンチや丸太などのエリアが見えるため、この場所で休めるという印象を与えるのは良いと考える。

Q: 第一印象ではこの区画に対する極めて主観的な印象が語られているのに、結論部分ではこの区画を完全に物扱いしたようなコメントになっている。なぜそうなったのか。

A: 議論の手がかりとしたのが自分たちの主観的な意見だが、それを客観視できるように合意形成しようとしていく過程でこうなってしまった。

## ●内村先生ツアー

### ○プレゼン要約

第一印象：・子供が作った秘密基地・人工的な丸太が自然に溶け込んでいる等

この区画にあるもの：ベンチ、丸太、ブナ（研究科長がたまたま植樹）、ハードル（木の体積を圧縮かつエクステリアとして使う）等

これらから考察→統一性がない、自然と人工物の共存、明るく開けているが、広葉樹のおかげで木陰も広い。この3つの考えは否定的な意味にも肯定的な意味にも捉えられることからこの場の価値の多様性を生んでいる。また、統一性の無さから、作成意図が様々な方向に取れる。これらの考察からこのエリアは癒やしの空間を創出するための研究サンプルとしての価値があるのではないかという結論に至った。

## ○ディスカッション

- ・この空間の価値は研究としてのサンプルと言う面が大きいのか→この空間は安らぎを感じる人もいれば、物足りなく感じる人もるので、多くの人が同じイメージを共有するためにはどのような空間が良いのかという研究のサンプルになると考えた。
- ・第一印象からの変化はどうだったか→ある人は最初はこの空間にやすらぎを感じていたが、他の班と比較した時に、より自然的な方がより安らぎを感じるのでは無いかと思い、このエリアがとても中途半端だと感じた。
- ・僕は統一性はあるというように感じたので模造紙に書かれていることは主観的では無いか。統一性について議論は行ったのか→丸太がおかれていて、一見座るために置かれているのかと思いきや、ベンチもあるというところから統一性のなさを感じた。
- ・僕はその丸太を見て座るために置かれたとは思わなかった。→座るためのもの前提に議論をしていたので、丸太についての議論はしていない。
- ・統一性とはどういう意味なのか。→作成者の意図が見えなくなっているということ
- ・考察は同じレベルなのか。①、②は主観的な意見。③は客観的な意見→安らぎを感じる理由を並べた。しかし、この理由からは安らぎを感じない人もいて否定派が生まれた。否定派が生まれるということは、必ずしも安らぎでは無いのではないかということになり、班の中でも作成中に結論が変わっていった。
- ・コメント：通過している人にとって、このエリアは大きな価値があるのでは無いか。通過している人の目線もあっても良かったのでは。
- ・コメント：他の班と比較して計画意図がよく分からないにも関わらず、ポジティブな印象を持ったことが面白かった。議論の過程をもう少し表せていたらより面白かったのでは。
- ・設計意図があったものと無いものがあるのでは。そこら辺の分析はあったのか。発表を聞いていると全て(ベンチ、丸太・・・)を同等に扱っているような印象を受けた→場所に意図があったかという議論は少なかったかも知れない。ものに対する議論は沢山あったが。

## 4班

1日目 9/8(火) 14:00-18:30

### ●作業内容

領域の情報:林業のための実験を行っているエリア。寒い地域の木を持ってきて植えて、地域に最適な木を調べていた。最初に10分ほど各自で歩いて、その領域のプロパティを調べた。その後、木の位置を求めるために、長さや角度を調べた。領域について気づいたことは、領域の中心部分にみぞがあり、そのみぞを境に植生が変わっていた。また、枯れ木が多いということである。また、平面図についての情報を集め終わった後は、RHを測ったり、歩いて感じ取れることを感じ取ろうとした。グリッドを作って、一個一個を写真を取った。寮ではまず、調べてきた情報を元に平面図を書き始めた。

### ●作業から得た現時点での方針や結論

全体が取れていないから情報が足りない。

### ●教員からのコメント

- ・ある場所があって、その場所を知ろうとするのなら図示することが基本の基本。なぜそう思うのかを考えるときにヒントになる。木の位置がどう変わったら自分たちが感じたものはどう変わるのか。最初に感じたことを言葉に残すのが大切。(福島先生)
  - ・感じていることを出来るだけ言語化して、それが何故かまで話し合ってもらいたい。(石田先生)
- 印象は?(石田先生)
- 色々な木があるな。
  - 谷を境に植生が変わっていた。
  - 枯れ木が意外と多い。遠くから見ると普通にも見ると近づくと、枯れ木が多くて、もっと近づくと小動物の気配(?)
  - ・上のようなものをみんなで出してみよう!(石田先生)
  - ・みんな意外と意見を持ってそう(中西先生)
  - ・場所に関連していれば中に書けばいいし、関連しないなら枠外に書けばいいので。(中西先生)

↓

2日目 9/9(水) 9:00-9:30

### ●作業内容

気づいたことがあれば、平面図にポストイットを用いて書き込んでいった。平面図に木の位置をプロットしたが、それだけではわからなかったため、主観的なことから、木の情報等をポストイットに書いて貼っていった。→それでもわからなかったため、その上にトレーシングペーパーを敷いて、それに書いていっている。

### ●作業から得た現時点での方針や結論

書き込んだのはいいが、だからどんな価値があるのだろうか。

### ●教員からのコメント

- ・今は知る段階(石田先生)
- ・いきなり価値って何と考えても頭でっかちな価値になってしまう(石田先生)
- ・出した意見をもっと構造化してみるべきでは。(福島先生)
- ・言葉の奥にあるものをお互いに話してみると、表面的なもの裏にある個々人が考えていることがわかるのではないか(福島先生)
- ・見た目上、違いがわかりやすいが、この領域全体を見た時にどう感じるか(中西先生)
- ・要素同士の関係性を考えると、理解しやすいかもしれない(石田先生)
- ・感覚の数が少ない。明るい、暗い以外にも臭い等様々な感覚があるはず。(マエムラ先生)
- ・感覚を表す言葉に対しても、人によって程度が異なるのでそこを共有すべき。また、そのように感じた原因を突き詰めるべき

↓

## 2日目 9/9(水) 14:00-15:00

### ●作業内容

水平チェッカーを使って紐を水平に張る。レベルを使ってその紐と地面の距離を測ることによって高さを求めた。

### ●教員からのコメント

- ・幹の様子が異なるから、溝から離れた部分にある松のような木の種類等を調べるべき。
- ・工夫し、それが領域の特徴を表すものであれば、断面図の中に手前部分の情報を入れても良い。

### ●議論の結果得られた方針

アドバイスとして、前日との比較をすべき。感じ方、見え方、聞こえ方が異なるはず。

↓

## 2日目 9/9(水) 夜 演習林藤原先生レクチャー

### ●質問と回答

○区画の中に谷のような部分があるが、そこを境にして道側には広葉樹、反対側には針葉樹がある。これはどういう理由があるのか。

→この区画は一定の間隔で色々な木を植えており、境で変えたのではなく、たまたまその部分で木の種類が変わったのでは。

○鹿の好みの木はあるのか。→ある。ミズキが大流行している。鹿の場合は、ある特定の木を常に食べ続け、それがなくなると別の木に移る。鹿の中でブームがあるみたい。毒もどちらかと言うと野生の勘があるというよりも、周りの動物から学んでいるだけと推測される。

○皮をはぐ動物はいるのか。→モモンガとかクマもはぐ。

↓

## 3日目 9/10(水) 9:00-12:00

### ●作業内容

昨日の時点でトレーシングペーパーを貼って、土地の大きなイメージを上げていった。

機能の午後に行ったら、印象が変わってしまったので、トレーシングペーパーに書いてあることが正しくはない。

機能歩いて感じたことをポストイットに書いて、それを大まかに似ているものでグルーピングしてみた。

### ●作業から得た現時点での方針や結論

倒木が倒れていて、それを見てみると、くちですぐに無くなるのではなく、その倒木に苔が生えて、周りに草が生えてというように朽木は次の世代の栄養になり、生命の連鎖を感じることが出来た。

空間的な違い：谷を境に様子が異なる。片方は生命の連鎖を感じられる。(糞とかで動物の生活が垣間見れる、草木だけではなく)逆側は木が元気よく生きている、広葉樹が多く、木の生え方に躍動感が感じられた。

雨の日と晴れの日で感じ方が変わった。

下が最初に気づいたこと、その上に雨が上がった跡に気づいたことを書いた。

何で良いかということをお互いで考えた。

ある人は生物が好きで、よく虫取りをしていたから、鹿の後とかが好きで、樹液の匂いも好き。この場所は人工的な部分もあり、容易に侵入できる。僕は自然が好きとまでは断言できず、自然と人の手が入った部分の混ざり合った部分が好き。次の人にとっては、このエリアの中でも視覚的な変化があって、例えば明るい暗い、開けている開けていないなど。均一的に高い木があるのではなく、一部は開けている。自然の部分だけでなく、人の手が入っている部分もあり、それが絡み合っているところがいいなと思った。次の人にとっては、実家の周りは草ボーボーしていたので、そういう場所に安心を感じる。その領域を見て安心を感じる原因はやはり、幼いころの体験の影響だと思った。鹿に幹が食べられているといったような、明らかな生命の痕跡があることに感動し、過去からのつながりを感じられて、興味深かった。次の人にとっては、小学校のときの帰り道によく雑木林に寄り道をしていた。領域で木漏れ日や、葉の擦れる音などが、そのときの体験に近いものを感じ、よかった。昔の体験が呼び起こされたと思った。一方で、鹿の痕跡は、普段動物園でしか見れないようなものを見てよかった。昔の経験を呼び起こされ、あらたな経験をでき

てよかった。次の人にとっては、昔山道を歩くのは嫌いだった。領域について、木漏れ日などの自然を感じられてよかった。パーッと光が木に当たっているのが死神の森に似ているように感じ、印象的だった。

### ●教員からのコメント

- ・5人が個人の価値について行ってくれたが、それをまとめて欲しかった。音とか匂いとか自分の印象が結び付けられているところがあるので、なぜその印象があったのか、原因を考えるべき。言語化して関連性を見出してほしい。(石田先生)
- ・既視感を持つものをよいと思うのは当たり前。印象の域を出ていない。細かい点を見て、いま出た話が何故出たのか考えてほしい。価値を構造化する時、差異を考えるのは重要だが、その差異の大きさにもっと注目してほしい。この場所の価値を考えるとにもっと細かい点に注目してほしい。例えば、鹿の糞→鹿に会えるかもしれないというようにもっと出ている話を育てて、価値について考えてほしい。(福島先生)
- ・整理という意味では、印象をマッピングすることはできている。天候の変化が与える印象の変化という部分に切り込んでいるところが良かった。今マクロでとらわれているので、ミクロで考えるとどうなるのか、また、ミクロを考えた時、マクロとの関係性は何か。まだ、共有が足りていない。(柳沼先生)
- ・要素としては出揃っているが、明るいからこうではなく、こう感じたのは○○だからであるといったものを出してほしい。(中西先生)
- ・ここの領域の外から見た時にこの領域はどう思うのかといった視点があっても良い。(松丸先生)
- ・生命の連鎖は発見的だけど、当たり前。(福島先生)
- ・生命の連鎖は規定の枠組みとしてある
- ・そこに倒木があったから断面図を書き入れたというのと、その倒木にみんなが生命を感じたから断面図を書き入れたでは、出来上がってくる断面も異なってくるはず(中西先生)
- ・どこにでもあるから価値が無いわけではない。世界に一個しか無いものも価値がある理由は異なる部分にあるはず。(福島先生)
- ・価値は関係性。例えば、喉が渇いた時は水の価値は物凄く上がる(石田先生)
- ・ディスカッションによって価値についてぶつかりあうことによって出てくる気づきを反映させてほしい。(石田先生)
- ・複雑なものを分解すると共通項と差異の部分が出てきて、それをまとめるとよい(柳沼先生)

↓

3日目 9/10(木) 14:00-16:00

### ●作業内容

現地エスキス

### ●作業から得た現時点での方針や結論

- ・低くなっている部分が谷の様になっている。谷の左側と右側で生えている木が違う
- ・エリアごとの特徴を捉えているだけでは価値に結び付かない→各自がエリアの中で最も価値があると思う部分を挙げていくことに
  1. 左側・・・下草が生えて居たり、木が曲がっていて躍動感がある。生命力を感じる部分と死んでいる(葉のついてない木)→生と死の印象  
小学生の時に祖母が亡くなり、念仏を聞いた思い出→そこから死に対して敏感に。生と死を間近に感じて、自分の中で身にせまるものがあった。
  2. 木漏れ日→はっぱの水滴が光ったり、太陽の光がきれい。暗いところから見た、明るい所の風景が綺麗。対比。都会では味わえない景色。
  3. 立っている1本の木が印象的。回りは比較的密集しているのに、この木は開けた場所にあり、光が当たっている。割と若い木で、目の高さに葉っぱがあり、親しみを覚える。なぜ?→離れてみた時に、明るさのような木の特徴が際立って見える。
  4. 僕も同じ木。他と違って、上が開けていて、あかるい。向こうから歩いてくると、だんだん開けてきて、きれい。3は親しみを覚えるといっていたが、僕は神秘的、遠い感じを覚えた。なぜ?→光が差ししてる風景が、特別に感じる理由。
  5. 木が食べられたあとや、踏み固められた少し硬い地面などがいいと思った。向こうが覆い茂っているからこそ、こちらがはげていると感じた。印象というのは相対的なんだと思った。
- ・皆の印象的だったことを書いて、並べると、共通していたのが、エリアの中は平たんではなく、生命力に対して枝だけになった木など死のイメージ、一方で動物の痕跡があったり、対立するイメージが一つのエリアの中に入ってい

るのが、このエリアの一番の特徴で、一番の魅力。

・全員が思った価値、このエリアの中におけるコントラストの中で成り立っているというのが結論。多様性＝価値、というのはありきたりだが、ここの特徴としては、人口林で、普段では見られないようなスケールでの混在が起きている。境にして広葉樹と針葉樹、など。あんまり見たことない。歴史の経緯などもあって、コントラストがはっきりしているのが価値、ということにしてもいいのでは。

### ●教員からのコメント

・向こうとこっちがコントラストに、というだけではない。動物の食べられた跡や、明るさなど、一つじゃない。二つの比較のいろんなスケールの組み合わせで、この中の特徴や、皆が感じた価値を表現したいということなのか、と感じた。(福島先生)

→テーマがあって、その中の具体的なものは沢山あるので、あえて抽象的な言葉で表している(学生)

・いっこいっこ表現していく必要がある。抽象度が高いものはずっと入るけど、分かった気にさせたようでわからないことがある。これは何か、と聞かれたときにこれとこれとこれ、といえる必要があるし、それが絵で表現されてないといけない。(柳沼先生)

・二項対立は分かりやすいけど、すごく多くのものを捨象してる。二つの比較の片方ずつは実は同じことで、3つの関係性ということもあるかもしれない。スタートは二つでもいいけれど、一回それをバラバラにしてみる必要があるかも。最初に出すときには二つの方が出しやすいのかも。その中でつながるものがあったり、この二つの比較は他とは独立事象で面白い、というものがいくつあるかとか、3つ4つつながるものがあったりとかするかもしれない。二つって決めてしまうともったいない。(福島先生)

・二つのコントラストの要素を、空間の中にたくさん置いていくんだよね？マルチに。それを引いてみると、関係性が見えてくるかも。立法体を異なる断面で切ったイメージ。それを組み合わせた時に、どんな絵になるか。それでここの特徴を表現できれば。(石田先生)

・立体のたとえがよくわからない。(学生) →・丸はどこで切って投影しても丸。立方体だと投影の仕方によって形が変わる。そういうこと。(石田先生)

・皆が言ってる比較、っていうのは、投影の仕方が違うだけで、本体は一個かもしれない、ということ。(福島先生)

・いろいろ重ねていきながら、そこで終わらずに、そこから見えてくる構造などまで行ってほしい。(福島先生、石田先生) いっぱい出したなら、それを重ねてみればいい。何かヒントがあるのかもしれない。いくつくらいあるの？ →あんまりないかもしれない(学生) →コントラストに決めるなら、それにこだわって、沢山出してみるといいかも。現地に来られるのはこれが最後だし。(福島先生)

・こちらが死というのがちょっと。確かに枝葉はないけど。もう少し班内で議論してほしい。言葉の選び方なのかもしれないけど。(石田先生)

・2個ものあって、何もなかったところを共有してるっていうのは極めて数学的な考え方。この森を相手にするときは、皆がどこから見ている。同じ二項対立でも、近いとか遠いとかいう関係もあれば、自分がどちらか片方の中にいるときもある。それをきちんと整理できると、平面図や断面図と自動的に連動してくる。その辺で図をどう描くかということと、何を表現するのかということが、同時にできあがってくるんじゃないか。(中西先生)

・中での対比だけじゃなくて、外との対比とかもあると見えてくるかも。今は中ですごく探してくれてるけど、そういう視点もあっていいかも。断面図書く時には奥行きのもを書くこともありうるわけだし。(松丸先生)

↓

## 最終日 9/11(金) 最終発表(4グループに分かれてツアー形式)

### ●内村先生ツアー

#### ○プレゼン要約

樹種、木の密度などから4つの違う特徴を持ったエリアに分け、それによって、葉や緑が生い茂っている場所(=生)と葉や緑がない場所(=死)という対比構造の中に、死の場所においても木が鹿に食べられた痕跡があり生を感じさせる場所が存在するといった重層的な対比構造が生まれる。この場所の価値とは、4つの異なる種類の木が植えられたエリアが存在することで、上記の例以外にも、多様で重層的な対比構造を発見できることである。

#### ○ディスカッション

・重層的な対比構造の根源的要因は樹種の違いのみなのか→地形も要因の一つかもしれないが議論が中途半端に終わってしまった。

・班員全員が対比があることが価値と考えているのか→対比自体に価値があるのではなく、人々の考えた価値が対比に起因するという結論になった。

- ・このエリアの手入れに関する議論はあったか→議論はあった。手入れ具合はエリアによってまちまちである。その手入れ具合の差も多様性を生み出している一因であると考え。
- ・この土地の価値は対比がたくさん取れることなのか、それとも重層的な対比が取れることなのか→両方。
- ・対比が価値につながるロジックを明確にするべきだった

## ●尾崎先生ツアー

### ○プレゼン要約

- ・このエリアに対して感じたことを出しあい、感じた理由を考えた結果、根底には対比があると考え、また、その対比は重層的であることから、重層的な対比が価値だと考えた。
- ・平面図：木の密度や樹種、土の固さ、人間の手が入っているか否かなど、4つのエリア同士で様々な対比があった。また、対比の生まれた原因は樹種の違いにあり、それは植樹方針（人園の意図）の違いから生まれた。
- ・断面図：ビニール紐の場所で切った。樹種の違いや谷が入るように断面を設定した。

### ○ディスカッション

- ・重層という言葉が表しているのはどの部分か→エリアで見ると生と死の部分に分けられるが、その死の部分の中にも鹿の痕跡（= 生）を感じられる点が重層的である。
- ・重層的な価値とは→この場所を訪れた人が各々の視点で色々な対比ができるところに価値がある。対比を通して、自分の考えを深めることが出来る。
- ・断面図の人がしていること→鹿が皮を食べているところを観察している。（希望も込めて）
- ・断面図で人と鹿を離れたのは何故か→鹿の食事（= 生）を暗がりからみることで強調した。
- ・谷について→雨が流れている痕跡とかは無いが、木が無いので、侵食されたのでは無いか。
- ・植樹の意図や広葉樹内、針葉樹内の樹種の比較をすると新しい発見があったのでは。

## ●中井先生ツアー

### ○プレゼン要約

- ・このエリアを歩いて個人が印象に残ったことを列挙した。（生と死、親しみ・安心など）
- ・全員が共通してコントラストを感じていた。（樹種、明暗、下草など）
- ・対比の根本を考えると人間の意図があった（針葉樹、広葉樹を植えた意図）
- ・班で価値の共有は出来なくて、価値はこのような対比から生まれるのでは無いか。この対比から各々の感情等を含んだ結果、各々の価値が生まれたのではないか。

### ○ディスカッション

- ・重層性に着目したのは良くて、人間が介入して作ったもののはずなのに、そこに自然らしさや重層性、多様性を感じるの面白いと思った。
- ・人工林と鹿が共存しているように人間と自然は完全には分離できないことが分かった。
- ・どのように区画の価値を感じたのか→対比するものが多いからこそ、対比されたものが共に強調されて、身に迫って感じる事が出来るのがこの土地の価値だ。
- ・都会では生と死は意識しないのか→ニュースでの生死は無関係のものと考えてしまっているところがある。また、初日は天気が悪かったので、生死を意識しやすかったのでは。都会では車や人など様々な動きがあるが、森は静かなので死を連想しやすいのでは。
- ・二項対立を本の中でと森の中で考えることの違い→森の中では対立軸が与えられてない。
- ・多様性の要因をより深く考察できるとよかった。

## ●石田先生ツアー

### ○プレゼン要約

- ・小さなエリアに様々な対比が重層的に存在していることがこの場所の価値だと考えた。
- ・針葉樹と広葉樹の境目という場所の特異性から、差異を価値とする結論に至った。
- ・価値に至った過程：第一印象を最初に共有し、共通項を探した。そこから出てきたものは「対比」でこの対比の根源は樹種の違いであるという結論に至った。

・平面図では、ゾーニングをした。針葉樹のエリアも2つに分けられ、下の針葉樹では動物の匂いを感じられ、上の針葉樹は倒木などがあり、生を感じられる場所となっていた。

### ○ディスカッション

- ・(断面図で)立っている人は?→人と動物が共存していることを表すために書いた。
- ・客観的な情報と各自の感情との対応が模造紙には書かれていない。感情を何故感じたかその要因を要素分解したものが模造紙には書かれている。
- ・空間的な対比とは別に時間的な対比は出てこなかったのか→明暗は感じる事が出来た。
- ・断面図をその部分で切った理由は→一番大切な樹種の違いに加えて下草、倒木、谷が入るように切った。できるだけ多くの要素を取り込もうとした。
- ・樹種の違いや下草の生え方とかを考察し、発表に落としこむことによって、自分たちが様々なことを考えていたことをより理解してもらえようになったのではないか。

# 5班

1日目 9/8(火) 17:30-18:30

## ●作業内容

平面図に起こす前に、全体図をスケッチ。情報や面白かったこと、キーワードをひたすら書き込む。  
下層植物（キノコ、コケがたくさん）や倒木を中心に写真撮影

## ●作業から得た現時点での方針や結論

生えていた低木や草の高さにも注目  
面白い形のキノコや植物をマッピング  
倒木の周囲の生態系  
注目点は同じだが、予想や思ったことは人それぞれ  
(現地でのつぶやき)  
・木の皮がはがれている木 → 新陳代謝なのか？腐りかけているのか？木の皮を採集  
・倒木の周りから新しい緑の葉が生えているのに注目（倒木が好きそう）

## ●教員からのコメント

・観光地のガイドブックみたいで良い（内村先生）

↓

2日目 9/9(水) 8:30-10:30

## ●作業内容

スケッチブックの書き込み（客観的事実）はほぼ終了し、大きい模造紙で平面図を作成開始。  
植生／疑問点・今日調べたいことを書き込む。

## ●作業から得た現時点での方針や結論

(このエリアの価値はみんなで共有できているか？という質問に対して) 他のエリアに比べて、自然のままの状態であるのが特徴。人の手が加わっていない。自然のまま放置したら生態系はどのように変化するのを見つけない → 「自然のままであることに価値がある」と断言して良いのか、疑問を感じている。だからまずは事実を図面に起こしていきたい。  
「誰にとっての価値なのか」が分からない。人にとって？森にとって？人の場合は主体によっても違う。メンバーによって感想が違った。時間がたつにつれ感覚が変わっていった人もいた。  
どういう目的かによっても変わる。  
点・ポイントに注目するのではなく、面で捉えたい。

## ●教員からのコメント

・主観をならべてばかり、逆に事実をならべるだけなのも良くない  
・何故時間がたつにつれ感覚が変わったのか、をつき詰めてもおもしろそう（水谷先生）  
・ポストイットの構造化とは違って、スケッチブックに落とし込むなど、いろんな手法がある。他の班の手法で参考になる点があるかも（小松崎先生）

↓

## 2日目 9/9(水) 13:00-18:00

### ●作業内容

断面上に水平にロープを張り、標高を測定

### ●作業から得た現時点での方針や結論

昨日と別風景に見えた。

倒木や大きい木、複数の植生を含む断面図を作成したい。今回の台風で新たに折れた枝なども入れることで、「新たな倒木と生態系の誕生」というテーマが出来ないだろうか？

↓

## 2日目 9/9(水) 夜 演習林藤原先生レクチャー

### ●質問と回答

・手入れの行き届かないところ→倒木について

・倒木、台風で新しく、倒木の頻度

→まさに調査している。5年に一度。森林の分野でも、細かい時間スケールで調査するのも興味はあるけど大変。対象が広いので、突発的な現象を調べるのが難しい。

・倒木、部分的に人の手で切ったような跡が。

→歩道にかかる場所など、最低限チェーンソーで。落としたら落とせばなし。

・今日は歩道の部分が塞がっていたけど、

→5年に1回。歩道にかかる場所は年に1回も入らない。5年に1回の調査の前には必ずやる。

・朽ちるまではどれくらいの年数がかかるのか。

→それも調査対象。倒木のスケッチを蓄積。樹種や倒れた部分の水分や動物によってオーダーで違う。なんとも言えない。10年でガボガボになる気もあれば、10年位じゃ変わらない気も。ここは涼しいので、温かいところより腐りにくい。腐り安さによって土壌が変わる。北欧は有機物が残った状態の土ができる。熱帯は分解が早いので、無機化。地面には有機物がほとんどない。

↓

## 3日目 9/10(水) 9:30-12:00

### ●作業内容

スケッチブックとA4二枚でプレゼン

### ●作業から得た現時点での方針や結論

最初は入りにくいという第一印象→「倒木」がきっかけで観察→ディテールの面白さ→生態系のサイクル、「二時間見るだけで100年が見える」

倒木がなかったら興味がわかなかった。他の班と違う。そこから幅が広がった。

面白い:人によって違う。お気に入りポイント。メンバー6人中5人は都会育ち。森にはきれいなイメージがあったから、分け入ってみて6人様々な驚きがあった。

サイクル:メンバー共通の根本の考え。引継ぎと更新→「新陳代謝」を追体験できる。

倒木そのものにオリジナリティがあるというよりも、入り口にドーンとあるのが、インパクトが強かった。入りにくいというの、都会育ちの学生にとっては大きかった。

誰にとっての価値なのか、というのは初日から議論になった。生態系と価値を結びつけるのが難しいと思っている。ただし、「サイクル」というのが価値であるという結論ではない。日常と違う体験が「面白さ」に繋がっている。「面白さ」と「サイクル」は二対。

### ●教員からのコメント

・このエリアだけ、というものではない気がする。倒木は他のエリアにもあるのでは？(マエムラ先生)

・「都会育ちだから～」というのは毎年出てくる。台風で新たに倒れた木があったのが一番の特徴。2日目にあった印象の変化がむしろきっかけになったのでは？「サイクル」の一步目を目撃したのがこの班の違い。(尾崎先生)

- ・何故、その時の流れや生態系が良いと思っているのかをもう少し考えてもらいたい。森に入って突然「良い」と思うのか？（菊池先生）
- ・モノをしっかり観察できているし、各個人でバラバラの主観を持っている。「サイクル」などという陳腐でシンプルな言葉できれいにまとめるのはもったいない。（森川先生）

### ●議論の結果得られた方針

森に行って、「価値」についてももう少し議論すべし

↓

3日目 9/10(木) 15:00-18:20

### ●作業内容

1対5にメンバーが分かれて、全員が気に入っているポイントを発表し、Q&Aをした。  
(現地エスキス)

### ●作業から得た現時点での方針や結論

- ・(今回の台風で新しく折れた枝に対して…) 太い枝ではなく、細い枝が残った(太い枝の方が弱っていたからか?)  
→ 自然は生き残るために一番良い方法を選択していて、人間より合理的なのではないかと感じた。
- ・人間は倫理観を加えてモノを考えており、切り捨てるべきものを切り捨てられない。1つのモノを生き残らせるといふ倫理は人間では許されない。また、人間は生きることを目的としていない。
- ・このエリアは「朽ちていくさま」が印象的で、様々な死に方から始まる何かがある、というのがこの土地特有のものだと思う。
- ・自分たちなりに「何故こうなったんだろう」と考えていくうちに、この数日間で考え方が変わっていったプロセスが大事だったんだと感じた。

### ●教員からのコメント

- ・「死」に価値があると考え、「そこから新たに何かが始まる」と思う点が普通の考え方とは違う(マエムラ先生)
- ・ディテールを飛ばさないようなまとめ方をしよう(尾崎先生) → 「面白い点がいろいろある」ということをまとめていかなければ…
- ・「サイクル」といっているが、実は「生命の終わり」がテーマだったりして。(菊池先生)
- ・美談ではなく、もっとリアルに迫ってほしい。この林はまだ作られて100年も経っていない若い林。林相(?)にも着目して見てはどうか(尾崎先生) → この木々は最初に競争する場を与えられた、ということか?(武藤)
- ・今、自分たちは人間中心の見方をしているのだと認識してほしい。人間との距離感。(森川先生)

### ●議論の結果得られた方針

(18:00頃からのエスキスにて)

#### ①自然との距離感、距離感

90年前にカラマツを植えているので100%原生林ではない。でもそれ以降は加えられていないので、100%人工的とは言えない。これが自然だと言っているのかわからなくて迷っている。

→原生林は植生として安定した競争が続いている状態。一方で今回の森は闘っている最中。ここ90年でどのような植生の変化があるのかが調べられるはず。(尾崎先生)

→そもそも草木が種の保存を優先させており、感情があるかのような考え方をするのは人間よりの考え方かもしれない。(内村先生)

→90年後に「人間はなんて非合理なんだろう」と考える人間がいるなんて、90年前に植林した人は思わなかっただろう。何も考えずに植えたはず。(尾崎先生)

#### ②人と草木の生きざま・死にざまの違い

人間は種の生存だけでなく、価値観(肉を食べないとか…)など優先順位が人によって違っている。草木は分子レベルで次の世代に受け継がれるが、人間は他の種の生存に貢献しているという自覚がない。一方で精神面・知識面で貢献している。人間は遺産を遺すとき、残す相手を意識的に選択するが、生物は全てに対して身をささげているのが違う点。

このような考えに至ったりハッとさせられたりしたことの結論・過程に価値があると思う。

→歴史によって人間の価値構造も変わってきているとは思ったが、それだと幅が広がってしまうため、「人間」ではなく、「現代の私たち」が主体となって価値を見出すべき。

→私たちが「死にざま」だと思っていたものが本当は「生き様」だったのかもしれない。(佐藤)  
現象に対して「私たちはこう思う」という解釈はまとまってきたが、実際にはどうなのか、というのが気になる。→裏付けが手に入ればいい。全容解明は無理でも、出来るだけ説明できるようになればいい(尾崎先生)

↓

## 最終日 9/11(金) 最終発表(4グループに分かれてツアー形式)

### ●尾崎先生ツアー

#### ○プレゼン要約

模造紙に沿って各班員の“萌えポイント”を説明 → 演習中に折れたばかりの枝にフォーカスし、感じたことをまとめる → もともとは人工林だったが、植林後 90 年間手が加わっておらず、人工林から自然の森へと移行している段階であることに触れる。

植物と我々人間の生きざま・死にざまの違いについて感じた事 → 班員が都会出身だったこともあり、このエリアに引き込まれていった結果、人間の倫理観や生き方について思いを巡らすことができたのがこのエリアの価値だと結論付けた。

発表の後半で、断面図や平面図を用いて、エリア全体の様子や特徴を解説した。

#### ○ディスカッション

・高橋先生：一番最近折れた木の幹の死にざまとは？折れた後の枝はどうなるのか？

→人間は初期投資したものを切り捨てるのが難しいが、木は弱ったものを切り捨てることができる。その点が両者の違いだと思う。折れた木は、これから芽生える生命の生きる糧となるだろう。

・学生：班員全員が「死」という同じテーマを共有していたのか？自分は、倒木だけでなく、しっかりと生えている木々を見て、生命力も感じとった。見ているものが同じだとしても、人が違えば感じ取るものも違うのではないかと？

→きっかけは、最初に目についた倒木や切り株やコケだった。僕(発表者)も木々を見て、個人的に生命力を感じとっており、「死」というテーマと相容れない部分もあるかもしれないが、倒木や切り株がスタート地点だったのは班員の間で共通。

・尾崎先生：台風で新たに折れた木がきっかけだったのではないかと？

→木々が生き残るためにどのように取捨選択をしているのか、今後どのように育てているのかを考えるきっかけになった。それが今回の結論に結びついている。

・松丸先生：この新たな倒木を見て、班内で異なる意見は出てきたか？

→植物の人生という時間スケールで考えたときに、同じ空間に、異なるライフステージ(しっかりと立っている木、ポロポロの木、倒木など)の木々があるというのに注目して、違いを捉えていた。

・尾崎先生(?)：植林してから 90 年だっているエリアであるという説明があったが、その事実と結論との関連性がよく分からない。90 年たっている森だからどうなの？

→このエリアは、自然のままの森と、手入れが行き届いている森の中間にあり、ワンサイクルすら終えていないという印象を受けたが、その事実は結論には反映されていない。

### ●内村先生ツアー

#### ○プレゼン要約

模造紙の内容に沿って順に説明。初日の雑多な印象 → 倒木=「死」→ 各人の萌えポイント → “ちょんす”の木、倒木、大木を見て感じたこと → このエリア内の草木と人間(自然に触れる機会が少なかった私たち班員)の生き様の対比、死後どのように次世代へ引き継ぐのかについて → 見出したこのエリアの価値

#### ○ディスカッション

・福島先生：草木に我々人間を投影しているが、草木を擬人化できる条件とは？

・菊池先生：過去の学生の中にも、森を見て「死」を感じる人が多かったが、私にはそれが意外に感じる。最初からそのようなテーマを考えていたのか？

→初日は違っていた。2日目に“ちょんす”の木を発見したという生の体験のインパクトが大きかった。

・学生：今回は運よく台風が来て枝が倒れたため、このような価値が見出せたと思うが、もし台風が来ていなかったら、どのような結論になったと思うか？

→各人の萌えポイントを挙げて行ったところで行き詰っていたと思う。

・菊池先生：残った細い枝よりも、折れた太い枝の方が高かったとすれば、「生き残るために弱っている方を切り捨てた」ということではなく、単に背が高い方が風を受けやすく折れてしまった可能性もあるはず。

→折れた枝にはそれほど葉がついていないし、枝も太いので、単に風が強くて当たったからという理由ではないと思う。

## ●石田先生ツアー

### ○プレゼン要約

当初はとっつきにくい印象だったが、徐々に面白くなってきた。理由：様々な倒木や苔が特徴的で、木々の多様な死にざまを感じ、このエリアは森全体のライフサイクルを考えられる場所だと思ったから → 各班員が良いと思った萌えポイントを列挙 → 演習中に折れた枝を紹介し、一つのもの（太い枝）を犠牲にして（細くて新しい枝が）生きのびようとする植物の姿を目の当たりにしたことを説明 → 種の繁栄を第一にしている植物と、生き残って子孫を残すことだけを目的としていない人間との、生の目的の違い → 死の後の役割に関しても、植物と人間とで違いがあることに触れる

補足説明：このエリアは、90年前に植林して以来、人の手が加わっておらず、似非自然となっている。

### ○ディスカッション

・学生：植物と人間との対比の議論はどのようなプロセスで生まれたのか？

→きっかけは“ちょんすの木”。木全体の生存のために、2本あった枝のうち1本を犠牲にするところが、種全体の繁栄のために一部の人間を切り捨てることのできない人間との違いだと思った。また、今回は自然の中でもこのエリアだけ、様々な時代や多様な人間がいる中でも私たち班員だけに絞って議論をした（あらゆる自然・人間を考慮したわけではない）。

・学生：人間でも、例えば宗教に従っているのは個人の遺伝子を残すためという合理的な目的によるのではないかと思う。生と死という観点からこのエリアを捉えようとしているが、その他に、ここが良いなと思ったポイントやもつと感覚的な感想などを紹介してもらいたい。

・学生：この発表はすんなりとは受け入れられない。特に「生と死」の部分は一個人の意見のように聞こえる。

→「人間は種の存続・繁栄を重視していない」というよりは、重視しているけれども、それに加えて「意図的に考えて選択している」という点が草木と違うと思った。今回の発表で重視したいのは、このような議論や考え方が、普段都会で生活しているだけでは得られなかっただろうということ。能動的に森の価値を見つけようとする機会を与えてくれるところに価値がある。

## ●小松崎先生ツアー

### ○プレゼン要約

内村ツアーと同様、模造紙の内容に沿って順に説明。断面図：倒木に注目してほしかったため、それを濃く描いた。平面図：植生&死に様パップにした。

### ○ディスカッション

・学生：草木と人間の違いに関して、この森に入る前と後で、我々人間の生の目的や死後に対する考え方に変化はあったか？

→生きる目的は普段あまり考えることがなかったため、この演習中に草木を見たことで、今回の考えに至っている。

・学生：天気の変化による影響はあったか？

→初日の雨の中では厳かな雰囲気があって死が重いものを感じられた。晴れてからは木漏れ日を受けて育っている植物を見たり、風にあたって揺れる木々に気付いたりして、死と生の共存や森全体の新陳代謝に着目できるようになった。

・中井先生：倒木が生きているのか死んでいるのか、どう定義しているのか？スパッと割り切れるのかどうか？

→それは議論にもなったが、倒れた後も周りの草木の生の糧になっているかどうかを重視している。葉っぱがまだ生えているものは生きている…？

・学生：他のエリアにも倒木はあるが、どうしてこの班は倒木に固有の意味を見出したのか？

→倒木がいくつもある上に、倒れた時期が様々だったため、メインテーマにした。

・学生：倒木の倒れ方の違いを班で話し合ったか？

→根っこから自然に倒れたものもあれば、人の手で切り倒されたものもあった。恐らくこのエリアには昔道が通っていたと考えられ、道を通すために切り倒されたのだと思う。

・小松崎先生：森にのめりこむ体験というのは、断面図の中の人物たちで表現されているのか？

→森に「のめりこむ」=この演習中に班員が、台風の前で考察したり、萌えポイントを探したり、お互いに質問し合ったりしたこと。断面図の人物はそんな我々の体験の一部分。倒木に座ってみたり、木々に触れてみたり…。

→（小松崎先生）価値の気付きは、森に入って活動するというプロセスを通して初めて得られたのか？例えば他班のように、このエリアで長い時間過ごしていない人々には共有されない価値なのか？

→皆がぱっと見て理解出来ないこともあるだろう。我々班員が時間をかけて吸収したものを発表した。

→（小松崎先生）発表を聞いた学生が理解を示しているということは、見出された価値に、ある程度普遍性があったのだろう。それは逆に言えば、このエリア特有の価値ではなかったのかもしれない。価値の固有性を追求しているわけではないが、この土地ならではの部分があると良かったかも。

# 6班

1日目 9/8(火) 13:00-17:00

## ●作業内容

各自が気になるところの写真を撮る  
平面図を書くために5m×5mの16区画に分け、それぞれの位置の写真を撮影  
使えそうな断面を選んでロープを張る、写真

↓

1日目 9/8(火) 17:30-18:30

## ●作業内容

各自気づいたことの言い合い  
その場所の価値が誰にとっての価値なのかの議論

## ●教員からのコメント

- ・考えるものの視点が限定的になっている、色々なストーリーを想定して多くの視点から議論すべき
- ・議論されている「自然」とは何を示すのかが不明瞭

↓

2日目 9/9(水) 9:30-10:30

## ●作業内容

意見の共有(いろいろな主体から見た価値、感想、価値の尺度の3つに分けた)  
→人の手が加わっていないことによる生物の痕跡、  
16区画の写真を用いてpost itで簡易平面図を作成

## ●作業から得た現時点での方針や結論

簡易平面図からわかる空間的特徴を議論

## ●教員からのコメント

- ・Post itを色分けして考えたので、それを構造化して考えると何か見えるかもしれない
- ・議論の軸を考えるのを考えていくのも良いかもしれない
- ・評価のマトリクスを作るのも良いかもしれない
- ・価値を色分けしたのは良いことだが、価値は多様な側面を持つので色分けしても分けきれない懸念がある。そこもしっかり考えるべき

↓

2日目 9/9(水) 夜 演習林藤原先生レクチャー

## ●質問と回答

- ・窪地のエリア。大木が育ちやすいのはなぜ?  
→水分条件がよい。ちょっとした微地形で水分条件は変わる。凹。水分条件が悪いと、木の高さまで水分が届かない。水分条件は木の高さに凄くシビアに効く。あとは風当たり。風当たりが強いと伸ばした枝が痛む。窪地だと風当たりが小さい。
- ・下草が余り生えていないところと、生えていないところがある。木漏れ日と下草の有無があまり関連がないように見えた。その他の要因は?  
→光は強い条件ではあるけれど、それだけではない。季節や時間帯によっても光は変わる。成長する時期の光をみるべき。土が露出しているところ=鹿の寝床である可能性も。

・大木が3つ、うち2つはカラマツ。1こだけすごく苔がたくさん生えている。1本だけ苔が生えることはあるのか。  
→ありうるけど、なんとも言えない。森は近くても不均一な環境であることも多い。研究の時は近似して均一とするけど、細かく見ていくとかなり不均一。風や日当たりなどの細かい環境の差で違ってくることもある。アカマツも生えてた気がするけど。

↓

3日目 9/10(水) 9:00-10:30

### ●作業内容

価値について思ったことを挙げていった

丸太について：丸太が縦ではなく横になっている、人工感がありそこに親しみを感じられる。まだできていないが、丸太に関心を持たない人もいるのでそこに注目するのもいいかも。

危険な場所としての森林と、隔離された場所としての森林の境界がしっかりしている。(動物園のライオンの檻のようなもの)。危険な場所を安全な場所から見ることができる。

雨が降っているときは区画に入り込んで写真を撮れたが、晴れの時は入りにくかった。それは雨の時は森を無機質なものと捉えていたが、晴れの時は動きのあるものとして捉えていた。その違いの議論は深められていないが深めたら面白そう。

鹿が出たが、ハチ、蛇、熊のように鹿に悪い印象はない。

鹿が木の皮を食べたといった動物的な痕跡がかえって自然らしさを生み出している。

自然に対する感じ方は個人によって異なる。過去の育ち方、種類(鹿、ハチで印象は異なる)、多様性(多くの種があることが良いと考える)、ダイナミックさ(風が吹いている)

### ●教員からのコメント

・鹿に対する印象とかは出身によって異なるのでは？自分がどのような属性にいるからその感想を持ったとかを考えるとより議論が深まる。

・最終発表では班員のコンセンサスを示す必要はない。構造化をするなどして見せるその方法がキーポイント。

・藤原先生や実際にハチが区域内に見つかったことを受け、無意識にハチに対する印象が強くなっている可能性がある。

・議論の過程で様々な話が出てくるが、それらをどう統合・構造化して示すのかがポイント。

・個々の価値の関係性に関する議論はなされているが、その価値を生み出す要素と生まれた価値との関係に関する議論はなされていない。

↓

3日目 9/10(木) 14:00-16:00

### ●作業内容

価値観が個々でどうして違うのか

→過去の個人の経験から価値観に違いが出る原因を考える

### ●作業から得た現時点での方針や結論

それぞれの価値基準同士をどうつなげていくかを議論

### ●教員からのコメント

・今出てきているものが何かと結び付けられるかどうかかわからない

・安全、安心感というのに引っ張られすぎている。一般的過ぎて深い議論にならない。

・概念を階層構造にしていくと良いかも

・今は並列で示されているものが並列かどうかは疑問

・自分たちが感じたことを他人に伝えられる形で概念化、構造化するべき

・考えていることが抽象的になりすぎているので、最初の段階で感じたことまで戻って考えても良いかも

↓

## ●尾崎先生ツアー

### ○プレゼン要約

この場所で気になった丸太、開けた場所であること、つる、鹿の痕跡について、何故気になったのかを議論。丸太は自然と人工のコントラストを象徴する存在、開けた場所は安全を感じる場所、つると鹿の痕跡はその非日常性から新鮮さを感じさせるものであるからという結論に至った。ここで出た「自然と人工」「安全・危険」「新鮮とマンネリ」というキーワードを構造化。自身の経験を基にその場所が「安全・危険」であるかを判断し、「自然・人工」「新鮮さ・マンネリさ」の順でその場所の良し悪しを判断する。この場所の価値とは、安全が確保される開けた場所から自然を楽しむことができる点にある。断面図は安全地帯である紙面右側から紙面左側の自然を楽しむことができるということを示している。平面図も同様。

### ○ディスカッション

自然と人工のコントラストを考えているが、自然には原生林もあればここのように演習林という人の手が加えられた森もある。自然を外側から見るという発想は面白いが、もう少し自然に関してどのような自然かということまで深く議論できればより良い発表だった)

Q: ハチは自然エリアにいるがこれは新鮮さを感じさせる要素か？

A: 人による。田舎出身の子はハチに新鮮さを感じ、気分が高揚していた。

Q: 班でどのような議論がなされた？

A: 価値を構造化すると言われていたが、個人的には飲み込めなかった。視点を構造化して論理的に説明するというのが解せなかったし、自分たちの考えを論理的に結び付けようとすればするほどかえってわかりにくくなってしまった。

Q: 雨の日は臆することなく奥まで入っていったのに、晴れるとそれに怖さを感じるようになった要因は？

A: 雨のときは濡れていて森に動きが感じられなかったため危険は感じなかった一方、晴れのときは風・光・虫など森に動きがあったから危険に感じられた。

## ●石田先生ツアー

### ○プレゼン要約

自分たちが感じた雑多な感想を話し、それを感じた理由を突き詰めるため、ある事象を見てからそれを価値であると捉えるまでの思考回路を議論した。議論した結果を踏まえてはじめに話した雑多な感想について改めて分析し直した。この場所の特徴として、くぼ地でオープンスペースであること、丸太やつるがあること、鹿の痕跡があることが挙げられる。丸太は自然の中にある人工物であり自然と人工のコントラストを象徴するもの(自然と人工)、くぼ地やオープンスペースという地形的特徴は自然との距離生み安心感を与えてくれるもの(安全と危険)、つるはそのダイナミックな様子から非日常性を感じさせ新鮮さを与えてくれるもの(新鮮とマンネリ)、鹿の痕跡は普段接することのできない動物であることから新鮮さを与え(新鮮とマンネリ)、さらに鹿は安全であるという知識から安心感を与えてくれるもの(安全と危険)である。ここで挙げたキーワードを構造化すると、まずは過去の経験や知識からこの領域が安全か危険かを判断し、次に自然か人工かを考え、そして新鮮かマンネリかをもちこの場所の価値を判断するという結論となった。この領域の価値とは、自然から距離のある(=安全が確保された)オープンスペースから非日常である自然を見渡せることである。雨の日だと自然空間の野生度合いが下がるため、安全な領域と外との境界が薄まる。断面図は4つの概念が描かれている。平面図はオープンスペースから木が生い茂っている場所に行くにつれて草が濃くなっていくことと、気の間から木漏れ日が見られることを表現している。

### ○ディスカッション

Q: この価値構造では危険なところには価値がない？

A: 自分の身を危険に晒すことには価値がないが、自分の身を安全において危険を遠巻きに見られることには価値がある。

Q: 雨と日と晴れの日でのこの場所の違いとは？

A: 雨の時には躊躇なく奥に入れたが、晴れの日には入れなかった。これは雨の日は視界が悪く音も聞こえず植物の生命力があまり感じられず、晴れの日には草が生き生きとしている様子から野生さを感じ恐怖を覚えたから。

Q: 雨の日の状況を日常に例えると目が悪くイヤホンをしているような状態だが、これは極めて危険ではないか

A: 傍から見ればそれは危険だが、当事者にとってみれば危険を認知できないが故に危険を感じないということ

## ●内村先生ツアー

### ○プレゼン要約

まず何で価値を感じるのかについて話した。価値は対象物、それを見る人、空間が持っている価値構造の3つの要素が合わさって生まれる。対象物は丸太、オープンスペース、つる、鹿の痕跡の4つであり、見る人は班員6人であるとして、空間が持っている価値構造について議論した。6人がそれぞれの対象物を見てどのように感じたかを議論した中で挙げたキーワードは、丸太は「自然と人工」、オープンスペースは「安全と危険」、つるは「新鮮さとマンネリさ」、鹿の痕跡も「新鮮さとマンネリさ」である。そこから価値構造の分析をしたところ、個人の知識や経験を基に「安全・危険」「自然・人工」「新鮮・マンネリ」という尺度にかけ、最終的な価値を見出すという結論に至った。この価値構造を基に領域全体の価値を考えると、この領域はオープンスペースという安全が確保された場所から、すぐ近くの自然を見ることができることである。

雨の時には奥に入っていたが、晴れの時には入っていけなかった。これは晴れのときは木々の揺れや木漏れ日の存在から自然に野生的なものを感じたが、雨の時はその野性さがなくなったためだと考えられる。

### ○ディスカッション

Q: 安全とは物理的な状況のことなので、ここでは安心が適切ではないか？

A: これは危険性から身を守られるかどうかという意味で安全という言葉を使った

C: 価値構造はマズローの理論に基づいているものだが、それであれば新鮮さマンネリさに関して各個人の背景がどのように新鮮・マンネリの判断につながっているのかを明確化するべきだった

Q: 価値を構造化しているが、それはこの場所に特有のものなのか？

A: できる限り一般化して価値を構造化しようとしたが、この場所の特性をもって考えた価値構造なので、この場所特有のものになってしまっていることは否定できない。また、この場所では気付かなかったが他の場所では気付く要素もあったかもしれない。

Q: 対象物に4つのものがあるが、それを選定した理由は？

A: 他のものも対象物に挙げたが、この4つが他のものの特性も網羅しているから。

## ●小松崎先生ツアー

### ○プレゼン要約

見る人が対象物に価値を見出すのは個人の中の様々な価値観が組み合わさった結果であるという前提の下、その個人の様々な価値観が対象物に価値を与えるまでの道のりを考えた。対象物は丸太、開けた場所、つる、鹿の痕跡の4つがあり、それらの場所が示す対比的なキーワードを探った。丸太はその切り口などから人工的なものを感じさせるもの(自然と人工)、開けた場所は人に安心感を与える場所(安全と危険)、つるはそのダイナミックさから動きや非日常性を感じさせるもの(新鮮さとマンネリさ)、鹿の痕跡は普段見られないが故に非日常性を感じさせるものであり(新鮮さとマンネリさ)、さらに鹿は安全な動物であるが故に安心感を与えるもの(安全と危険)であると考えた。ここで挙げた3つのキーワードを構造化すると、知識・経験を基にそれが「安全・危険」をまずは判断し、次に「自然・人工」「新鮮・マンネリ」の順で対象物を捉え、最終的にその対象物の価値を判断するという結論に至った。この空間の価値とは、危険な場所から距離を置いた開けた場所から自然を見られることである。また、雨の日には虫などの動きが減ることで自然の恐怖が減り、雨と晴れのときではこの空間の価値が変わるということもわかった。

### ○ディスカッション

Q: 価値を見出す尺度に3つのキーワードを用いたことはわかったが、発表者自身はその尺度をもってこの場所の価値をどのように捉えたのか？

A: 安全が確保された開けた場所から自然を見ることができるということに価値を感じる。しかしながらこの尺度はこの場所の価値を議論する中で生まれたものなので、他の班に適用できるとは限らない。

Q: 安全・危険という概念は実際に自らが危険な目に遭って生まれた概念なのか、もしくは客観的判断から生まれた概念なのか

A: 自ら危険を感じたということではなく、客観的判断から生まれた

Q: 開けた場所は安全で他の場所は危険だという感覚は何故生まれたのか

A: 平面図から見ても明らかのように、開けた場所は草や木が少なく、その他の場所は草や木の密度が明らかに濃くなっているから。

Q: 自然か人工かというのは評価軸なのか？

A: 自然に対する苦手意識がある人は自然を悪いと判断し、逆の人はよいと判断する。これは知識や経験に含まれるのかもしれない。

# 7班

1日目 9/8(火) 14:00-18:30

## ●作業内容

領域の情報：杉がメインのエリア

ある人達は木の位置を測った。測り方はまず、x方向を測って、その後y方向を測るといった方法だった。また、幹の太さも適宜図っていた。また、ある人たちは植生について調べていた。この班は、草の種類の数といったように数にこだわって調べていた。

寮に帰ってきてからは、自分たちが感じたことを客観的な事実を書き出して、それを空間内の位置に対応するように模造紙に貼っていった。その後、発表。

## ●作業から得た現時点での方針や結論

(学生が感じたこと)人が作った自然と自然な自然の融合、人が作ったものに自然が絡みこむ→混沌した様子。杉同士の戦い

細い木：負けた杉の木、元気な広葉樹

もらった区画は植物が少ない

## ●教員からのコメント

- ・主観とか印象は人によって違う→それは常に同調なはずではないので、意見をぶつけあってください。(石田先生)
- ・ぱっと見て分からないけど、詳しく調べれば分かることをより深めていくことが大事(福島先生)
- ・意見の違いを整理すべき(石田先生)
- ・言葉だと上手く言えないけど絵だとわかりやすいこともあるので、積極的に図示するべき(福島先生)
- ・領域外と比べてみればよいのでは？中だけの価値を考える必要は決して無い。(中西先生)

↓

2日目 9/9(水) 9:00-9:30

## ●作業内容

昨日の結果から、今日はしたいことリストを作っていた。杉の位置を地図にした。

ポストイットに書いて情報共有を行った。(杉同士が縄張り争いをしている)

## ●作業から得た現時点での方針や結論

したいこと：高さに関する情報を測りたい。客観的な情報が多く、主観的な情報が足りていなかったなので、次は個人個人テーマを見出していきたいと考えている。

## ●教員からのコメント

- ・価値ってなんだろう(石田先生)
- ・エスキスで、人によって見方が違うって話があったが、次に行くときはどういうやり方で人々の主観を吸い出していくつもりなのか。行く前に問題意識をもつべき。(石田先生)
- ・印象や気付きの数はたくさんあるが、これは他の人にもできるのか→自分たちと得た気づきの関係性を考えても面白いのでは。気づきに気づけた背景を考えてみれば。ポストイットに書くときは情報を絞ってわかりやすくするのはいいのでは。(小松崎先生)
- ・杉の木をプロットして思ったことは？(菊池先生)→太い木、細い木は意外と細い木は細い木、太い木は太い木で固まっている。→それは日光のせいだと推論。→分布図から
- ・感覚と定量的なデータを比較してみれば(石田先生)

## ●その他

杉が多い、間伐をしていない、植物も少ない

↓

## 2日目 9/9(水) 11:00-12:00

### ●作業内容

目視で紐を水平に張った。その後レベルを用いて紐と地面の距離を測ることによって、高さを求めた。また、高さを経った部分の地面、空の写真を撮った。

↓

## 2日目 9/9(水) 夜 演習林藤原先生レクチャー

### ●質問と回答

- ・スギの林齢→スギ、ヒノキは30 - 50年くらい。
- ・杉林の間隔に粗密の差→もしかしたら植えた時点で変わってるのかも。或いはその後何回か間伐しているはずなので、競争に勝ってるやつを残していくので、強いやつが近くに残った可能性も。
- ・隙間のところに低木が。→スギのあとから。スギはきれいにしてから植える。田んぼも少し影があると収量があくつと下がる。スギを植える時も同じ。
- ・間伐の頻度は？→場所や育ち方にもよる。あの杉林の間伐は十分ではない。5年に1度くらいやってもいい。間伐はやりすぎて悪いことはない。10年に1回とか、15年に1回にしたりとか。一番最近いつだったかは分からない。調べてみる。切り株があれば分かるはず。切り株がなかったなら、少なくとも10年近くは間伐はしてないはず。
- ・あまり大きくなってないスギが、今後大きくなるのかの予測はできるのか。  
→スギは実データの蓄積があるので、成長予測が正確にできる。モデルがある。周りの木との密度が変わらなければそのまま。

↓

## 3日目 9/10(水) 9:00-12:00

### ●作業内容

平面図と断面図を書いた。これを20分の一縮尺で書き写したい。(途中)  
価値を話し合った。

### ●作業から得た現時点での方針や結論

価値の概念が出てきた。植林がされていて、特徴を知ることができるということが価値だと思っていた。それはどこにでも当てはまる。→自然の競争を知覚する、昔の体験を思い出せる  
知覚というのはその場所だからこそその知覚、  
6人が6人が異なる価値を持っていて、それをまとめるのは無理

### ●教員からのコメント

- ・異なる価値を持っているが、その部分を言語化してほしい、どのように違うのか等(石田先生)
- ・価値が異なるのは、生きてきた世界が違うからという風にバッサリ切ることはできるのか。そこはもう少し考えるべき。それを表に表してほしい(石田先生)
- ・最後の発表に至るものをつくるのではなく、それに至るためのプロセスが重要で(石田先生)
- ・まとめて構造化することがアウトプットになる。そのために、ぱっと出して構造化する必要がある。個々の意見を出して(柳沼先生)
- ・枠組みを考えることも大事だが、小さなことに共通項があるかも。ということはざっくりと言う前に、小さなことを客観的に評価すべき。違う背景といっても、東大来ているし、かなり偏った人たちなのだから、その小さな差異によってこの差異を生んでいるかもしれない。(福島先生)
- ・差異の部分だけ抽出して、見ると、意見の差異の原因が分かるかもしれない。(柳沼先生)
- ・全体的な方向性はOK。意外と、自分のことですら自分でわかっていないから、とりあえず、もっと出すべき(石田先生)
- ・主観的な部分のいいところは、そこから、より深い部分に入っていける。(福島先生)
- ・自分の考えが変わったこととかがこの森の価値と感じたが、それは違うのか→それももちろんある。ただ、それはこの場所だったからなのか、このメンバーだったからなのかなど、原因を考えるべき。よかったねの先に行くべき(福島先生)
- ・何を意識して表現するかによって、できてくる平面図、断面図も変わってくる(福島先生)
- ・上手く表現できないものを表現するためのツールとして、平面図、断面図を作っている(福島先生)

↓ (時間内に2回目のエスキス)

### ●作業から得た現時点での方針や結論

杉ごとの距離感を経ってみて、パーソナルスペースを調べてみると面白いかなと思った。

次の人は低木に注目してみた。まとまって生えていて、土壌内の栄養のことから、領域内で固まって生えたのではないかな。

誰かがツルを見ると切らないと行けないと思う。そのような背景とは異なる背景を持っている人と共有することに価値を見出した。

時間の流れを五感で感じたことに価値を感じた。

自分自身の成長というところに価値を感じた。最初何も感じなかったので、その後、スギの生体等を勉強して次の日行ったら、様々なことに気づいた。そうすると、見え変わってきた。

秩序があるようで、放置された無秩序を感じ、その混沌さが嫌だった。それを感じる理由はツタなのかな。ツタがスギに絡まって光を取っている。

### ●教員からのコメント

- ・空間の捉え方が異なるところに面白いかなと思った。教材、資源、擬人化 etc. (福島先生)
- ・擬人化できる条件ってなんだろう (福島先生)
- ・何として捉えて、評価してるのかは整理しよう。パラメーターが多すぎて、よくわからなくなっている (福島先生)
- ・まだ、その部分の固有性は出てきていない。(柳沼先生)
- ・この班は、森をアグレッシブに見ている。(中西先生)

↓

3日目 9/10(木) 14:00-16:00

### ●作業内容

自分たちで考えた価値について現地エスキスを通じて発表し、先生方に意見を頂いた。

エスキス後は平面図に書き下ろすときにどうやって木を描くか相談していた。→樹木は幹だけ書いて、樹冠の外側のラインだけ書くだけで表すことが出来る。スギの場合、樹冠は丸とは限らないので注意すべき(福島先生)

### ●作業から得た現時点での方針や結論

ある広葉樹は葉っぱが先っぽにしかついて居なかった。ある人はそれを敗者のようにとらえたが、ある人はそれは生存競争に勝つための戦略であると考えた。

全体的には倒木が多く、死を感じる空間となっている。

スギも等間隔に植えられているにも関わらず、場所によって太さが全然異なっている。

谷になっている部分はスギがなくなっていて、そこは穴のように空が見えており、その部分に背丈の低い広葉樹が元気に成長している。

ツルに関しては背の高いスギにのみ絡みつき、広葉樹より高い場所に葉を出すことによって戦略的に競争に勝とうとしている。

### ●教員からのコメント

・色々な植物が生えているので、その相互関係など学習教材としての役割、側面が十分にありそうな場所だと思う(石田先生)

・整理の仕方として、様々な植物の各々の状態(例えば、ツルはこう考えてスギに巻き付いている)を平行して動きみみたいな形で記述して、それが同じ場にあるからこれらが感じられるというふうにすることが上げられる。(福島先生)

・絵を描くことに熱中し過ぎない。絵は自分たちが何を見ているかの手段。写真を移すとの場合は、見てないのにそれがあるかのように書いてしまう。密度は上がるけど、何を言いたいかわからなくなる。きちんと書く対象物に対して意志を持つべき(福島先生)

・領域の内側と外側の比較も面白いと思う。(柳沼先生)

・下草が無いというのはどこと比較してか。(松丸先生)

・断面図は素直に書けば、後ろ側のレベルが上がっていくような図がかけるので、地面の様子も書き入れられる。(中西先生)

・手前の木に対比して、向こうに何を書けば、自分たちが言いたいことを伝わりやすいか考えるべき。これは寮では考えられないので。(福島先生)

↓

## 最終日 9/11(金) 最終発表(4グループに分かれてツアー形式)

### ●内村先生ツアー

#### ○プレゼン要約

- ・スギは常緑針葉樹でなじみのふかい木材。55年前に植林。その後手入れはされず、混沌とした感じ。
- ・グループでの価値の議論：対象物を見て、知覚して、そこに価値を見出すという段階。
- ・班員ごとに異なった価値観。

Ex. ①中山くん：スギが人間に例えられることの面白さ (Ex. 倒木が競争社会、資本主義社会) ②田代君：幼い頃の経験を思い出して懐かしい。③田口君：栄養分の多いところに植物が集まる→植物の生命力、工夫。④北川さん：時間の流れ、盛者必衰。⑤中嶋くん：人間の自然に対する勝手さ。植林したのに手入れをしない。秩序と無秩序の混沌。⑥瀬尾くん(発表者)：生態学について勉強しているうちに、見える景色が違ってきた。知識が増えると、着眼点が増える。植物では日光の取り合いが生態系の重要な決定因子。

- ・【断面図】高木→低木→低い草。ツタは針葉樹林にまき付き、広葉樹林よりも高いところで葉を伸ばして、日光を得ている。上層はスギ、下層は成長途中の木、さらにその下は雑草。
- ・【平面図】定点が二万個ほど。茶色の濃淡で土、緑の濃淡で草の密度を表現。うっそうとした感じを出すために全体的に黒でぬる。

#### ○ディスカッション

Q.6 通りの答え、価値観が出るのは当たり前だから、共通点を探してほしい。

→ A. (細い木のところに移動) たとえば、この木を見てどのような印象を受けるか。

→ Q. 細い、白い、斜め、雑魚そう、折れてる、など

→ A. 中嶋君は競争に負けた木といていたが、僕はうまく環境に適応していると感じる。呼吸でエネルギーを使うため、植物にとって葉っぱを生やすのはリスク。そのため日光の少ない場所では、日が比較的あたる先だけ葉をつけて、この環境を生き抜こうとしている。瀬尾と中嶋の人間性の違い。主観側で差異が生まれる。中嶋は競争的に、瀬尾は素直に見たい。それがどうしてそういう性格になったか、それまで考えたは考えた。けどどうしようもない。

Q. 資本主義のたとえ、なんでそれに気付いた？ そう思った？ 中山くんのバックグラウンドについて

→ A. 本を読むのが好きで、ものごとをたとえるのが好き。

Q. そぎおとされたやつは、他の人が共感していなかったから省いた？ マイノリティ？

→ A. 見出した価値から、着眼点を絞っていった流れ。

Q. エスキスではバックグラウンドの話をしていて、見出した価値はまとめるとか統合ではなく、こういう概念の表層としての価値、として捉えようとしているのかと思った。ちょっと時間がなかったのかも？

→ A. 最後どんどん広がって終わってしまった。

### ●石田先生ツアー

#### ○プレゼン要約

- ・杉林、56年前に植林、手入れなく放置されている。スギは成長が早くまっすぐ長く伸びるため、木材に利用。放置すると細い木と太い木に分かれ、細い木は間伐しなくても勝手に倒れる。

・【平面図】スギや落葉樹は、地面の様子を見せるために枝張りを小さめに書いている。全体を薄く黒くぬり、日のあたる部分がなくて暗い様子を表現。二万個くらい点をとった。茶色が土、黄緑がコケや草。手入れがなされておらず、混沌としている。道側のスギは、日の当たりがよいので、葉が成長。広葉樹はスギが減った間に生えてきた。

・【断面図】スギが多く並ぶ断面を選択。写実的ではなく、観察したものをかくというコンセプト。上層：スギの木は圧倒的に高いところに葉。はるか下の層(6-10m)：広葉樹の層。下：緑の小さな草、細かい枯れ枝。

・【断面図】スギについて、杉林の端、日差しのあたりやすい左側に枝がおおい。皮のはげたスギは、かつては立派だと思われるが、病気のため皮が赤くなっており、薄く表現した。ツタは、まっすぐ伸びるツタとぐるぐる伸びるツタがある。スギの高さを利用して広葉樹より上で日光を受ける。

・図については、観察したものを一つ一つ図に反映しようという意思で書いた。次に、そこからどのような価値を見出したか。

・僕(中山)：スギが人間に例えられる。倒木・資本主義、日当たりのいい場所：都心に集まる人のよう。とっぴだと捕らえる人も。僕はたとえ話がすき。

・僕(田代)：昔の経験を見つめなおすことができた。

・違いがどういふふうに生まれたかについて議論：経験とか性格によって、森を見る態度、知覚の仕方が違う。目で見ると足で踏むのとか。そこから生まれた価値も違うのだけれど、知覚の仕方も経験によって違う。それぞれに違った価値がある。それぞれの価値、要約できないものがある

## ○ディスカッション

Q. 中山君の資本主義、北川さんの盛者必衰、似ている部分もある。捉え方が違うのに、同じような結論に至る、他にもそういうのはあった？

→ A. この二つは一見似ている。でも大きく違う点。僕は何も価値が見いだせなくて、何とか擬人化にたどり着いたが、北川さんにとって擬人化は日常。あまり特殊なことではない。同じ結論でも、背景は全然違っている。なので二人の意見はまとめなかった。

Q. 変わっていく過程で、班内でどんな議論があったか。

→ A. まずポストイットで印象を並べる。最初の発表では、主観的に捕らえている人が少なかったので、主観的な感想を出し合おうという進め方に。主観的な感想を出し合ったときに、同じものを見ても感じるものは違ったと言うことに気づき、この枠組みに。

Q. 瀬尾の成長できたっていうのは？

→ A. 断面図で上を見上げてるのは瀬尾。ツタの伸び方など見て、帰って調べて成長できた、ということ

A. 着目したところ、もっといっぱいあったけど、共通したものをとりあげた。共通した着目点から、どのように違う価値を見出すかということを考えてかった。

## ●尾崎先生ツアー

### ○プレゼン要約

・56年前にスギの木 160本を植えた。間伐はあまりされず今に至る。ごちゃごちゃした印象。

・価値についての議論：「木などの客観的な事象→それを知覚する→それを受け止め、事象から影響をもらう」=それが価値。3つの段階を意識して議論を行った。

・班員の中で受け止め方が違い、6人分の価値があった。客観的事象のすりあわせを行ってみると、共通の事象を起点として、そこから異なる価値を見出していた。以下4つの共通の事象の説明。

・①倒木:あちこちに見られる。ここでは自然による太陽光の争いがある。その競争に負けたものが倒木。②スギの並び:植林のため直線状。③落ち葉:スギの落ち葉。地面が黒っぽい色をしているのが特徴④ツタ:スギの上のほうをみると、スギをつたっている。

・私は、かつて栄えたスギがツタにからまれて枯れる→「盛者必衰の理」を感じた。落ち葉と枝は踏むとパキパキという音。地面のやわらかさと、パキパキとした感覚、さらに光やにおいなども、五感で感じられる空間。時間の流れや盛者必衰の断りを五感で感じられることが、この空間の価値。

・僕の価値は、人間の自然に対する勝手さ。スギの整列は、自然に対して人間の手が入っていることの象徴。一方朽ちた枝やツタ、倒木などは人の手が入っていない。自然がつくった自然と、人間がつくった自然の対立。二日目に、人間の介入があることによる矛盾が起きているのではと考え始めた。それはツタだと思う。スギにしか巻いてない。スギという人間が植えたものによって日光が奪われているのは、この空間に生まれた矛盾のようなもの。人が植えたスギに対し、さらにその周りのツタが日光を奪うという矛盾を生まないために、人間は植えた林に対してツタを切る義務があると考えた。この空間の価値は、人間の自然に対する勝手さを強く感じられることだと考えた。

・なぜ同じものを見ているのに、知覚が異なり、価値が異なるのか？それはポスターには表せなかった。話し合ったときのポストイットに、一人ずつの価値、その周りに着眼点を貼り、共通する事象を結んだ。なぜ価値が異なるのか、差異を考えてみた。

・【断面図】知覚が異なるので、何を書きたいかが異なる。人によってかきたいものが変わっていて、それが凝縮された絵になったのでは。

・【平面図】一部整頓されているけど、引きでみるとまばら。スギはほっとくと細いやつと太いやつにわかれ、自然に淘汰される。光が当たらない谷になっている部分は、暗めに塗って影を表現した。広葉樹の下は影を濃くし、下草が生えてない空間を表現した。

## ○ディスカッション

Q. 感じた事が結ばれてるのが面白い。組み合わせの妙が生まれたりした？議論の中でそぎ落とされていたものはなかった？

→ A. 最初の頃、大きい広葉樹の周りに、細くなった広葉樹があることから、「広葉樹の敗者の地」と呼ぶ場所があったことや、同じスギでもツタがまいてるものもあれば、太くて一時はボスだったのが今は皮がはげている、初日に立っていたスギが2,3日目には倒れていたり。着眼した要素はたくさんあった。

→ Q. もっと体感ベースで、頭と身体的間隔のずれみたいなものを考えられるとよい。

Q. よく見る、場から情報を得るところがうまい。何か工夫を？

→ A. 下を見るのが好きな人、上を見るのが好きなところ、スギに詳しくなりたい人、皆見るところが違った。

Q. 瀬尾君は？

→ A. スギに関して文献を独自で調べていた。植物がいかに光を奪い合うか、いかにツタが巧みか。植物の構造、高さの層の中で植物が葉っぱを伸ばしてうまく生きているのが分かるようになった、という意味で成長できた、という価値を見出した。

Q. 現場を見る、ということについてはよく観察していて、うまく役割分担。一方、価値になったときに、つまこんでいたところが違うのが分かっていたのだとしたら、それを基に統合の仕方がもっとあったのでは。バラバラでいこうと言い切った経緯は？

→ A. 福島さんのエスキスで、人によって価値を生み出す上で、この場所を教材として利用するという話があった。例えば、故郷の思い出を投影したり、僕だったら現代社会への批判として見たり、この場所をどのように扱うかがそもそも違っていた。なので、統合せずに、違いなどを見たらいいんじゃないか、っていうことになった。

→ Q. そのバックグラウンドというか、この場所の見方が提示されるとより分かりやすかったのでは。

→ A. 軸をとったりして、見方によって分類すると、軸の中で評価されるんじゃないか、6個の個性が失われるんじゃないか。

→ Q. 軸ではなくて、この場所の見方とか、関係性とかで整理するとよい。

# 8班

1日目 9/8(火) 17:30-18:30

---

## ●作業内容

エリアをロープで3×3に分けて調査→平面図に起こす前に小さい紙に書きこむ。

植物の特徴(木の高さH,M,Lに3分類)を捉え、その種類を調べる。

主観的な感想は班員がwordにまとめる。

## ●作業から得た現時点での方針や結論

種類に興味を持ったわけではなく、機械的・客観的にすべての情報を集めようとしている。

(担当エリアに対してどのような感想・イメージを持ったか?という質問に対して…)

○視覚的には汚い、というイメージ。雑多な雰囲気。いろんなものがあったり、木々の方向が揃ってなかったり…。

○食べ物の袋のゴミが落ちていた→人工的なものは自然に馴染まないと感じた。また、人の手が加わったところは雑多なイメージがある。一方で、自然のままの箇所は、空間を埋めるように植物が生えている気がする。(彭)

## ●教員からのコメント

・もっと主観でまとめてよい。(内村)

・今日は雨だったから虫が少なかった。めくってみると、何か見つかるかも。(マエムラ)

↓

2日目 9/9(水) 8:30-10:30

---

## ●作業内容

個々人が、エリア内の細かい特徴をポストイットで書きこむ(植物の特徴、斜面・道など…)。

## ●作業から得た現時点での方針や結論

空間・植物でポストイットを色分け。そこからブレインストーミングでイメージを膨らませたい(が、なかなか煮詰まった議論にならない様子…)。

全体的にごちゃごちゃしたイメージがあるが、ここからどのような価値を見出せるかがまだ分からない。

## ●教員からのコメント

・もしも主観が思いつかなかったら、1つのポストイットから自分が連想するアイデアや印象を思い付きで足していき、後で、実際に現地調査で受けた印象との差を比較してみてもどうか?(森川先生)

・プラスの評価をつける必要はない。マイナスの価値を持つと思うならそれでもいいのでは?マイナスのものにこそ惹かれる人もいるはず。(小松崎先生)

・主体が違えば、これまでの人生も違うので、感想も変わってくるはず。時系列で印象が変わってくることもある。(尾崎先生)

↓

2日目 9/9(水) 13:00-18:00

---

## ●作業内容

断面図の直線の決定。

## ●作業から得た現時点での方針や結論

昨日と印象が違う。断面図も昨晚のものから変更。

↓

## 2日目 9/9(水)夜 演習林藤原先生レクチャー

### ●質問と回答

- ・丸太が切っておかれていたが、何かに利用されているのか。  
→特に無い。2-3年前の台風で多く木が倒れて、その分の空間が空いた。切り株がある場所に、木が育っていたのを想像してみるとよい。
- ・他の季節はこの森はどういう感じになるのか。  
→秋はものすごく紅葉がきれい。アカマツは真っ黄色に。ツタウルシも綺麗に赤く紅葉。(でも落ち葉でもかぶれる)春も葉っぱが出る前に小さな花が咲いて綺麗。冬は朝マイナス20度。地面が凍る。雪は降らない。富士山が綺麗に見える。
- ・ツル系の植物が見えたが、手入れとかは。  
→すぎやひのきはツルをできるだけ早く落とすべき。(光を受ける量を守るため)しかしここでは追いついてない。
- ・この山の土壌は全部同じ？  
→この山のベースが全て同じなので、基本的には同じ。スコリヤという宝永噴火の時の放出物の軽石が多くつもっている。その上に有機物がつもって、まざっている。

↓

## 3日目 9/10(水) 9:30-12:00

### ●作業内容

個々でエッセイを書いて回し読み。A4の2枚にまとめて発表。

### ●作業から得た現時点での方針や結論

「価値」…構造の面白さ。エリア内は動線が限られていて、ところどころに展示品がある。  
倒木によって新たな空間が生まれ、そこに光が差ししてくることで新たな生命が芽吹いてくる。  
1日目と2日目で差があったのは、草木がにょきにょきと伸びていた点。森が未完成で成長しているのを感じさせてくれるのも価値。  
メンバーのエッセイを回し読みした時に「森の中の家」という言葉があったため、構造の面白さという価値を挙げた。  
自然に対する畏怖の念、自然=コントロールできないもの(彭)  
細々としたポイントに目が行きやすい(五嶋)

### ●教員からのコメント

- ・個々がどのような感想を持ったのかが、発表から見えてこない。(菊池先生)
- ・この場所の最も愛すべきポイントとは？(尾崎先生)→倒木の巨大な根っこ(彭)
- ・初日の悪い印象から、急に「美しい」「きれい」という印象になるのがおかしい、飛躍している？(マエムラ先生)
- ・みんな結構違う印象やなかなか共感しづらい感想を持っていて、それをメンバー間で合わせようとしていないが面白いところだと思う。(菊池先生)
- ・バラバラなままでもいいのではないか？お互いに違っているところを共有・議論できていないのではないか？(森川先生・内村先生)
- ・マイクロな空間の構造が全然違って、構造化されていないから、テーマはむしろ「非構造の面白さ」なのではないか？(尾崎先生)
- ・声の大きい人の意見だけで集約する必要は無し(森川先生)別に根っこに引っ張られる必要はない(菊池先生)

↓

## 3日目 9/10(木) 15:30-16:30

### ●作業内容

5人とも異なるポイントに興味を持っていることを現地で確認。結論…  
このエリアに価値があると思う派：3人  
このエリアに価値がないと思う派：2人  
に分かれた。

## ●作業から得た現時点での方針や結論

(彭、価値があると思う派) 倒木の根を見て、ずばり「アート」だと思った。垂れ下がった枝がフレームのようになっており、真ん中の根っこがドームのようにどんと構えている(→生きていたはずの木の悲しい経歴が見えてくる)。晴れて光が当たるとスポットライトのようになり、神聖な感じになる。「美的価値」があると思う。(→「美的感覚」というのは人間の感覚)

(竹島、価値がないと思う派) 自分にとっては光の要素が重要。光に当たるのが好きなので、上にスペースが空いているところは、光が差し込んでいい場所だと思う。水滴が光るのも良い。コケが面白い形をしていると思う。天気や時間帯によって、良いなと思ったり、そうでもないなと思ったりする。

(祖父江、価値があると思う派) 家の間取りみたいだと思っていたが、そうでもないかもしれないと思い始めている。奥の傾斜の部分は開けており、童心に帰って遊べそうな空間。自分が小学生の頃に遊んだ遊具を連想させるため。大人が思いつかないような遊び方をする子供が、楽しめそうな場所。

(五嶋、価値があると思う派) ずんずん進むのが楽しい、見たことのないものを見るのも好き。写真を撮るのが好きで、コケやツルなど、普段の都会生活で見てこなかったものに目が行きやすい。

(田中、価値がないと思う派) 個人的に空を見るのが好きで、開放感を求めている。このエリアはぐちゃぐちゃしていて、曇りの日だと閉塞感を感じる。

## ●教員からのコメント

- ・(→彭)「アート」という言葉が危ない。同じ光景を見て共感してくれる人もいるが、してくれない人もいるだろう。
- ・形容詞だけでこのエリアを表現するのではなく、「動詞」(このエリアで何ができるのか)を用いるのも一つの手だと思う。
- ・今回の演習の目的として、シビルエンジニアとして他の人に理解してもらえようような説明をする、というのもある。(森川先生)
- ・各自で感じたことを深めてもらって、何かしら工夫をしてプレゼンをしないといけない(菊池先生)

## ●夜中の作業

模造紙に5人それぞれがキーワードとそのフローチャート(連想図?)を書き込む。5人に共通する部分を抽出して別の模造紙にまとめ直す。

↓

## 最終日 9/11(金) 最終発表(4グループに分かれてツアー形式)

### ●内村先生ツアー

#### ○プレゼン要約

- ・(まず敷地内を歩く) 真ん中の大きな倒木。上を見ると葉っぱが空いている。枯れ木も縦横、密度が高く、ごちゃごちゃした印象。ツタにぶら下がってみたり、遊んだりした。
- ・【作業図】この場所の価値を考えたら、5人違う結果。なぜ違いが?→価値観を要素に分解し、分析。同じ要素でも違う印象を感じていた。→連想できるかできないか、互いに判断しあった。→なぜ連想ができる人とできない人がいるのか?→繁みで遊んだ経験など、個人の経験による。  
→5つのやつをまとめないと、と思った結果、全員に共通する項目、一つだけあった=倒木  
→倒木を中心に価値を連想、つながりを引いてみた。すると、全員の要素が導き出せた。
- ・自分の価値観を人に対して説明せよという問いに対して、そう思った理由を説明するということだと思った。この場所は、倒木があって、そこからそれぞれいろんなことを感じて、その結果、自分の価値観ができたという結論。班としてまとまった価値観はつくれなかった。
- ・ぼく個人の発表:この風景に美的価値。二本の棒と枝=フレーム。倒木の上は開かれていてスポットライトのよう。右下には倒木の丸太、さらに土の塊の上には植物。死の上の生という対比。美しいと感じた=美的価値。なぜそう思ったのか?→うっそうとした自然の中の構造物に価値を感じる。最近いった美術館で、自然を切り取ってバランスよくものを配置するというものに美しさを感じた経験から。
- ・次の発表者:最初に来たときは、丸太や根っこ、枝がつんであり、ゴミ捨て場という印象。森に入る経験なし→入るのは避けたいという気持ちに。斜面のため道側から見ると障害物が多く、入りたくないが、奥から見ると開けている。一日目はどしゃぶりで下しか見ておらず、価値なんてあるのかと思ったが、2日目は晴れていて、上を見る余裕。倒木のまわりが開けている。青空を見るのが好きなので、森の中なのに解放感がある=安心感、それが価値。

## ○ディスカッション

Q. 原因を考察したところまではすごくいい。そこから生まれたもの、その先は？

→ A. 経験をしたから連想ができる。経験を増やせば人に共感できることが増えるともいえる。

Q. キーワードは？一言でいうと？倒木はもの。価値は？

→ A. 個々人違って、皆の共通となったキーワードは。。開けた空間っていうのは、大きいかも。アプローチの仕方が違って、そこから同じ形容詞はなかなか出なかった。

Q. 倒木がなければ、全員が感じている価値は生まれえなかった？

→ A. 少なくとも僕はそう思う。倒れなければ開けた空間や風景は生まれなかった。

Q. 倒木が倒れる、遊び場を生み出しているツタや木を生み出している背景のメカニズムの話をしていくと、モノの話だけじゃなくなっていくかも。森のサイクルとか、そういうレベルの話にしていければ。

→ A. 森のサイクルっていう点では、死と生というキーワードは出ていた。

→ Q. 言葉としてというよりも、印象を受けた状況をつくっている、もっと大きい背景、それがあからいような表象が出てきて、そこからいろんなものを感じた、っていうまとめ方もできたかも。個々人がばらばらに感じているものを、チームで議論できたかも。

## ●石田先生ツアー

### ○プレゼン要約

・倒木が一番印象的。土がめくれてもってかれてる。

・同じものを見ても、ばらばらの価値を見出して、あえてそれをまとめることはせずに、なぜそのような価値を見出したかという要素の分析をした。

・僕の価値：倒木の土の塊に植物、木が生えている→生命の力。雨上がりは水滴が光る。周りはあたらない。天に向かって植物が伸びている力強さ。逆に曇りのときはこの場所は来る価値がない。開けた空間で、光があるのとないで印象が全く違う。自分の価値基準として、光がすごく大事。

・ぼうくんのお気に入りの場所：先端で二つに分かれている木が堂々としていい。左右の木とツタをフレームとして、絵画的なもの、美的価値、美しいという価値。

・中を回って楽しむという視点：多少人の手が入ることで開けた空間ができる。丸太などの障害物で、ルートが見つげにくいのが逆に面白い。斜面に立って初めて、中に何があるか分かる。探究心をくすぐる、遊び場。林道は視界が開けているが、暗い。森の中を歩いていると、急に開けて、明るい。開放的なところが森の中にあるのは嬉しい。歩いてみると、導線が制限され、ルートが決まっていた、その先に開けた空間がある。→家の間取りにみたてる人も。(そぶえ)

・倒木：おどろおどろしい。これだけ大きな木が倒れることの力強さ。

・【平面図】単純に何かあるかを表した。導線。何日か歩いてみて、いろんなルートが実は開拓できる。いろんな遊び場について、そぶえが豊かな発想をしていた。

・【断面図】それぞれが価値を見出した場所をたくさん入れようという観点で選定。根っこに立ってみたり、丸太に立ったりツタにぶらさがったり、遊び心をくすぐる空間。

・【作業用シート】バラバラだったので、要素を抽出しないと、と作成→この空間を構成しているのは倒木。倒木が倒れたことで光が差したり、導線が変わったり。要素は同じだけど、皆ばらばらなものを感じて、違う価値を見出している。一つの価値としてまとめずに、こういう形で、分析を行った。

## ○ディスカッション

Q. 敷地に来て、人口的なもの＝車が通る道路が見えたり、丸太がつんであったり。そこに何か議論はあった？

→ A. 初日、この敷地は汚い、中途半端な人工物という印象。晴れてみるとその印象が変わった。道路については、道路があることで市街地とつながっているという安心感を得られるというのが、僕の感想。

Q. 知覚した情報と、そこから生まれた何か、と整理したんだと思うけど、よく分からない。要点は？

→ A. 自分が見出した価値を中心において、それを見出した原因を連想。線を種類でやってしまったのはよくなかった。原因、連想などの関係が区別できないから。自分が出した要素が他の人のところにもあったら印をつけた。全員に共通するものがあたら、それが重要な要素(＝倒木)。今度は逆に、その要素を中心において、そこから自分が見出した価値はどのように引き出されてきたのか、ということを考えて、線をひいた。そのせいで誘導が無理やりになった部分も。要素が足りなかったのかな。

Q. 6人全員の価値観、わりと似ている。遊び心がわく空間というのが共通点？

→ A. それぞれが見出した価値に納得はしたんだけど、理解はしてない部分もある。美的価値とか。理解をしてもらうために、要素を出していった。

## ●尾崎先生ツアー

### ○プレゼン要約

- ・5人の中での意見を統一に至らなかった。今回の発表は、それぞれの5つの価値と、その差を生み出したのはどういうものか、共通して抽出したキーワードと、最後に個人的な話を。
- ・【作業図】これが僕たちの班の状況を表している。まずみんなが選んだ価値を書いた。
- ・Ex. ぼう：風景の美的価値。二本の木と枝で、フレームに。光の当たり具合。生と死の対比。班長：ぼうとは違う方向から見て、光の当たり具合、土の根っこ。このみん：時間サイズのスケールの大きさ。田中：倒木が倒れたことによってできた空間、解放感。僕：子供の遊び場としての価値。
- ・なぜバラバラ？→森に対して免疫があるかどうか。森を観賞用と捉えるか、中に入って触れるものか。僕は個人的に小学校のころ、森にわけいって遊んでいた。→遊び場という価値。
- ・共通だと思った要素に点を。→5人ともに揃った要素は倒木。→倒木と、それによって開けた空間ができる。という二つから、主張だったり連想だったりを引っ張った。→同じ風景を見てはいて、その中心に倒木がある。でもそこから言っている価値観は違う、っていうのが分かった。
- ・僕の価値について：【平面図】木の根っこが目立つため、敷地の後ろの方に注意はいかないが、実は開けている。中の方に行くと、倒木によって開けた空間が出てくる。繁みと開けた空間という相反するものがあることで、開けた空間と開けた空間を行き来するという行為が生まれる。
- ・本当は沢山のルート。隙間、抜け道みたい→子供たちが遊ぶ際に、森特有の遊びができる。=自然特有の遊び=ブランコのように最初から役割が決まっていな。雑然といろんなものがあるって、自分が自由に役割を与えることができる。この敷地が単純な森と違うのは、枝がまとめられているなど実際はある程度手入れがされている点と、倒木により明るい空間がある点。

### ○ディスカッション

- Q. 人のスケールちゃんを書ければよかったね。もったいない。
- A. そうですね。子供なのかな？
- Q. 人の大きさがスケール感覚を得るので、そこを間違えてしまうともったいない。
- Q. 敷地を見てみたい。
- (全員で敷地をまわる、中心の倒木へ) A. もともとあの太い木の隣にあった細い木も一緒に倒れてて、ただ細い木は生きてる。根についた土もかなりの量なので、そこから2, 3本新しい木が生えてるっていうのが今の根っこの状況。裏から見るとその根の様子がよくわかる。蜘蛛が巣をはり、そこに雨粒がつくのが綺麗。いろんな要素があって発見がある。後ろのベリーは班員が食べたが味はまずい。
- Q. 最も根っこにくいついたのは？
- A. ぼうと班長(たけしま)。手前の道から見る、光のあたっている姿や、雨粒のついた蜘蛛の巣がキラキラしていいと言っていた。今は晴れだけど、天気が変わると神聖な雰囲気にも。雨が降ってた時の全員の印象は最悪だった。晴れてみると、空が開けて居たり、ツルがあったり。雨だどうしても下をみる。この場所の印象は天気の影響をうける。どういった天気での場所に出会うか。
- Q. 年齢の話が初めて出てきた。人間のライフステージによって価値が変わるという着眼点も面白いかも。どうして子供だとそういう価値を感じるのか、子供と大人の価値の差とか、そういうのも考えてみてほしい。

## ●小松崎先生ツアー

### ○プレゼン要約

- ・外から見たらしげっていて、土の塊があり、入りづらいが、中には開けた場所も。要素がすごく多い。
- ・皆いろんなところを見て、意見がバラバラ。最初は一個の方向にまとめようとしたが、バラバラなのを活かそうということで議論を進めることに。
- ・【作業図】それぞれが感じたことをかき、自分が感じた価値を要素に分解。→お互いに見て、分かる/わからない、共通点を見た。共通点が少なすぎて、唯一かぶったのが真ん中の大きい倒木。根に土がからまったまま倒れた。→1人は光が差したときの様子がいいとか、1人は突然、「これは芸術作品だ」といったり、他の人は、ここは家に見える、とか、曇ったら価値がない、と言いつく人もいた。私は倒れている木に草などが生えていることから、時間の流れを感じられるのに価値を感じた。
- ・なんで見方が分かれているのか？→なぜそう思ったのか聞いて行った→それぞれの経験に、皆が感じる価値に基づいているということが分かった。

- ・自分で見出した価値、5人それぞれで、まとまりはしなかった。互いに説明したことで、自分の価値の枠組みや、それにどうして至ったかということ＝自分の背景をお互い共有できるように。自分の知らない価値観を知れた。
- ・私の感じた価値：自然にくることがないので、見るものが全て新鮮。時間の流れを感じられるのが価値。自然は人間より長い時間を生きているので、自分が生きていない時間も感じられる。

## ○ディスカッション

- Q. 厳しいことという、メッセージがなかった。根っこが価値じゃなくて、根っこが何かの価値につながる、っていうことをもっと早い段階で発見するべきだったというのが反省点かな。
- Q. 班として一つのものにいたろうとする努力はあったはず。こういう風にまとめたプロセスは？
- A. 要素をかきだしたのも、バラバラな中で共通項を探そうとして始めた。本当倒木しかそろわなくて、考え方の違いがどうして生まれてるのか、どこが理解できないかも掘り下げたけど、今までの経験とか好きなことから皆違う方向に引っ張られていて、自分の経験によって、同じところから、全然違う印象を受けるっていうところで止まってしまって、そこからいけなくなってしまった。
- Q. エスキスではどういう議論が？
- Q (教員) . 合意はどうでもいいが、なぜ違うのか、理解までは行ってほしかった。
- A. 説明してもらったら、考え方までは理解できた
- Q. 美術館行ったからとか、浅い。深く行き過ぎて迷子になって、戻る時間がなかったのかな。
- Q. 概念化を上位にすればするほど、哲学的になって、現実に戻ってこないことも良くある。アナロジーをやるときの概念化は、上位の概念 (Ex. 安全) ではなくて、中レベルの概念化をするからアナロジーが使える。適切なレベルの概念化っていうのが、研究でも一緒に、細かくてもだめだし、上すぎてもだめだし。その概念化の感覚っていうのを、これから学んでくれればいいかな。
- Q. 平面図割りとすき。これでいうと、一番左の人とかがよくわからない。もったいない。なにやってる？
- A. 外から見てたい、という人。開けたところにいたい。ごちゃごちゃしたところが嫌い。
- Q. 外から見ると楽しい、という雰囲気が出るとよい。中に入りたくないという感じが出てる。

## 9 班

1 日目 9/8(火) 13:00-17:00

---

### ●作業内容

とりあえず目立つものの測量

↓

1 日目 9/8(火) 17:30-18:30

---

### ●作業内容

与えられた範囲を見て各自が感じたことを post it に書き出す

### ●教員からのコメント

- ・現在の段階で断面図を書くとするばどこにするかを質問
- ・(良い、悪いではないが)木にコメントが集中している、もう少し他のものに視野を広げるのも良いかも  
→測る時に木に注目した結果?
- ・断面の広さを変えていったらいつまで木が残るのかを考えるのは面白いかも

↓

2 日目 9/9(水) 9:30-10:30

---

### ●作業内容

人の手が入っていないことにどういった意味があるのかを議論  
地形

### ●作業から得た現時点での方針や結論

地形と起伏の関係を調べる  
全体から見たときにこの場所がどのような意味を持っているのかを考える

### ●教員からのコメント

- ・価値を考えるのに、他の場所との違いから考えるだけでなく(=相対的な価値)絶対的な価値から考えるのも良い  
→昨日木にばかり注目されていることを指摘されたことを受け、その他の要素にも注目しようとした結果、他との比較から考えるという方針になった
- ・場に出ている情報が少ない、ないのであれば出す工夫が必要だし、あるのであればそれを共有しよう

↓

2 日目 9/9(水) 夜 演習林藤原先生レクチャー

---

### ●質問と回答

- ・道を通す場所を選んだ理由と、道が通る前はどうか。  
→地形は変えていない。砂防ダムがあることと、地形の広がりを見ると、雪代(富士山の周辺で多い、雪解け時の土石流、雪崩)なんかを通る道だったんじゃないか。
- ・道が作られたのは何年くらいか。  
→演習林開設当初から道が通っていた記録はある。この辺に東屋があったという絵はある。本当にあったのか、計画図だったのかは分からない。
- ・50cmくらいの木と、15cmくらいの木がある場所。どういう要因で。  
→小さな高さのままというの基本的には不自然。人が刈っているか、日照が足りないか、動物が食べているか、などの要因が考えられるけど、場所による。現場を見ないとなんとも。
- ・ほった時に、土の硬さが全然違った。人が通らないところでも違うのはなぜ。  
→土も移動していないわけじゃない。傾斜地だと、スコリヤが溜まっていない場所がもしかしたらあるのかも。

- ・丸太がおいてあった。
- 歩道上で危ないなと思った木は切る。

↓

3 日目 9/10(水) 9:00-10:30

### ●作業内容

人間にとっての価値  
安心感、居心地の良さ、  
地形、気候、植生、道  
夜の人間にとっての価値  
不安感、  
雨の時の人間にとっての価値  
雨から守る、歩きやすい  
動物にとって  
植生や苔がある  
森全体にとって

### ●教員からのコメント

- ・安心感とは？  
→見通し、植生、水 etc… の居心地の良さ的な安心感
- ・ここで言う安心感とは居心地の良さを示すものであり、安心感という言葉遣いは不適切？正しくは居心地の良さ？
- ・人が集まるのは演習林の区画の一部であるから集まるのではないか、もし山中湖村全体を見たらどうなのか
- ・特徴としてあの箇所独特なものとはそうではないものに分けて考えられると良い
- ・特徴としてリストアップしている事項は全員の共通事項として挙げているが、個々の違いが出てくる段階まで突き詰めてその違いがどこにあるのかを考えると良い
- ・マズローの階層欲求(食、外敵から守る安心、人とのつながり、人に認められる、自己実現の5段階)で考えると、この場所に出てきた要素をそれに従って分類できるのでは。
- ・もしくはKJ法を使っても良いのでは。
- ・議論の軸の置き方の根拠が弱い。なぜそこに軸をセットしたのかを説明できるようにすることが重要。

↓

3 日目 9/10(水) 14:00-16:00

### ●作業内容

視点が人からのものに偏っているので、森全体から見てという部分に拡張してみた。「安心感」にスポットを当てて議論

- ①人の靴の裏についたもの等が運ばれてきて植物の多様性を生み出している
- ②来る人は都会から自然を楽しみに来ている人が多い。その人たちにとってはある程度道が整備されているが自然も残っていて、バランスのとれた人工と自然の調和ができている。

### ●教員からのコメント

- ・視点を森に広げるのは良いが、時間的に大丈夫か
- ・元の路線で話すのであれば、居心地について議論するのはどうか
- ・この区間で最も居心地の良さを感じるのはどこか、それが断面にも表れるのではないか  
→道、谷を入れたくてこの断面にした
- ・地形の特徴やそこに存在するモノと居心地の良さを結び付けられるようになれば良いかも
- ・落ち着きの原因を深く探れていない
- ・まとめ
- ・色々なタイムスケールがこの場で感じられる。少し長いスケールでは地形や道が変化しているし、短いスケールでは雨水が早くなくなっている等

↓

### ●石田先生ツアー

#### ○プレゼン要約

この場所の客観的特徴として様々な種類の木があること、森の一番奥にあるが故にたどり着くまでの道のりが長いこと、谷地形であること、目や腰の高さの下草がなく鬱陶しく感じる下草がないことをリストアップした。その上でこの場所に対して感じた第一印象を整理した。第一印象は2つのパターンに分けられ、それぞれこの区画を道の途中として捉えているものと、この区画を目的地として捉えているものである。休憩地点として捉える人は登山など自然と触れ合う経験が豊富な人が多く、目的地として捉える人は自然を見て自分の内面を振り返ることが好きな人が多かった。この区画の価値とは、第一印象においてこの場所を休憩地点と捉えるか目的地と捉えるかによって、自分と自然との関わり方やその背景について学ぶことができた点にある。

#### ○ディスカッション

Q: 断面図と平面図のポイントは?

A: 平面図は木と道に焦点を当て、それら位置をしっかりと書いた。特に木については木の多様性がわかるように描いた。

断面図は人を道に置き、生きている木、死んでいる木、若い木を見ている様子を入れた。

Q: 個人的に地形が特徴的であると感じたが、班の中で知見に対する議論はあったのか?

A: 谷地形であるので区画全体が目の高さにきて見やすく、外から守られているように感じるためこの場所で休憩したいと思うと考えた。

### ●内村先生ツアー

#### ○プレゼン要約

この区画の価値を考える上でのキーワードは「居心地」。この区画で作業をしていると、道のあるところに自然と人が集まる。3メートルくらいの谷地形であること、道が通っていること、雑草が少ないこと、背丈の高い草がないことから居心地の良さを感じるのが要因だろう。次に、この区画全体において居心地の良さを感じる要因を議論した。その要因は大きく2つに分けられ、この区画を折り返し地点として捉えているためというものと、この区画を目的地として捉えているものである。前者を主張した人は山歩きなどが得意で自然に慣れているという背景を持った人、後者はそうでない人である。また、この区画に対して初日に抱いた感想と最終日に抱いた感想は違いがあり、それは時間変化によって個人の自然に対する見方が変わったことを示す。このように個人の背景や経験によって自然の見え方が変わることがわかるというのがこの場所の価値である。

#### ○ディスカッション

Q: 谷地形というのは逃げにくく非常に危険なものというように考えることもできるが、そのような議論はあったのか

A: 夜における価値を考えただけで、谷地形であることは逆に恐怖になりうるという話をした。

Q: この場所の価値として居心地の良さ意外に出たのか

A: 谷地形であるにもかかわらず水はけが良いということなどが挙げられた

Q: 今にも落ちそうな木の枝があるが、そのような無秩序な自然に対してどう考えるかという話はあったのか

A: 今にも崩壊しそうな木があるが、その木が道のすぐ傍にあったら居心地が悪くなるのではないかと話があった。

C: 折り返し地点としての居心地の良さ考えている人は、森の中自体の居心地が悪いが故に安心するという話に聞こえる。森の中=居心地が悪いということが前提となっているのではないかと。

### ●尾崎先生ツアー

#### ○プレゼン要約

この場所を目的地として価値を見出している人と、通過地点として価値を見出している人の2つのパターンに分けられた。目的地として見ている人の意見では、この場所には倒木、若い木、成熟した木、丸太など様々な木が存在し時間の経過がよく見て取れるというものや、谷地形であるが故に区画全体の見渡しが良いというものなどが挙げられた。通過地点としての価値観を見出している人は、コケが広がっていて座りやすいことや休むのに適度な広さがあることから思わず立ち止まりたくなるという意見や、演習林の折り返し地点まで到達したため安心感が生まれるという意見などを挙げた。断面図は倒木や新しい木など様々な樹齢の木が共存している様子と、道に人がいる様子を描いた。

## ○ディスカッション

Q: この場所の価値をもう少しわかりやすく説明してほしい

A: 人それぞれであると思う。個人的には思わず休憩したくなるような場所であるということ。人によってはここを目的地と考え、色々な木々が共存しているここで非日常的な時間を味わえることに価値を見出す人もいる。

Q: 各個人の価値とその背景を示してほしい

A: 道を歩く人にとってはこの土地を通過地点としてみる人が多く、そうでない人は目的地として見る人が多い。どちらにも共通して言えるのは、この場所を居心地の良い場所として感じているということ。

## ●小松崎先生ツアー

### ○プレゼン要約

このエリアの価値として、目的地としての価値と通過地点としての価値を挙げた。平面図、断面図を描き上げる際に木ばかりに注目していたが、道やその他の要素にも注目するようにした。第一印象として居心地が良いということが挙げたが、それをもう少し深めるため、この場所に対する直感的な印象とその印象を作り上げる客観的事実について話した。直感的印象では自然になじみのある人となない人で意見が分かれ、前者はこの土地を「思わず立ち止まりたくなる価値」があると考え、後者は「自然との融和」がみられるという価値があると考えた。客観的事実では地形的な条件、水はけ、植生に関する話を考察した。

### ○ディスカッション

Q: 通過地点と目的地の違いを明確にしてほしい

A: 通過地点とは歩いてきた人にとって一度立ち止まりたくなる場所ということであり、目的地とはその名の通りである。

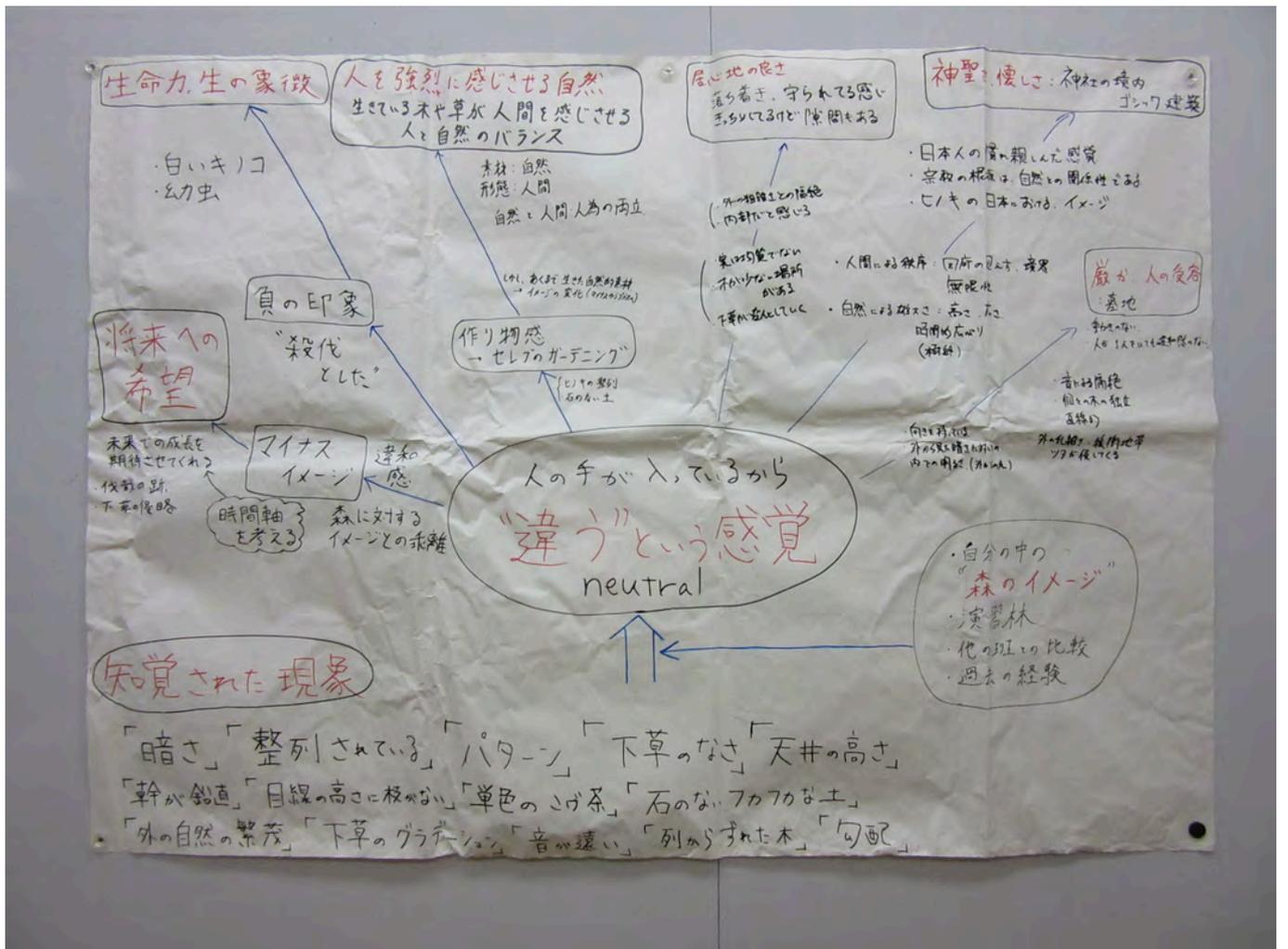
Q: ポスターにある自然との融和と目的地とのつながりについて教えてほしい

A: ここに来ることが目的というよりは、目的を持ってここに来るのが正しい。

C: 上位の概念として挙げている通過地点、目的地点の部分と思わず立ち止まりたくなる、居心地の良さ、自然との融和のつながりがやや不明瞭になってしまいもったいない。断面図についてもプレゼンで言いたい内容が網羅されているとは言いがたく、ややもったいない。



# 最終成果物



1 班ポスター

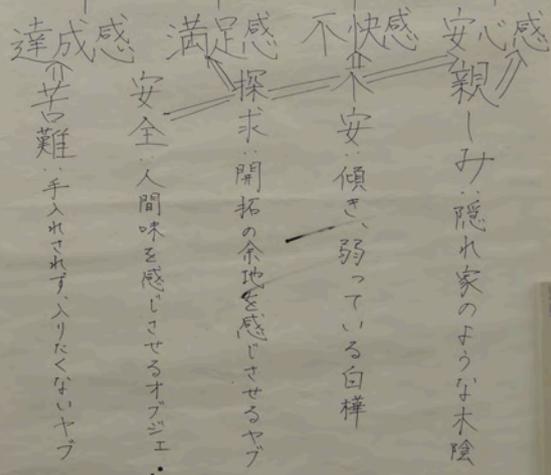


I 班 断面图



1班 平面图

# 冒険心の誘発



ヤブ オブジェ 白樺 木陰 チクチク村

2班 ポスター



2班 断面图



2班平面图

# より快適な森林空間の創出に向けて

3班: 山川 和藤 長津 森本 山本 猪苗代



## 1. 第一印象

## 2. 空間分析 (平面図参照)

- ・知らず知らずのうちに重心に帰ってしまうような、子供が作ったような雰囲気
- ・明らかに人工的に作られた、しかし自然に溶け込んでいるベンチ
- ・不自然な割り方をした、意図の読めない木の幹
- ・踏んだ感触が気持ちいい
- ・物理的な意味で境界があると同時に、自然と人工物の境界であることを暗示しているかのよう
- ・他の区画に比べて明るい印象を受ける

## 3. 考察

### ① 統一性のなさ

森の区画の雑多に統一性が配置されている

- (青) 無造作な配置はまるで子供の机を基地のようであり、重心と呼び起こされる。
- (赤) 不自然な乱雑さは、何を意図して設計したのかが明確でなく、違和感を感じる。

### ② 自然と人工物の共存

自然と人工物と分らない曖昧さの割合が多く混在している。

- (青) 林という自然の中に、人の手がのこった空間があることで安心を感じる。
- (赤) 自然に中途半端に人の手がのこれている状態を物足りなく感じている。

### ③ 明るく開けているが不陸である

木の深数は少ないが、葉が茂ることで、明るく開けた場所であるが、木陰の多い場所となっている。

- (青) うっそうとした林の中に開けた空間があることで開放感や安心感を感じる。
- (赤) 特になし。

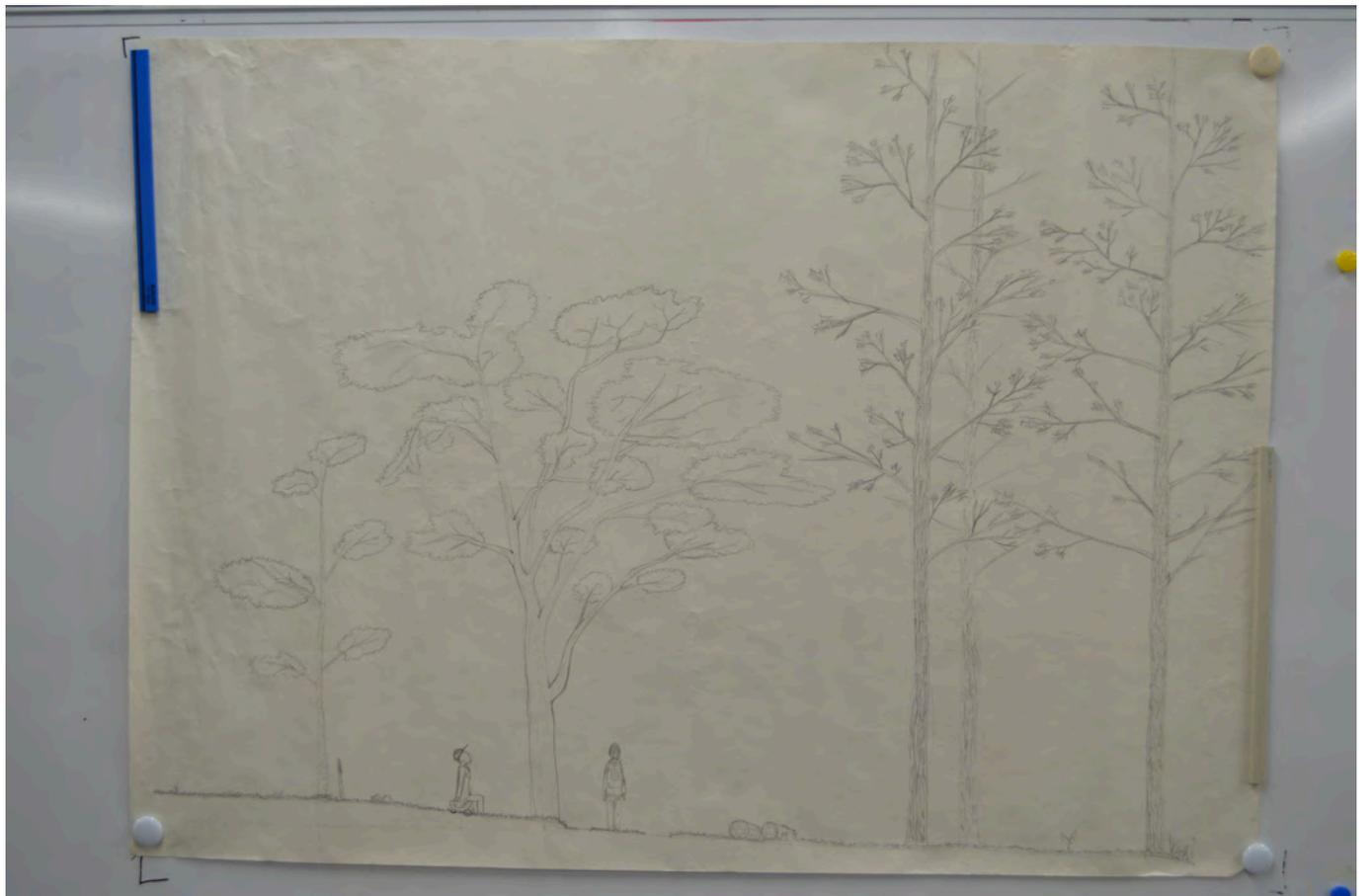
## 4. この区画の価値

この領域については考察で示したように肯定的、否定的な捉え方がある。

しかしこれはこの森林空間の当初の作成意図から乖離していると考えられる。

このような事例は、今後より快適な森林空間を創出するための貴重なサンプルとなるであろう。

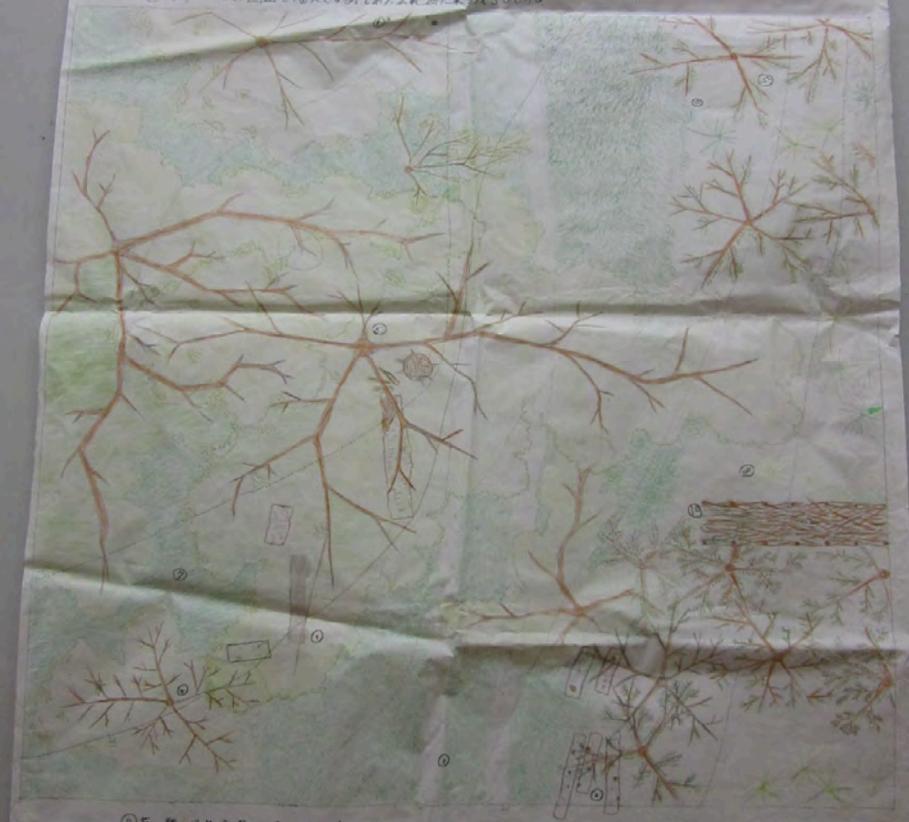
## 3班 ポスター



3班 断面图

## 2. 要素の列挙

- ① N-N 森に混在しているが、1つだけ人工的なものがある
- ② 凡木 6でかい樹種は、その位置で植えている
- ③ 道 工場の中央から分岐している
- ④ 17 植樹された木
- ⑤ 177 等間隔に植樹されているが、この空間は又別の場所がある
- ⑥ 27 この広場で1番大きな樹をとりまわすように植えている



- ① 5 路の中心部を占める大部分は占める。
- ② 雑草 路の中心部を占める大部分は占める。
- ③ 植 明の中心部を占める大部分は占める。
- ④ 11 植 植の中心部を占める大部分は占める。
- ⑤ 植 植の中心部を占める大部分は占める。

3 班 平面図

# 重層的な対比

4班

## ○ First Impression

生死 追憶  
安心 心地良い  
親しみ  
きれい

共通項  
比較・コントラスト  
による顕在化・明示される

## ◎ 感情と事実

安心 ← 木の影から覗く日光 暗がりから太陽に覗く

生死 ← 葉や草木の茂りの違い、丸太

親しみ ← 丸太の足込み具合、明-暗、密-疎

きれい ← スポットライトのような明暗の対比

## ◎ 対比の論理構造



試験場がある ⇒ 狭いエリアに多様な木バリエーションを形成 (= 特異性)

4班 ポスター



4 班 断面图



4班 平面图

# 5班 死とその先 ~草木と私~

芳賀・相・宋・佐藤・武藤・沢津橋

第一印象: 雑然・入りにくい

倒木 = 「死」

サイクル

新しめの倒木 → 古めの倒木  
 ↓  
 大木 ← 小さな木

一人ひとりの萌えポイント

- ① ゆたかりとした高木のゆれ → いやし
- ② 目線を下ろしたときの木々の近さ
- ③ 台風で幹の折れた木
- ④ 倒木 → 星野道夫「森へ」
- ⑤ 倒木の根や枝のダイナミックさ
- ⑥ 倒木の切り株

## ・ちんすの木 ~ 死の現場 ~

台風により新たに折れたのは本筋の幹。分かれた細い枝のほうが残った。本筋の幹はすでに弱っており容赦なく切り捨てられていた。自然の厳しい合理性。

## ・倒木 ~ 死後 ~

大木は数年~数十年かけて土に還り若い草木やきのこたちの糧となる。自然界は狭い範囲で循環しているようだ。

## ・大木 ~ 力強い生 ~

直径50cm余の大木。ただ材齢は若く、かつての生物が蓄積した栄養源ともいえる腐葉土から養分を摂取し、今でも成長し続けている。

気付き・昇華

前提: 木の背景  
 (自然・人間との距離性)

## 【我々と草木の死に様と生き様】

### ・生の目的

草木: 種の生存・繁栄

プログラムされたようなもの

我々: 必ずしも種の繁栄を重視しない

倫理観 その他の価値観

・死の後(次世代への引き継ぎ)

草木: 他生物種の量

木全体の生存に貢献

我々: 死後を見据え意識的に

生前に次世代に貢献を継承

## 我々にとっての価値

木と向き合う経験がなかった私たちが  
 木にのめり込む体験を通じて

我々の生き方について考えることができた。

5班 ポスター



5班 断面图



5班 平面図

Team 6 Nature

川崎 西村 中川  
信夫 瀧澤 亮平

～自然と対峙した4日間の～  
物語

丸太

- 整って切りかたの丸太
- 直線 (モノ)
- 横たわっている

丸太 = 人工の象徴

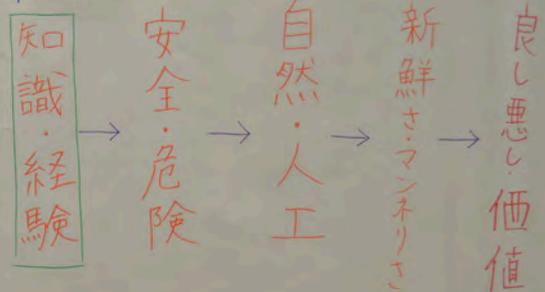
- 安心感 (完全な野生的空間ではない)
  - 自然と人工
- 人工と自然のコントラストにより自然が強調される - 自然と人工

開けた場所

- 草少い
- 視界が広い
- 班員が集まる場所

- 草むらに入りにくい - 快不快
- 危険なものからの距離があるため安心感 - 安全と危険

価値構造



キーワード 自然と人工

- つる
- ねじれている
  - 曲線
  - 三次元的な形

- 曲線と木の幹 (直線) との対比 - 重なり
- 予想と異なるとの形状 - 非日常

キーワード 安全と危険

シカの痕跡

- 普段接することがない - 非日常性
- クマ等と比べると安全 - 安全と危険

キーワード 新鮮さとマンネリさ

キーワード 新鮮さとマンネリさ

領域の価値

自然に近づくには安全を確保したい。  
 その上でなるべく自然に近づきたい。  
 そういった経験は日常では味わえない新鮮なものがある。  
 この領域のオーパスはそこから満たし、  
 そこに立つとその場が視点場 - 自然が対象場となる。  
 必雨の日には、野性的空間の性質が弱まると  
 それらの境界が薄くなる。

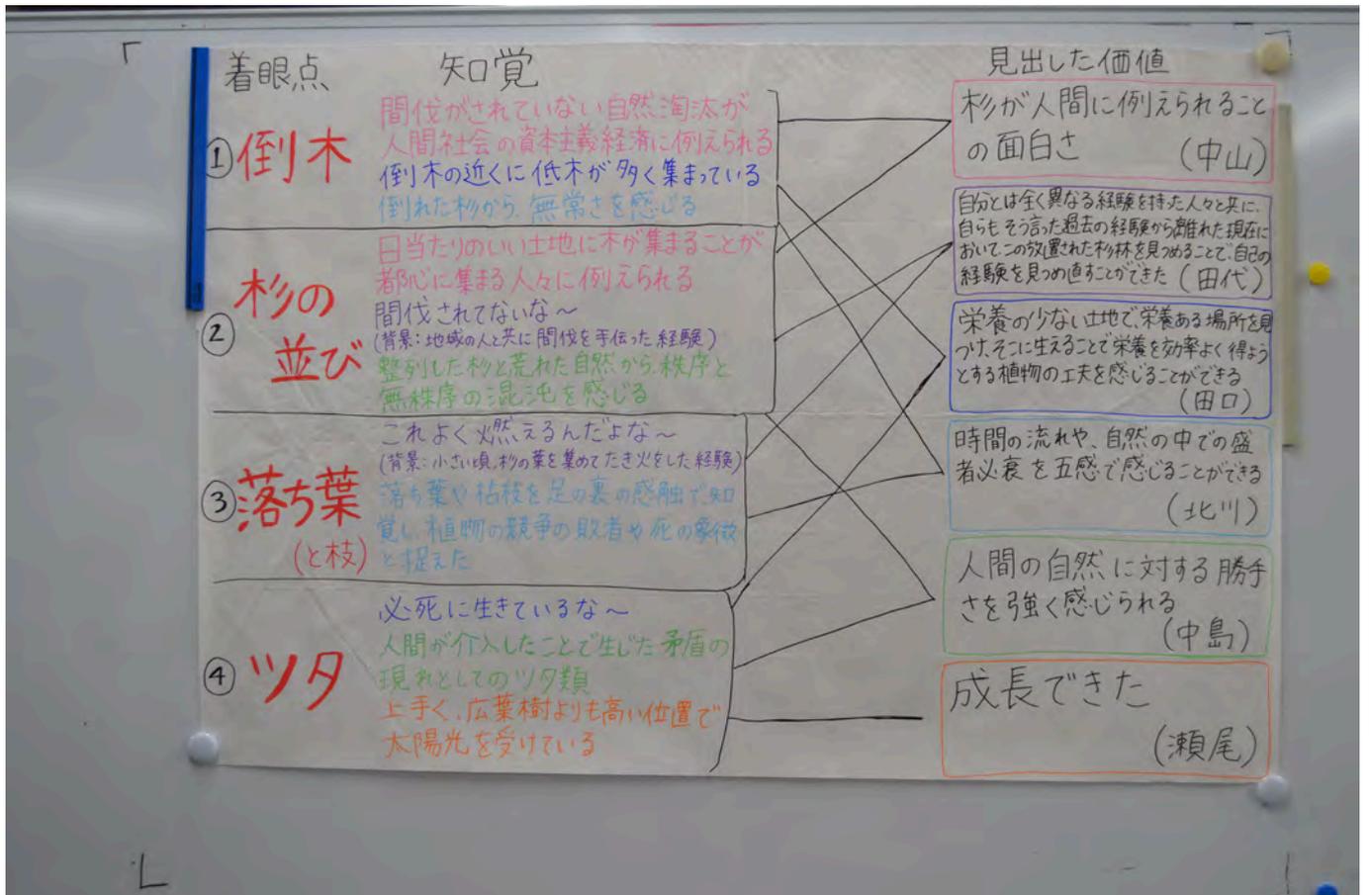
6班 ポスター



6 班 断面图



6班 平面图



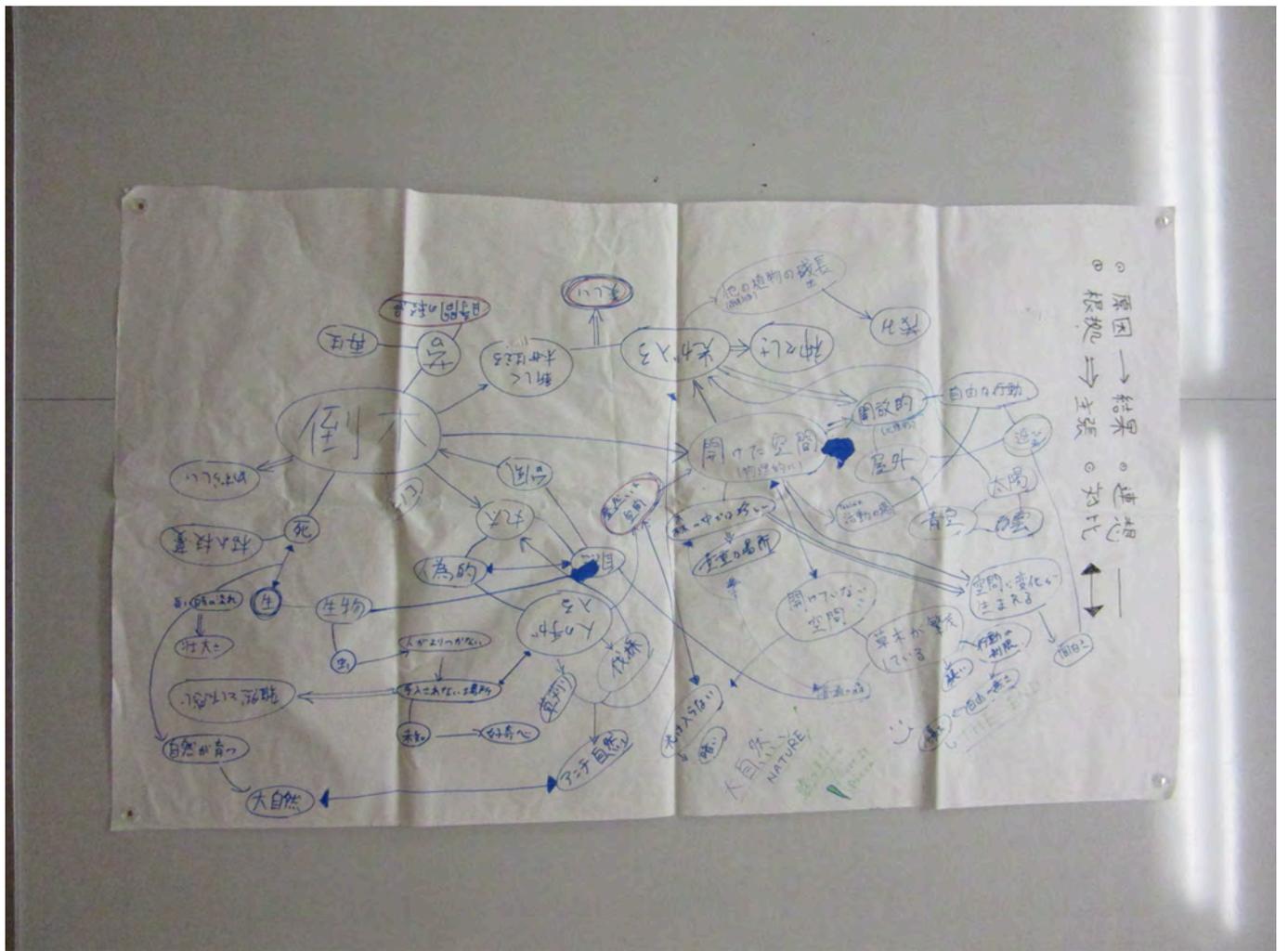
7班 ポスター



7 班 断面图



7班 平面图



8班 ポスター



8 班 断面图



8班平面图



9班 ポスター



9班 断面图



9班 平面图



# 個人レポート

---

1 班	安富佳菜子
2 班	佐藤樹、嵐田涼子
3 班	加藤孝典、山本高久
4 班	大原勇
5 班	柏貴裕、芳賀泰平
6 班	川崎広樹、中川恵
7 班	北川まどか
8 班	田中裕一郎、竹島滉
9 班	田口遼

## レポート課題

4日間全体の取り組みや講評会の内容をふまえ、課題にどのように挑んだか、あなたが何をどう考えたかを、振り返り時の班内での情報共有もふまえてまとめる。特に、演習期間を通じた各自の意見の変化、班員間での意見の一致や相違、それらがグループ発表へ与えた影響などに着目する。

## 0 取りまとめの方針

このレポートでは、時系列に沿って、4回の現地踏査(発表含む)を区切りとして取りまとめることにする。

最終日にあった先生方の講評の中で、森川先生の他の班で時系列を追って、自分たちの考えがどのように変化していったかをまとめることも大事というお話があった。違う経緯を持った他の班への講評だったので、そのまま当てはめられるわけでもないが、考えの変化やその変化の他の班員の意見との影響を考えるには時系列に沿った方がまとめやすいだろうと考えてこのまとめ方をすることにする。しかし読みにくくなってしまいそうな点が心配である…。

### 1-1 初日の踏査と感想、初回の意見交換

初日の踏査では、敷地内を歩き回って観察したところ、ヒノキが格子状に並んでいることに注目が向かい、とりあえず平面図作成に向けて木の位置を正確に測定するためにグリッドに分けることにした。

寮に帰ってから、まず収集したデータをもとに完成品より小さなスケールで平面図をかき木があった位置を書き入れると、整然とずっと並んでいるように見えていたヒノキの列の中でも、ぽっかり開いたスポットがあることに気がついた。また、同じ図をみて案外木の数が少ないということに注目した人もいた。区画は全部数えると100区画以上あるが、木の数は60本ほどだった。

エスキスを受けて、測定結果のまとめは少しあとに置き、はじめの印象を忘れないうちに話し合うことになった。敷地をみて回ったとき以外はほぼ位置の把握・測定に重きをおいていたため若干難しくも思えたが、第一印象を大事に話し合った。私が第一印象としてあげたのは、「暗い」「なんとなく空間に向きがある気がする、敷地内部の空間の方向性(光の方向とグラデーション、ぽっかり開いた空間の向き)」「外を意識させられることによる内側感(外の明るさなど)」等だった。一つ目は、外から入っていったときの印象で、それまで見てきた演習林の他の地域よりも暗く、あまり初めに良い印象を受けなかったことがこのような言葉になった。二つ目は、下草の生えている量が敷地を斜めに切るような向きでだんだんに増えて行くこと、増えていった先が敷地内で一番明るいことや、平面図に現れた木の少ないスポットがその斜めの方向に長い形をしていることから感じられる敷地のもつ方向性に関して書いたものである。三つ目は、ヒノキ林の外と中で明るさが違い、中の空間が内側の空間であると感じられることであった。内側だと感じられるもうひとつの原因は、ヒノキの整列がさながら柱か壁のようで、室内空間にいるかのようであったことにあると思う。

この結果をそれぞれ発表して班で話し合い、付箋には話し合っただけの追加と、他の人から気になった点の書き込みを行った。その時にはそれぞれ個人にペンの色を割りふった。私の出した意見には「空間の方向性」を感じさせる要因として地形の勾配も追加することになった。均質なヒノキの広がり、斜めの方向に変化していく勾配、下草の対比の様子が面白いのではないかという話になった。あとから気がついたことだが、この段階では皆第一印象をあげるつもりでも印象とその原因がいっしょくたに付箋に書かれていた。

1日目の最後に話し合った上で印象をひとことで付箋に書くことにすると、「時間がたったら愛着湧きそう」であった。これは裏を返せばいまのところそこまで価値を感じられていないことをなんとなく思っていたらこういう表現になった。

## 1-2 班内意見共有 (6 枚のふせん) と二日目午前のエスキス

二日目に、前日体調不良で現地には行ったが話し合いに参加出来なかった赤松も参加し、彼の第一印象も新たに聴いて振り返りつつ共有をした。また 6 人が挙げた印象について似通ったもの同士を集めるなどして分類を行った。さらに、それぞれ一番ここが価値だ！と思う点を選び出すことにした。

私が書いたトピックは「居心地の良さ」だった。初日には安直に聞こえる気がしてこのような言い回しは使わなかったのだが、「内側であると感じる」ことを価値として言い表せる言葉を探して結局この言葉を選んだ。実は、このとき一番気にかかっていたのはこの点ではなく「空間の方向性」だったのだが、それは面白いが価値と呼べるのかという疑問が拭えず、また自分の気持ちを探っても心から良いと思っているという感じがしなかったので、より身体的な感覚で良いと思える居心地のよさをピックアップした。

「居心地の良さ」の根拠として考えられることは、もともと「内側だと感じる」ことの根拠になっていたことが主だった。まっすぐで枝の無いヒノキが並んでいることによって、柱や壁があるように感じられ、それがあたかも室内であるかのようなこと。ヒノキ林の外側を内側から見ると明るいこと。また木が無い空間によってできたスポットが、班員の誰かと話をしようとするときに集まりやすい場所となっていることも根拠だと考えた。

これらを班員と共有すると、居心地が良いという言葉以外に、他の人のあげた「墓地のよう、一人でいてもおかしくない場所」という意見を聞いて共通項を感じた。私の感じた居心地の良さをそれをもとに言い換えるなら、「ここにいても良いと受容された感覚」を覚えたのだろうと思った。また、話し合いの中ではこの森が人工を感じさせるという話になり、私の意見に対しても「人の手を感じるからこそ感じた居心地の良さもあるのではないか」という意見ももらった。この話し合いを受けて、私の感じていることを言い表すには「落ち着く感じ」の方が適切かもしれないとも迷った。

このように各々が一番感じる価値をあげて集まった 6 枚の付箋を持って初エスキスに行った。エスキス中に他の人の意見を聞いていて、自分の感じていることが薄っぺらい気がして来てしまった……。そのときは理由が明確に言葉にできなかったのだが、おそらく自分が五感にもとづいて感じる直感的なところに留まっていて、他の人の意見（宗教的？神社のよう、墓地のよう）がより高次元だと思ったからだと思う。

6 人分の意見を述べての先生方の評価は

- ・面白い
- ・予測をしていたのと少し違う
- ・ばらばらで意見がまとまっていないというが、そうではないように見える
- ・それは「自然に対する（人間の）距離感」をテーマとしていること

褒められたのは、感じたことへの根拠付をなるべくきちんとするように試みたことだった。

この段階では、先に述べたように初回の踏査（しかも測定中心だった）だけをもとに話し合っていたため、自分で受けた森への印象に自信がなくなってきていた。話し合いによりイメージが形成されすぎていた気がする感覚は、他の班員も持っていたようで、とにかくもう一度森に行きたいという意見と、自分たちの今の意見をもう少し構造化しておきたいという旨の意見があった。

## 2-1 二度目の踏査と現地エスキス

やっぱりイメージは形成され過ぎていたと感じた。また、初日の雨の中の踏査に対し晴れていたため森全体が明るく光が外から差し込んでくる印象が強まった。また、風が吹いていたため、周囲の森からは風によって揺れる葉の音がよく聞こえてきたのに対し、ヒノキ林は近くに葉がないためほとんど音がしなかった。実はヒノキも上を見上げると風によく揺られているのが見えるのだが、広葉樹の大きい葉に比べてさわさわという音はたちにくく、やはりヒノキ林の中だけが静けさに包まれており内側であるという感覚が強まった。

また、断面図を書くために勾配の測定も行った。

## 2-2 それを踏まえての議論

寮に帰り、今までの議論を今回の印象を加えて更新しながら話し合いを行った。自分たちの意見それぞれで、人の手の加わった部分と生命とを対比して捉えたひとや、柱のような空間として人との関わりを考える意見があった。(この段階の議論は体調が悪かったためか記憶が曖昧です・・・)

## 3-1 三度目の踏査とそれによる意見変化

断面図や平面図に落とし込む情報を選ぶことを意識して区域へ入った。外との違いを描くためにヒノキの隣の明るい広葉樹林をよく見たり、くるみのあった場所を確認したりした。

## 3-2 それを踏まえての作業、議論

最終的なプレゼン資料を作る段になり、私たちの感じているのは「(何かとの)違和感」という言葉に代表されるのではないかと考えて、それを中心に据えてまとめることにした。図の下の方には観測できる事実、そこから私たちが受けた「違う」という感覚が自分の中の自然のイメージや演習林の他の部分との比較によって生まれ、それぞれの価値観に基づいて図の上の方で6方向に派生して行くと考えた。

## 4-1 発表に対してのリアクション、フィードバックとそれを受けて得た気づき

一人が発表した方が内容がよく伝わるだろうと話し合ってもうひとりの班員にプレゼンをお願いしたので少し恐縮だが、プレゼント質問を経ると、思ったより私たちの伝えたい内容が伝わらなかったような気がした。

### 質問・コメント内容

- ・ニュートラルとは？
- ・班員のそれぞれの価値についての質問
- ・班員それぞれが区域を自然として捉えているけれど、人間が木を採る場とも言えるのではないか(小松崎先生)
- ・お前の自然を問い直せ(中井先生)

結局西洋の自然観に囚われてはいないか、自ずから然り、として考えると？

- ・班員の性質の違いをもっと説明せよ(図の上の法をもっと構造化するべきだったのではないか)
- ・「違う」とは何と違うなのか
- ・まとめる努力をせよ
- ・森に対するイメージはみな一緒なのか
- ・「違う」という感覚は6人全員で共有されたのか
- ・セレブのガーデニング・・・？
- ・(松丸先生講評)つぶさに対象を観察した点が良い。図にも工夫が見られた。それらと価値の関連の説明がもっとあると良かった

そのひとつの原因として、プレゼン資料でいう図の上の方、それぞれの価値観を派生させた部分がただの列挙に近い説明に留まってしまい伝わりにくかったということがある。価値観についてもっと掘り下げて構造化することができればもっと面白い内容になったのではないかと自分でも思った。

価値について、ひとつにまとめる努力をせよと言われることに対しては反発を感じた。価値観がひとつにまとめられていた他班の区域に行った場合でも、私たちの意見は6本の矢印が出ることになったのだろうか、と考えるとやはり6本に分岐した気がする。構造化が出来ていれば、それに反論するのに十分だったのではないだろうか。

また、プレゼン技術として「何と」違うのかを図上に明示すべきだった、矢印の使い方がわかりにくい、図の説明をもっと出来るとよい、などの指摘ももらった。

勢いがあるのでそのまま図を書けば良い、とエスキスでは言われたが、十分私たちの伝えたいことを理解した先生たちの反応であるということを考えれば、その点を口頭で十分私たちが説明できるはず、という前提でのアドバイスだったのだから、口頭説明をもっと(短時間で)できる工夫をしておけば良かったかもしれない。

#### 4-3 レポートを書いたのきづき

ここまでレポートを書いて演習を振り返ってみると、私たちの最初の踏査後の初日～二日目午前の話し合いが基礎になっており、少しその後の伸びが薄いようにも感じられる。成果物の作成と上手く両立出来なかったのだが、やはりプレゼンを受けて指摘された通りそれぞれの感じた価値について比較や共通点のまとめを行って構造化して発表に望めたら良かったと思う。その点で、進み具合などに関して、客観的に自分たちの立ち位置を評価する姿勢が薄かったと思う。また、それはスケジュール管理の甘さにつながっていたような気がする。

先学期基礎プロIでお世話 TA の B4 の先輩などを見ていて、グループワークの見通しやスケジュール管理をすごく考えられることをすごいなあと思っていたのだが、今回は、自分たちの考察が順序よく目標がある程度見えて進め勧められたため、少し見えたような気がする。最近演習の授業でよく感じることだが、プレゼンの資料の形にアウトプットするには時間がかかる。今回は時間がなかったため、ポスターの完成度によらず、伝えたいことを伝えられるように準備をする時間をスケジュールの中に取り込むべきだったと思う。

#### 5 演習全体についての意見、感想

石田先生から好評の際にフィールド演習の今までの変遷についてのお話があったが、今回の課題は、今までになくこれからもなかなか考える機会のなさそうな課題でとても興味深い課題だったのであまり変えないでほしいと思ってしまった。

はじめのエスキスで先生方からの良い反応を頂いたという単純な動機もあるのだが、今回の課題に意欲的に取り組めたと思う。個人的に細かい発見はレポート内容にそぐわないので割愛するが、この先自分が物事に対してどう取り組んで行きたいか考えるきっかけになった貴重な経験となったと思っている。

そのあと学科の人と話していて、他班の発表の感想を話し合う機会があった。そのとき話題になったのが、五感で感じた身体体験よりも、森を眺めて受け取り、頭で考えて得られた感覚を述べる人の方が多いということだった。別に良い悪いの問題ではないのだが、身体体験のもつ説得力に勝てないような気がしてしまう。これ自体が自分の価値観によるのだとは思いますが・・・。

また余談だが、この4日間森林について考えていたことに触発されて、演習後に森林のことに多く触れられている本を再読したところ違った角度から本を読めて面白かった。恩田陸の「黒と茶の幻想」という本で、壮年の男女4人が屋久島(と思われる島)の森を歩きおしゃべりしながら自分の過去を回想してゆく物語なのだが、森が色々な意味を持って主人公たちの心情を映す様子が描かれている。おすすめ(?)です。

私たち2班はシラカバが生えているエリアを担当した。初日に抱いた印象を二日目に記述したファイルがあるので、ここに紹介しておく。

私が思うこの場所の価値としては、少年のころのようなわくわくした心、好奇心、冒険心のようなものを掻き立てる点があります。人の心に何らかの影響を及ぼすものは価値があると考えています。

私たちがこの結論に至ったのは、初日に帰ってきたとき、疲れたにも関わらず何故か班員全員が「楽しかった」「なんか子供のころのようだった」というように、ポジティブな感想を口にしたことがきっかけです。では、なぜこのエリアが私たちの冒険心、好奇心を掻き立てたのかを、このエリアの面白さを、これから説明していこうと思います。

さて、皆さんはこのエリアを最初に見たとき何を思いますか？おそらく、シラカバの群生が目につくか、もしくはこの奇怪なオブジェとベンチが気になるでしょう。私たちもそうでした。これによって好奇心によって引き寄せられ、気づかぬうちにこの道路に面する場所がこのエリアの入り口となります。入ってからしばらくは、オブジェや穴が気になるでしょう。

そのあと、かならず斜め方向へと自然と意識が向きます。これはベンチの向きも影響しているかもしれませんが、生い茂る木の方向が気になるからだと思います。これによってゴールはある程度人にはよりますが、エリアのスタートとゴールが決まります。

いざ進んでいく段階となると、ここで私たちのエリアの特異性が見えます。ここの最大の特徴は、シラカバではありません。生い茂る草木によって向こうが見通せないということです。

先に見えるトンネルより、見えないトンネルのほうが好奇心が掻き立てられるように、見えないからこそ、進んでいきたい気持ちが芽生えるのです。

実際に私たちは雨の影響もあってか最初は全くこの場所の全容を把握できず、広大なジャングルを目の前にしているかのような印象を受けました。そこで一度宿舎に戻り、杭を用いて現場を区画分けして把握していこうと考えました。そして私たちは雨の中背の高い草をかき分け、道を作り互いの姿が見えない中大声を出しながら作業を行いました。区画分けによって、座標化され初めてこのエリアの全貌が見え始めました。宿舎に帰ると(中途半端なところで終わっている。)

フィールド演習のレポートを書く形式として、時系列順に追っていくのが一番だと思われるので、初期、中期、終盤に分けて時系列順に書いていこうと思う。

## 目次

### ① 初期

まず、私たちが与えられた土地の説明であるが、これは先生方も訪れているのである土地かという概要の説明は省略する。

初め、この土地を訪れたときは雨のせいもあってか土地の全容が全くつかめなかったため、一度宿舎に戻った。宿舎で、与えられた正方形の土地に  $x, y$  座標を敷くことを決め、便宜的に角を座標  $(0, 0)$  として呼ぶことに決めた。

(反対側の角は  $(20, 20)$  となる。)そして現地に戻り、杭を  $x$  も  $y$  もともに5の倍数となる座標に打っていき、便宜的に土地を16区画に分け、土地の把握をしようと務めた。



Figure 1 写真撮影の様子

この作業が思ったよりも大変で、大雨の中邪魔な草木をなぎ倒しながら森の中を進んでいくかのような有様であった。お互いの姿が見えないことも多く、大声で互いの位置を確認しながらの作業となった。このとき巻き尺は借りられなかったため、高さの測量用のスタッフを用いて5mを測っていった。杭を打ったあとにはそれぞれの杭の位置の原点  $(0, 0)$  を基準とした標高、16個に分けたそれぞれの区画の写真の撮影を行った。この困難な測量?の経験が、最終的に我々が見出した価値に大きな影響を与えた。

宿舎に帰ってきて以降、私たちが話し合いの時口々に言いあったのは「妙に達成感があった。」「意外と楽しかったような気がする。」「探検している気分だった。」ということだった。区画に分けて撮った写真を平面図に落とし込んでいく作業を行ったり、各個人で初日の感想をレポート風に書いて見せ合ったりして、情報の共有をおこなった。

最初のエスキスに至るまで、私たちは暗闇の中を進んでいるような感じがしていた。価値というのは、ただそこを通りかかっただけの人にとっての普遍的な価値なのか、私たちがそこで調査し、熟考したうえで見出した価値なのかわからなかったからである。つまり、「茂みの中に入ると意外と面白いと思う。」「あそこを通っても誰も茂みに入ろうと思わないでしょ。」というように、藪の中に入って行って初めて感じられることはその場所の価値なのか?そもそも入ろうと思わないのだから価値は無いのではないか?という議論がなされていたのだ。もちろん「自分が見つけた価値」と冊子には書いてあったが、その辺りの曖昧さは残っていたのである。

最初のエスキスでは、班内では共有されていた「ダンジョン感」や「冒険心」という言葉を中心に発表をした。このダンジョン感というのは、一般的なRPGゲームに出てくるダンジョンのことで、先のわからない入り組んだ道を宝箱などを探しながら進んでいく場所のことを指している。班員はRPGが好きな人が多かったため、この言葉は非常にわかりやすい共有の言葉となった。また、この時点で『価値の定義』の意見を出していたのはおそらく私だけで、その定義は『人間の感情をなんらかの形で動かすものには価値がある』というものだ。つまり、「ちょっと休みたい。」「向こうはどうなってるんだろう。」「怖い。」など、人間の関心を引き起こしたり、感情を与えれば価値があるという定義の仕方である。個人的にこの定義はかなりの的を得ていると感じていたのだが、あまり班員の共感は得られなかったようである。エスキスで先生方にいただいた言葉は、「ダンジョンとはなんだ?」「君たちの言いたいことはいまいち伝わってこない。」「体系化しろ。」などといった言葉であった。正直ダンジョンを知らないのは単なるジェネレーションギャップだと思うのだが、それ以外の部分は確かに事実であった。私たちは言いたいことを全然伝えられていなかった、そこに入ったこともない人に伝えるような説明をしていなかったのだ。しかしながらそれよりも私にとっては重要だったのは、このエスキスで「そのエリアのオタクになったつもりで良さを伝えればいい。」と聞いたことである。暗闇から抜けた感じがした。道路から見たらそもそも藪に入ろうと思わないだろうというような議論は必要なくなり、我々が藪の中を動き回った上で感じたことを発表すればいいとはっきり分かったのである。

## ② 中期

一回目のエスキスから、三日目の夜までの話を中期とする。

エスキスのあと、私たちはどういった説明なら私たちが「ダンジョン感」と呼んだものを説明できるだろうかという議論を行った。結論から言うと、「冒険心」という言葉になった。

背の高い草で先の見えないワクワク感、見えなかったところにある空間や植物を見つけた時の感覚などからそう考えたのである。そして、この方針で良いか確認のために二回目のエスキスに向かっていった。エスキスで言われたことは、「ちゃんと説明しろ」ということであった。私たちはまだきちんとした説明を用意してはいなかったのである。構造化するなりして、わかりやすい説明をする必要があるとわかった。ここで「冒険心」を押して

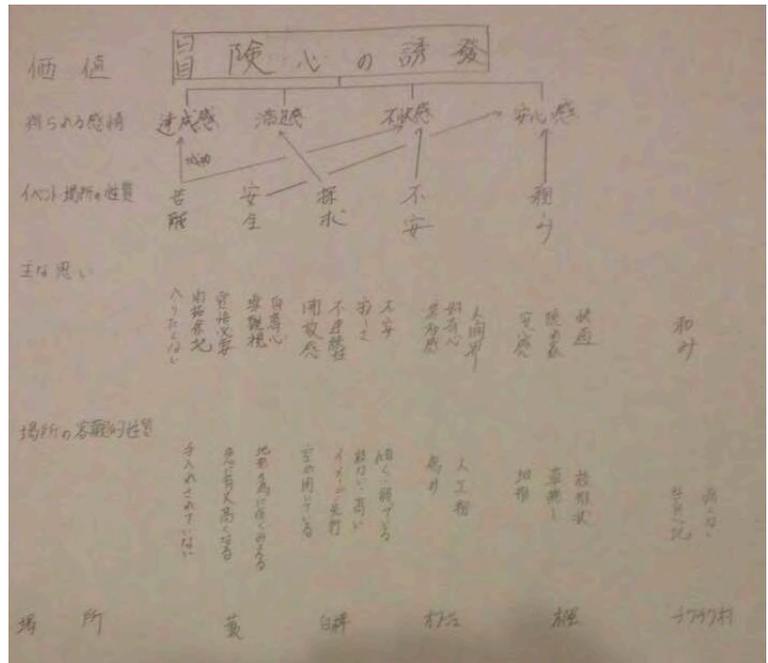


Figure 2 実際に作業で書いた図

いたのは主に嵐田さんと私であったように思うが、何名かそれほど「冒険心」とは思わない人たちがいたようで、「童心」「秘密基地のような感じ」などというような表現とで意見が割れた。何人かは再びエリアを見に行ったり、断面図を書きだしたりと、少しぎくしゃくした。

## ③ 終盤

三日目の夜、結局価値の議論がまとまらなかったため、事実から順に構造化していく作業を行った。

結果は右の図のようになった。作業としては下の場所という事実から、客観的性質、そこで抱いた感想、それを性質で分けた言葉、得られる感情という順で考えていった。

最終的に、得られた感情は達成感、満足感、不快感、安心感の四つに分類された。ここで重要なことは、この図を作るまでの議論では班員でそれほど変わらず、皆同意していたことであった。皆、感じたことはそこまで変わらなかったわけで、分類された四つの感情を感じた後、それを「童心」「秘密基地のような感じ」「冒険心」「ダンジョン感」などのように、それぞれが自分の中のイメージにあった言葉を選んだのである。そのため、中期の議論ではそれぞれが自分の感じた感情を表現する言葉が食い違ったのだ。子供のころ、藪の中や森の中で秘密基地を作ったことがある私には「童心」という表現は理解できたが、都会っ子である班員にとってそれは子供のころを思い起こすようなものではなかったのである。この話を尾崎先生に相談したところ、発表の時は代表の言葉として「冒険心」を使えばいいのではないかとのことであったので、最終的に冒険心という言葉で包括することに決めた。

これにて、私たちの議論は終了である。

## ④ 感想

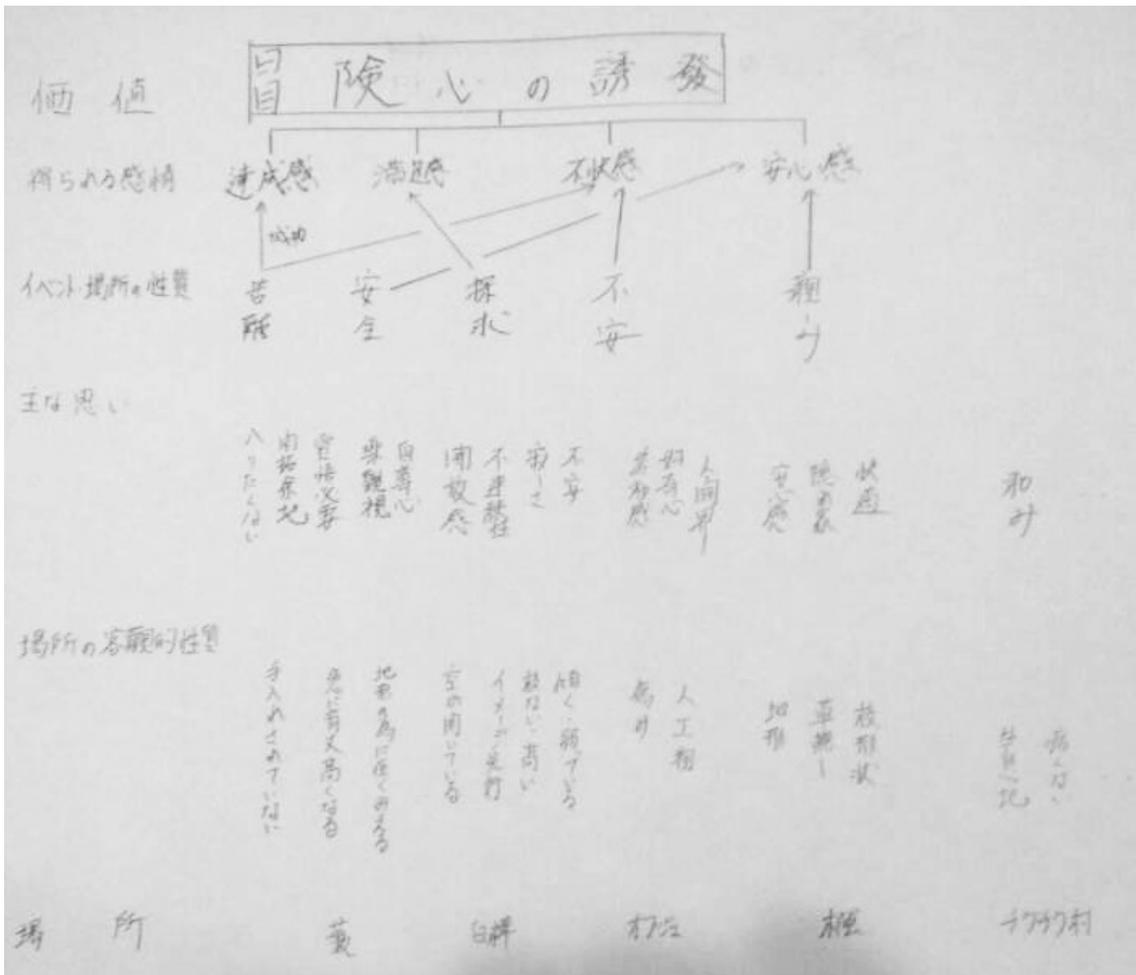
最初は何がしたいのかわからない講義であったが、最終的に議論が収束し、皆感じたことは同じで、それを形容する言葉が違っただけだとわかったときは爽快感を感じた。最終日に飲めなかったのが心残りである。

2 班の対象敷地は非常に単純な場所だった。我々はまず初日の雨の中、草むらを切り分け道を作り、等間隔に杭を打って敷地の全体像を把握した。その後セミナーハウスに戻って班員全員で場所の特徴とどのような心象体験が得られたかを共有したところ、メンバー全員が、さしたる話し合いやすり合わせもなく同じような意見を抱き、その内容も「冒険のようだった」「秘密基地みたいだった」といった幼く単純なものであった。2 日目の晴れ間の中でもその傾向は変わらず、我々は体感的に土地の価値を共有していたが、我々の感じた感情を「童心」とまとめるか「冒険心」とまとめるかという議論が起きた。直感的に、童心も冒険心も感情のかたちは似ており、ここの食い違いは幼少期の体験に起因すると感じていたので、もう少し一般的な感情で言い表せないかと思い、段階を踏んで考えてみた。具体的には、敷地内の印象に残る場所を「やぶ」「白樺」「木陰」「オブジェ」「チクチク村」の5つに分け、それぞれの客観的特徴→それに対する感情→似た感情の整理→感情の一般化というプロセスで、担当敷地で抱く一般的な感情を「達成感」「満足感」「不快感」「安心感」という4つに整理した(詳しくは添付資料)。この4つの感情は皆共通して持っており、それらのバランスと幼少期の体験などが最終的に作用して、包括的に「童心」になるか「冒険心」になるか決まるという事が分かった。ちなみに、このプロセスで個人的に面白かったのは、皆がチクチク村に対してあまり悪い感情を抱いていないことであった。チクチク村とは、ふくらはぎくらいの高さで刺がある植物がまとまって生えている地域の愛称で、大木とオブジェをつなぐ幾つかの道の1つにある。誤ってこの地域を歩いてしまうと足がチクチクして痛いということでこの愛称がついた。よく通る場所にある上に背が低いので歩きやすそうに見えるため、我々はしょっちゅうここを通過してしまっただけで痛い痛いと思いでいた。しかし、後で感情を整理してみると、意外とここに対する否定的意見は少なく、「いたずらされたみたいな気持ち」とか「森と交流してる感じがある」といった意見が多かった。結局この場所に対する意見は「和み」という一言でまとめられたが、このように我々に害をなす場所でも愛着が生まれるのだなあと思って面白かった。

この段階で我々にのこった課題は、「どのように担当敷地の価値を分かりやすく伝えられるか」のみであった。我々の班では当初から似通った印象を抱いていたがゆえにグループ間で価値を共有するのに論理的な言葉が必要なかったため、意識的に発表の方法を考えなければ独りよがりな発表になってしまう恐れがあった。発表の仕方を工夫する中で、発表の際に大切にすることが2つ定まった。1つ目は、難解な理論は展開せず、あくまで主観的に感情ベースで伝えるという事であった。幼少期の体験も性別も違うメンバー全員が擦りあわせを行わずとも同じような気持ちを抱いた場所なので、プレゼンを聞く人たちもおそらく似た気持ちを抱くだろうと判断し、客観的な論理よりも感情の言語化を優先して、相手に「この気持ちはこれなんだ」とすっきりしてもらおうような発表を目指した。2つ目は、我々自身が敷地内での体験から一足飛びに価値を見いだせたので、プレゼンの際にはその人たちにも実際に敷地内に入って貰うという事であった。その際に我々が大切にしたのは、目的をきちんと設置するという事であった。対象敷地は草が背の高さよりも高く生い茂っているので、本来非常に過ごしづらい場所である。我々も当初目的を持たずに動き回った時には疲れきり、対象敷地には何の価値も見いだせなかった。しかし、目的を持って敷地内に入っていくと、うっとうしい茂みも目的を阻む敵のように思えて、征服欲が湧いてくるし、目的を達成したあとは満足感が得られる。視界が遮られ迷路のようにになっている敷地のどこかにポスターを隠しておき、宝探しをしてもらうという案などいくつか出たが、いきなり茂みに入れといわれても積極的になれない人も多くいることを考慮し班員が先導・解説するツアーを行うというマイルドな案に落ち着いた。

プレゼン後には、ツアーによってその後の4つの感情や「冒険心」「童心」という感情に共感できたという意見もたくさん貰ったが、敷地外や白樺との関係や、冒険心などの感情を抱く原因をもう少し細かく分析できればいいという意見も目立った。伝え方について考慮しただけあって我々の提示した価値がよくわからなかったという意見はなかったのは良かったが、思索の浅さを指摘される形となった。

最後にこの演習についての意見だが、個人的にはシビルエンジニアとは自分で対象敷地の価値を見出す以上に、地元の方々が価値と愛着を感じている場所に手を入れる職業だと思っている。もちろんエンジニア自身が価値を感じていなければ地元の方々と対話等もうまくいくはずがないし、今回の演習で培ったような能力も必要だとは思いますが、もしあと2泊くらいあれば、価値を見出した後に班をシャッフルし、他の班が手掛けた敷地に要求性能を満たしつつも旧担当班の人々にも納得してもらう何か新しい建造物を作る、という課題があったらいい経験が出来たかなと思った。



添付資料 ボトムアップのプロセス

山中寮での演習は非常に難しいものであり、とても考えさせられた。行く前から課題内容を見るに、あまりにも抽象的なものであったことから覚悟したつもりではあったが、発表の体裁に仕上げるのは苦しいものであった。私たちの班は3班であり、メンバーは山川（班長）、猪苗代、山本、島津、森本、加藤であった。与えられた区画は他の班に比べて開けた場所であり、藤原さんが「マニアックな場所」と評していたのが今になってようやく納得出来る。初日、雨のなか簡単に観察した結果、出てきたのは辛うじて周りのものを列挙しただけの拙い特徴であった。

特に苦勞して踏査することもできない、区画の中心から見渡せばほぼ全てがざっと観察できてしまうその区画から価値を見いだせというのとはなかなか難しいものであった。

2日目、再び観察した我々は、この区画が自然と人工物が共存していることが一番大きな特徴であり、それが乱雑に散りばめられていることにはほぼ全員が注目した。それに対する見解は班員によって様々であったが、何しろ注目することのできる対象はなかなか少ない。ベンチ、植樹された木、無意味にささっていた棒、木の枝の束のかさを小さくするためのハードル、何も書いていない看板、カラマツ、桑、モミジの木々、苔、茂った雑草。あるもの全ての位置、大きさ、高さ、標高、葉の茂る面積、できることはほぼやり尽くした。そもそも調査対象は全然少なかったのも、全てやることでなにかを見出すしかなかったのだった。唯一の解が見えてきたようなところで二日目終了。特に夜に作業することはやらなかった。あまりにも答えが見えてこないのも、半分放棄したい気持ちもあったかもしれない。

3日目に入って、ついに発表のために形に仕上げる作業に着手した。しかし、まったく論理だった「価値」の答えは出てこない。基本的にミクロな視点で価値を見出すことができず、マクロなもので価値を各々が発表してしまったために、景観学的な発表になりそうだったのである。各々があげた価値をそのまま発表してもグループワークの意義がなくなってしまうし、全員がそう答えることを導いたような、なにか大きな共通の価値のようなものは何も見つからなかった。この日の午前中のエスキスに臨む際に提出した中間物は、「乱雑さや自然と人工物の共存により様々な価値を見出すことのできる多様性」という、なんともパッとしないものになってしまう。案の定エスキスチームにダメだしされた一同はそれを見つけようともう一度奮闘する。猪苗代が提案したのが、この両方はどちらも兼ね備えているために、どっちつかずな中途半端なものに見えてしまうのではないかという意見。他の班の区画はもっと自然が前面にでているところが多く、我々の区画は人工的なものによってその自然の良さがぼけていのではないかというものだ。この理論は私とまったく逆の意見であったのである。私はこの直後、自然と人工物の両方があることで、より多くの人々が安心する場所なのではないかと捉えたのである。無機物が何一つとして存在しない自然な広場にやすらぎを感じる人はいるはずである。一方で、現代の人々（特に私たちが住むような都会に住んでる人々にとっては）の中には何も人の手が施されていない自然に対して、どこか落ち着かない不安を抱く人がいるはずである。その人たちにとって、人が作爲的に置いたとわかるベンチや、植樹された木を見ることのできるこの空間は安心できるかもしれない。一つの特徴からまったく逆の二つの価値のようなもの（猪苗代の提案したほうは悪い意味での価値になっている）が生まれたことへの考察は、徐々に結論へとつながっていく未来が見えたのである。

そもそも、この広場を意図した理由はなんであったのだろうか。この区画のすぐ外側には富士山を観測するための3メートルほどの塔が立っている。ここはそのことから考えても、人工的な広場として作られているのではないだろうか。富士山が見える、そのことによる高揚と安らぎを与える、そのための広場なのではないだろうか。偶然にしては、あまりにも他の場所に比べて人の手が加わり過ぎてしまっているのである。だとしたら、猪苗代のようにどちらかといえば中途半端だ、物足りないと思われてしまうことはイレギュラーなのではないだろうか？ 私たちはここより結論を紡ぎだしたのである。結論は成果物、及び発表で披露した通りなのでここでは省略する。

フィードバックとしていただいた意見は的を射たものだと思うし、自分でも弱いと思っていたものであった。この考察の流れから結論に持っていくのは論理が飛躍しているから初見の人たちにとっては理解しにくいものであるし、そもそもこれでもまだ強引なのだろうとは自覚している。それでも、強烈なインパクトが得られないこの空間を合意形成もなし、ただメンバー全員の意見を列挙することだけ、にならなかったことは非常に満足しているし、発表が割と不評な中でそこが認められたのは嬉しいものであった。

と、議事録をまとめたようなレポートになってしまっただけではフィールド演習を十分にこなせたとはいえないと思うので、この演習を通しての課題であった、「価値とは何か」というところにもう少ししっかりと向き合いたい。3泊4日でこの課題に自分が完全に満足する答えをだすことは非常に難しいと思っている。実際に、その答えに真摯に向き合って答えに近いものを出していたのは6班と7班だけであったのではないだろうか。残りは課題を発表しなくてはならないことを意識したあまりに楽な方に流れてしまった印象を受けた。この価値というのは個人個人にとって当然違うものであり、どこに着目するかは人数分の答えがでるはずである。しかしそこにはなんらかの客観的に論理的な魅力（抽象的なものであることが多いかと思うので、それを結論として導くのは非常に難しい）があるのも確かだ。では、この区画の価値は結局何であったのだろうか。

この区画は特になにも大きな特徴がなく、ここでの価値を見出すことを強いられるとすると、いろいろな細かいものに注目していくしか方法がない。自然と人工物の対比が大きなテーマとして浮かび上がり、その奥にある価値を見つけていく作業を繰り返す。この作業は、自然の価値を考える上での一連の作業と同じなのではないだろうか。自然の価値はどこから生まれるか。それは対立する概念が存在しない限り発生しない。つまり、人工物があってこそその自然なのである。だから、都会と自然といったようなペアでの考察が自然に働くのではないだろうか。もしそうだとすれば、ここで価値を考えることは、もっと大きなスケールでの土地における価値を考えることと同じ体験ができるのではないだろうか。これは他の区画のように自然に満ち溢れた場所で行うことはできなく、3班の場所ならではの価値なのではないかと思う。もしそうだとすれば、この価値というのは、本当に抽象的なものであり、このプロセスを俯瞰的にとらえないとこの結論は出て来ない。これが3泊4日を通しての自分の結論であり、演習中の考えを全て包括し、かつ論理的に導出できる答えである。

この答えをもし演習内に導くことができ、かつ他の班員を納得させることができたとしても、発表の際に皆に納得してもらおう説明するのは非常に難しかっただろう。今回の演習で一番痛感したのは、発表の稚拙さである。自分たちは十分に議論しての発表のために知識がある状態で臨んでいるが、他の人たちからすればその場所についてほぼ初見の状態での聴衆となっている。よって、理論の根本的な流れをどこか少しでもすっ飛ばしてしまうと、論理に飛躍を感じてしまうことになる。この技術は卒論の発表など、さらには社会人になってからも必要なものとなるだろう。発表のときは、サルでもわかるように伝える必要がある。これは小学校のときから育んできたものであるはずだが、話題が難しくなるにつれてこの意識が欠落していくのだろう。

最後に、演習の感想を書きとどめておきたい。まず、スケジュール的にしんどいです。懇親会もう少し遅くしてでも、食事後の演習の開始を遅くしていただきたいなと何度も思いました。懇親会8時開始は多分早すぎです。あと、エスキスの方針が教授により異なっているのはおかしいと思いました。最後の発表の時にそれが顕著になってあらわれてくる気がします。自分たちのエスキスで禁じられていたものを他の班が堂々と発表していたことには戸惑いを感じました。もちろん先生によって考え方が違うことから、エスキスの方法は異なるのは仕方ないと思うのですが、おおまかな枠組みは統一して欲しかったです。気になったのは以上の2点です。他は特にストレスもなく演習に臨むことができたし、設備的にも特に苦勞することはなかったです。懇親会とエスキスを通して先生方とコミュニケーションを取れたのも非常に良かったし、同期と酒を楽しみながらいろんなことが話せる機会がもたらされたのは貴重でした。実際、演習の期間と課題のレベルもちょうど良かったです（頑張っても期限内には結論が出ないが、全貌が見え始める段階になるくらい、と思っています）この演習がこれからどのような形で生かせるかはまだはっきりとしていませんが、抽象的なことに対してここまで長く議論を重ねて発表したことは大きな財産になると思っています。

この場を借りて、フィールド演習の準備、運営をなさってくれた全ての方に感謝したいと思います。ありがとうございました。

【課題】

4 日間全体の取り組みや講評会の内容を踏まえ、課題にどのように挑んだか、あなたが何をどう考えたかを振り返り時の班内での情報共有も踏まえてまとめる。特に、演習期間を通じた各自の考えの変化、班員間での意見の一致や相違、それらがグループ発表へ与えた影響などに注目する。

【解答】

小章に分けて、議論の流れ、自分がどのように考えていたのか、与えられた空間に関する価値、本演習の特徴や思ったことについて記述した。

○演習林がすぐ近くにあることで

学科の授業や所属しているコミュニティにおいて議論を行う機会は多少はあるものの、フィールド演習では、議論を行うための素材である演習林がすぐ近くにあるため、実際にその場に即した議論ができる。そのため、机上の空論のような、実際のものとはかけ離れてしまうという議論にならないということが大きな違いにあったように思う。また、自分たちが議論をした結果見出した価値が、実際にその場にもう一度足を踏み入れることで、感じられるのかということを再度検証して、フィードバックすることで、さらにみずからの価値をブラッシュアップできたと思われる。また、グループ内の他の人が見出した価値を、より認知できるということで、偏見などによる無駄な議論や空想を省けたと思われる。このように実際の事物が近くにあるからこそより深い議論ができるということがわざわざ演習林の近くで行う理由であり、また、人は自然よりも人よりの考えに傾いてしまいがちであるが、自然と人工物を真摯に捉える上では、自然としっかり触れ合って学ぶことはとても重要なことではないかと考えた。

○グループワークであるということを念頭に

今回は、演習林の価値を見出すということで、グループ個人の持つ経験やバックグラウンドからその演習林の価値を見出さなければならないので、その結果、班員それぞれの十人十色の価値が生じえると思われる。そのため、異なる価値を共有することで、それぞれの価値に包含される価値の共通点を見出すことが、グループワークの一つの目的になりえると思われる。一方で、ただ単に異なる価値を共有して、その価値がそれぞれにおいて、班員が価値を理解して、尊重して、演習林の価値をその班員それぞれが見出した価値であるという、多様性を追求することも一つの結論なのかもしれない。

そして、私たちの班では、最初の方は、与えられた空間の持つ価値は、異なる個人個人が十人十色の、多様な価値を見出せるという結論に至っていた。これは、班の方針及び演習の方針として、単なる合意形成を見出すものではなく、あなたにとってのその場所の価値を見出すという課題の本旨に従って、自分のもった第一印象を大切に、そのように思った理由からその価値について考えるという方針であり、個々人の意見を尊重するような仕組みの議論であった。そして、その意見を共有することで、各人がその空間の価値を再度認識して、自分が思った価値を相手に説得できるような定量的データ（日射量や気温、湿度、葉っぱの被膜面積など）、要素の空間的位置関係などを観測して、各個人の感想、価値に根拠を見出し、この空間が、多様性をもたらす原因について考え、より結論の根拠づけを行っていった。しかし、エスキスや班員内でグループワークであるということを通して、一つの合意形成を見出すという方針に変更した。これは、エスキスで指摘されたこともあるが、班員内の考えとして、また、個人的な考えとして、既存の結論が一つの結論にすること自体を逃げていたような気がしたからである。

課題は、あなたにとっての価値を見つけ出しそれを他人に伝えるということだが、ある班員の意見としては、発表資料の結論の部分は空白にして、その部分は班員個人の価値をそれぞれ言うのが、この課題の答えなのではないかという意見もあったが、せっかくグループワークでこの課題を行っているのだから、やはり、一つの合意形成を築き上げるべきなのではないかという考えに至った。また、フィールド演習自体が個人課題であったのならば、価値は人それぞれ異なるから、自分の思った価値を言うだけの陳腐なもの陥ってしまう可能性もあり、この点において、深い議論に基づいたよりよい結論を導きたいという共通の考えがあったように思える。

合意形成に至る前までは、グループの中では、自然と人工物の混在による違和感、人工物がある程度自然に存在しているということから得られる安泰感、子供心や冒険心をくすぐるような空間といったような意見の相違がみられた。前者1つと後者2つというグルーピングができるものの、双方は相異なるように見えた。3日目の午後という残り時間が少ない状況において、多様性という結論から「休む空間」という結論に方向転換した。幸いにも、違和感があるという意見を持った人も、この空間よりは杉林のようないかにも自然を感じさせるような空間の方が休める空間とは適しているとはいえ、この空間に置かれているベンチを見て、休みたくないという意見は持たないということで、違和感を捨象して一旦はその結論に落ち着いた。しかし、その結論を根拠づける理由及びその空間的要素を再考すると、陳腐な議論に陥ってしまい、今までの議論を反映できていないことが発覚したため、結論を変更せざるを得なかった。

班員の共通の見解としては、最後まで、意見の一致をなるべく避けてきて、それぞれの意見を象徴しつつ、かつ、議論を深めていったので、その頑張りを見せたいというものがあつたからである。しかし、結局のところ、その成果が、他の班よりは一見して綺麗に纏め過ぎていると印象を持たれたのは事実であり、このことについては後述することにする。それはさておき、最終的な結論は「よりよい森林空間の創出のために」というものになった。これは、与えられた広場のような空間は、富士癒しの森研究所の目的である、人間が癒される空間とは何なのかというものを研究するという趣旨を体現したものであり、本来の意図では万人の人がそれぞれ癒されるという意見を持つはずであった。しかし、その広場に対する意見は、肯定的なもの、否定的なもの、何も思わないという大きく分けると三つの意見に分けられており、本来の意図通りの働きを必ずしも行っているとは必ずしも言えない。以上のようなことを踏まえると、この広場は、未来に人に癒しを与える森林空間(林の中にある広場のような、人が休めたり活動出来たりする場所)を作るときに、その森林空間がよりよい森林空間になるための創出のための一つの貴重なサンプルであるという価値を結論とした。この結論は、安易に「多様性」というそれぞれの価値を尊重しすぎるあまり、まとまりのない価値が出来上がるのを避け、グループワークの基本である議論の発展と意見の終結を短時間のうちに成し得たものである。

他の班とは異なり、合意形成を最終的に目指したことによる一定の主観的な意見の捨象は否めない。記述した通り、最初は個々人の意見を尊重してできるだけ捨象することを避けていた。しかし、その方針をやめ、一つのゴールになるようにすることで、グループワークで行われる意見の昇華が行われたことも事実である。確かに、意見を纏める際にある程度の抽象により、個々人の意見を犠牲にしたことは否めないが、その抽象というプロセスがなければ、何が大切なのかということも見えてこなかったのではないだろうか。もし、悪く言えば「この広場には様々な価値があります。」という飾り気のない、纏めることを放棄した結論であれば、森林空間という言葉も、本来の富士癒しの森研究所の本来持つ意義についても考えることがなく、それはそれで浅はかな議論で終わったように思える。そのような意見の抽象によるさらなる議論の深化は、グループワークの一つの期待される効果であり、重要なものであるように思える。意見を尊重するもの大切ではあるものの、尊重し理解したうえで、さらによりよい結論を見出すプロセスこそグループワークに求められる、一つの重要なものなのではないか、と考えた。

いずれにしても、私たちの班では、グループワークということ念頭に議論を行っていたように思える。一人一人の意見を尊重しているとともに、その意見の中での相違、共通点がなぜ起こるのかということを見つめ直し、その空間の価値に関して真摯に見つめ直すということ、グループワークを念頭にした議論であるからこそ達成できたと思われる。すなわち、私はグループワークでこの課題に取り組むことを上記のような効能があると考え、それを念頭に、最終的には合意形成を目指して、課題に取り組んだのである。

#### ○発表形式と内容に関して

発表の内容としては、成功したとは必ずしも言えなかったと思われる。これは、結論である「よりよい森林空間の創出のために」という一見して綺麗に纏めて挙げた結論のせいであるように思われる。先生のご講評にあったように、コンセプトを述べるだけに留まってしまうと、議論の流れが見られない発表になってしまい、人の心を動かせる発表にはならなかった。他の班には勝らないとも劣らない議論をしっかりと行っていたので、それを十分伝えることができず表層をなぞるだけの発表になってしまい非常に個人的には残念だった。しかし、変にプロセスも語ってしまうと、要領の悪い発表になってしまう可能性が高いので、発表としては、的をえないものになりがちで、発表自体のクオリティも下がってしまう危険性があり、発表の難易度も上がると思われる。発表資料の作成自体もギリギリであったため、発表自体のクオリティを上げるためには、もう少し時間的余裕が欲しかったように思える。

### ○与えられた空間についての価値

3 班に与えられた空間は、中央に道が貫いており、ベンチやハードルなどの明らかに人の手が加えられたものや不自然に乱雑に丸太が置かれており、また、見晴らしがいいように木々が伐採されていて、広場のようになっている空間であった。僕にとって、この第一印象は苔の踏み心地が良い場所という空間で人が立ち止まったり、または、人が集まったりするのに好都合な場所という印象であった。また、この空間について観察したり、他の班員の意見の一つである不自然な乱雑さやベンチで休むことができる、人間を圧倒するような自然という印象を沸かせないという意見を聞いたりすることで、この空間自体に様々な価値を見出せることは確かである一方で、その価値同士がそれほど拒絶しあっているとはいいいがたいように思えた。すなわち、この空間は、特徴的なものが多いものの、ひとつのシンボルのようなものすごく攻撃的なモニュメントは存在しないためか、ものすごく嫌いであるという印象はあまり生じえないように見え、レンジの広い空間のように思えた。レンジが広いということは、極端にその場所を嫌う人があまりいないため、待ち合わせ場所や人が集まって一つのことを行う場所、休息所としての役割は見出せると考えられる。それは、広場がもつべきはずの本来的な価値の一つであり、憩いの場を考える直す点では一つのサンプルなのかもしれない。しかし、憩いの場、すなわち「休む空間」という言葉からは確かに、主観的要素をはぎ取った、客観的装いしか見出すことができないのかもしれない。このプロセス及びより鮮明な議論を知らなければ、この「休む空間」という言葉に込められた考えを読み取ることは難しく、安易にこの言葉を用いることは危ういと思われる。結局のところ、受け手のレンジの広い空間をどのように用いるかによって価値は左右されると思う。自然保護者にとっては、人の手が明らかに加わってこの空間を忌み嫌い、広場の失敗作としての価値を見出すかもしれない。一方で、都会で育った子は、林の中のこのような明らかな広場は、心を落ち着かせる居心地のいい空間であるに違いないと思われる。

この二つの価値のバックグラウンドまで含めた統合した価値を見出すのは難しいと思われる。今回は、未来の広場設計のサンプルという形でまとめたものの、それ以外の価値、より多くの人々がそれを価値だと見出せるコンセプトを見出していきたいと思ったが、いまだにサンプル以上にこの空間の持つ価値を統合的に評価した価値を見出すことができていないのが現状である。

### ○感想

4 日間全体を通して、空間の価値について考えてきたが、班員それぞれの異なる意見を聞いて大変興味深かった。人それぞれが、着眼する箇所が全く異なっており、また、たとえ同一箇所について着眼したとはいえ、個々人の持つ意見は分かれる。さらに、その意見に関しても、それを表現する言葉が変われば、聞き手の受け取り方は異なり、さらに違う意見を生み、意見の種類はとどまることをしらない。このような膨大な意見、人それぞれのバックグラウンドがあるから、エスキスの際にも先生方の意見は人それぞれでアプローチも全く別のものになり、そのアプローチの仕方も中々面白いものであるように思えた。

そして、何を終着点とするのかも人それぞれであり、それに対する評価も人それぞれであった。どの評価や結果、結論に対しても尊重はすべきであり、杓子定規で物事を図ろうとするのはよくないと思われるが、個人的な意見として、ある程度、結論としては班という一つの共同体組織の中では一つのゴールを導き出しているもののほうがいいように思えた。確かに、一つの結論を生み出す過程においては、いくつもの要素を削り落としていくわけで、主観的なものから客観的なものに変化していくのが普通ではあり、結果としては何ともみすぼらしいものが出来上がってしまう可能性もある。しかし、前述したようにそのようなプロセスを行えるのがグループワークであり、合意形成を行い、一つの結論を作り出すべきであると思われた。

## ●議論の流れ

対象とする演習林の『価値』を見出すという課題だったが、そもそも価値と言われても各人でその言葉の定義も微妙に違えば何を価値とするかの判断基準も異なり、頭から「価値を見出そう」という姿勢で演習林を見ても頭でっちなものしか得られないと踏んで、各々が素直に感じたことを大事にしたいという考えの下、まずは各々が自由に演習林を見る時間を取った。その結果「区画の中央を谷が横切っている」「谷を境に植生が違っている」「鹿にかじられた跡がある」「倒木の周りに苔や草が多く生えている」など、各自が特徴的な部分をピックアップして全体で共有した。その後平面図を作成し、平面図上に気付いたこと、感じたことをポストイットで位置と結び付けて貼っていった。ただ、それだと区画をミクロに見ていった際の特徴は分かっても、マクロに見たときの特徴・感想は得辛かったため、平面図の上にトレーシングペーパーを貼り、そこによりマクロな印象を書いていくことで、区画全体の理解につなげようとした。今回求められているのは「対象区画の価値」であり、区画の一部を切り取ったものではなく、さまざまなミクロスケールの特徴の総体としての区画全体の価値であると班内で考えたからである。この作業の中で、「ここはこうだった、あそこはこうだった」という散り散りの印象がある程度大きなスケールでまとめ、区画全体を考えやすくなった。

だが、区画の持っている物理的特徴や個々人の感じたことをまとめても、そこからどのように価値につなげていくかという部分で議論が難航した。実際2日目の午後の時点でも価値らしきものは見つかっておらず、時間的にかなり厳しい状況だった。議論が難航した原因としては、まず一つに「この土地の価値は何か」と考えると頭が固くなり、取って付けたような意見しか浮かばなかったことがある。また、自分の考える価値が他の班員には価値であると認められないこともあった。例えば私は対象区画に入った際に、鬱蒼と茂る草木を見て周りが山で囲まれていた実家を思い出して落ち着いた気持ちになり、人が「落ち着く」という感情を得られる時点でそれはその人にとって価値を持っていると言えると思った。だが価値そのものについて班員と話をしていくうちに、そんなどこにでもある薄っぺらいものではなく（生い茂った草木であれば他の班の対象区画にも見られる）、もっとその土地固有のものを価値として見出そうということになったため、ある感情を想起されるだけでは価値とは言えないという結論に至った。

このように、対象区画の特徴はある程度整理できても、価値を考える段階でかなり時間がかかった。3日目の午前中のエスキスでここまでの班の意見を集約して発表したところ、特徴をつかむところまではおおむねできているが、「何をどう感じたか」の部分が弱いと指摘された。単純に「明るい」「暗い」と言ってもその言葉は余りに意味が広く、もっと感覚を総動員して繊細に感じ取り、できる限り正確に言語化することが求められた。一般化された言葉は班内での合意を得やすいが、一般化することはまた本来持っていたはずの細やかな特徴を捨象してしまうことを意味する。私の思っている「明るい」と他の人の思っている「明るい」は違う、ということである。また、これまでの班内の議論では物理的特徴から帰納的に感情を導くような思考手順を踏んでいたが、むしろまず先に感情があるべきであり、なぜその感情が生まれるのか、それを生む区画の物理的特徴や個々人の感性・過去の経験等を考えるという風に演繹的な手順を踏むべきである、という指摘を頂いた。

この指摘に基づき、まずは感情を大事にしようと考え、区画に入って最も感じたこと、胸に來たことは何か、ということを一一人が熟考し、班内で共有した。私が最も感じたことは生と死（谷の左右で葉の茂り具合、下草の量、幹の色が対照的になっている）、死から生への流れ（一方で死を感じた木の幹には動物の痕跡があったり、死んで倒れた木からは新たな草や苔が生い茂る）であったが、当然ながら他の班員の感じたことは違った。ある人は一本の木に安心感を覚えたり、ある人は鹿の痕跡（幹の食べられた跡、糞、寝床と見られる土があらわになっている部分）から動物との一体感、心地よさを感じていた。

すると、それらの根底には全てこの区画内の対比的な構造がある、ということが分かった。生と死は谷の左右での植生の対比から生じていた。死から生への流れは、葉が付いていない一方で幹に鹿の生きた痕跡が見られるという一つの木の中での対比から、あるいは死んで倒れた後に新たな生命の栄養源になる、というこれもまた一つの木の内部での対比から生じていた。一本の木に安心感を覚えたというのも、その木に至るまでは草木が生い茂り暗い道のりだったが、あるところから視界が開け上から光が差し込んでいたことで、その一本の木にスポットライトが当たったような印象を受けていた。生と死のように対比そのものに注目しているものもあれば、一方で対比の片方に感情を引き起こされたものもあったが、対比という共通項を見つけ出して分かったのは、対比が

あるからこそお互いがお互いの特徴を引き立て合うような働きをしていて、それによってより一層感じるところも大きくなる、ということだった。

3日目の午後、ここまでの議論をまとめて再度エスキスに臨んだところ、この区画に見られる様々なスケールでの対比を考え、対比と対比の組み合わせから新たな発見を見出すことができれば面白い、とのアドバイスを頂いた。そしてエスキス後、踏査する中で他に対比がないか詳しく見ていった。だが結果としてこれといった対比を見つけないことができず、それまで出てきた対比を整理してもその組み合わせから発見を見出すことは難しいように思われた。

その後、なぜそのような対比が生まれているのか、という方向に議論は進んだ。そして突き詰めていくと、これらの対比の根本には、この区画に最初に植林した人間の意図があるという結論に至った。谷を境界として植生が異なっているのは、もともと道路側は様々な種類の広葉樹を意図的に植えたのに対して反対側は寒冷樹の試験場として針葉樹林を植えたためである。そして人間の意図の下、このように様々な種類の樹木が20m四方の狭い区画に（混在ではなく）ある程度まとまって存在しているというのはこの区画特有のものであり、これがこの区画の価値の根底と言えるだろうという考えに至った。ただ、この区画の価値を具体的にどう見出すかは各人にゆだねられた。このような様々な対比によって区画内の特性が際立ち合い、それがあからこそ生と死を感じたり一本の木に安らぎを感じたりすることができる、それがこの区画の価値であると私は考えた。一方、区画内に見いだされる対比の根源を探っていくと全てある一つの事柄に端を発していることが分かる、その過程を体験できることが価値であるとする班員もいた。

### ●反省点

最後まで「価値」について納得することができなかった。対比に気付いてからそのルーツを遡っていく中で価値に近づいているという感覚はあったが、対比によって際立った環境の下で各人が各々の固有な体験をすることができる、という私が見出した価値は、自分自身でも無理やり引っ張ってきた印象は否定できない。端的に言えば不完全燃焼だった。

時間の制約があったため（言い訳に過ぎないが）とにかく形にしなけりならなかった。また、様々なスケールの対比を組み合わせることで発見を見出すことができなかつたのも悔やまれる。仮に対比を組み合わせで発見が得られないにしても、突き詰めて「これ以上やっても発見は生まれまいだろう」と納得するところまでは行きたかつた。

二つ目は、各人の考えた価値について班内で深く掘り下げることができなかったことである。価値の根源と思しきものまではたどり着いたが、結局そこから各々が別々の価値を見出すところで議論が終わり、「価値は人それぞれ」というありふれた陳腐な社会通念の流れをたどった結果になった。そこで終わることなく、なぜそのように価値を見出したかまで議論を進めることが必要だった。

### ●感想

概して言えば、「価値」という言葉に最初から最後まで振り回され続けた四日間だった。前述のとおり、対象区画の特徴やそれに起因する個々人の感情の整理はある程度できても、そこから価値につなげようとする議論が行き詰った。だがそこから、なぜこのような感情・心象が生まれるのか（言い換えれば、この土地のどのような物理的特徴が、あるいはその人のどのような過去の経験・価値観・育った環境が背景にあるのか）を深く突き詰めていくことになった。これまでならば「森→自分の原体験を呼び起こす→安心感を得る」で納得していたが、今回のフィールド演習では例えば「森のどの部分のどのような特徴が原体験を呼び起こすのか」まで考える必要があった。執拗とさえ言えそうなくらいここまで突き詰めて物事を考える経験というのはこれまで無かつたことだったが、表面をなぞっただけで理解した気にならずに徹底的に事物を見つめることで意外な発見を得ることができた。この経験は価値を見出すということに限らず、授業を受けるとき、ニュースや新聞を見るとき、人と話をするとき（特に相手に説明したり逆に相手の説明を聞くととき）などこれから生きていくさまざまな場面で活用できる。

特に社会基盤は大規模で公共性が高く、さらに税金が投入されることから、新たなインフラを作る際にはできるだけ大きな価値を生み出す責任が伴う。当然「価値」は一義的ではないため真に最大の価値を生み出すことは困難だが、それに関わる様々な主体にとっての価値を考え、総合的な価値が最大となるように努力する責任がある。

最後にフィールド演習に対する意見について。全体を通してよく計画された演習であると感じたが、価値を論ずるには時間が少し足りていないように感じた（私たちの班の議論の進捗が悪いと言われればそれまでである

が)。特に3日目夜から4日目明朝に及ぶ作業は、確かにやりがいはあったが特に後半はまともな思考力が伴わず、なかなかの苦行だった。

何らかの形で（例えば懇親会を減らすなど）作業時間を少しなりとも増やし、最終日の負担を軽減できればいいのではないかと思った。

このレポートでは、平成 27 年 9 月 8 日～11 日、東京大学演習林「富士癒しの森研究所」で行われた「フィールド演習」において、私の所属した 5 班が対象敷地に関して考えたことを時系列順にまとめるとともに、終了から約 2 週間たった現在考える今回の演習についての所感を述べる。

## 1. 時系列順の私自身、班での思考の変化

### 1.1. 藤原先生との踏査 (1 日目午後)

1 日目はまず、台風接近による雨の中、富士演習林助教、藤原章雄先生と一緒での、対象敷地の踏査が行われた。私がこの踏査で訪れたのは、順に 4 班、私の属する 5 班、3 班、2 班、そして 1 班である。私自身は都会育ちで、本森林のような「自然」林の中に入るのは 5 年ぶりであった。そのため、雨の中宿舎を出て、まず間伐の丁寧に行われている 4 班の敷地を見た時既に、「都会から離れて緑の中に入ったのだなあ」という雑感を抱いた。

次に、私の属する 5 班を訪れた。藤原先生は、「90 年前にカラマツの計画的植林が行われたが、それ以降間伐などはほとんどされず『自然』のまま手つかずの、最も『ワイルド』な敷地である」とご説明された。その上で初めて 5 班の敷地を見たとき、4 班の敷地をはるかに上回る、敷地の環境の雑多さに驚いた。木の蔭や低木が複雑に絡まっており、中に入ることが困難であることが容易に想像されたし、乱雑な中に豊かな下草の深緑色、コケの青みなど、様々な色がカオスに混ざっているように感じられた。この時は中まで踏み込まなかったが、中に入るとどのような森なのだろうと思った。

その後、丸太のある開けた広場の 3 班、シラカバと低木の入り混じる 2 班、谷地形に高木が植えられた 1 班を順に踏査し、各敷地がそれぞれ、3 班の丸太、2 班のシラカバのようなものに特徴づけられていることを考えた。そのような敷地が並ぶ中で、「ワイルド」な 5 班の敷地を、私自身や班でどのように考えていこうかと考えた。

### 1.2. 対象敷地・個々人の観察 (1 日目夕方)

1 班まで見た後で、5 班のメンバー (班長 A, 以下 B, C, D, E) とともに 5 班の敷地を改めて訪れた。

先ほど予想した通り枝葉が密集していたため、雨の中傘を差して対象敷地に入るのは困難であった。それを乗り越えると、まず足元を塞いできたのが倒木 1 である (図 1)。長さ 15 m ほど、直径 50cm ほどあり、まずその大きさと私たちを圧倒した。

しばらくは、班員自由に敷地を見てみようということになった。私は倒木 1 が程よい高さでもあったことから、まず倒木 1 に「座りたい」と思った。腰を下ろして視線を下ろすと、森がぐっと近くに感じられた。私は身長が高めなので、この敷地に育つ低木も見下ろす形になる。倒木に座ると視線がぐっと下がるので、低木の幹や葉までが目の前に近づき、普段は隠れる地盤や木の芽までが視界に入った。

すると、次第に倒木 1 の荒々しさに気づいた。おそらくまだ倒れてからさほど日数が経過していないようであったが、すでに樹皮は雨水を吸って黒ずみ、弾力のある座り心地がした。表面はコケやキノコで覆われ、近くの地面からは背の低い草、高い草、背丈ほどの低木などが自由に生い茂る。私はここまでの生々しい「朽ちた倒木」のイメージを持っていなかったもので、その後私の意識はいつも、この倒木 1 に向かっていた。



図 1 「倒木 1」(奥)と「Cんすの木」(手前)  
台風後の撮影で、Cんすの木はすでに折れている。

### 1.3. 班での作業、とりまとめ（1日目夜～2日目朝）

ある程度個々人の観察が済んでから、課題の平面図を作成するための計測等を行った。具体的には、大まかの位置関係を把握してから、特徴的な木や植生のラフスケッチ、位置測定を行った。

宿舎に帰ってから、情報のとりまとめ、共有を行った。5班では対象敷地で得られたデータをスケッチブック上のラフ平面図に書き込んでいき、情報の一元化を行った（図2）。対象敷地の中にある要素が多く、そのままでは「何があるのか、何に注目すればよいのか」が分からなくなるだろうと考えたためである。

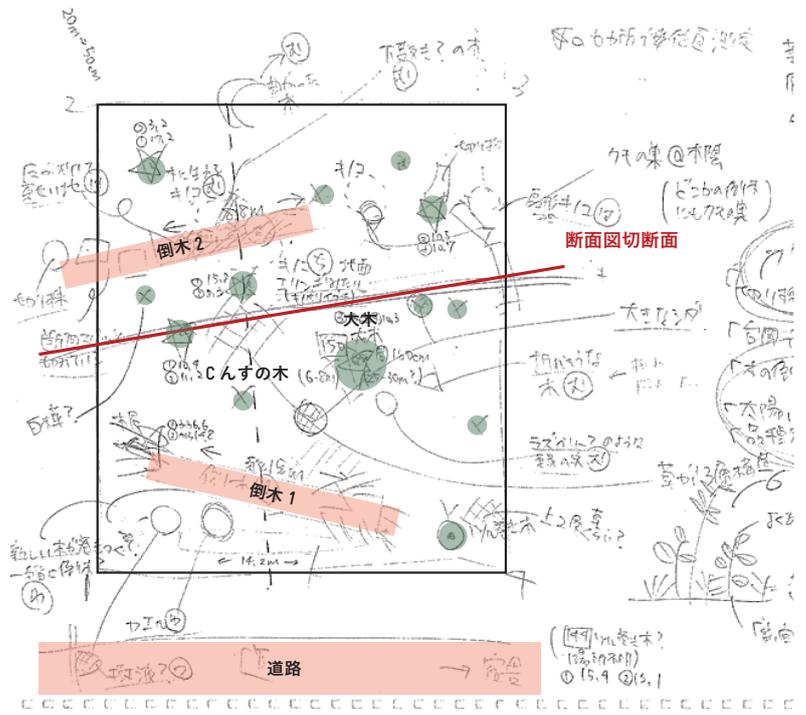


図2 1日目に制作したラフ平面図 見やすいよう加筆している。

この議論で、対象敷地でキーポイントになるものが少しずつ明らかになった。

・前述の「倒木1」、その奥にある「倒木2」。

倒木2の方が樹皮の剥離が激しく、腐食が進行しているように見えた。また、倒木1は根の一部が未だに地盤に食らいついているが、倒木2は対象敷地の外に高さ2m程度の切り株があり、そこからなぎ倒されている。

・倒木1と倒木2の間には豊かな植生が広がっている。これは、高さ3cm程度の小さな下草、10～30cmに伸びた大きめの草、1m程度の低木（後述の「Cんすの木」含む）の3層に分かれている。

・倒木1の枝の近くには対象敷地で1番高い、高さ30mほどの「大木」がある。

この方法によって、客観的データの整理を行い、たとえば十分に植生を観察できなかった箇所はどこか、この箇所に特徴的なものがあつたかなど、「データ」の穴を確認した。

### 1.4. 班ごとの中間発表、それを踏まえた議論（2日目朝～昼）

2日目の朝は、まず前日からのとりまとめを進めたが、その過程で若干の議論の行き詰まりを感じた。先生からの「もう少し客観的事実から離れてみよう」というアドバイスを踏まえて議論を進めようとしたタイミングで、中間発表の時間になった。

この中間発表では、特に他班の発表に対する、先生からのコメントが非常に参考になった。たとえば5班と同等に比較的事実ベースの議論が多かった8班や1班に対し、福島先生から「第一印象、次に来る印象、と時系列を辿ってゆくことで『気づき』を得たプロセスを追ってみる」、尾崎先生から「自分たちの背景を踏まえて、主体と空間の相互関係を捉えてみる」といういくつかの視点を提供していただき、私たちの議論にそれらが欠けていることに気づき始めた。また、2班の、「各個人で場所に関する印象をエッセイに文字化し、それを回覧することで各々の感じ方を炙り出す」という方法も班内で話題になった。

一方で、1日目にまとめた平面図は回覧に来た先生にもある程度講評であり、この空間把握は生かしていきたいという話も班内で生まれた。そこで、2日目午後の対象敷地視察の方針は以下ようになった。

・前半1時間半程度で、平面図に書き込む樹木の位置・高さ、植生やキノコの分布のより細かい把握を行う。

・後半30分程度で、鍵となりそうな「倒木1」、「倒木2」についての主観的感想、前日との感じ方の変化、「自分の好きな箇所」を見つけて、宿舎に到着後発表する。

### 1.5. 対象敷地・詳細な観察と主観的感想の発掘（2日目午後）

以上の方針のもとに、台風一過の2日目午後、対象敷地に向かった。

対象敷地を改めて見ると、雨の1日目と晴れた2日目で感じ方が大きく異なることに気づいた。私自身が気づいた大きな変化は、第一に日差しがさして森全体が明るく見えたことである。その中で、先日は大きさを目にした倒木1の色の漆黒さが目についた。周囲は先日にも増して様々な明るさ、濃さの緑色に輝く中で、倒木1は幹が黒く、重苦しく見える。しかし、座った時の感触は先日と変わらず、かえって先日気づかなかった、倒木

に所狭しと生えるコケやキノコ、低木から落ちる露の輝きや、飛び交う虫の生命感がますます感じられた。

予定通り、前半の2時間弱を用いて詳細な観察を行った。私は植生の観察を担当し、改めて倒木の周りでは、倒木から外れたところ以上に豊かな植生が広がっていることを確認した。また、後半の数十分は再び各々自由に敷地を観察し、主観的感想を膨らませた上で宿舎に持ち帰った。

#### 1.6. 藤原先生の質疑応答、班内での議論（2日目夜～3日目朝）

班内議論の前に、藤原先生と各班での質疑応答が行われた。私たちの班では倒木に注目していたこともあり、どれくらいの頻度で倒木が発生するのか、朽ちてゆくのかなどを質問したが、「森によって大きく異なるので一概には言えない」ということであった。班の議論とは直接関係がなかったが、1班の「演習林内の生き物の痕跡」の話、4班の「シカの好む食べ物」の話などは興味深かった。

その後班内で、各々がメモした主観的な感じ方を中心に議論を行った。今回はポストイットを用いて、各個人の感じたこと、考えたことを列挙していった。すると、各個人が森の中で気になるポイント（以下、「萌えポイント」と呼ぶ）は、各個人で大きく異なることが分かった。

・ C は、敷地内に生える低木のうち、図1に示した「Cんすの木」に注目した。この木は1日目に観察したときは高さ3m程度の低木で、1m近辺で太い幹と細い枝に枝分かれしていた。しかし、台風一過の2日目に改めて観察すると、Cんすの木は太い幹を折り、細い枝のみを残していた。

C は、ここからCんすの木が、「種の存続」をかけて合理的な判断を行うということを考えた。細い方の枝をよく観察すると、この枝は近くの大木の陰に隠れない南に向けて、大きく枝を伸ばしている。一方で太い幹は他の低木と絡まり、その十分な光合成を行えない。そこで太い幹を切り捨てたのは、自分の一部を「殺す」ことによって、自分自身、また自分の子孫を残そうとしたのである。

・ 私は、1.2., 1.5. に記したような、倒木1とそこから新しく生えてくる生き生きとした後継者の姿に注目した。これをまとめると、個体として倒木1は「死」んだが、その養分を貪欲に吸収し、そこから新たな生命が芽吹いていく生き生きとしたライフサイクルと言える。

・ E は、自分自身がこの2,3日で森の中に溶け込んでゆく自分自身のプロセスに注目した。Eは生まれてからの大部分を東京で過ごしており、虫、雨嵐など様座兄側面から、自然の森に対する恐怖を抱いていた。

それが、この敷地を訪れると、まず目に入るのが木々を分け行った先にある倒木たち、その周りに広がる東京では見ることのない野生の木々、そしてそれをやさしく包み込む雨であった（藤原先生のお話でも、森の中では雨粒が大きくなる代わりに勢いは弱まるとあった）。それを観察してゆくことで、今まで恐怖に思っていた森に愛着を感じてゆくプロセスを、Eは特筆すべきものと感じていた。



図3 倒木2のダイナミックな切り株（左）と、私たちの抱いていた「切り株」のイメージ（右）

・ D は倒木1の根元が倒れた衝撃で大きく持ち上がり、それでいながら地盤に粘り強くしがみつ়く様子を見て、そのダイナミックな様相に圧倒された。

・ B は、倒木1は前述のような根元であるのに対して、倒木2は幹ごと風によって、痛々しく斜めに切り倒されている（図3）。Bの考えていた平たく年輪の見える「切り株」のイメージが森の観察によって覆ったこと、また切り株1つを見ることで、その木がどのように傾き、倒れ、朽ちていったか、「死に様」のドラマが想像できることに驚いていた。

・A は、今までただ一様に「土は茶色、木は緑色、空は青色」だとしか思っていなかった色彩感についての森のイメージが大きく変わったことを上げた。よく見てみると、土はシダやコケに覆われて緑色になり、カエデとサンショウでは緑色の濃さ、淡さが大きく異なり、空を見上げてもカラマツの枝葉のせいでは空は見渡せない。

ここまでの各々異なる「萌えポイント」の観察を、ポストイットを用いて列挙、整理してみた。すると無意識のうちに、全員が同じように感じていたような考え方があることも明らかになった。私たちが、この敷地に足を踏み入れた時にまず感じたことは「倒木の圧倒感」であった。そこに注目し、次第に周りを見渡すと、倒木＝「死」を経験したのも昔は雄大に生きていたことがわかり、逆に死んだ倒木を支えにして新たに生を受けるものがある。つまり、倒木の「死」からはじまるライフサイクルを、全員自分たちの観察から考えていた。

また、E の感想について議論を進める中で、実は全員同じような体験をしているのではないかと、との発見が生まれた。班員は都会育ちなどで、人間の管理を離れた「野生」の森林に不慣れであった。そのため、山中湖の深い森に対して最初恐怖を感じていたり、ステレオタイプな負のイメージを持っていたりした。それが、朽ちつつある巨大な倒木と出会うことで、森全体に興味を広がり、森への心理的な距離が近づいたという過程を、全員無意識のうちに経ている。

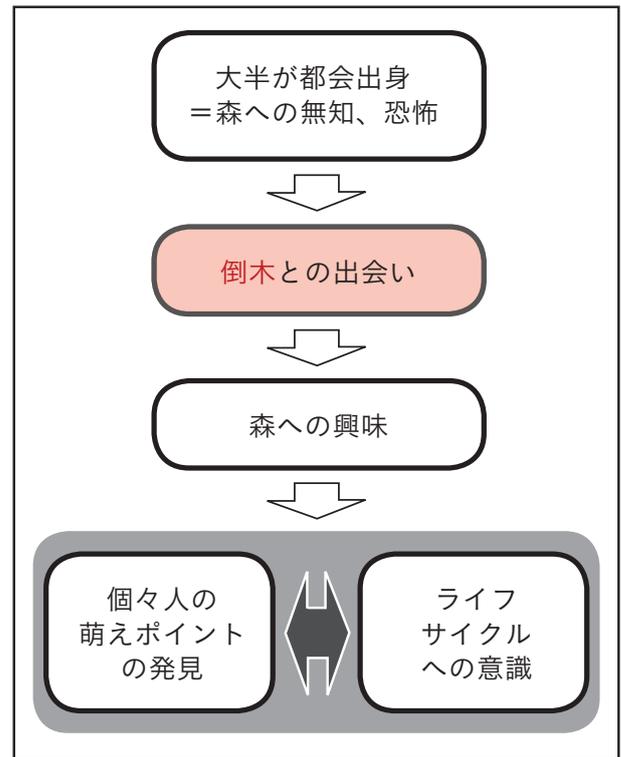


図4 2日目夜での私たちの思考体系 矢印は時間の発展を表す。

### 1.7. 先生からのエスキス (3日目朝)

以上の私たちの思考プロセスを図として表したものが右の図4である。班員のほとんどは「自然の森」になじみがなく、漠然とした恐怖や嫌悪感、あるいは無関心しかない。しかし、対象敷地を入るとまず否が応でも目に入る2つの「倒木」のスケールの大きさ、視覚的な複雑さに圧倒され、そこから倒木の周りの枯れ草、いまだ直立する木など森の他の生体に興味が移ってゆく。そして、各々がこれまで培ってきた自分たちの感性に基づく「萌えポイント」を見つけると同時に、そのそれぞれのポイントから、木が倒れ、またそこから育ってゆくという「ライフサイクル」を意識する。さらにそのことに注意して森を観察すると、新たな「萌えポイント」を発見して、……という、思考の行き来を私たちは経験した。この図を準備したうえで、3日目朝、宿舎でのエスキスに臨み先生の前で説明を行った。

指摘のあった点は、以下の3点である。

#### ① では一体、5班は何を「価値」と感じているのか。

実はこの指摘は、2日目の時点でも頂いている。5班は客観的事実に重きを置きすぎ、「私たち」が一体何を「価値」と考えているのかが分からない。特に、図4のフローチャートを見たため、先生方には私たちは「ライフサイクル」を価値であると考えていたようである。一方で私たちの認識は、図4のような「萌えポイント」⇔「ライフサイクル」の思考の行き来までには気づいていたものの、そのどちらかを価値と、あるいはそのような行き来を価値だと思っていたわけではなく、しかし具体的に「何」を私たちが大切にしているかまでの発見には至っていなかった。

#### ② 「萌えポイント」の魅力が分からない。

今回のエスキスでは「萌えポイント」の箇所を説明するにあたって、実際に私たち1人一人が「萌えた」ポイントについて説明を行ったが、その魅力を十分に自分たちの中で整理することができず、また伝えることができなかった。たとえば、既にこの時には私たちは「Cんすの木」を対象敷地のキーポイントとして考えていたので、Cを中心にその木について説明を試みたが、先生方はそれを把握しきれないよう見えた。その理由としては、実際にCんすの木を見ていない先生方がその（視覚でしか伝わらない）ダイナミクスを体感できないこと、

そのダイナミクス、そこから私たちの感じていたことを言語化できなかったことの両面があるだろう。

### ③ 班全体として議論がまとまりすぎていて面白くない。

それぞれが「萌えポイント」として各々の気づきを得たところから、「ライフサイクル」という、ある意味よく語られるような言葉に纏まりすぎているということを先生方から指摘された。(②のような話があったにしろ)ユニークな着眼点を持っているので、それをあるポイントに強引に収斂させるのではなく、様々な班内の意見を共有・議論してゆき深めるべきだと気づいた。

以上の宿舎でのエスキスを踏まえて、3日目での対象敷地の視察では、私たち自身での主観的イメージの形成・議論を目的に、以下のことを行う方針を決定した。

- ・ 主に「1対5プレゼン」を行う。これは、前日に各々が発表した「萌えポイント」や、その他現地で気づいたことについて、現物を全員で観察しながら1人ずつ5分程度の軽い発表を行う。その後、そのような思考に至った過程や、もっと深めた内容などについて班員からの質疑応答を行う。これを全6人で行い、互いに理解を深めるとともに現場で得た感覚の掘り起こしを行う。
- ・ その後、(最終発表に近いこともあるので)資料に何を載せるのか、どういう論を組み立てるかなどを、対象敷地その場で議論する。

その上で、現地到着のおよそ1時間半後、予定していた計画をちょうど熟したほどのタイミングでの先生方との現地エスキスをお願いし、方針をより定めることにした。

### 1.8. 対象敷地・萌えポイントの「1対5プレゼン」(3日目昼～午後)

予定していたように議論を行った。具体的にはまず、1.6.節に掲載した各々の萌えポイントを、B、私、C、D、E、Aの順にプレゼンした。内容については、おおよそ1.6.節の内容と重複する。一方、他の班員の内容、さらには自分の内容についても、前日午後での議論で釈然としなかった考えが、実物を見ることで明らかになることが判明した。たとえば「Cんすの木」について、実物を見ながらCの話聞くことで切り捨てた方の幹の切断面の残酷さ、一方で残した方の枝の、天頂へ伸びる瑞々しさが明らかになった。その中で、やはり片方の幹を切り捨てる、つまり自らの一部を「死」に追い込むことによって、もう片方の枝を「生」かすという、死→生のサイクルを自分の中で確認し、また共有した。

そのような議論の中で、Dから「それぞれが気づいた『萌えポイント』は、みな『死』から『生』が生まれる現場の記録なのではないか」という意見が出され、私含め班内で議論が起こった。BやDが見たように、大きく育った大木が倒れるとき、その折れた幹や切り株にダイナミックな痕跡を残し、それは後から見てもたどるこ

とができる。私やDが目した「倒木1」もその1つであり、それ自体は20mにもなるような大木が倒れると、微生物の働きで有機物が分解され、朽ちてゆく。その養分を吸い、あるいは森にばかりと空いた空間を利用して新しい生命が育ってゆく。それらはCが見たような、自分自身の中での「死→生」のプロセスを経ながら成長を重ね、高さ30mを超しそうなカラマツの「大木」などに成長する。議論を経て、このような過程が整理されてきた。



図5「大木」を下から

### 1.9. 対象敷地・現地での議論（3日目午後）

「1対5プレゼン」の流れで、雑談半分の感覚で対象敷地について話をしたが、これが議論の大きな飛躍点になった。ここで宋が話に出したことは、「人間と森林の比較」である。ここではそれぞれの「萌えポイント」の議論をベースにして、次の2点での比較が行われた。

1つは「生きる行動の判断基準」である。つまり、Cんすの木でみたように、森林が意思決定をするための最大にして唯一の判断基準は、「生命の保存、種の保存」である。ある幹を残しておいてももはやこれ以上養分を得られないと判断したときは、植物は何のためらいもなくその幹を切り落とす。

一方で人間はそうではないのではないかと、との問題意識が出てきた。Cんすの木のように、人間がある要素の成長を見込んで労力をつぎ込み、その成長が今後見込めないとわかった時、そう簡単に手を掛けたものを手放すだろうか。おそらく「勿体ない」、あるいは「愛着があるから切り離したくない」と思うのではないかと。また班内ではもっと極端な例も出てきた。現在の日本社会では高齢化が進み、人口の1/3が高齢者となっている。彼らには働く体力が残されていないので社会に奉仕できるわけではない一方で、医療費などに多額のコストを要し社会的負担になる。言わば、日本社会全体から見た『Cんすの木』の太い幹なのである。だからといって私たちは、「Cんすの木」のように明快に、負担になっている高齢世代を切り離すことはできない。それはなぜなのか。

人間を縛っているのは、「人を殺してはならない」という倫理観や「長者を敬え」とする宗教などである。森林の生物は、その厳しい生存競争を乗り越えて生き続けることこそが生の目的であり、だからこそ常に行動判断は「それによって自分が生存するか、種が生存するか」に落ちてゆく。しかし、人類は頭脳が発達し、衣食住が安定したことで、もはや「生きること」だけが生の目的ではなくなった。その自由な行動の選択肢を誘導するように、次第に倫理観や、「世間一般での考え方」などが形成されて行き、私たちの行動を目的づけ、規定するようになった。植物は生きるためには「種の保存」という低次の欲望しか持てないが、思考を備えた人間は倫理観などの「高次の欲望」を生の目的として持つ。

しかし、高次の欲望に従うことで低次の目的が達成できなくなるのではないかと、という逆説を、佐藤がイスラム教の例を挙げて説いた。イスラム教では豚を食べることが禁止されており、ムスリムはできるだけそれに忠実であろうとする。それは、イスラム教という考え方に従うことがムスリムの人々にとっての「生の目的」になっているからであり、それを彼らは疑わない。しかし、豚肉を食べないということは、その分だけ豚肉に含まれる脂肪などの栄養を切り捨てていることを意味する。つまり「高次の欲望」である倫理観に従ったばかりに、より「低次の欲望」である自分の存続が脅かされかねない。

2つ目の「森林と人間の比較」は、「死→生」のサイクルの継承の仕方である。これは、私の注目した倒木1＝「死」からの「生」の宿り方から議論が始まった。森では、ある大木が倒れるとそれが朽ち、そこに飛来した種子が芽を出して新たな生命が成長する。大木の中にあつた養分はそのまま新たな生命に取り込まれる。つまり、上に見たような、植物における生ける者の目的である「種の存続」は、死体を基盤に幼木が育つ受け継ぎが物理的になされることで、世代間の受け継ぎでも滞りなく行われている。

一方で、人間はそうではない。当然、人間の死体から幼児が生じることも、人間が生きるために人間の死体を摂取することもなく、世代間の物質的な受け継ぎはなされることがない（なお後者については、これも人間の倫理観がその行為を縛っているという話も出された）。

一方、人間の世代間の継承は肉体的なものに限らず、精神的、思想的なものを含む。これは、Bが、「体を次の世代に残すことができなくても、人間は遺書で自分の意志を伝えることができるのではないかと話したところから話が進展した。一方で私は、「意志を伝えるにしても、植物のように自然の摂理のプログラムに従って行われるのではなく、死にゆくものが主体的に、後世に残るものに伝えるべきものを伝えなければ途切れてしまうのではないかと考え、発言した。1つ目で人間の生の目的として話に出た「倫理観」や「宗教」にしても、ある人間が死んだらそのままその子どもに継承されるということはない。後世に残すためには、死にゆく人が考え、生き残る人に「遺言」を伝えなければならないし、生き残る人は、死にゆく人が残したいと考えた精神を受け継がなければならない。これは遺伝子にプログラムされたものではなく、人間が考えられるからこそ、考えて伝えていかなければならないことである。

2つ目の班での議論を振り返り、私は死んで行った人からの「遺言」の継承を、生き残った私自身ができているのかが疑わしくなった。たとえば、死んで行った日本や世界の偉人は、自分がどういう経験をして、どういうことを考えているのかを本として著している。本としたということは、つまり彼らが残すべき価値があると考え、

後世の人々が辿れる形に遺したということである。その「生の遺言」ともいべき書物を生き残る自分が辿り、人間としての継承をするべきであること、今の自分にはそれが足りていないことを猛省した。

#### 1.10 現地・宿舎でのエスキス（3日目午後～夜）

その後、現地で先生方とのエスキス（というよりディスカッションといった方が良いかもしれない）、また宿舎着・班内での議論の後、再度エスキスをしていただき、日付が変わるころまで班内での議論を重ねた。その内容をまとめると以下ようになる。

#### ④ 実際に対象敷地を見てみて、「死」から始まるライフサイクルは確かに感じられる。

この理解を先生方がしてくださったのは、先ほど述べた通り実際に先生が倒木1を「見た」からであるのが大きいのではないかと、エスキス後の班内議論で話題になった。つまり、今回私たちが「ライフサイクル」という1つのキーワードを見出したのは、どこかで聞いたことのある言葉をいい加減に持ってきたのではなく、森に恐れ恐れ足を踏み入れ、倒木に圧倒され、周囲の森を省察し、「Cんすの木」について熟考するという過程を通じて初めて得られたものである。

#### ⑤ 「この草木」で「この私たち」が考えたことの重要性。

これは内村先生の意見から明らかになった。内村先生は私たちの議論を聞き、「この森を見て『自然は種の生存を第一に動いている』と言っても、自然全体が本当にそのように考え、その通りに動いているかどうかは定かではない」とした上で、「森を捉えているのは『私たち』であり、その私たちが見ているのは『対象敷地』なので、『自然』『人間』というのは話が大きすぎる」という提言をされた。それを踏まえ、私は「植物の『意図』を調べるためにさらなる調査を行うべきではないか」との意見を出した。一方、Dの「今回は『自然』『人間』と一般化するよりも、『私たち』が考えたということが重要ではないか」という意見もあり、時間が十分でないこともあって、主体・対象を具体化して絞ることにした。

つまり自然に慣れていなかったこの私たちが、倒木1のあるこの森に遅く生きる、この植生の多様な生き方を、私たちそれぞれが観察し、議論した。私たちとその植生では、その考え方が違うことに気づき、そこからさらに「私たち」を客観的に眺め、反省するところに繋がった。これはただ話を聞いて考える以上に、自分の根本を問い直すものであり、それこそがこの森が私たちにくれた「価値」なのではないかと整理した。

#### ⑥ その上で、対象敷地の特殊性も考慮してみる。

これは、まず現地エスキスで森川先生に指摘されたことである。今までの議論では見落とされていたが、この森はいわゆる「原生林」ではない。藤原先生のご発言の通り、対象敷地は90年前に帝国大学の演習林として整備するために、もともと草原であったものの草を掃いてカラマツを植えたものである。確かにその後90年間はほぼ人間の手が加えられていないが、自然の生命から見たら90年など短い時間であり、ただこの森を見て「自然のライフサイクルが明らかになった」とするのは早計であるということであった。

それを受け、班内で議論を行ったが、これが若干議論の迷走を生んだ。確かに植林後90年経過した今の森を「自然の森」ということは正しくないが、これは自然の「種の生存」というプログラムの初期値を変えただけではないのか。つまり、私たちが注目した「死→生のライフサイクル」というのは、「種の生存」のために死ぬべきものが死に、生き延びるべきものが生き残る弱肉強食の動的プロセスであり、それ自体は原生林でも、計画的植林のあった森でも変わらないだろう、だから先生の言ったことは当たらないのではないかと話が進んだ。

この疑問については、宿舎到着後でのエスキスで、尾崎先生が解消してくださった。確かに植物が主を残そうとするプロセス自体は、原生林でも人工林でも変わらないだろう。重要なのは、私たちがそれを原生林ではなく、もともと「カラマツ植林の実験場」であった東京大学演習林という場所で気づいたということである。そもそもは農学的使命を背負った実験場において、今回工学部社会基盤学科の学生が「森の『価値』」を見出す合宿を行っている。さらにその中の1つの班が、そこでの草木の死と生のプロセスと、人間の死と生を対照して考えることを通じて、学生たちが今後の生き方の指針を見出している。その「目的-効果」の不一致が、かえって私たちの思考プロセスに説得力を与えているということで、私たちは漸く先生方の意図を理解することができ、納得した。

### 1.11. 最終成果のとりまとめ (3日目夜～4日目未明)

考え方の筋は日付の変わるころに大枠がまとまり、それと並行しながら、またそれ以降にかけて、最終課題である平面図・断面図・プレゼン資料の制作に取り掛かった。内容は成果物を見ていただきたいが、表現すべきであると考えたのは以下の内容である。

平面図は、「死」から始まるライフサイクルを意識し始めるきっかけとして、対象敷地に様々な様相で現れる「死」と、そこから立ち上がる「生」をまとめた「死に様マップ」である。一見ただのカオスな森林であるように見えるが、そこには班員一人一人の「萌えポイント」がある。その自分独自の「死」への気づきがあって初めて、それをベースに2日目夜の討論や3日目現地での雑談を経て、私たちの「価値の創出」に至った。この制作はC, B, Eが行った。

断面図は、そのような「萌えポイント」を見て、班員がどのように考えているのかを描くことに注力した。描かれているのは「倒木1」、「Cんすの木」、「大木」と、その周囲にたたずむ人間たちである。この人間は私たち一人一人をイメージしており、植生の様子の観察を通じて思考を巡らせている。

私は倒木1を眺めて、「どんなに大きく育ったカラマツもいつかは倒れ朽ちるが、それを地盤として新し芽を伸ばす草木がある」ことを観察する。そして、「私たちもこの倒木1と同じように、他者の『死』を受け継いで生きているのだろうか」と考える。または、CはCんすの木を眺めて、「太い枝でも光合成ができなくなればそれを切り落とし、細い枝に自分の未来を託して育てている」ことを観察する。そして、「私たちのいる日本社会はそう合理的ではないだろう」と考える。そのような、「ここの植生」と「この私たち」の、死に方、生き方の違いを捉える私たちが、この断面図の主題である。

この断面図は、私とDが主に取り掛かり、私は倒木1と大木を、Dが周囲の植生、Cんすの木と人を主に描いた。断面図を描くうえで苦労したのは、スケールが大きい大木ではなく、その根元に横たわる倒木1と、そこにいる人をいかにして注目させるかである。そこで、描画作業の際、福島先生にアドバイスを頂いた。大きい大木を質素に描く一方で、倒木1を丁寧に描くことで視線を下部に持ってゆくこと、後ろのレイヤーとして背景の木々を描くことで立体感を出すことを教えていただき、作業を行った。鉛筆書きのためモノクロになった分、密度濃くコケやキノコを書き足した倒木1が浮いて見えて良かったと思う反面、大木のスケール感が不正確で、雑になってしまったことに後悔を残している。

プレゼン資料では、図4のダイアグラムを発展させ、ここまでの議論を時系列でまとめることによって議論の全容をみせることを心掛けた。このレイアウトは班長であるAとEが主に担当したが、前述の通り方針づくりは全員のディスカッションの中で行われている。

「価値」の部分で、私自身の言葉で纏め直すと以下ようになる。

大半が都会育ちで、自然を見つめることの少なかった私たちは、この森を訪れるとまず目に入る倒木1に圧倒される。そこから森全体に興味が広がり、1人ひとりの発見を通じて森にのめり込み、その魅力を語り合い議論した。すると、森は「死」を通じて「種の生存」のためのライフサイクルが始まる場所であると気づくとともに、私たち人間はその植生ほど「生の目的」や「世代間の継承」が単純でないことを見出した。これは私自分の生き方の根本を問い直すものであり、この森がこの私にそうさせたということが、対象敷地が私たちに提供した「価値」なのではないかと考えた。

### 1.12. 講評会、先生方からの総括 (4日目朝～)

最終成果物は朝5時頃に完成し、仮眠をとった後班ごとのプレゼンテーション、講評会を行った。私は武藤とともに、石田ツアーでプレゼンを行った。

プレゼン自体は、2人で行ったこともあって自分の考えた議論の流れを伝えることを伝えることがある程度できたのではと考えている。その一方で、私が気になったレビューは以下のものである。

#### ⑦「死」という概念についての考察が不十分であった。

これは例えば石田先生やT(他班学生)から「人間の生の目的に『種の生存』が含まれないのではなく、『種の生存』が達成されたうえでさらに高次の『倫理観』『宗教』などの概念が生まれているのではないか」という意見があったり、内村先生から森川先生から「朽ちて次の生き物の土台になっているのを『死』と言い切るのではなく、広い意味での『生』として捉えてみるのはどうか」という意見があったりした。いずれも尤もな意見であり、実際

時間的余裕があれば踏み込んで考えるべき内容であったと考える。

一方で再三になるが、自分たちが特筆すべきであると感じていたのは「死」「生」についての哲学的議論の内容自体ではなく、森に興味を持っていなかった私たちが、議論を巻き起こしたことによって大なり小なりこの森に愛着を持てるようになったという点である。そのため、このような批評を受けて議論がまた新たに巻き起こることは、逆に私たちにとっての森の「価値」を高めたのではないかと考える。

#### ⑧ 班の多様な意見が、「価値」に飛躍している。

私はこの点について多くの指摘が来るのではないかと予想していたが、実際フィードバックがあったのは（私の確認しているもので）K（他班学生）だけであった。というのも、実際私自身の反省として、「萌えポイント」として気づいた点を、最終的な価値には全部拾いきれていないように感じている。たとえば、今回の「価値」の創出に1.6.節でAが挙げた、「予想以上に森の色彩が豊かであり、ステレオタイプな森のイメージと異なっていた」という萌えポイントをあまり使用していない。実は、この萌えポイントは、私自身にとって興味深かった。というのも今回の班での議論の方向性とは関係なく、自分たちの「土は茶色、木は葉が緑、枝は丸く生い茂る」というイメージが、森の観察によって瓦解してゆくプロセスが面白く、逆にそれを通じて、自分が普段「知っている」と思っているような自分のイメージが、実は自分の中にしかない虚構にすぎないと気づいた。

方法論については個人的に興味があるので、後述の「感想」で述べる。

#### ⑨ 「場所固有の価値」になっているのか。

これについても後述の「感想」で述べる。

## 2. 感想

### 2.1. 意見の集約方法、グループワークの進め方について

5班では、1日目では各々の観察に基づいて対象敷地の概略をラフな平面図に一元化してまとめる方法で、複雑な対象敷地の中での客観的事実を整理した(1.3.)。その後、主観的な各々の感じ方を拾い上げるために自分の好きな場所、「萌えポイント」を探すとこの作業を通じて「好き」という感情の背景にある考え方の構造を探り(1.6.)、ポストイットを用いて要素を洗い出し、時間軸の流れで構造化した(図4)。ただしこの構造化で纏めすぎた嫌があったため、それを1人ひとりの言葉で語る「1対5プレゼン」を通じて理解・共有した(1.8.)。その中でいくつかの「萌えポイント」が、雑談をきっかけとした話を通じて、森から離れた「倫理観」や「遺言」と結びついていった(1.9.)が、最終的にはやはり多様な意見がある中で、「Cんすの木」と「倒木」に主に見方を絞って、そこから2点に関する見方を深めていった(1.11.)。このうち、「平面図」と「萌えポイント」は私が、「1対5プレゼン」は芳賀が、雑談を通じた議論の進展は宋が軸となって行われた。

取っ掛かりの情報の整理について、「一つの平面図への落とし込み」は、全員で同じ図に情報を落とすことで、客観的事実については見方をそろえることができるのではないかと期待して提案したものである。実際それ以降の議論は、常にその平面図を軸に進めることができ、はじめからポストイットを用いるより情報のまとまりの点で効果的であったのではないかと感じる。一方で、「平面図を完成させる」という目標ができてしまったせいで、2日目昼くらいまで情報の網羅性がかり気にしてしまう状態になってしまった。

そこを抜け出す方法として各班員が様々な方法を考えてみたが、特にAが提案した「1対5プレゼン」が、それぞれの考え方を互いに理解し合い、質疑応答で深めることができ効果的だった。先生のエスキスのときにも感じたが、実際の木を相手に見せながら、自分の感じたことを系統立てて説明することが、どんな明瞭な図を作成するより効果的であることを痛感した。なお、この方法のもとになったのは、2班の「各々がエッセイを書いて共有する」という方法である。今回私たちは「言葉で質疑応答する」ためにプレゼンという形をとったが、議論を後からでも丁寧にたどるために、文章化が必要であったことは猛省される。

1.11.に書いた通り、最終成果を纏めるための方針づくりの作業中で、Aの萌えポイントなど、いくつか切り捨てていった気づきは存在する。このような、「死と生」や「ライフサイクル」ととらわれない面について、議論を通して考えを深めたいとは思った反面、ここまで築き上げてきた方向性を崩すべきでないのではないかと、また最終成果の提出時間が限られている点で、あえてその点を無視して話を進めた所はある。その代り、班での話し合いを通じてある一つの見方に班としての考え方をクローズアップさせ（これは尾崎先生にエスキスの際薦められた）、それを軸に6人の捉え方を意識しながら「価値」に昇華させる手法をとった。一方7班の発表などでは、

個々人の「多様な注目点の違い」をそれぞれで「価値」まで昇華させ、その対比を論じていたので、論の骨子としては私たち5班と対照的であった。

その方法論の違いについての良し悪しは、班のメンバーの特性や議論内容に依るところもあると思うので判断は難しい。ただし、前者をとった私たちが、もし後者の手法をとって「個人の考え方」ベースで議論を進めていたら最後の成果にはどのような視点が必要であったか、あるいは後者の手法を取るのに、どのような議論の組み立てが必要であったかは考えてみたい。特に今回のエスキスを通じて、私は議論の中で「全体の意見を纏めて合意させる」ように無意識に他人を誘導してしまうことに気づいた。7班のように個人の感じ方を尊重しながら、それをどう班全体の成果物として形にするかは、今後の課題として考えていきたい。

## 2.2. 場所の「固有性」、そもそもの「価値」について

今回の最終講評の中で、「『死』に場所固有の文脈を入れてほしい」「概念的なものでない『死』の価値を見つけてほしかった」という意見も聞くことができたが、この点は演習中ずっと悩み、今も結論が出ていないことに関するものである。つまり、「場所固有の価値」とは何なのか、最後まで掴むことができなかった。

まず「場所固有の価値」ということについて、エスキスなどでの先生のご発言を、「世界にこの場所一つだけ」というものを見つける、という風に捉えて考えていたが、そのようなものを見つけるのは至極難しいのではないかと感じた。「白神山地はブナの原生林です」のような言い方は容易にできるだろうが、そのような固有性が今回の5班の対象敷地ではいったい何だったのか。

私たちが見て考えると、この敷地は「人の手入れがなく自然に荒れた土地」のように目に映る。一方森川先生がおっしゃったように、この土地を紐解くと、実は「90年前に草原を刈り取って、そこに計画的にカラマツを植えた場所である」。知りうる限りのことをできるだけ知ってその場所を考えることができるのなら、後者まで含めて考えるのが「場所の固有性」につながるのだろう（実際、私たちの議論ではここまでを捉え切ることができなかった）。しかし、私たちがその場所に実際に足を踏み入れ、目で見て感じたものは、そのほとんどが前者に由来している。というのは、（都会に育った）私たちにとって、「人工物」の入り込まない森に入って3泊4日細かく観察するのは初めてであり、この場所の「自然」は、本当に昔から「自然」であるように映った。そこで、では何がこの森をそう「自然」足らしめているのかと考え、前述の「死」というキーワードに至った。その意味で、あくまで私たちにとって、この場所の「死」に「自然」を感じたのは、この場所独自の経験になるのではないかと考えたのである（もちろん私たちの視野が狭かった、で片付くことなのかもしれないが、少なくとも私にとっては人生の中で特筆すべき経験であった）。

「価値」という言葉が、捉えどころのない言葉として私の中に残った。先生がエスキスの際、「ライフサイクルというのは中身がありそうで無さそうな言葉だ、それだけで『価値』を持つような理由にはならない」という話をされたが、「価値」という言葉も同様に、中身がありそうで無さそうな言葉のように感じられた。

最終的に評価された（ように感じられた）2班や7班、9班の内容をたどると、2班は「冒険する」、7班が「調べて森に出る、を繰り返すことで成長する」など、9班が「道を切り切った達成感を味わう」など、『ある主体がその場所で何をできるか』、ということを考えていることが分かる。実際、『大辞林第三版』には【価値】「①物がもっている、何らかの目的実現に役立つ性質や程度」とあり、「何らかの目的実現」がどのようになされるかが、その場所の価値の捉え方（福島先生の言っていた「価値構造」に通じるのではないのでしょうか）なのではないかと考える。

すると、今回の演習課題は、「与えられた地点を複数の視点から観察し、深く知ることを通じて、あなたにとってその場所がどのような目的実現に役立つか」ということになるのではないかと考える。もちろんここで言う目的実現は、「売って資金にすることができ」「木を切って木材にすることができ」といった即物的なものにとどまらず、「ただ座って癒される」「冒険を夢見る」「死についての議論を深める」といったレベルの事象を含む。すると、ただただ「価値」という言葉を繰り返して考えるより、より踏み込んで考えられるのではないかと考えられる。

これに沿って考えれば、たとえば9班では、その敷地をゴールを目指す9班の班員は苦勞をして標高差50mを切り切り、そこから谷底を見下ろすことで達成感を得ることに気づいたので、「班員が達成感を味わう場所」として対象敷地の価値を見出したことになる。一方で3班は最終的には「今後の公共空間の創出に役立つ」ことを価値として述べていたが、その主体は「3班の班員」でなく「公共空間のプランナー」であって、その齟齬のせいで「価値」を語る説得力に弱いのではないかと考える。

### 2.3. 表現方法について

最後に、最終講評で森川先生のおっしゃった「表現方法」についての感想を述べる。

「コンセプトを最初に述べるな」という批評によって、今までの自分の表現に対する考え方の甘さを再認識させられた。2年後期や3年前期の授業で、いくつかプレゼンテーションやポスターでの発表を経験したが、その際最初の「タイトル」や「コンセプト」決め毎に毎回苦労していた。つまり、それまでの議論を完全に要約し、一言で表す表現を探していた（いずれも上手にできなかった）。今回の講評を聞き、確かに3泊4日かけての議論を端的にまとめることなど不可能であるということ、そのためには聴衆が私たちの議論を追体験できるようにまとめることが重要ではないかと感じた。今回、「『死』がこの森の価値なのか」と何回も言われたところからも痛感させられた。

その上でさらに、今回「平面図ではこれを魅せる、断面図ではこれを魅せる」とある程度方針を立ててから作図の作業に取り掛かったにもかかわらず、「この平面図（断面図）は何を表しているのか」という問いがいくつか聞かれたことも心残りである。私自身は意味もなくディテールに拘り過ぎる嫌いがあることを認識しているが、しっかり表現したいことを明確にしたうえで、さらに細部を詰めていくことでしか丁寧で簡明な表現ができないことを、改めて身に沁みて感じた。将来何かしらの形でデザインを行いたいと考えている私にとって、この最終発表に向けての準備も非常に大きな経験となった。



対象敷地で存在感を示す倒木（撮影：沢津橋）

## 1 はじめに

3泊4日のフィールド演習で得たものは、考えていたよりも大きかった。慣れていない班長になってしまったり天候が不安定だったりお酒を飲みすぎたりと大変な4日間であったが、じんわりとした達成感を得ることが出来た。

以下、班の議論、見出した価値、発表と3本立てでそれぞれまとめた後、最後に全体を通して考えたこと、感じたことをまとめたい。なお、本レポートは演習期間中の出来事、考察に加えて、演習後に考えたことも含んでいる。

## 2 班での議論について

5班は3日目午前まで、あまり方向性の定まらない議論をしていた。最初のエスキスでは「サイクル」と「面白さ」という二本立てで説明したが、「そういうことはどの班でも言う」という講評を受けてしまった。一步引いて考えればまさにそのとおりであり、その対象地点ならではの特徴や発見を十分に考えきれていなかった。我々の班で最初使用したキーワードである「サイクル」のような一般論はわかりやすく反対意見がまず出ないため、よく注意しないと議論の主役の座を占めやすい。そのようにしてまとまった意見は一般論を自分たちの議論の中に埋め込んだだけであり、実質的な意味や説得力を持たないことを実感した。基礎プロジェクトIでも感じたことであるが、意味のある議論をするためには使いやすい一般論ではなく、敷地の忠実な観察と観察結果に基づく議論こそが間違いなく重要である。

見ることの重要性は事前資料にも書いてあり自分でも納得しているつもりであったが、議論の過程で倒木の朽ち方や倒木周囲の植生、木漏れ日の様子など敷地で観察した内容のかなりの部分が抜け落ちてしまった。ポストイットを活用して構造化を進めた際に、「サイクル」に含まれない部分は自然と「面白さ」・「そのほか」としてまとめてしまったのが原因だと思う。また各人の認識の違いを曖昧な言葉でまとめて満足してしまったのもよくなかった。認識の差は意味ある議論を生むうえで重要なポイントであると思うが、それを有効活用できなかったのは反省点である。例えば3日目朝の段階ではサイクルを「受け継ぎ」と捉えるのか「新陳代謝～更新」と捉えるかで差があった。これは議論の過程で浮かび上がってきたことで、二つの言葉は一見似ているのだが、受け継ぎは古い生が死んだあと新しい生に引き継がれるというイメージだが、新陳代謝のほうは、新しい生のために古い生が死んでいくというイメージである。そこを掘り下げをせず、「違いがありました」という段階で議論が終わってしまっていた。このことは結局、最終発表に生かすことが出来なかった。

最初のうちは植生にも注目して観察していたのだが、拡散した議論を絞ったためこの話題はあまり盛り込むこ

とが出来なかった。

3 日目の現地観察&雑談&現地エスキスあたりからようやく方向性が定まり始めた。リラックスした環境の中で話すと、話はずみ新たなキーワードが幾つも出てきてとても面白かった。森での作業後の雑談は自分にとって癒しそのものであった。そして雑談とエスキス、その後の話し合いの末「死」というキーワードを軸として敷地をみて考察し、その思考過程に価値を見出すという方針に収斂していった。

最初私は、倒木をみてもそれが「死」の状態であるとは考えなかった。また生が宿しているとも考えず、「ただ存在している」以上の感想は持たなかった。後から考えてみると、人間はミイラや検体のような特殊な例を除いては、「死」の状態のまま長期間維持され続けることがない。そのため「死」が目の前に見えるということに意識が向かなかつたのだと思う。

「死」を意識しだしたのは、やはり台風によって折れた木を目撃してからで、横たわっている倒木にもかつて折れた瞬間があったのだと想像力を掻き立てられた。

### 3 我々の見出した価値について

5 班では、私たちをのめり込ませた森の力、自分たちの生き方を考えるきっかけを与えてくれた森そのものに価値を見出した。とはいえその生き方については、考えた内容を説明するにとどまってしまった。以下では演習中に考えたこと、演習後本レポート執筆にあたり考えたことを述べていきたい。

#### 3. 1 生き方～草木と私～

私は2日目までの観察で、自然界は物質の循環が狭い範囲で回っているという印象をうけた。原子レベルで見れば、気体として飛散したり何らかの力で運ばれたりしていといった現象があまり生じていないように見えたからだ。もっとも、これは遠くから原材料をもってきて遠くへとごみを捨てる現代の人間社会と比較しての話である。思い返してみると、私は2日目あたりから人間と自然とを比べがちであった。最終発表においてはもっと広い枠の中に、自分の感じたことも位置付けることが出来たと思っている。

発表の時点では人間は肉体的には循環せず、知識・精神・金銭面でのみ後の世代に引き継ぐことが出来ると考えていた。だが今は人間の肉体も大きな物質循環の一部なのかもしれないと思える。最終発表時には人間は肉体的に他の生物の糧となることはないとしたが、結局肉体を燃やした際に出る二酸化炭素はいずれ植物に吸収されるわけだし、全く糧になっていないわけでもなかった。

現代を生きる我々は生と死というものを明確に区別しようとしている。例えば数年前には脳死は死であるかどうかという議論が注目されていた。だが森を観察しているうちに、生と死とは実は全体の流れの一部であり、表裏一体であると感じた。なぜ我々が生と死を明確に区別しようとするかということ、人間は意識があり「生」の実感が伴っているからではないかと思う。自分が生きているとは認識できるが、おそらく自分が死んでいるとは認識できない。我々にとっては生こそが通常の状態、死は異常なのだ。他の生物と違い「生」の実感があるからこそ、生の対極のように思える死に対しての恐れも生じているし、諸宗教は死に対して特別な意味を見出そうとしているのではないか。

だが生と死が表裏一体であるということと、各草木が生存のために全力を尽くすということはなんとなくかみ合わない気もする。このことは次節3.2で触れたい。

現代を生きる我々は種の繁栄以外にも、趣味やお金を稼ぐなど様々な目的・目標をもって生きている。だがこれは決して人間だから自動的に享受出来ている権利ではない。例えば中東の内戦の様子をみていると、自らと家族の生存以外の目的に振り向けられる余剰時間が存在しない社会もあることを思い知らされる。そのような社会では、我々のように森をみて価値を見出すなどと悠長なことをやっている暇はないだろう。自分が日本に生まれたという物凄い幸運を喜ばざるをえない。

最終発表において「自然のほうが合理的にみえた」と言及したが、演習前私はそのような感情を抱いたことが一度もなかった。ところが班の中には、それは当然だと考えていた人もいた。彼は生態系に小さいころから興味があったらしく、自分より自然と向き合ってきた時間が長く自然に対する見方に違いがあると感じた。

私は今では草木が人間より合理的に生きていると感じているが、だから草木の生き方のほうが良いとは全く思っていない。むしろ生物の種の一つである人間が遅々としてではあるが、倫理観や道徳心などを発展させてき

たなと感心している。草木の生き方は合理的と言ってもそれはあくまで生存に関しての厳しい合理性であり、そこに「生」を楽しむ余裕はない。人間として生まれたからにはあと60年程の寿命を有意義に全うしたいと考えている。今は漠然としていて先がよく見えていないが、そこで自分が何をしたいのか早いうちに考えないといけなそうだ。

### 3. 2 植物を擬人化して考えていること

私の発表に対して福島先生から「人間が他の生物を擬人化する条件はなんだと思うか」という難しい問いをいただいた。今でも答えはわからないが、考える過程で自分の思考の癖に気が付いた。

それは、草一本ずつ、木一本ずつそれぞれが一つの生命体であると考えていたことだ。少し考えると、この考え方には疑問符が付く。動物の場合、一つの脳が支配している部分を一つの生命体と捉えるのが自然であろうが、植物の場合どう考えるのが適切なのだろうか。細胞の集合に過ぎないとみるべきなのか、逆にもっと広い範囲で空間そのものに生が宿っていると考えるべきなのか、いろいろな見方が出来そうである。いずれにせよ人間や他の動物と同じように、一つの個体に一つの生が宿るという見方は相応しくなさそうだ。

例として、演習期間中の台風で太めの幹がおれた一方、脇から生えていた枝は残った木（通称ちゃんすの木）について考えてみる。この木を見て、私は木が不必要な部分を弱体化させて折れやすくしていたと捉えた。これは木に一つの生命が宿っていると潜在的に仮定しており、擬人化したような考え方をしていたと言える。だが幹の細胞が自らの条件不利により成長をやめていて弱体化したと捉えることもできる。また視野を広げて空間で考えると、生き残れるものが生き残っただけで自然の通常の姿と考えることもできる。そこに我々が普段考える意味での生や死の概念はない。

草木の生の考え方には、自分で思いつくだけでも上記の3通りがある。振り返ってみると、演習中はその中の一つの見方、草一本、木一本ごとに生命が宿るという考え方によりすぎていたように思う。

### 4 発表について

講評によると、発表がコンセプト先行のように受け取られてしまったようだ。我々が発表の題名「死とその先～草木と私～」を決定したのは本当に最後の最後であった。事実に基づいて着実な議論を進めてきたことには自信がある。我々が議論してきた要素のすべてを含んではいないものの、議論から帰納的に導いたつもりであった。だが結果として発表内容が逆にコンセプトに引きずられたように聞こえたのなら、それは本意ではない。そうってしまった最大の原因は発表練習時間が取れなかったことだと考えられる。話し合った事柄についてはみんなで確認を取りながら共通理解のもとで進めていたからだ。

仮にもう少し時間があれば班の中で一人ひとりが発表し、それを互いに評価しあうような練習を事前にしたかった。そうすることで時間制約が厳しい中発表で、どのようにしたら相手によりよく伝えられるかという点まで意識が回ったと思う。また、発表内容がキレイゴトすぎると指摘も受けた。おそらく最初にキレイゴトありきで発表を組み立てたように聞こえたのだと思う。その原因も我々が辿った思考過程を発表にうまく盛り込めなかったことであるだろう。

この演習では森の持つ価値について考えて、それをその場所を初めて訪れる聴衆に理解してもらうまでが目的であるが、理解してもらう難しさを感じた。特に思考の過程を追体験できるように説明することは大変だ。またどうしても発表は独りよがりになりがちで、客観的な視点が足りなくなってしまうと反省している。短時間で場所の特性と我々の思考過程を理解してもらうためにはより言葉の精度を上げる努力が必要だったと言える。

### 5 演習を通して

この演習はとてども時間が足りなかった。台風が来るなど不測の事態もあったが、その分スケッチ課題がなくなるなど内容に変更があったため、それが時間不足の主要因とは思えない。そして他の班も例外なく最終日深夜まで作業していた様子を見ると、我々5班だけが時間マネジメントに失敗したわけではなさそうだ。あの課題を十分に処理し、かつ発表の準備までするためにはあと半日は必要だと思っている。

投入時間と成果は全く比例するものではないが、2日目までにもう少し担当敷地の価値について議論したかった。私の推測では、2日目午後の観察時に全員で現地雑談をしていれば議論の進捗が大きく違ったと考えている。2日目午後は台風の影響で午前に行けなかった分、各人が担当区域の観察にかかりっきりになってしまい、互いの思いを共有しようとする余裕がなかった。折角の班活動なので、今後同じ境遇に出会ったら時間がなくとも話す時間は捻出したい。

多くの人に共通していると思うが、森と向き合って自分の中の森の像が典型的な森林像から脱却しつつあることを感じた。もともとのイメージは土に木が生えていて葉が茂っているという極めて貧相なものであった。高校時代までずっと福島県で育ってきたものの、森に触れた機会は、学校の遠足で行ったり家族で訪ねたりした遊歩道ぐらいしかなかったと思う。そのため、森を身近に感じたことは一度もなかった。加えて、もともと植物など自然界への興味関心がなさ過ぎて一般常識レベルすら怪しいのだが、自然に関する知識が少しはないと社会基盤の世界では生きていけなそうだと感じた。少なくとも一般的なレベルまでは早期に追いつきたい。

演習を通じて、一口に森と言っても生えている木の種類や手入れの度合いによって印象は全く異なるし、光加減や地形、水の流れによって一地点、一地点ごとに別の風景があると感じた。5班の担当敷地は人手があまり入っていないとはいえ、林齢がせいぜい数十年の人工林でしかない。私の目ではそれは自然の姿そのものにみえたが、それは自分の自然と向き合う経験の乏しさゆえであろう。原生林のある場所として森川先生からインドネシア行を勧められたが流石に気軽に行ける場所ではないので、尾崎先生から勧められた高野山あたりについて触れてみたい。

自らの価値観に変化があったのだが、価値は外部から付け加えるものではなく、そこに見出すものであるという考え方になってきた。東京に戻ってきてから、街中に「価値」を見出せるか考えてみたが、見つけようと思えば価値を掘り当てることは出来ると思えた。価値を見出していくという姿勢はまちづくりなどにおいても必要となるものだと思う。

## 6 その他

### ○お酒

完全に自己責任であるのだが、2日目の夜つい友達とたくさんお酒を飲んでしまい、数人に迷惑をかけてしまった。今までで一番多く飲み、アルコールに対しての自分の限界値が分かった気がする。かつて東畑先生が授業で、中央アジアでは挨拶の一環として大量にお酒を飲むという話をされていた。もしも自分がそういう境遇におかれたならば、今回の教訓を生かし節度をもって対応したい。

### ○事前資料

6月に配布された事前資料は不備が多かったように思う。少なくともパソコンの必要性を明記してほしかった。5班ではパソコンが1台しかなく、不便に思うことが何度かあった。また、資料の中にアメニティが何もないと書いてあったため事前に携帯シャンプーを購入してきたが実際は不必要であった。無駄になってしまい残念である。

### ○演習形式の授業

私はフィールド演習のような演習系の授業が好きである。どの演習も身につくものがあるしそれが後の演習や日常に影響を及ぼしていると感じている。また普段あまり話さない人や先生とかかわれる点も面白い。TAの方が3本指に入る思い出と仰っていたが、私にとっても社会基盤学科での3本指に入る思い出になると確信している。担当だった内村先生グループの先生方には、ときには攪乱されたがヒントとなる助言を多くいただくことができ、大変感謝している。また私が班長を曲がりなりにもやり遂げられたのは班員みんなの温かい協力あればこそであった。とてもありがたく思っている。

## 7 写真



お気に入りの写真のひとつ。枝があたかも人工的にはめ込まれたように見えるが、自然に起きたことである。(撮影：芳賀)



演習終了後の達成感に満ちた表情での集合写真。私は右から3番目。

## 【概要】

6班は今回のフィールド演習の課題に対して、その場所の持つ価値構造に着目した成果物を作り、発表しました。おそらく全9班の発表の中で最も複雑で分かりにくかったであろう発表は6班であったと思います。教員の方たちや生徒の一部は褒めてくれましたが、それでも大多数の人たちにとって理解しがたい発表であったと思います。なぜそのような発表になったか、どのような班内での議論があったのかを説明していきます。

## 【6班の論理】

まず、6班の議論は1日目2日目と、ポストイットに班員6人が感じたことを書いて張り出していくという、一見オーソドックスなものでした。3色のポストイットを使って、黄色は個人が6班の区画に対して抱いた感想、赤はそこに見出した価値、そして緑がそこにあると思う価値の基準でした。これはどういうことかという、具体例として、黄色は「暗い」「シカの痕跡がある」「茂っている」などで、赤が「生物の痕跡が豊か」「丸太が新鮮」などで緑が「農業」「生物」「林業」などです。(写真1)

この方針で1日目2日目の議論は終わりました。現地では雨の中エリアを5m×5mの区画16個に分けて写真を撮ったり、断面を決めておおまかな測量をしたりしました。それをもとに簡易的な平面図や断面図を作成したりしました。

ここまでが2日目までの6班の流れです。2日目の夜にある先生からこの方針を注意されたことで、3日目の議論の方向性が大きく変わりました。その注意とはポストイットの使い方です。緑色のポストイットに価値基準を書きましたが、それはしてはいけないことでありました。なぜなら価値基準というものは議論していく中で初めて導き出されるものであり、それを最初に書き出すのは順序がおかしいと、そのような指摘を受けました。全体的な進捗も他の班より遅いということもあり、3日目はひたすら議論をしました。他の班が現地でエスキスを受けている中、6班はエリア内にスズメバチの巣があったというアクシデントもあり、3日目は屋外に出ることなくずっと屋内で議論していました。他の班よりもずっと長い間議論をしていたからこそ、他の班とは全く違う方向性のものになりました。それでは3日目の流れをまとめます。

3日目、6班は初心に帰り、1から議論をすることにしました。それぞれが6班のエリアにどのような価値を感じたかだけに絞り、ポストイットを使って6人の情報共有をしました。その結果5つくらいのトピックが出てきました。僕たちはエスキスを受けた結果をもとに、それらのトピック(丸太、オープンスペース、シカ、多様性、蔓)に対して、なぜ各班員が各々の価値を感じたのか、どのような人生、背景があったからそのようなものにそのような価値を見出したのかをどんどん掘り下げていきました。(写真2)この段階こそが、他の班と決定的に違った方向性に6班が至った瞬間です。他の班がその場所の価値を発見して終わったのに対して、僕らの班はその価値を各個人が感じた理由、拝啓、人生にまで議論を掘り下げたのです。ここで6班の議題は「班のエリアにどのような価値があるか」ではなく、「班のエリアにそのような価値を見出す背景とはなにか」言い換えると、「その場所のもつ価値構造とはなんなんのか」というものになりました。

この価値構造ですが、概念がとても分かりにくいと思うので、班の合意形成の際に用いた例を使います。

$$z=f(x,y)$$

{z:対象物に対して個人が感じる価値 x:個人 y:対象物 f:その場所固有の関数、エリアの価値構造}

これは、6班のエリアのもつ価値構造に主体となる個人(x)と対象の物体(y)の二つを代入すると、その物体にその個人が感じる価値(z)が出力されるというものです。これが6班の考えた価値を見出すうえでのモデルです。そしてここでの価値構造とは関数fとなります。

このfを見つけることこそが6班の議題であり、長時間議論した目的でもありました。見つけ方としてはまずその場所にある物体4つ(丸太、オープンスペース、ディアライン、ツル)と個人(班員6人)、個人がそれぞれの物体に感じた価値(計24通り)をそれぞれ話し合います。つまりx,y,zは今既知数になるわけです。未知なのは関数fだけということになります。既知の情報を共有しあいそこから逆算することでその場所固有の価値構造である関数fを導き出そうというのが6班の論理の流れでした。価値構造fが分かれば、そこにその場所全

体を入力してみることで、その場所全体の価値というものが見えてくる。それこそがエリアの価値になるというわけです。

以上が6班の今回のまとめです。それでは本題である各班員個人そして僕個人の今回の課題に対する考えの変化などをとめていきます

### 【班員について】

前述したとおり6班はその時間のほとんどを議論に割いていました。当然その時間に比例して衝突の頻度も高かったです。1日目2日目はスムーズに進んでいたのですが、3日目になって本格的に議論が始まったところで衝突が起き始めました。まず前のトピックで説明した通り僕らが挑戦したのは他の班と比べても極めて抽象度の高いことでした。つまりそれだけ議論の内容も抽象的になります。そのため班員の意見の一つ一つが分かりにくくなってしまふのは必然的であり、ある班員の発言をある班員がなかなか理解できないということが多発しました。特に演習3日目になるとイラついたり焦燥感も高まってくるため、そこで言い争いになるようなこともありました。3日目の終盤となると残された時間も少なくなってきます。その結果班員の発言をしっかりと理解できていないまま議論が進むという感じになり、結局議論の全体の内容が6人の班員全員がいまいち理解できていないまま進行してしまいました。

議論の具体的な部分については班員でしっかり情報共有できたと思いますが、最後の価値構造の話に議論が及んだ段階ではうまく情報や意思の共有ができませんでした。班員の中には最後まで班の議論の帰結に納得できていない人もいました。そのため、最後のほうになると共有をあきらめて2,3人で議論を進めて残りの班員は平面図や断面図の作成に取り掛かっていました。グループワークとしてはあまりよくない状況であったなと感じました。

### 【自分個人、班長として】

僕は6班の班長でした。じゃんけんで決まった班長ではありましたが、決まった以上責任をもってやろうと思ひ、事務作業にとどまらず議論においてもできるだけ6人全員が発言できるように気を使ったりしました。しかし前のトピックで言ったように、6班は班としてはあまりよくない班であったように感じます。議論もなかなかまとまらず最後のほうは班員がバラバラになったりもしましたが、その責任は班長である自分にやはりあるのだと思います。今回の授業に限らず班員が6人いても発言量は平等にはなりません。発言力の班員と低い班員に顕著に分かれてしまい、班の総意は徐々に発言力の高い人のものへと移り変わってしまいました。きっかけとかは特になくそうやって少しずつ班はまとまりを失ってしまったのだと思います。だとすれば僕のやるべきだったことは班の議論の流れに気を使い、発言力のある人の意見に班の意見が偏りつつあったら気を付けたり、発言していない人にも話をふり、班の議論の流れにもっと敏感になるべきでした。気を使ったとは前述しましたが結局のところ力不足だったように思えます。

### 【自分個人の意見】

僕の意見としては班の議論が価値構造になりつつあることについて、若干の混乱は感じました。しかし他の班がどのように議論を進めていくのかもわかりませんでしたし、実のところ僕らの班は途中まで自分たちが少し変わったことをやっているという自覚はなく、他の班も同じようなことをしているのだと思っていました。3日目の深夜25時くらいにそれに気づいたのですが、そのころにはもう後戻りできない状況だったのです。そのため混乱を少しは感じつつもこれが正解だと思いながら議論を進めていきました。3日目深夜25時頃に後戻りできなくなったとは言いましたが、僕の思ひとしてはこれは6班の個性のた論理だと思ひましたし、その方針で頑張ってきたのだから、その方針で進んでいくべきだと思ひました。議論こそまとまりませんでした。6班の論理や成果物自体が間違いだとは思ひませんでした。

班の何人かで最後価値構造についてのまとめを話しているとき、残り時間が少ないにも関わらず長々と議論しているのを見て、ざっくりまとめて価値構造を完成させましたが、それについては早く終わらせたかったというのがありますし、なにしろ話題が抽象的なだけに煮詰めようと思えば永遠に煮詰められてキリがないです。ある班員がそのことについてとてもこだわりを持ってとても煮詰めようとしていたのですが、その時点でポスターが全く完成していなかったこともあり、ざっくりまとめるべきだと判断しました。しかし、そのまとめについては僕は非常に納得できるものでしたし、班員もある程度は納得していたものだったように感じます。そのため最終的に仕上がった6班のエリアの価値構造は僕個人としては結構良いものでありました。

## 【プレゼン】

プレゼンに関してはかなり反省要素がありました。ある程度なにを言うかの原稿は用意していたのですが、プレゼンの段階ではなかなか想定通りにいかず、前述のとおり生徒のほとんどには全然発表が伝わっていないように感じました。生徒が発表を理解できていないという顔を見るのはとてもつらかったです。ただでさえ抽象的で分かりにくい発表内容、さらに班員6人でうまく合意形成ができていないというのがその原因だったように思えます。他の3つのツアーでも発表はうまく伝わらなかったらしいです。

## 【反省点 最後の班員の情報共有を踏まえて】

4日目の最後、生徒や先生のフィードバックをふまえて班員6人で話し合いました。その結果の反省点を述べていきます。

まず1日目と2日目の議論があまり意味がなかったこと。そのため3日目に議論が集中してしまい時間が足りなくなってしまったことが、最後まで班の合意形成が取れなかったことの原因だと思います。班の論理やそもそも価値構造というものがあるのかが分からなかったことについては抽象的なことを扱っているだけに多少は仕方ないですが、発表をもう少し分かりやすくすればよかったと思います。そのために前述した  $z=f(x,y)$  の例を発表で述べたりするなどもう少し考えて工夫をすればよかったです。

今回の発表で一番問題だったのは価値構造を見つけたあとの最後の詰めです。僕らの班は前述したとおり、価値構造を発見したうえでそれをエリア全体に適用するというものです。実は僕らの班は最後のゴールを決めたうえで価値構造を見つけようとしていました。つまりやる順序が逆だったわけです。ある程度価値構造の大枠が見えてきたところでゴールを決めてしまった、そのため本来やるべき論理の流れを歩んでいないわけです。したがって最後のエリア全体の価値についても、いまいち辻褄が合わないということになってしまいました。それに加えてその価値にしても、「視点場と対象場」という極めて抽象度の高い結論になってしまいました。価値構造という概念自体が抽象的で、論理や道筋も正当なものではなく、最後の結論もまた抽象的であったために非常にわかりづらいプレゼン、成果物になってしまったのです。(写真3、4)

着眼点やおおまかな方針自体は6班の個性です。そこは正しかったと思います。もう少し班の合意形成に力をいれ、時間を計画的に使っていくべきだったと思います。最初に課題に着手する時点で1日目2日目3日目に何をやるか、どういうことを話し合うかという見通しをしっかりと立てていくべきだったと思います。

以上が反省点でした。

## 【フィールド演習に対する感想】

とても良い演習だったと思います。成果物はあまり理解されませんでした。だからこそその問題点を把握し反省することができました。班で議論することの難しさや哲学的、あるいは論理的思考、場所の価値についてなど、実に幅広いことを身に染みて勉強することができたと思います。また、班で班長をするということは今まであまりやってこなかったもので、班長であったことも一つの経験になりました。

ただエリアの中にスズメバチの巣があったことについてはもう少し下準備をしてほしかったなと思いました。雨がたくさん降りましたがあの雨がなかったからこそ晴れの時の姿と比較することができ、そこから見えてきたものもあったように思えました。あの雨は非常に迷惑ではありましたが逆にそれで得たものもありました。

演習とは関係ありませんが、僕の寝部屋が4人部屋なのに明らかに4人が寝られる広さじゃないことと、食事があまりおいしくなかったことが少し不満ではありました。演習と関係なくて申し訳ありません。演習に関しては特に不満などはないです。しいて言うなら各ツアーのプレゼン後、演習室に集まってからの時間が少ないように感じました。もっといろんな先生やTAさんの意見を聞きたかったです。

あと、僕は今回の演習で富士山山中湖というバス停を使いました。これは東京駅や横浜駅から乗ることができ、セミナーハウスまで徒歩30分くらいです。行きはどしゃぶりだったので30分の徒歩は地獄のようでしたが、あまり混んでいないですし予算も控えめです。なので来年以降のフィールド演習のしおりでは選択肢として加えてみてはいかがでしょうか。

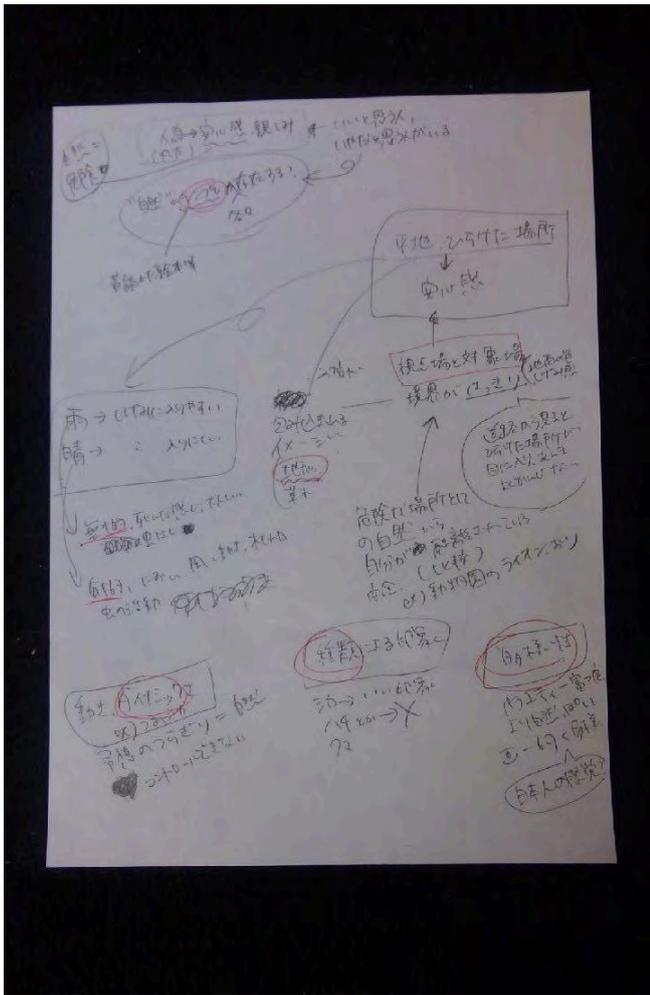
懇親会ではいろんな先生方からいろいろな話を聞くことができとても楽しかったです。めったにできない話をするのができて貴重な経験でした。

【写真】

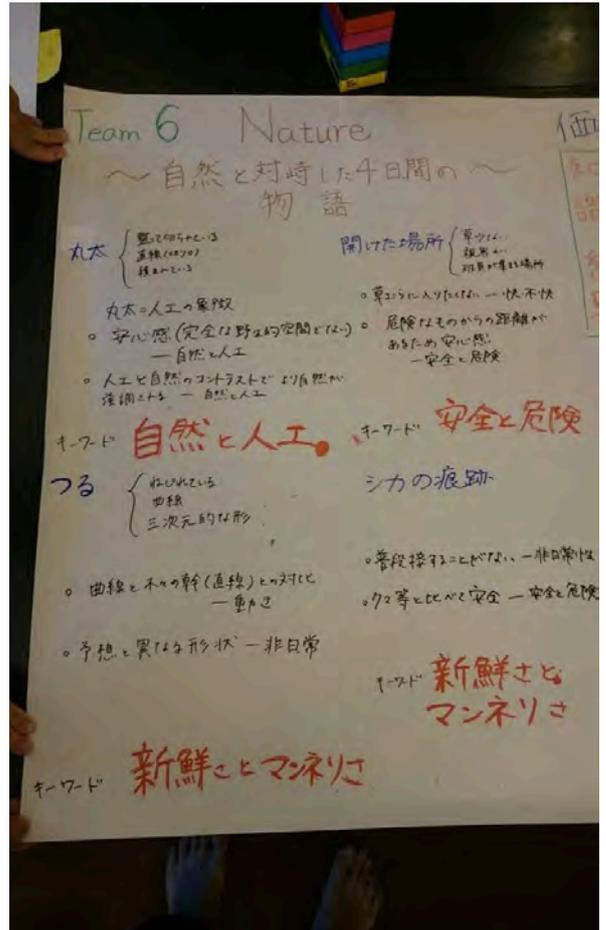
1



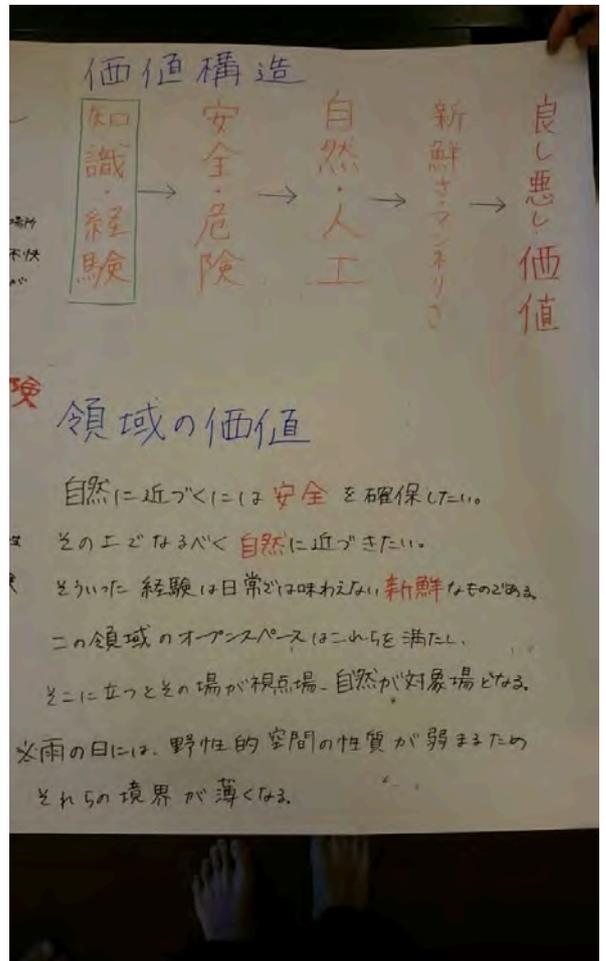
2



3



4



9/8～9/11 に山中湖の演習林で行ったフィールド演習について、6班の課題への取り組み及び個人の考え方の推移を時系列でまとめていく。

#### < 1日目 >

演習林についての基本知識、注意事項等のお話を聞いた後実際に演習林と各区画を歩く。台風による雨。各区画の説明を受けた後、適宜各班で与えられた区画の調査を開始する。区画をまわるコースの関係で6班のみがすべての班の区画を見る。

☆自分の区画がつまらないと思う。第一印象では開けて見えたのと丸太が目立って見えたので人工感が強くなにも良いと思わなかった。9班の区画が一番遊びたい！と感じて好きだった。

↓

班で区画を調査。各自気になる場所の写真を撮る。謎の穴を発見しハチの巣か?!となる。これは多分違うだろうとなるがしばらくしてもう一つハチの巣らしき穴を見つける。

☆つまらないと思いつつも歩き回るうちにモノとしてはなんかいいと思うものを見つける。価値とかは分からないので「なんとなくいいかも」という感覚に従って写真を撮る。ただ場所全体としては好きになれないまま。とにかく見つけた穴が気になる。好奇心は掻き立てられていたただ何をするわけでもなく歩き回るのはなんだかワクワクした。

↓

区画を区切っているひもを利用して5mのひもを4本作製し、そのひもを利用して区画全体を5m四方のエリア16個に区切って写真を撮る。平面図作成のため。雨であったこと、メジャーが手に入らなかったことなどを鑑みてきちんとした測量を行わなかった。さらに断面図が作成できるように仮の断面にひもを張った。この場では区画にどのような価値を見出すか何も共有できず決められなかったので、価値を表せている断面ということではなく一番高低差がありそうなところをとった。

☆始める前はもっとすみずみまで見たい、もっと歩きたい気持ちが強く作業をしたくなかった。作業を始めると、寒いしチクチクするしさっさと終わらせて帰りたかった。

↓

セミナーハウスに帰り各々が感じたことを付箋に書いて雑多な感じに模造紙に貼る。ピンクが価値っぽいこと、緑が価値を判断する際に着目していそう、してもいいかもしれない、ような価値の尺度、オレンジがその他なんでも思ったこと感じたこと、という分け方をすることになった。

☆課題の意味がまったく分からない。何をしたらいいのか、何が求められているのか、これをするに何の意味があるのか、さっぱり理解できなかった。したがって作業の重要性も分からないので、適当に思いついたことを書く。首がかゆい、とか。そしてまだ与えられた区画に価値を感じられない。この段階では求められている「価値」が何なのかわかっていないので、とりあえず深く考えず「好き」という感覚＝「価値」を感じている、という解釈を自分の中ではしていた。

#### 1日目の成果



## < 2日目 >

午前中は外出できず。1日目と同様、付箋を増やす作業を行う。

↓

書き終わった付箋を見ながら、どういう意味なのかをお互いに聞きあう。関連して思い出した話、思いついた話などもどんどん挙げる。先生のエスキスもあり、話の途中で固まりかけていたストーリー（生物の痕跡が分かりやすく感じられる）に対して、早い段階で自らストーリーを構築して固めてしまわない方が良いと言われる。

☆班員の感想を聞いて共感あまりできないことも多い。同じところを見ていても抱く感想が大きさに見える。自分の知らない理論とかも出てきて面白い。着目しているポイントがすごく点、モノだなーと思う。話しているうちに聞いたことのある理論とかありそうな理屈とかを思い出して第一印象に理由をつけることができている。それを口に出すことで本当にそうなのかもしれないと刷り込まれていたり、つまらない中で強いてあげるなら程度だったポイントが美化されて単純に良いと思ったポイントにすり替わっているような違和感を覚えていた。固まりかけたストーリーについても、自分が思ったことと班員が言ったことを総合してみるとそう言えるかもしれないと感じたので私が発した言葉だったのだが、何か冷めた感情を抱いてしまい、じっくり来ていなかった。

↓

各班がこれまで取り組んだこと、これからの予定等を全体に発表、先生方や他班からの質問やエスキスを受ける。6班ではカテゴリ化する際に要素を落とさないように等の助言をいただく。

☆みんなめっちゃ付箋使ってる、みたいなどうでもいいことを考えている。とにかく何をしたいのか分からないので、他班に先生が言っていることを聞いて意図をつかもうとするがやはりよく分からない。

価値ってなんなんだ、価値構造ってなんなんだというところでぐるぐる。価値構造を明らかにすることを最終目標だという理解にとりあえず落ち着く。

↓

午後から演習林に出る。台風を経て状態が変わっていたため、再びエリアを歩き回って状態を確認したり写真を撮ったりする。1日目に発見したハチの巣かもしれない穴を確認。それとは別に本当にハチの巣を発見。

☆台風で枝が落ちたり切り株が露呈したりと荒々しくなったエリアを見てものすごくテンションが上がる。すごくつまらないと思っていた区画がかなり魅力的に見えた。まだ「価値」＝「好き」という感覚が支配的なので、「なんなんだよ価値って…」というネガティブな感情が、「(やっぱまだ価値とかよくわかんないけど)価値あるのかもしれない!」というポジティブな感情に変わり、課題に真剣に取り組める心持になった。ハチの巣がすごく気になる。怖いという気持ちよりは好奇心が勝る感じ。

↓

その場で話し合いながら断面を決める。班員が挙げていたポイントのほとんどを含むことができる断面があったので、まだ班としてのストーリーは固まっていないがその断面を選択。アプリを使って水平を取りながらひもを張り、高さを調べる。断面上のモノの位置を調べる。

↓

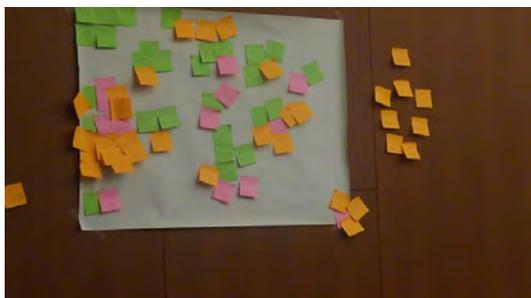
セミナーハウスに戻る。思ったより状況が変わっていたので1日目と同様に付箋を増やす。互いの感情を聞きあう。思いついたことをどんどん言いながらさらに付箋を増やす。

☆自分の気持ちがポジティブになったので他人の意見を受け入れやすくなる。

↓

付箋をカテゴリ化。緑の周辺にピンク、その周りにオレンジという配置にしようとした。

☆カテゴリ化がうまくできない。というか個人個人の感覚でどれが近い方がいいとかがちょっとずつ合わない感覚を覚える。どこに入れていいか分からないやつとか。周りに張りたいものがすごく多くなる付箋が発生。でも自分としては、確かに付箋の枚数は多かったかもしれないけどぱっと思いついた些細なことを書いていたので、なんとなく感覚と合わない。



2日目の成果

〈3日目〉

個人的にエスキスを受けた班員の意見により、緑で書いた指標を先に設定してカテゴライズを試みた点で頭がそこにしか向かなくなっているということで、今までのやり方を捨ててもう一度第一印象に立ち返って考えることにする。各々の意見を一つずつ細部まで掘り起こして、意識無意識を超えてその感情に至るまでの流れを理解しようとする。

☆どうしてそう思ったのかを掘り返すと基本的にそれまでの人生経験によることに気づく。他人と意見をすり合わせる必要はないが理解して説明できるようにしなければいけないという思いから、なんでなんでと聞きまくる。この段階では言葉や文章のニュアンスを正確につかもうとしていたように思う。自分の言葉が伝わっていない感じを受けると言葉を選びなおして分かるまで伝えようとしていた。

↓

すべての印象について深め終えたところで、抽出する要素がなんとなく定まる。

↓

エスキスに行く。いくつか面白いと言われる着目点があった。

☆一番最初に自分が挙げた意見ではないが、おもしろいと言われるほっとする。班員の意見をきっかけに思いついたことを言っていくうちにまるでそれが自分自身の純粋な考えであるかのように錯覚していることには気づいていたが、以前と比べそれに嫌な感じを覚えることは無くなっていた。

↓

具体的な要素とそれを遡った論理をどうするのか話し合う。一つ一つの感情が引き出されたその理由や流れが価値構造であるという意見と一つ一つの感情に対する理由である判断基準がどのように構成されているかが価値構造であるという意見が出る。結果としては、具体的事象から拾い上げることができる価値判断における基準をつなげたり階層づけたりすることで体系化し一般的にどうしてそう思うのかという頭の中の仕組みを明らかにしようという流れに固まる。

☆単語が難しくてわけがわからなくなる。ここにきてようやく言葉の定義を整理し始めたのは遅かったと後悔。

↓

前段階で絞られた言葉を各々でどのように体系化するか考え、その意見を班内で発表。どれを選択すべきか分からずエスキスを受ける。エスキスを受け、頭の中を表現することが課題ではない、それはより上位の概念で、一段階下げろという助言をいただく。

☆自分なりに考えたことや目指したことと他の班員が考えたことや目指したことが、私は違うと思ったがまるで同じかのように受け取られていると感じた。このころには、価値構造をどのように表現するかについてそれぞれが意見を持っていたが、そもそも価値構造という考え方自体私にはなかったものなのに価値構造自体には何の疑問もなく受け入れていた。さらに、他人から出た意見を共感でなくても理解しようがんばってきたせいで、自分の解釈と違う解釈が受け入れられない状態であった。理性での理解なのだから完全に一致しているはずだし、班としてその考えを選択したのだからそこは一致しているはずだ、だとしたらその表現だと間違っている部分がある、といったように、私の中では論理的かどうかですべてが進んでいた。はじめのころの感情論から外れずごく論理的に考えるようになっていた。

↓

エスキスを受け、頭のなかの価値構造を考えた上でそれを現地に当てはめることにする。

↓

価値構造が定まらない。班員全員で考えるのをやめ、平面図や断面図も並行して進める。

☆ものすごく学問をやっているような感覚。授業を聞いて理解できないところを腑に落ちるまで質問して理解したり、自分が分かっていることを他人に分かるように説明することで自分が実は分かっていたことが発覚しさらに考えることで理解が深まる、といった感じ。数学用語を使って議論したりしていたので、完全に論理によった頭になっていた。

↓

価値構造が決定。区画全体に当てはめた結果としての区画全体の価値も一応決定する。

☆最終的な価値に至る理屈は自分が考えたので、最終的な価値がちゃんと理論こじつけられていることは説明できたが、自分がそう思えるかというそうではなく、論理に従うとこう解釈できる、という感じだった。あんなに感情論で動いていたのに感情がなかった。

< 4 日目 >

他班の発表を聞く。

☆おそらくどの班よりも論理的に考えてきた結果、論理がスカスカに感じる。感情的な感覚的なものをおいてきたので、他班のそのような部分が理解できない。

↓

自分が発表。

☆すごく深く時間をかけて考えてきた部分を端折らざるをえなかったのと、うまく言葉で説明できなかったので、分かってももらえない恐怖が強かった。

↓

生徒、先生からのコメントを読む、聞く。それに対して、また発表してみても受けた感覚について、班員で反省等しあう。取り組み自体や着眼点の面白さを評価していただいた部分は多かったが、価値構造のところがよく分からないというのと、全体的に言葉の使い方の雑さに対する指摘が多かった。

☆言葉の使い方に対して、すごくこだわった部分とすごく雑に済ませた部分があったと気づいた。議論の際に理解の違いが発覚してすり合わせた言葉についてはしっかり吟味したり定義づけしたが、なんとなくお互いの頭の中で一致している部分に関しては吟味が足りなかったと思った。また、自分の発表時のコメントと他の班員の発表時のコメントを比べて、理解してもらえなかった発表と理解してもらえた上で賛同してもらえなかった発表と、など色々あることに気づき、中身だけでなく伝え方も重要、むしろ伝え方の方が重要だったのかもしれない、と感じ、うまく伝えられなかったので落ち込んだ。

☆班としてはとても論理的な路線で議論を進めたが、本来自分は感情論で生きているので、最終的にやはり価値とは感情的に好きとか良いとかでもいいじゃないかと思う。他人に伝わるようにという文言から論理的になったのだが、伝える手段としては別に論理でなくてもいいと思うし、なんとなく伝わるでもいいと思う。しかし論理的に考えた結果として以前と少し変わったのは、世の中には様々な意見を持つ人がいる中で、他人を納得させるには論理は不可欠だし言葉のチョイスがすごく重要だけど、それだけでも人は動かないし感情論も必要だ、しかし感情論だけではぶつかり合うだけだし、バランスが重要だ、と考えるようになったことである。そしてうまくバランスをとるためには、ニュートラルな気持ちでいろんな視点にたつことができなければいけないと思った。

#### 演習全体の感想や意見

現場を見て歩いてみてすぐに、うまく価値を表す平面図や断面図に必要な測量を行うのは無理だと思いました。各々が感じられる分だけ感じ取った後で班員と意見を共有してそのうえで動き出したいと思いました。

また、課題がつかめなくて苦労しました。言葉の使い方が難しく何をすればいいのかわからないし、先生方が想定していることも一人ひとりバラバラで、とにかくわからないのオンパレードでした。先生方同士でももう少し意見が統一されていたり、他の先生の意見を理解したうえで生徒にこういう考えもあるよと提示していただける状態であれば、もう少しつかみやすかったかと思います。はじめに成果物の具体例などいくつか挙げていただけてもイメージを持ちやすいと思います。それだと例に引っ張られて思考が限定されるので先生方の意向には沿わないのでしょうか。懇親会で先生方と色々なお話ができたのは今後の学生生活にとって有意義で楽しかったですが、演習全体としてはつらかったです。

### 演習の目的

ある事物・ある事象を良く「見る」ことを通して、シビルエンジニアとして必要な素養である、様々に変わりうる価値を多様な視点から理解しようとする能力を養う。

### 演習の概要

与えられた演習林内の 1 地点 (20m × 20m) を複数の視点から観察し、深く知ることを通して、自身にとってのその場所の価値を見だし、その価値を他の人が分かるように作図 (平面図・断面図) などによって伝える。

### 4 日間の演習全体の振り返り

#### ○演習 1 日目 (9 月 8 日)

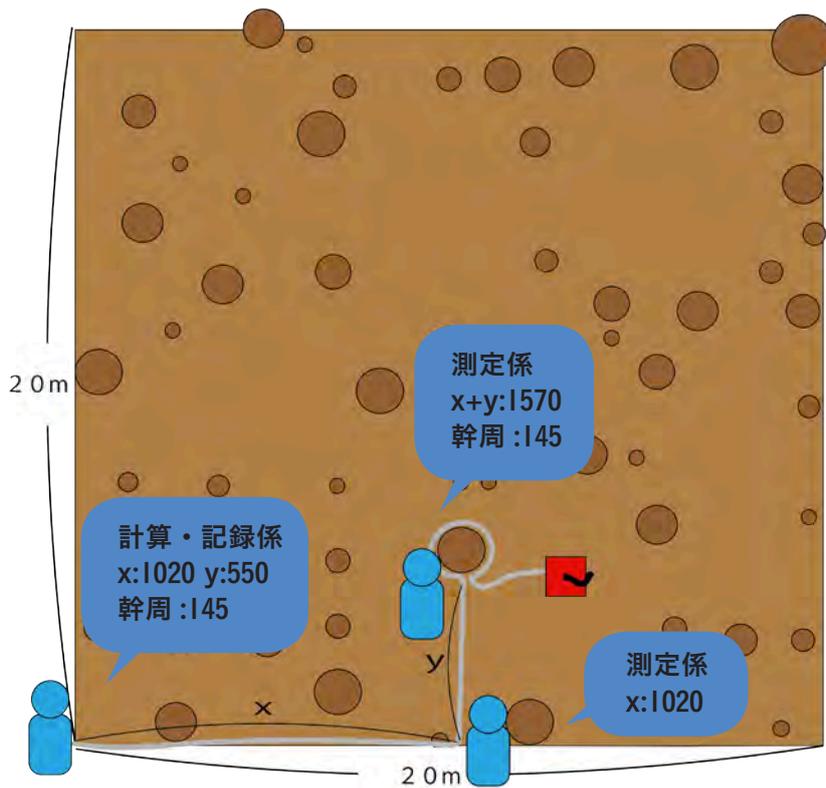
行程：全体レクチャー、踏査、班内での議論、全体共有・エスキス

初日の天気は演習 4 日間の中で最も悪く、雨の中の演習スタートとなった。対象敷地に対する第一印象は「測量するのが大変そう。どうやって座標を置こうかな。」であった。7 班の対象敷地は植林された後十分な手入れがされていない杉林ということで、広葉樹や様々な低木が生え放題で、杉の木も一見秩序だって生えているようには見えなかった。また、窪地で沢と言うこともあり高低差は大きく、測量が (他の班の対象地域と比べて) 比較的困難になることが予想された。班員の中島君が、第一印象として、「(この空間が) あまり好きじゃないな。なんか無秩序で混沌としていて。」と言っていたのが印象的である。



写真 演習初日の対象敷地

この写真を見ると分かるように、杉の木がかなりの密度で生えているのに加えて、杉以外の植物もかなり多く生えていたので、初め敷地に入るのも木をかき分けてと言う感じで大変であった。とりあえず、10 分程度各自で敷地を見て回った後、6 人の班員を 3 人ずつに分けて調査を進めようということになった。北川 (私)、中山、瀬尾は、杉の木うち、幹周が太いものの座標と幹周を測定し、中島、田代、田口は引き続き対象敷地全体の観察を行った。まず、杉の木の座標を決めるために敷地の南西の角を原点とする xy 座標を定め、巻き尺を使って (7 班はこの時、巻き尺しか使用できる計測器具を持っていなかった。) x 座標、y 座標、幹周をそれぞれ計測した。計測の方法は下の図に示す。



x座標	y座標	樹周
265	80	110
470	530	93
705	155	120
1210	70	130
1550	630	112
1670	1210	90
1660	1890	126
1940	1210	88
1940	1560	112
1940	1940	170
1370	800	115
1320	1880	90
1020	550	145
1000	1120	105
810	990	122
650	1710	139
510	290	73
480	530	110
500	1990	90
330	570	86
65	1040	120
390	1280	94
200	1450	100
160	1760	70

図 杉座標の測量方法と実測値（エクセルデータ）

雨の音で声が通らない、雨で手帳がぬれる、生い茂る広葉樹や低木をかき分けなければならないなど様々な理由から、測量はなかなか困難であったが、3人という必要最低限の人数で測量を行うことができたので、残り3人が対象敷地の観察に十分な時間を当てることができ、結果的に初日の作業時間を非常に効率的に使うことができたと思う。

夜の議論では、まず、班員各自が対象敷地に対して感じたこと・気づいたことなどをポストイットに書き出したものを模造紙に張り付け、全員で情報を共有した。観察を主に行っていた3人の意見は、

- ・杉の木の中にボスのような特に太いものが2本ある（後に旧ボス・現ボスと名付ける）
- ・対象敷地の中にも4つのゾーンの的なものがあり、そのゾーンによって植生が異なる。杉の木同士の間いがあるように見えるところもあれば、その争いが終わりその下で広葉樹同士の間いが始まっているように見えるところがある
- ・低木が多く生えているところと、ほとんど生えていないところがある
- ・杉の木にツタウルシが巻き付いている
- ・杉の木の表面が削り取られ、赤い肌が露出しているものがある

など、さまざまであった。杉の木を例えばボスなど、人間に例えて捉えているのが特に面白かった。私が測量中に特に印象的に感じたことは、雨の音と上を見上げたときの空のまぶしさ（杉の木が不均一に生えているため所々空がよく見える地点があった）や土のにおい、ときどき腕に当たって痛い枝の感触など、森と言う空間を五感すべてで感じているという空間体験であった。

この日は、瀬尾君が杉の木の位置と幹周をエクセルデータにまとめてくれたので、それをもとに杉の木のプロット図を作成し、これを印刷し二日目の調査に持っていくことにした。プロット図にしてみると現地では気付かなかった新たな発見もあった。例えば、一見無秩序にしか見えなかった杉の木の配置も、一部整然と並んでいる部分もあるということや、初めは整然と植えられた杉の木であったが（当初は約160本植えられていた）、自然淘汰の結果、現在では半数以下に減っていることなどである。

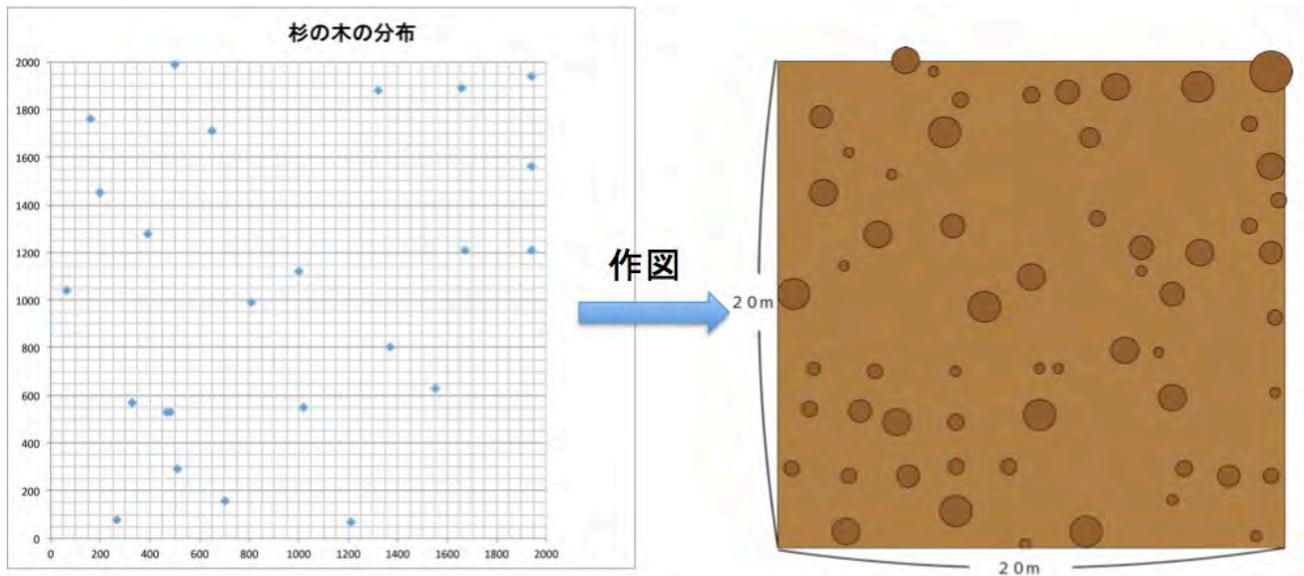


図 エクセルデータと杉の木のプロット図

○演習2日目（9月9日）

行程：班内での議論、調査・測量・測定・作図、全体共有・エスキス

二日目は、朝から土砂降りの天気で、午前中は現地調査に行くことができず、セミナールームで班の議論を進めることとなった。この日の議論の初めに、瀬尾君が「実は今朝、杉についてめっちゃ調べたんだよね。杉についてめっちゃ詳しくなろうと思って。」と言っていたのが印象的である。実際彼は本当に杉について詳しくなっていて、演習全体を通して班員の誰よりも対象地区の植生に関して詳しく思ったように思う。議論ではまず、対象敷地において班員各自が見いだした価値について、それぞれポストイットに書き出したものを模造紙にはってみんなで共有した。それぞれが見いだした価値は、6人みんながバラバラではじめは何の共通点も見つけることができなかったが、「背景（個人の過去の体験や性格など）・何を知覚したのか（観察対象物）・そこで見いだした価値」という風に段階を踏んで分析し、見いだされた価値の根拠をさかのぼって考えていくうちに、徐々に共通点や相違点がはっきりと見えてきた。午後は天気が回復し現地調査にいけるとのことだったので、これらの議論をふまえて、断面図を書くことで、この対象敷地の価値を最も良く表すことができる断面を選定した。エスキスでは、7班の班員が見いだした価値は、本当にみんなバラバラで無理に一つにまとめるよりは、断面図の中にそれぞれが見いだした価値を落とし込んで表現する方が良いだろうというアドバイスをもらったので、それも考慮して断面は下の図の赤い矢印で示す場所に決定した。

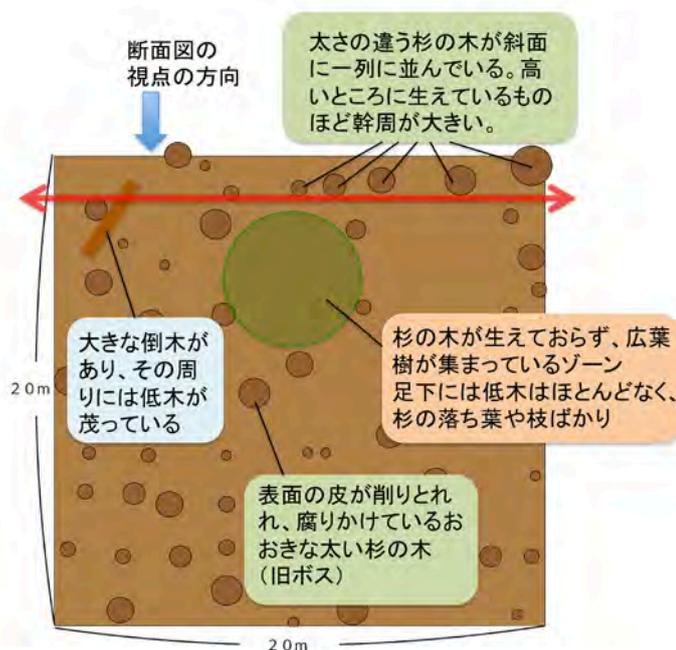


図 断面図の選定場所、及び理由

現地調査ではまず、対象断面の標高の測定を全員で行った。使用した道具は、1 m ごとに印を付けたビニールひも（25 m 分用意）とアルミスタッフである。20 m の区間について、1 m 起きに標高をはかり、地面の植生の様子とその地点から見上げる空の様子を写真で記録した。測量の方法は下の図に示す通りである。

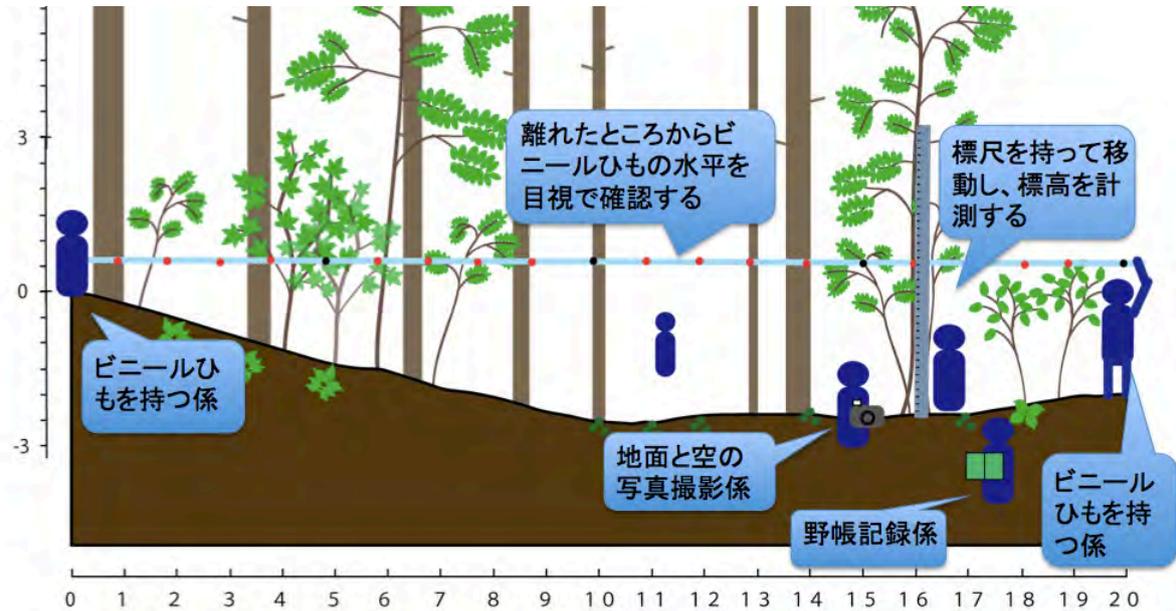


図 標高の測量方法



写真 実際の測量の様子

標高の測量の後は、男子5人が杉の木（断面に含まれるもの）の高さを測定し、北川が1日目に記録していない細い杉の木の位置、及びその他の広葉樹の位置を、初日に作成し持参した杉の木のプロット図に記録した。2日目の夜は、おのおのがセミナールームに集まり平面図・断面図作成の作業を進めた。まず、北川の作成した杉及び広葉樹のプロットをもとに、平面図の下地を作成した。

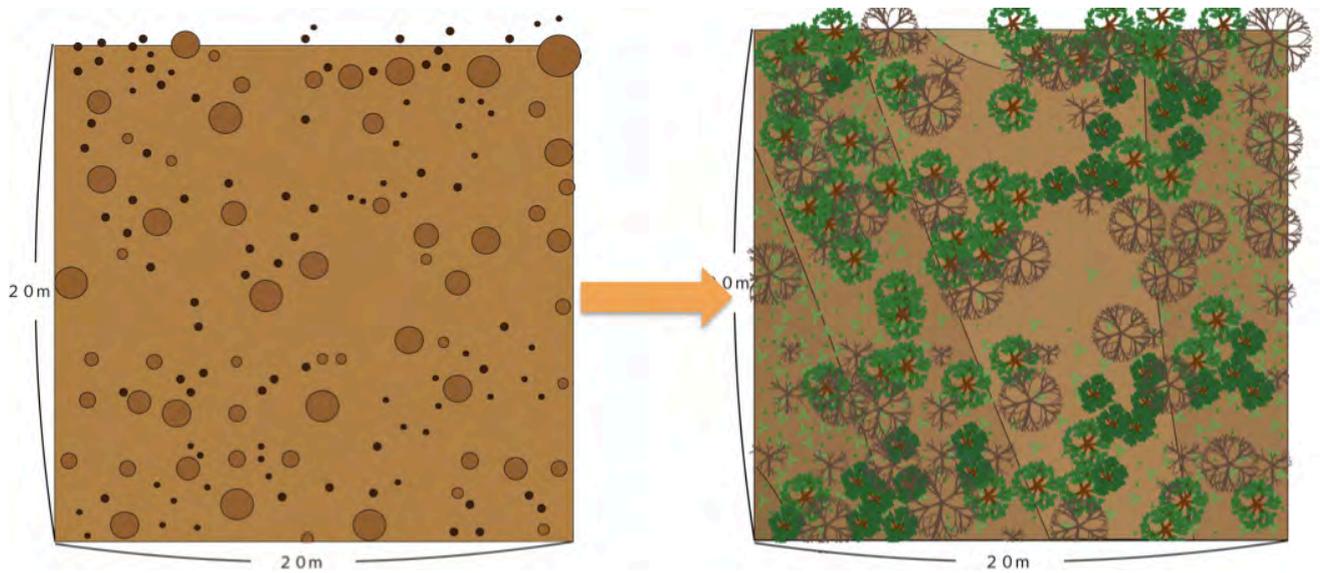


図 平面図の下地

そして、この下地をもとに、1m x 1m の平面図を書き始めた。同様にして、標高の測量データと撮影した写真をもとにして、断面図の下地を作成した。

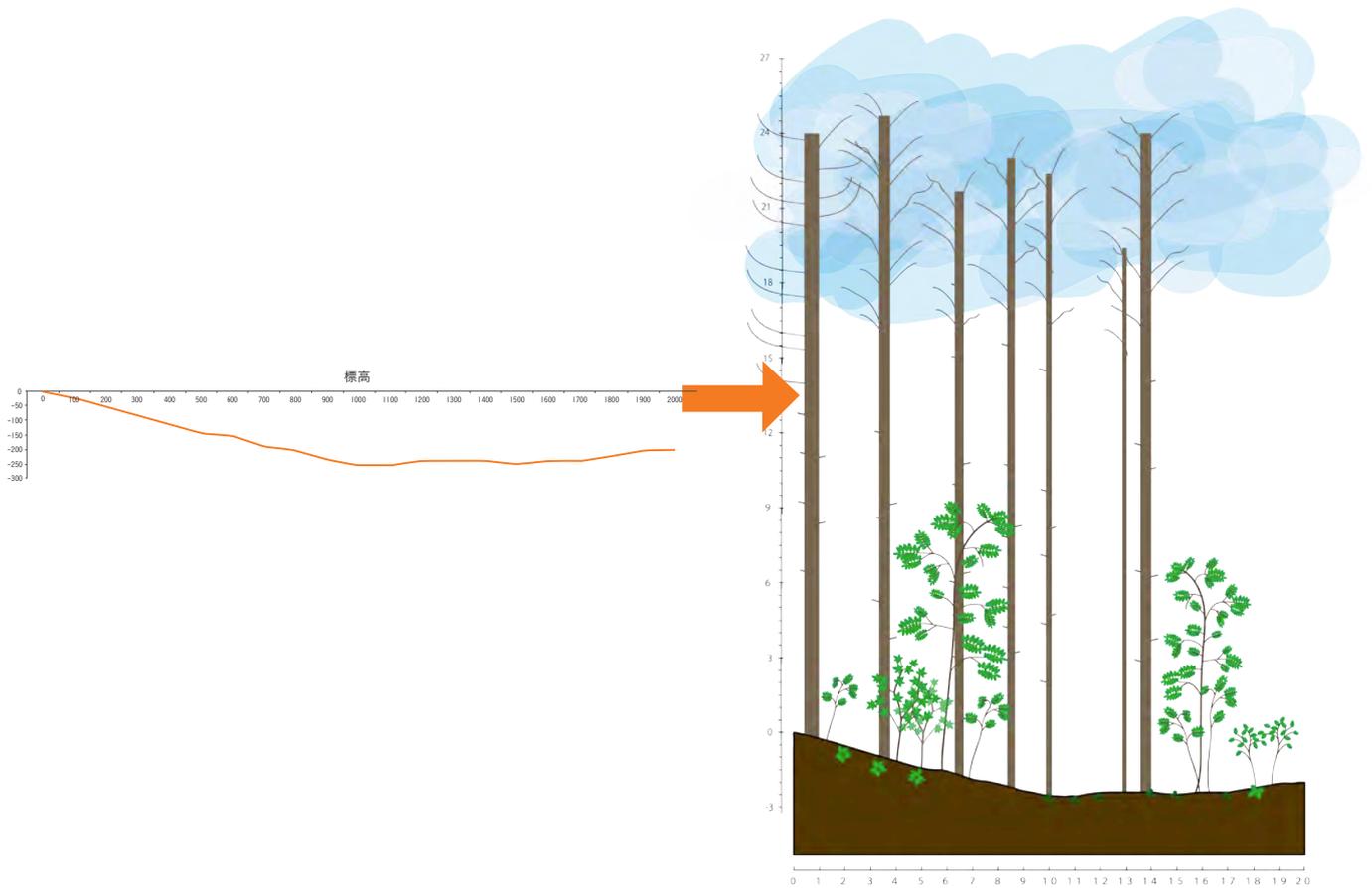


図 断面図の下地

下の図の写真は北川の撮影した地面の様子の写真の一部である。



図 断面図の区間の各地点の地面の様子

### ○演習3日目（9月10日）

#### 行程

現地エスキス、調査・測量・測定・作図

3日目は、平面図・断面図の作成をしながら、各班員が見いだした価値について考察を深めるために議論を行った。議論では、それぞれが自分の見いだした価値をまとめ、その中で同じ知覚対象から異なる知覚を得、異なる価値観を見いだした組み合わせについて、その相違が生まれた原因はどこにあるのかを追求して考察した。また、ここでもう一度、今回考えている価値とはどのようなものなのかということについて議論した。対象敷地について、「～～と言うことが知覚できる」と言うことを価値としてしまうと、それはこの場所だけではなくてどんな場所でも当てはまってしまうので、ただ知覚できることを価値とするのではなく、さらにその知覚が観察者（私）に与える影響を考え、価値とすることとした。下の図はそのイメージ図である。

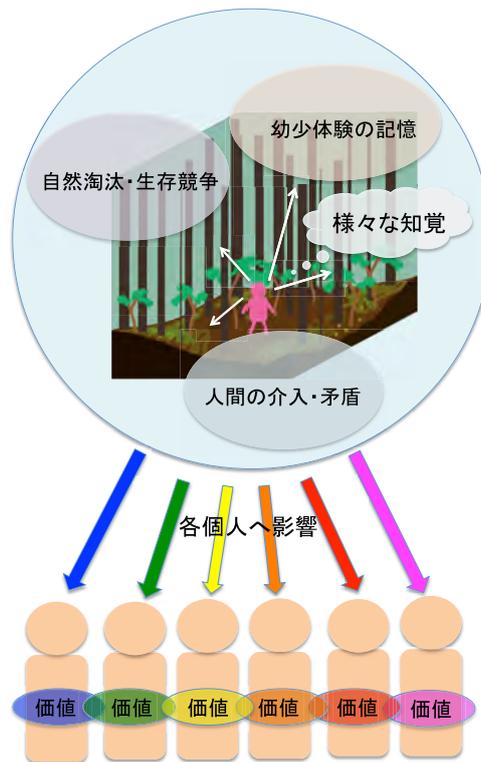


図 価値のイメージ図

現地エスキスでは、見いだされる価値の違いは、班員それぞれの対象敷地の捉え方の違いから生じているのではないかという指摘をもらった。例えば、自身の（学問的な）成長を価値とした瀬尾は、対象敷地をある種の「教材」として捉えている。過去に今回と同じような森での様々な経験を持つ田代は、今回の対象敷地を自分の過去の体験の記憶と重ねる「投影」の対象として捉えている。さらに、そこで得られる五感による知覚体験を重視した北川は、対象敷地を「空間体験」の場として捉えている。

3日目の夜は、20分の1の平面図・断面図の作成を班員全員で分担して進めた。また、価値の考察についてもさらに議論を進め、1枚のポスターに考察をまとめた。

#### ○演習4日目（9月11日目）

行程：現地でのポスターセッション、講評会

演習最終日は、前日に早朝まで作図作業をしていたこともあり、かなりの疲労と眠気があったが、「やりきった感」と言うような強い達成感があり清々しい気分で最終講評を迎えることができた。現地でのポスターセッションでは、3日間で考えてきたことを、たった10分で伝えきることの難しさを感じたが、断面図を効果的に用いることで、自分が対象敷地でどのような体験をし、どのように感じたかを伝えることができたと思う。

## 最終成果物について

### ① 20分の1平面図 (1m x 1m)



写真 完成した平面図の全体像

この平面図の特徴は、樹木を、背の高い杉・背の低い杉・背の高い広葉樹林・背の低い広葉樹林の4種類に分類し、それぞれ異なる絵柄で正確な位置をプロットしていることである。今回の対象敷地は、他の敷地と比べて樹木の数が多くに加えて種類も様々であったのでこの作業は厄介ではあったが、敷地の特徴を示すためには必要不可欠であった。結果的に、ひと目見ただけで、そのような特徴が読み取れる図になったと思う。また、木々の表現だけではなく、地面の表現にもこだわった。下の写真は、平面図作成時の作業の様子である。これは、2.5cm四方の中に茶色い油性ペンで点を9個打つと言う作業を1m x 1m にわたっておこなっている様子である。なぜこのようにドットで地面のようすを表現しようと思ったかという、この対象敷地は地面のほとんどが杉の木の落ち葉や折れた枝で覆われていたので、その特徴を表現しようとしたためである。場所によって、落ち葉よりを低木（雑草）が目立つ範囲や、落ち葉が他の場所より特に多い範囲があり、そのような場所も、ドットの一部を緑色にしたり、ドットの数で2.5cm四方の中に16個（～25個）にしたりすることで表現した。



写真 平面図作成時の作業

加えて、平面図作成途中に、先生に「この空間を基底しているのは陰だよ」といわれ、その要素も平面図に取り入れることにした。確かに、対象敷地では多くの広葉樹林が茂り、地面のほとんどが木の陰になっており「薄暗い」空間となっているのが、大きな特徴といえる。その中でも所々、光が地面に届いている部分もあり、その場所は現地で観察・記録していたので、これをもとにして、黒い色鉛筆で陰となっている部分と光が当たっている部分に濃淡をつけることで、薄暗さや明るさを表現した。



写真 地面の表現

②20分の1断面図(2m×1m)

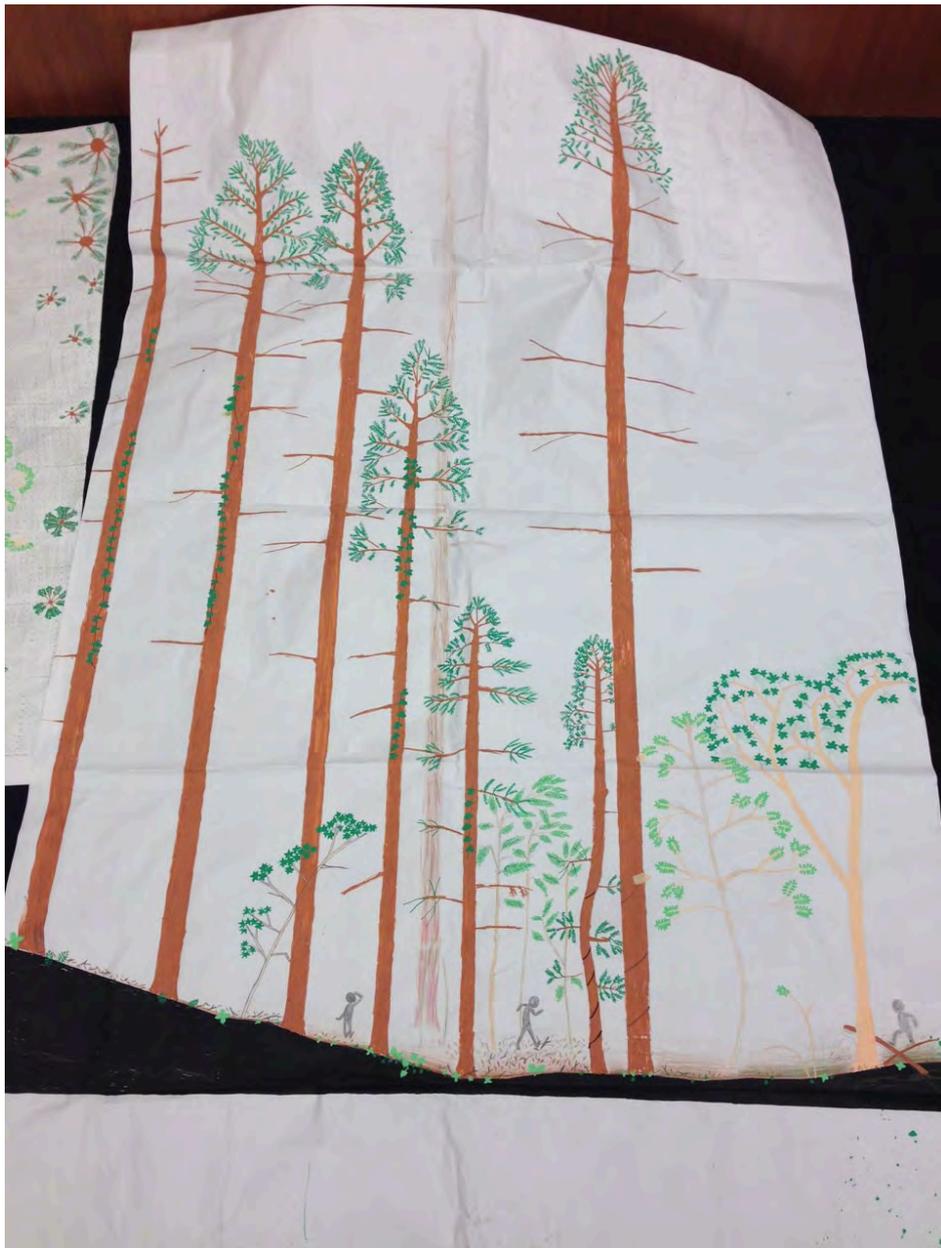


写真 完成した平面図の全体像

この断面図の特徴は、1m×2mと、その大きさがかなりあるということである。これは縦横の縮尺を等しくしたためであるが、これにより人に対する杉の木の高さがいかに大きいかということが効果的に表現できたと思う。この断面図を書くときに重視したのは、自分が実際に対象敷地で見て感じたものを、いったん自分なりに自分の中に取り入れ、自分なりの表現で紙面に再現する、というプロセスである。つまり、現地でとってきた写真をそのまま写生したような絵では、「自分にとってのその空間の価値・体験」を表現したとはいえないため、あくまでも「自分なりの絵」ということにこだわり、不必要な情報・脚色はあえて削ぎ落とし、現地での深い観察のなかで自分が知覚した森の姿をそのまま素直に表現することを心がけた。

例えば、地面(地中)の色が真っ黒なのは、実際にスコップで地面を掘ってみると黒い火山灰の土壌が出てきたという深い観察によるものである。一見、対象敷地の地面は茶色に見えるのだが、これは大量の杉の落ち葉が地面を覆っているためであり、実際の土壌は植物の生育に不利な黒い火山灰土なのである。また、広葉樹林についても、一つ一つの木について、その植物の種類を記録し、葉の形から木の高さまで、見た姿を忠実に表現した。



写真 断面図における地面の表現

上の写真は、断面図をかく上で特に細部にまでこだわった、地面近くの部分である。点景をおくことで、「杉に巻き付いているツタウルシを見上げる人」や「杉の落ち葉や折れた枝を踏んでいる人」など、各班員が同じ空間で様々な知覚体験をし、それぞれの「自分なりの価値」を見いだしている様子を、細やかに表現した。また、1m置きに撮影した地面の写真をもとに、場所ごとに実際に観察された種類の低木を書き込むことで、例えば「西から5m付近のエリアでは楓系の植物の木が6～8mの高さまで成長しているのに、10m付近のエリアでは大きく成長することはなく、10cm程度の状態で生えている」など、より深い観察結果を表現できた。

### ③価値考察のまとめポスター

班員それぞれが異なる価値を見いだしたプロセスをポスターにまとめる上で、それぞれが同じ対象敷地のどの部分に着目したのか、ということに注目して、その着眼点を①倒木②杉の並び③落ち葉（や落ち枝）④ツタ、の4つにしぼった。そして、同じ着眼点を持った複数の班員が異なる価値を見いだした原因は「同じ事物・事象から異なる知覚を得た」ことだと考え、そのプロセスを下の写真のようなポスターで表現した。

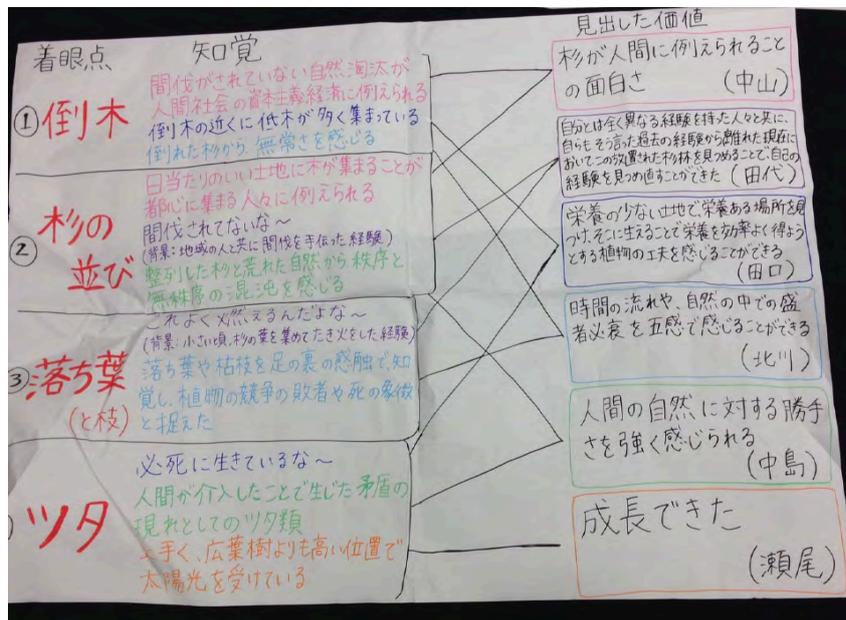


写真 ポスターの全体像

もちろんこのポスターに含まれていない多くの知覚体験や、書ききれなかった「各自が見いだした価値」があったが、班全体の意見を分かりやすく伝えるために、多少内容を削り簡略化した。

#### 意見・感想

この4日間は、本当に濃密で充実したものだ。ここまで自分の脳をフルで使い、他人と議論を交わし、互いの考えをぶつけ合い、手を動かし何かを懸命に表現し伝えようとするのは、人生でもなかなかない経験だった様に思う。自分は性格的に、何かに没頭して取り組むのが好きなので、フィールド演習はかなり楽しみにしていたし、実際に楽しかった。最終日の講評の後、先生が最終レポートの内容の説明をしている時、フィールド演習が終わった直後の本当に純粋な感想を残しておこうと思い、手引きの余白に書いていたメモが、「眠い、満足」であった。眠い、の漢字が間違っており、その時いかに眠かったかが非常に良く伝わってくる。自分で「満足」という感想を残せるくらい、課題と真剣に向き合い取り組めたことは、本当に嬉しく思う。その一方で「価値を論じること」の難しさを強く感じ、結局自分の「価値を見いだす能力」は不十分なままであるという少々苦い思いも残っている。

初めに「森のある空間について、自分なりの価値を見いだしてください」といわれたときは、何を言っているのか良くわからなかった。しかし、手探りでも対象敷地の中で調査を通して様々な知覚体験をしていく中で、だんだんとその意味と向き合えるようになっていった様に思う。フィールド演習の目的は、シビルエンジニアとして必要な、根っこの部分を培うことである。何をつくるべきか、何をすべきか。その判断を迫られる時、一つの判断基準となるであろう自分自身の価値観について深く考察し、また異なる価値観を持つ他人と議論を交わすという貴重な経験ができた。

今回の演習で一番難しく感じたのは、自分たちの思考のプロセス・苦労を表現し、他人に伝えるということである。このためには、自分の世界から抜け出して、客観的に自分たちを見つめる力が必要であるが、これが非常に難しい。最終成果物のまとめでも、あと一步踏み込むことができずに、結局うまく伝わらないもどかしさ、共感してもらおうことの難しさを強く感じた。

最終講評で一番印象的だったのは尾崎先生の「価値の多様さを尊重できるエンジニアになる」という言葉である。これを実現するにあたり、フィールド演習での経験は自分にとって大きな一歩になったと思う。

今回の山中湖への遠征で、森林の一区画を与えられ、その区域の価値を見出すという課題をこなしていく上での取り組みについてのまとめは以下のものである。まず、我々8班の与えられたところは木が切り倒してあったり、枯れ枝が積まれていたり、傾斜が急であったり、すぐそばに道路があったりというような他と比べて少し特徴のある場所であった。初めは誰もがこの場所の価値を見出せと言われても何をすれば良いのか分からず、ただただその場所を散策をしてみるまでであった。そこから、なにか出来ることからこなしていこうという話になり、まずはこの土地の平面図を作成することを目標に作業を始めた。カメラを持った四人が区画の一辺から整列して何枚か写真を撮りつつ、奥に進んでいくという作業を4辺で行った。次に、区画をビニール紐で小さな正方形に9当分し、5人班であったため、1人1または2区画を担当して詳しい平面図を作成する作業を行った。大きなものを小さく分けて分担するというこの作業は、個人的にはこの土地の理解の大きな助けになったのではないかと思えた。そして、大まかに描いた平面図を持ち帰り、次に試みたのはその植生を調べるというものであった。個々人が担当した区画で撮った植物の写真を出し合い、それが何の植物であるかを特定しようと試みたが、知識と時間が足りずそれは断念せざるを得なかった。そこで、やっと本題であるこの区画の価値について意見を出していこうとの話になり、各々が付箋を用いて思ったことを自由に模造紙に貼っていくという作業を行った。例えば、中央付近に切り株があったのだが、そこで休むことが出来るのではないかと等々人が連想していった。そして次の日のエスキスに備えて出来上がった8班の考える価値は、土地の構造の面白さというものであった。一見して、この地は積まれた丸太や枝が多く、人が立ち入れるような場所がなさそうに見えるが、足を踏み入ると自然と赴く方向が決まっていくというものである。また、この地の中央に存在感を放つ倒木についても価値があるとして意見をまとめた。しかし、それを発表したところ余り納得してもらうことができず、一人一人が良いと思うところを上げていって欲しいとのリクエストを受けた。そこで出たのは、倒木が美しく感じられた、眺めが良いと思った、家に例えられそうであった、森にしては比較的開けていて心地よかった、苔やツルが興味深かったという答えが出て来て、それぞれが全く違う考えを抱いていたことがようやくわかった。最後には、無理に一つにまとめるよりも個々人の意見を尊重しあい、それを抽象化し上位概念化することで、班として一つの価値を見出すのが良いというアドバイスをいただいた。そこで8班が次に行ったのがブレインストーミングであった。先ほど一人一人が述べた個人にとっての価値を中心にして、そこから連想されるものをどんどん書いていった。その後、お互いに書いたものを回し見して、共感できる場所、できないところにマークをつけていった。しかし、そこで行き詰ってしまい、そこから全員の価値に共通するような上位概念を見つけることができないまま終わってしまった。自分もそうであったが、人によっては天候によってその土地の価値が左右されていると考える人も班の中にいた。そこで、翌日担当区画に行ってそれぞれがその場で自分の思うこの場所の価値を発表した。1日目の土砂降りの中ではなかなか価値を感じられなかったが、運が良く2日目はきれいに晴れていたため、それぞれ見る箇所も変わり考えが変わっていったので、もう一度考えてみようという趣旨のものであった。そうするとやはり、天候に左右されていた組は、曇りとなるとどうしてもあまり価値を見出せないという結論に至ることもあった。しかし、晴れのときこそこの場所は価値を持つようになるのであるという考えも悪くはないと言われ、その方針も視野に入れて作業を進めた。また、そこで一人一人の主張する価値を内包しているような場所を全て含んだ断面図の製作を行った。8班では視覚的美を主張する人が何人かいたが、美しいという基準は人それぞれであって、共感してもらう必要はないが理解してもらう必要はあるので、客観的な根拠付けが欲しいとのアドバイスも頂いた。一通り作業を終えてセミナーハウスへ帰ったが、時間をかけて考えても一つの共通したこの場所の価値を話し合いで見出すことが出来ずにいた。話して出てくるのは、あくまでこの場所の特徴であり価値ではないという指摘ももらった。そこで、TAの方にいただいた案は、今度はほぼ全員が共感できると思ったものから矢印にルールを付与してブレインストーミングを行ってみようということであった。ほぼ全員が賛同したのは倒木と、それによって生まれる開けた空間がこの土地の価値を生んでいるということであった。そこから、原因と結果、対比、根拠と主張などルールを付与して個々人の価値にたどり着くことができた。しかしながら、やはり8班としての共通した価値というものはそこから見出すことができずに終わってしまった。そして発表では倒木や開けた空間という共通した”モノ”から生まれたそれぞれの考える価値を言うことになってしまった。

最後に、この演習を通した感想についてを述べる。まず、一番強く感じたのは当たり前ではあるが、人それぞれ同じものを見ても感じることは違うということである。生まれてから今までの経験や、元々の性格が人によって様々なので当然といえば当然なのだが、ここまで全員が同じものを見ても考えはバラバラというのは面白かった。言ってみれば、今回与えられたのは単なる木や雑草が生い茂っているだけの土地であり、至極単純な場所であった。普通に考えれば、そのような複雑でない場所では一人一人にそこまで考え方の違いが出てくるように思えない。しかし、発表してみれば全く違う価値を見出しており、大袈裟に言えば一人一人の世界観が大きく異なっていることを感じざるを得なかった。しかし、それが原因と言ってはなんだが最後まで全員の意見をまとめるような事ができず、発表をした後にグループでやった意味はなんなのかという厳しい意見をもらった。もともとの意見であり、我々は何も言う事が出来なかった。最後まで個々人の意見をお互いに尊重しあって発表まで持っていけた点は良かったと言われた一方で、班としてのまとまった価値観を見いだせずに終わってしまったのは一番反省すべき点であったように思える。また、断面図は個々人の考える価値を表す場所を盛り込んだにもかかわらず、発表の際にうまく活用する事ができなかった。平面図もそうであった。折角木の高低も考慮して作成したこれらの図が発表で活かせなかったのは、非常にもったいなく、自らの発表のスキルのなさを痛感した。また、この班の一番の課題であった一人一人の意見をまとめる事についてであるが、これが想像以上に困難であった。誰かが引いて誰かの意見を押し通してしまうのであれば簡単であったのだろうが、全員の意見を尊重しまとめるというのは非常に難しく他の班がどの様にまとめたのか気になった。初めは森の価値を見出して発表するという課題になんの意味があるのだろうか、そもそも森は森でそれ以上でもそれ以下でもないだろうと考えていた。しかし、今回の課題を通して本来の趣旨とは少しずれるのかもしれないが、個々人の意見を聞き出してまとめるという事のプロセスや難しさと言ったものを学ぶことができた。

### 課題の理解

まず実習の目的である「価値を考える」ということがどういうことかを理解するまでに時間がかかったが、ともかく、話し合いやエスキス、講評などをもとに私なりに理解できたつもりである。

私たちが社会基盤や社会そのものを対象として研究や事業、あるいはローカルで小さなプログラムを進めるうえで必要とされるのは、必ずしも工学・科学分野における知識やスキルだけでなく、むしろ社会や構造物などの対象そのものを分析し、事業の価値を検討し、それを理解してもらうために外部に発信するといった力である。そのためにはまず、対象範囲にある社会（文化、コミュニティ、住民など様々な要素がある）を観察・分析するときに、視点や思考の論理が様々であることを知っておかなければ、自分の行う事業が対象にどのような影響を与えるかを正しく検討することはできない。事業の価値を考える際も同様で、同じものに対しても自分と全く異なった価値基準を持つ人がいる（というよりむしろ同じように価値を感じる人がいる方が珍しいかもしれない）ことを念頭において、多面的な思考を心がけねばならない。

そして、事業は（社会基盤に限らず）チームで、さらに外部の団体と連携して進めるものであるが、住民や協力を得たい相手を説得して価値を認めてもらうというのがけっこう難しい。この点に関して今回の実習で学んだのは、説得力をもたせるにはどうすべきか、ということである。あるものに対して自分が感じた価値を伝えるとき、その説明が自分の感覚にのみ基づいたものであっては理解してもらうのは難しい。単に自分がどう感じたかだけでなく、その背景に何があって、ではそれが一般的にどのような意味を持つのか、どういった人にとって大事なものとなりうるのか、といったことまで分析して初めて、異なった価値観を持つ人にもある程度理解してもらえるようになる。そこからさらに説得力を持たせるには、正確な言葉の選択などの工夫が考えられるが、ともかく、価値を見いだしたらそれを分析して伝え、理解してもらうことが、社会基盤事業を行う上での第一歩であると思った。

### 調査

本来、調査、意見共有、分析は順番にではなく並行して繰り返しながら進めていくのだと思うが、私の班は割にそれらが分かれていたような気がする（中間のエスキスがあったのでそこで一度共有と分析はしてみたが）。あまり課題の意味を理解していなかったか、具体的にどうすれば良いかのイメージができていなかったのだと思う。

初日は、最初にざっと敷地を見て回った後、敷地をひもで9分割し、担当領域の平面図を各自で作成した。私は筆記具を紛失してしまったので（余分に持っている人もいなかった）、仕方なく、写真に収めて後で思い出しながら地図に書くという方法を使った。このとき自分はこの敷地に対してあまり関心がなく、「なんだか汚いところだ」くらいにしか思っていなかったのも、何かに着目して地図を作るという発想にならず、ひとまず特徴的と思われるものを記録するに留まった。

二日目以降は一転して日が射すようになり、私を含め班員は皆この敷地に対する印象が大分変わったようだったので、再度全体を散策したのち、着目した点を中心として今度は各々が全体を調査し、平面図に書き加えるということをした。

### 班内での意見・情報共有、分析およびまとめ

この班は見出した価値が見事にバラバラで、非常にまとめにくかった。

中間エスキスでもその傾向は既に見られたが、その後の調査と意見の共有でそれがますます顕著になっていったように思う。

私が光の差し込む空間を好み、祖父江は遊び場としての価値を、田中は周囲の林と異なる開けた空間としての価値を、彭はある地点から眺めた時の構図の美的価値を、五嶋はそこにあるものから感じる質的・時間的スケールに価値を見出した。一見バラバラでも実は根底には共通するものがあるのではないかと考えて分析したりもしてみたが、結局根本的に見方が異なるようだという結論に至り、しかしそれではグループワークとして格好がつかないのでは、などという意見もあり、少々困ったことになった。最終的には、基本的に意見の統一はせず、自分たちの見出した価値がどの要素から来ているのかを明らかにするに留めた。

私の班で行った意見の共有と分析は、以下のようである。

たしか二日目だったか、中間エスキスの前、各自が見出した価値とその理由（何があったからそう感じたのか、自分の持つ背景がどう影響しているのか、など）を文章にまとめ、それを班内で回して読み合った。そのときはともかく班で一つの意見を提示する必要があったので無理矢理まとめたが、その無理矢理な感じを先生に突っ込まれ、それぞれが本当に感じていることを発表したところ、それが見事にバラバラだった。先生によっても方針が異なるようだが、我々はひとまず無理に統一することは避けるということにした。

最後の発表に向けた分析では、それでもやはり班として発表する以上は何か一つの価値を提示したいと考え、コンセプトをひねり出してみたりもしたが、いまひとつ良いものが出なかったため、ブレインストーミングのようなことをすることにした。

それぞれが見出した価値を中心に置き、そこからその価値を感じさせている要素やもともと自分の中にあるもの、連想されるものなどを繋げて書き、それらの中に班内で共通する要素を探した。実はこれは私が中学で習った発想法で、思いつき程度にやってみたものなのだが、これが案外面白いということで、先生からアドバイスを受けながら、これで見つけた共通の要素をこの敷地における重要な要素として、そこから各自の見出した価値がどのように導かれているのかを、今度は矢印の種類を分けて（一見）同じような作業をすることで整理した。しかし初めてやることだったのであまりうまく整理することはできなかった。また、ここでは「倒木」が最も重要な要素として中心におかれたが、実は祖父江の「遊び場」という見方は必ずしも倒木に起因するものではないところがあり、もう一つ中心の要素があるともう少しうまくいったのではないかと思うが、一方でより多くの人を感じた価値は「倒木」によって形成されていたという意味では「倒木」だけを中心に置くというのは間違っていたのかもしれない。

このようにどこまでも方向性の違う見方をしていたのだが、しかし他の人を見出した価値とその根拠を聞けば、どれも納得の行くものだったのが印象的であった。単なる理解に留まらず、「そのときは考えていなかったが言われてみれば自分も同じように感じる」というような意見も多く、そう考えれば案外共通の意見を持っていたとも言えるのではないかと思う。班の意見をまとめる上で、そういったアプローチの仕方もあったのではないかと、このレポートを書きながらふと思った。

他の班の発表を聞いて思ったのが、やはり私の班は意見の統一がなされていないということである。いずれの班も一つの意見にまとめていた。先生はそれでもいいとおっしゃったし、私もそれでいいと思うが、一方でやはり意見の統一に向けた努力をもっとできたら良かったとも思う。はじめに書いたとおり、グループワークであっても結局相手に主張を理解してもらおうという点は外せないものであって、そのとき主張が一つにまとまって整理されていなければ説得力も何もあったものではないからである。今回は課題の趣旨から考えると統一の必要性についてはどちらにも解釈できるように思うが、それが少し心残りである。

## ・課題への取り組み方と私の考え方

まず、班全体として課題にどのように挑んだかについて述べ、その方法に対する考察や反省を考えてみたい。

課題を始めるにあたって、与えられたフィールドが山中寮から離れており、遠い場所であるという班全体の共通の認識からスタートした。1日目にフィールドに到着後、雨が強く降っていることもあり、価値について考えるというよりも、平面図の完成を優先し、そのために必要な情報を収集することに力点を置いて演習を行った。具体的には、対角線上の大まかな標高差と、木の位置の把握を行った。2日目の午前中に価値について考えようとしたが、1日目にあまりに木に着目しすぎたがために、木についての話しか班の中で出てこず、場所の価値という大きな視点についての話まで広げることができなかった。そのため、2日目の午後からの野外活動実施時に、断面の測定とともに、各自で価値について考え、それを踏まえて3日目の午前中に班員がそれぞれ場所の価値について考えた。すると、地形や日差し、水、植生などへの着目が生まれ、視点が従来に比べてかなり広がってきたように思えた。しかし、この時点では、それらの要素をポストイットで分類し、整理したものの、多くの要素が出ているだけで、それらを統括する価値について考えられていない状況であった。その後、班内で話し合うスタイルでは、議論の流れに沿った意見しか出てこないということで、各自が価値について5分程度で考え、発表するというスタイルをとったところ、班内で二つの価値観が出てきた。一つ目が、そのフィールドにおける木や植物、日差しなどに価値を見出すという「森の観察者の視点」から生まれた価値観だ。二つ目は、そのフィールドの地理的地点に着目し、そこが森の最奥で、折り返しになっているという点から、休憩地点としての価値を見出すという「森の散策者の視点」から生まれた価値観だ。これらは、一見異なる価値観のように思えるが、その根底にはフィールドの居心地が良いという概念が存在していると考えた。というのも、居心地が悪ければ、木や植物などに着目して、非日常性や生命のサイクルなどに関して物思いにふけることもできないだろうし、いくら休憩地点として地理的に優れていても場所の居心地が悪ければ休憩するモチベーションは全く起きないからだ。以上のような異なる二つの視点から見たフィールドのそれぞれの価値と二つの視点に共通する価値をまとめるということで方向性が決まり、ポスターを作製した。

上では、課題の取り組み方の概要について述べてきたが、次に、班内での意見の一致や相違、発表の結果について考察する。私たちの班では、比較的皆が協調性高く作業ができていたように思える。しかし、そのためにかえって、班内で価値についての議論をする際に、各々が自らの価値観について主張するというよりも、班内の議論の流れに乗って、それに自らの意見を足すというスタイルになっていたように思える。そのため、各自が持っている考えの違いというものが前面に出てくることなく、より深化した議論がなかなか生まれづらい状況であった。そのために、上でも述べたように、各自が自らの意見を考え、表明する機会を設け、その結果、班内で大きく分けて二つの価値観があることが分かった。一方は森の観察者の視点であり、もう一方は森の散策者の視点である。私たちの班では、それらの価値観を統一することは、価値判断する視点が大きく異なるために、難しいと考え、共存させる方法を選んだ。ただその際に、視点が異なっても共通するものがあると考え、それを見出そうとし、出てきたのが「居心地の良さ」であった。これは、それぞれの班員がその場所に対する価値を主観的にポストイットで表現した際に、皆が共通して書いていた内容であり、共通項として見出すことができた。つまりこの「居心地の良さ」は、班内の議論の結果、皆で話し合っただけで価値観を統合したものではなく、全ての班員が潜在的に抱えていた意識ともいえるだろう。

だが、価値についての議論をまとめるのに時間がかかり、価値の概念における議論が不足してしまったという点は反省すべき点だ。最終的な価値を示す概念として、「思わず立ち止まりたくなる」、「居心地がよい」、「自然との融和」という3つの概念を示し、議論した班員はこれらの言葉で自分たちの言いたいことが表現できていると感じ、方向性は間違っていないと思ったが、議論の過程を聞いていない第三者にそれらの言葉が伝わるのかという議論が欠けていたように思われる。特に、「居心地が良い」と「自然との融和」はかなり漠然とした言葉遣いであり、解釈の取りようの幅が大きいいと見える。また、班員の中ではこれら3つの言葉は概念として同列なのだが、これだけを聞いた人にとっては概念的に同列だとわかりにくかったようにも思える。言葉の選び方や表現方法の議論がもう少しできていればより分かりやすく完成度の高い発表になったと思われる。

また、もう一つの反省として、客観的なデータや要素の取り入れが少なかった点が挙げられる。価値についての議論は抽象的、主観的なものになりやすいが、その価値についての主観を支えている客観の部分にももう少し着目し、焦点を当てるべきだったように思える。地形データや木の配置、さらには土壌水分量の変化まで調べていたので、そういったデータを上手に援用できていれば、より説得力のある発表ができたのではないかと思う。例えば、地形の起伏がなだらかな場所があること、土壌水分量がすぐ減少し、地面に水が溜まりにくいこと、休めそうなところに大きな木が重なり合うようにあり、光のこぼれみを感じられるといった客観的に分かりやすいことをもっとアピールするべきだったのではないかと思う。

次に、僕自身の考え方とその変化について述べる。フィールドに到着してまず感じたのは、フィールド内を道が走っているが、その道はフィールドを通過あるいは分断しているという外的なものであるというよりも、その場所を価値あるものに変えており、その場所に溶け込んでいる重要な内的な要素だということだ。通常、森の中に道を通せば、自然の中に人工的なものを通すため、違和感を覚えたりしがちだが、それが少ないように思えた。その理由として、道が歩道専用で広くないこと、手入れされていないエリアであるために、道が上手く自然と一体化していること、また道がU字でフィールドに入っているために、通過、断絶といった要素になりづらかったことが挙げられるだろう。さらに、道が曲がっている箇所が太くなっており広場の要素を感じることもできた。

そして、その場ではあまり意識していなかったが、山中寮に戻って地形図と照らし合わせて確認してみると、自分の実感以上にそのフィールドが谷地形であることが分かった。そして、2日目にフィールドに行った際に、谷地形を意識して、中央部分に立つと、周囲のせりあがり確かに強く感じられた。

3日目の午前中に、班内で価値についての議論が始まったが、その際に「安心」というワードが出てきた。安心できる場所というのがこのフィールドの価値を示すものではないかということだ。だが、この価値観には非常に強い違和感を覚えた。というのも、谷は周囲を高台に囲まれ、遠くまで見通せず、また水の通り道になることも多く、決して安心できる場所ではないと思ったからだ。確かに、明るい時間であれば、谷地形は人が自然と集まるような場所だと言える。街の発展を見てみても、渋谷のように周囲より低くなっている場所が商業地として発展している例は多々ある。周囲より低いということで、自然とそちらの方に移動してしまう人間の性質のようなものがあるのだろう。だが、暗くなれば、谷地形は見通しが悪く、水や野生動物といった外的要因に対する不安感が高まるのではないだろうか。また、安心という言葉には、「何かしらの脅威に対する安心」という意味が内包されており、その脅威をはっきりと特定していない以上、安易に使うことには抵抗があった。

その後、班内で話し合うと、「安心」という言葉が、その場に居たいという思いから、出てきたということが分かり、それを言いかえることはできないかという議論になり、居心地の良さという言葉が出てきた。そして、班内の議論の結果、僕は道というものに着目し、その道を利用する立場の人間からそのフィールドを観察しているという自分の視点を発見することができた。これは、先ほど述べた「森の散策者の視点」である。その視点をさらに掘り下げて、道と調和した空間という最初にした価値に加えて、そのフィールドの地理的な位置から休憩場所という新たな価値を付加できたように思える。

以上のように、班内での議論を通じて、自らの価値観をより深いものにできたことは、非常に良い経験だったと思う。だが、その一方で、時間が足りず、班内で「森の観察者の視点」から見た価値観について、僕自身の理解が深められなかったことが大変残念であった。当然、班の発表をするために、その視点から見た価値について理解はしたが、意見交換や、僕自身の価値観に新たなものを付与するレベルまで進むことはできなかった。価値についての議論と断面図や平面図といった作業とのペース配分などを事前に正しく考えるべきだったと反省している。

最後に、フィールド演習に対する意見、感想について述べたい。まず、感じたのは、断面図、平面図が効果的に使われていない班が多かったことだ。断面図や平面図が丁寧に作られている班がほとんどであったが、実際にそのフィールドで発表するために、それらの図に着目する必要性が薄く、どの班でも、発表ではポスターがメインで使われ、最後に絵を提示するという方法で発表し、価値の説明では絵がほとんど使われていなかった。だが、絵を使えば必要な視覚的情報を取捨選択することができ、その班が調べ出した価値を説明するのに非常に効果的はずだ。従って、次回からの演習では、価値観と絵を同時に聞き手に提示するために、ポスター作りをやめて、断面図、平面図に情報を書き込むというスタイルをとるのが望ましいと思った。そうすれば、各自が発表する価値とそのフィールドの情報とがより密接に関連しあい、発表を聞く側にとって、より分かりやすいものになるはずだ。

また、そのフィールドに人工物（ベンチや道、休憩所、舗装など）を作るならどういったものを作りたいかということ、班内で議論して断面図に絵として加えてみるのも面白いと思った。工学部でなおかつ社会基盤学科に所属している以上、自然の改変を行う立場になることはこれから確実にあるはずだ。その改変を他者にも納得してもらえる形で、議論、提案するというステップはエンジニア育成において役立つのではないかと思うのだ。